

ヴェルナー・ゾンバルトの企業家観と信用・株式会社論 - 「盛期資本主義経済」の認識を中心として-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥山, 誠 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19075

090.1-778



明治大学大学院政治経済学研究科

2008年度

博士学位請求論文

ヴェルナー・ゾンバルトの企業家観と信用・株式会社論

— 「盛期資本主義経済」の認識を中心として —

Werner Sombart's view of the entrepreneur, and his theory
of credit and joint-stock corporation : Focusing on his recognition
of the "High capitalism"

学位請求者 経済学専攻

奥 山 誠

凡 例

1. テキストからの引用は、(著者名 出版年, 引用ページ数)を基本とし、邦訳が存在する場合には、該当ページ数を併記する。ただし、引用における訳語・訳文は必ずしも邦訳に忠実ではない。
2. 引用文中の〔 〕はすべて引用者(奥山)による補足であり、「……」は、特に断りのないかぎり引用者による省略である。また引用文における圏点はすべて原著者による強調箇所(ドイツ語文献の場合、多くは隔字化された箇所であり、英語文献の場合、多くは原文イタリック)に付されている。さらに引用文における / は、テキストにおける改行箇所を示している。
3. 外国人名の表記は主として『経済思想史辞典』(丸善)によっている。

第3章 信用創造理論の系譜とゾンバルト

— 「動態的信用理論」の受容をめぐる —

I. はじめに	83
II. 近代的信用理論の生成 : H. D. マクラウドの信用創造理論	85
III. 「動態的信用理論」の展開 : シュンペーターと L. A. ハーンの 信用創造理論	89
IV. ゾンバルトにおける「動態的信用理論」の受容と展開	96
V. おわりに	102
注	103

第4章 ゾンバルトの株式会社論

— 資本調達プロセスの「民主化」と経営者支配の論理 —

I. はじめに	113
II. リーフマンの証券資本主義論	114
III. ヒルファディングの株式会社論 : 創業者利得形成のメカニズム と大株主支配の論理	118
IV. ゾンバルトの株式会社論 : 資本調達プロセスにおける「民主化」 と企業家による「経営」支配の論理	125
V. おわりに	132
注	133
結 語	142
Anhang	147
参考文献	166

序 論

I. 問題関心

本学位請求論文は、20世紀初頭ドイツにおいて活躍した著名な経済学者ヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart, 1863-1941) の経済思想を、特に彼の資本主義理論に焦点を合わせつつ検討し、その経済学説史的な意義を明らかにしようとするものである。

周知のように、「ドイツ最新歴史学派」を代表する巨星の1人であるゾンバルトについては、ドイツ本国はもとより、これまでわが国においても早くからその人物および経済思想が注目され、彼の主要な著作の翻訳・刊行はすでに戦前から盛んに行われていた。たとえば、大正期には『労働組合運動の理論と歴史』(Sombart 1900, 森戸辰男訳 1922年)や『社会主義と社会運動』(Sombart 1896, 池田龍蔵訳 1923年; 林要訳 1925年), さらには『奢侈と資本主義』(Sombart 1913a, 田中九一訳 1925年)などの邦訳書が公にされており、当時ベルリン大学正教授の職にあったゾンバルトの名前は日本のアカデミズムのなかでもつとに知られるところとなっていた⁽¹⁾。1930年代になると、『3つの経済学』(Sombart [1930] 1967, 小島昌太郎監訳 1933年)や『資本主義の将来』(Sombart 1932, 新川傳介訳 1932-1933年; 鈴木晃抄訳 1933年), 『ドイツ社会主義』(Sombart 1934, 難波田春夫訳 1936年)などの刊行間もない重要な文献が相継いで訳出され、さらに戦中には主著『近代資本主義』第2版 (Sombart [1916] 1987a; 1927) の邦訳⁽²⁾が始まるというようにまさにゾンバルト全盛の時代を迎えつつあった。同時代という制約もあり本格的な研究文献こそまだ見出せないものの、このように主要著作の大部分がすでに翻訳されているという事実は、わが国におけるゾンバルトへの関心が戦前・戦中であっていかに高いものであったかを示す1つの有力な証左といえるであろう。

しかし、戦後になるとこうした事情は一変する。すなわち、ゾンバルトの著作の邦訳がまったく行われなくなったばかりか、戦前・戦中の豊かな翻訳の成果に依拠した研究文献さえも、ごくわずかの例外を除いてほとんど見出されなくなるという状況が、1990年代に入るまで実に40年以上もの長きにわたって続くことになるのである。その理由の一つとしては、晩年のゾンバルトが — とりわけ『ドイツ社会主義』に見られるように — ナチズムへの傾斜を示したということ

が大きな要因として挙げられるが、しかし特にわが国においては、ゾンバルトをマックス・ヴェーバーとの間で行われた、いわゆる「資本主義起源論争」⁽³⁾の敗北者として位置づけるというある種の一面的な評価が定着してしまっただころにその最大の原因があるように思われる。わけても、戦後のヴェーバー研究をリードした大塚久雄によるゾンバルトへのネガティブな評価、すなわちゾンバルトの「資本主義精神」は、「資本家（企業家）層の心的雰囲気」に過ぎず、「賃金労働者層」をも含めた「共通の心的態度」として捉えられていないという鋭い批判（大塚 [1964-1965] 1969, 20-23）は、その後のわが国におけるゾンバルト研究の方向性を決定づけるほどの大きな影響力を及ぼしたといっても過言ではあるまい。事実、比較経済史学派の流れを汲むわが国の経済史・経済思想史研究にあっては、大塚の批判以降、ゾンバルトのテキストが内在的に検討され、その所説の積極的な意義が抽出されるという作業は、ほとんど行われなくなるのである。

ここでわれわれが看過してはならないことは、大塚に代表される戦後のゾンバルト批判がもつばら「資本主義精神」をめぐるヴェーバーとの対比という枠組みにおいて、言い換えれば、歴史的な「近代資本主義」の起源に躊躇された議論との関連でなされたものであるということである。だからといって、もちろんわれわれは、こうした研究視角に対して全面的に異を唱えるものではない。「近代資本主義」を形成するエトスに注目した大塚のヴェーバー研究が、戦後のわが国の社会科学の発展に計り知れない貢献を果たしたことは今や否定し得ない事実であり、その学問的な功績は高く評価されなければならないといえよう。しかし、にもかかわらず指摘しておかなければならないことは、「近代資本主義」の歴史的な起源をめぐるヴェーバーとの対比という研究視角からだけでは同時代の、ゾンバルトの眼前に展開されていた現実の資本主義経済に対してほかならぬゾンバルト自身がいかなる認識をもち、それをどのように捉えかつ分析していたのかというきわめて重要かつ興味深い問題がまったく見落とされたままに放置されることになるということである。

ゾンバルトの学問的関心は、ただ「近代資本主義の起源」を解明することだけに注がれていたのではない。たとえば、ハイデルベルク大学でエドガー・ザリーンの指導のもと『ゾンバルトとヴェーバーにおける資本主義』(*Der Kapitalismus bei Sombart und Weber, 1927*)という論文を執筆し博士学位を取得したタルコット・パーソンズは、その学位論文を英訳した最初の公刊論文のなかで「彼 [=ゾンバルト]の主要な関心は、盛期資本主義 *mature capitalism* という現象にこ

そあるのであり、彼は一貫してそこに注意を向けている」(Parsons 1928, 656)と指摘しており、また『近代資本主義』初版の詳細な検討を行った田村信一氏は、「彼 [= ゾンバルト] が『近代資本主義』というタイトルで問題としたのは、まさに高度資本主義の『現代』の・『最新』の局面であり、『近代』という意味の中に、中世から近世という意味での近代というよりも、むしろヨーロッパ『近代』社会が 19 世紀末に迎えた『モデルネ』の時代に重点が置かれていたのである」(田村 1997, 241) という注目すべき論点を提示している。こうしたパーソンズや田村氏の指摘にならうならば、ゾンバルトの「近代資本主義」研究の主眼は、その歴史的な生成過程の解明にのみあったのではなく、否それどころか、むしろ現実の資本主義経済、すなわち「盛期資本主義 Hochkapitalismus」⁽⁴⁾の最新の局面にかんする分析にこそ向けられていた、ともいうことができるのである。

以上の問題意識にもとづいて、本学位請求論文の目的は、19 世紀末から 20 世紀初頭のドイツにおいて、それまで主流であった手工業経済からの転換を成し遂げ、文字どおり、そのヘゲモニーを確立しつつあった資本主義経済に対してゾンバルトがいかに対峙していたのか、すなわち「盛期資本主義経済」に対するゾンバルトの認識を、主として「企業家」と「信用」および「株式会社」という 3 つのファクターを検討することを通じて明らかにすることにある。その際、われわれがここで特に、従来のゾンバルト研究においてほとんど注目されることのなかった「企業家」と「信用」ならびに「株式会社」というこの 3 つのファクターに照射しようとするのは、以下に詳しく論及していくように、それらが「盛期資本主義経済」の本質を解明していくうえで決定的に重要な役割を果たす概念であるとゾンバルト自身が考えていたからにほかならない。すなわち、ゾンバルトにとって「企業家」とは、資本主義経済を形成するうえでの「究極的原因」(=「指導的経済主体」)であり、「信用」とは、その企業家の経済活動を促進するうえでの必要不可欠な装置(=「盛期資本主義経済における精神の化身」)、さらに「株式会社」とは、その「信用」を体現する最も重要な機関・企業形態として見なされる。ゾンバルトにあっては、この 3 つのファクターが相互に有機的に機能することによってはじめて資本主義経済はその「最盛」の展開を示すことになることと把握されているのである。こうして、われわれは今、本論文の構成について言及する段階に達したのであるが、その前にこれまでの国内外におけるゾンバルト研究の歩みを多少なりとも整理しておこう。

II. 研究史

すでに触れたように、戦前・戦中のわが国では、その著作の旺盛な翻訳作業を通じてゾンバルトの思想を積極的に摂取・吸収しようとする意欲に満ち溢れていた。先に列挙した邦訳書にくわえて、『戦争と資本主義』(Sombart 1913b, 立野保男抄訳 1938年), 「社会政策の理想」(Sombart 1897, 戸田武雄訳 1939年), ならびに「技術と経済」(Sombart 1901, 阿閉吉男訳 1941年), 『ユダヤ人と経済生活』(Sombart 1911, 長野敏一抄訳 1943年)といった諸訳書もこの時期に矢継ぎ早に出版されている。しかし、こうした傾向は、金森誠也氏による『奢侈と資本主義』(Sombart 1913a)の邦訳(1969年)と論文「カール・マルクスの経済学体系批判」(Sombart 1894)や「カール・マルクスと社会科学」(Sombart 1908)などを訳出した知念英行氏の業績(1976年)を例外として、戦後にはほとんどまったく継承されておらず、ゾンバルトにかんする研究書も、『近代資本主義』第2版の内容を詳しく紹介した木村元一の著作(木村 1949)を除けば、戦後間もなく公刊された小原敬士『近代資本主義の範疇 — ゾンバルト「資本主義理論」』(小原 1948)と戸田武雄『ウェーバーとゾムバルト』(戸田 1948)が数少ない成果として挙げられるに過ぎない。小原と戸田の作品は、ゾンバルトの資本主義理論を検討したわが国における草創期の研究として注目すべき成果であり、その開拓的な業績は高く評価されなければならない。しかし、両著作の分析内容は、総じて「近代資本主義の起源」にかんするゾンバルトの議論の紹介にウエートがおかれており、大塚久雄と同じく、ゾンバルトの「近代資本主義」および資本主義精神論のパーリア性が強調され、かくしてヴェーバーとの比較からゾンバルトの起源論を批判・断罪するという手法をとっている⁽⁵⁾。それゆえ、両研究では、ゾンバルトにおける現実の資本主義認識を解明するという問題意識ははじめから考察の射程外におかれることになるのである。

1950年代には、榊原巖がゾンバルトの経済思想を多面的に論じた意欲的なモノグラフ(榊原 1958)を著した。榊原は、『近代資本主義』第2版の検討にとどまることなく、ゾンバルトの1910年代以降の主要著作のほとんどに言及しており、社会主義論、ユダヤ人論、さらには『3つの経済学』に代表される経済学方法論にいたるまで、その思想をバランス良く紹介している。榊原はまたゾンバルトの資本主義精神論についても検討しているが、それまでの研究のようにヴェーバー的視点から批判をくわえるというスタイルをとることなく、それを「多元論的

起源論」として客観的に評価しようとしている。榊原の叙述は、冷静かつ公平なものであり、その研究はゾンバルトの思想の全体像を描き出そうとしたわが国における最初の本格的な成果として位置づけることができる。ただし、多様なトピックを一括して扱おうとしたがゆえに、各論の考察は概して表層的な水準にとどまっており、また『近代資本主義』初版や『19世紀のドイツ国民経済』といったゾンバルトの初期の代表作はまったく議論の俎上に載せられていない、という欠陥を抱えていることも指摘しておかなければならない。

さて、1960年代から80年代にかけて公にされた研究で逸することができないのは、木村元一の論稿（木村 1964）である。木村は、ゾンバルトの経済学を「制度派経済学の潮流に属する経済学」であるとはっきりと指摘し、その特徴が「経済社会学的な立場の強調」にあり、「漸進主義、進化主義、社会改良主義を基調」としたものであると明言する。木村はまたゾンバルトの「近代資本主義」論が、「経済志向」・「技術」・「組織」の統一体としての「経済システム Wirtschaftssystem」⁽⁶⁾という概念によって明確に枠づけられていると主張し、その議論は「経済史」に分類されるものではなく、それよりもむしろ「理論的＝抽象的＝体系的な叙述」によって貫かれたものであると力説する。木村によれば、『近代資本主義』第2版は、「普遍史であると同時に体系的な専門書」として把握されなければならないのである⁽⁷⁾。さらに、木村の分析はゾンバルト最晩年の著作『人間について』（Sombart 1938）にも及んでおり、ゾンバルトの経済学が「資本主義機構を前提とした自然科学的な分析にあきたらず、人間の生命と人間の精神の織り成す文化領域としての経済の精神科学的な理解を目指していた」ことを強調している。

制度の経済学としてのドイツ歴史学派が脚光を浴びている近年の研究動向から見ても、ゾンバルトの経済学を制度派経済学に連なるものとする木村の指摘は、当時において創見であり、きわめて鋭いものがある。木村は言及してはいないけれども、ヴェブレン（Thorsten Bunde Veblen, 1857-1929）やコモンズ（John Rogers Commons 1862-1945）、さらにはミッチェル（Wesley Clair Mitchell, 1874-1948）といった20世紀初頭のアメリカ制度学派を牽引した主要な論者たちが、ゾンバルトの議論にたえず関心を払っていた⁽⁸⁾という事実をわれわれは看過してはならないだろう。

木村の論稿以降も、70年代には、知念英行氏がゾンバルトの科学技術論を検討したモノグラフ（知念 1973；1976）を発表しており、次いで80年代には、鈴木

芳徳氏がゾンバルトの株式会社論を扱った研究ノート（鈴木 1981）を公にされている。このように、わが国においてもゾンバルトへの関心は完全に途絶えたわけではなかったが、しかし、ゾンバルトの経済思想を体系的に分析した著作が出版されることもなく、とりわけ目を惹くような成果を以上のほかに見出すことはできない。つまり、戦後から 1980 年代にいたるまでのわが国におけるゾンバルト研究の歴史は、総じて戦前・戦中の翻訳作業に見られたゾンバルト受容の熱狂的ともいえるアカデミズムの動きを継承したものとはなっていないのが実情なのである。このようなゾンバルト研究の乏しさは、戦後のわが国における重厚なヴェーバー研究の蓄積（橋本 2000）と比較して見た場合、よりいっそう際立つものとなる。

さて、大正期以降 1980 年代までの日本のゾンバルト研究の歩みは、大略以上のように総括されるが、ではドイツ本国における事情はいかなるものであったか。いうまでもなく『近代資本主義』をはじめとするゾンバルトの議論は、同時代からアカデミズムの内外で注目を集めてはいたが、しかし実は、ドイツでもゾンバルトの経済思想が正面から検討されるようになるのは意外にも遅く、その本格的な成果が現われるのは、ゾンバルトの死後 20 年以上も過ぎてからのことであった。まず注目されるのは、「戦後ドイツのゾンバルト研究の原型」（田村 1996, 25 注 4）として評価されるリンデンラウプの業績（Lindenlaub 1967）である。リンデンラウプは、『近代資本主義』の初版と第 2 版の間にゾンバルトの世界観や人生観、さらには学問的な立場に根本的な変化が生じていると指摘し、その思想上における転換・転向の問題に注目している。すなわち、リンデンラウプによれば、マルクス主義からの強い影響のもとにあった初期のゾンバルトが、1903 年に公刊された『19 世紀のドイツ国民経済』以降、次第に「反唯物論、反政治、反民主主義」的な立場を濃厚にしつつ「貴族的な転向 aristokratische Wende」を遂げていったというのである。ゾンバルトにおけるマルクス主義の受容とそこからの離反という問題は、彼の資本主義観の変遷を考察するうえでもきわめて重要な論点を提供するものであり、この問題をめぐっては今日なおゾンバルト研究者の間で活発な議論が繰り広げられている（Tötto 1996）。リンデンラウプの研究は、まさしくその先駆けとなるものであった。

次に、ブロッケ（Brocke 1972）は、ゾンバルトの「近代資本主義」論が「資本主義の理論家および歴史家」としてのマルクスからの決定的な影響のもとに彫琢された議論であることを認めつつも、マルクスにとっての「歴史事象の主体」が

「超人間的な主体」としての「資本」であったのに対して、ゾンバルトにとってのそれは、シュンペーターと同じく、「経営する人間自身」すなわち「近代的企業家」であったことに注意を喚起する。ゾンバルトにとっては、本質的には「企業家の歴史」、さらにいえば「経営する人間の志向様式と行動様式の歴史」(＝「資本主義的精神の歴史」)が問題となるのであって、この「資本主義的精神」という概念を用いることによってゾンバルトは、資本主義を年代順に世界史のなかに配列し、かつヨーロッパにおける経済発展を内的に区分するための基準を獲得した、とブロッケは指摘する。このように、ブロッケは、資本主義の分析に「精神史的な解釈」を導入したところにマルクスとは異なるゾンバルト独特の特徴を見出そうとしている(9)。

また、ブロッケは、自ら編集を手がけた『近代資本主義』にかんする研究書(Brocke 1987a)にも、ゾンバルトの生涯を精査し、主要テキストの再検討と、さらにはその資本主義理論の現代的影響までを射程にのこした論文(Brocke 1987b)を寄稿しているが、管見の限りでは、ブロッケのこのモノグラフは、1990年代以前のドイツにおけるゾンバルト研究の一定の到達点を示すものとして注目しに値する。事実、このブロッケの研究成果を吸収・発展させるような形で、90年代以降続々とゾンバルトにかんする研究文献が刊行されるのであり、かくて社会経済思想史における「ゾンバルト・ルネサンス」といっても過言ではない状況が導かれるのである。

このようなドイツ本国における90年代以降の「ゾンバルト・ルネサンス」を主導した一人がミヒャエル・アッペルであった。アッペルは、ミュンヘン大学に提出した学位論文を公刊した著作(Appel 1992)において、主として『近代資本主義』初版と第2版に焦点を合わせて考察を行っているが、彼はテキストの内在的分析にとどまらず、たとえば初版が、ベロウやデルブリュックといった専門の歴史家からその手工業把握や資本成立の理論(＝「地代蓄積説」)をめぐる厳しい批判にさらされたこと、さらに第2版もドブシュから「経済システム」という理論的枠組みによって歴史的諸事実を整序しようとするその手法が指弾されたことなど、『近代資本主義』に対する当時のアカデミズムの反応を精力的に掘り起こしている。このアッペルの著作によって『近代資本主義』がドイツのみならず、同時代の世界じゅうの経済学者および中世史家をはじめとする歴史学者によって大きな関心をもって迎え入れられていたという事実が立証されたのである。また『近代資本主義』初版の刊行以来、「資本主義」という用語が人口に膾炙し、学

術文献のなかでも頻繁に用いられるようになったという同時代人パッソウの証言 (Passow 1918, 2-3) も本書によって明確に裏づけられることになったといつてよい。

1994年には、フリードリヒ・レンガーによって従来のゾンバルト研究の水準を飛躍的に高める大作 (Lenger 1994) が発表された。この著作は、ゾンバルトの生誕から正教授就任までを扱った第1部とそれ以降ベルリン大学正教授としてワイマール時代からナチスによる政権掌握という激動の時代を生き、第2次大戦中に病没するまでを扱った第2部から成っており、全15章570ページもある浩瀚な伝記である。レンガーは、公刊資料のみならず、メルゼブルク公文書館所蔵のゾンバルトの遺稿をはじめとして、その他同時代人の残した膨大な未公刊資料をも精査しつつ、ゾンバルトの生涯を丹念に追っている。本書によって明らかにされた新事実やユニークなエピソードは数多いが⁽¹⁰⁾、看過してはならないのは、本書が単に伝記的側面だけではなく、ゾンバルトの資本主義理論の分析にかんしても光彩を放っているということである。とりわけ、ゾンバルトのユダヤ的資本主義論を扱った第9章では、『ユダヤ人と経済生活』に対するほかに類を見ないほどの詳細な検討が行われていると同時に、この作品が第1次大戦以前のドイツ社会学における人種問題への関心の高まりとも相俟って、刊行されるやいなや夥しい反響を巻き起こしたことなどが指摘されている。処女作『ローマ・カンパーニャ』 (Sombart 1888) から晩年の『ドイツ社会主義』 (Sombart 1934) にいたるまでレンガーの分析は、ゾンバルトの主要著作・論文のほとんどすべてに及んでおり、しかもその考察の水準はきわめて高く、よって彼の著作は今日のゾンバルト研究における最高の成果として見なされるべきものである。

アッペルやレンガーの大著とならんで、ブロッケによる彼の年来の研究をさらに深化・発展させた論稿 (Brocke 1992) もこの時期に提出された重要な成果であるが、研究史上、看過しえないのは、1996年にユルゲン・バックハウス編纂の全3巻からなるはじめてのゾンバルト研究論集 (Backhaus 1996abc) が公刊されたことである。この論集は、全巻英語論文によって編まれているが、扱われているテーマは、伝記研究はもちろんのこと、ユダヤ人論、人口論、都市論、政治論、手工業論、科学技術論、社会科学方法論、社会主義論など多岐に及んでおり、実に多様な観点からゾンバルトという人物とその思想、および彼の経済学が描き出されている⁽¹¹⁾。本論集には、マンフレート・プリシングによる企業家論 (Prisching 1996) も収められているが、彼の論稿は、本論文のテーマとも密接

に関連しており、またゾンバルトの企業家論を本格的に検討したはじめての研究として注目に値する。さらに、2000年には、同じくバックハウスの編集によってドイツ語論文からなるゾンバルト研究論集（Backhaus 2000）も刊行されているが、このなかにもプリシングの企業家論文の改訂版（Prisching 2000）が収録されている。

さて、以上のようなドイツ本国における「ゾンバルト・ルネサンス」の動向と軌を一にするかのように、わが国においても研究の進展が見られた。まず、戦後久しく手がつけられていなかった翻訳作業が金森誠也氏によって再開される。金森氏は、1969年に自ら翻訳した『奢侈と資本主義』（Sombart 1913a）を一部訳語の手直しをしたうえで1987年に再刊したことを皮切りに、1990年に『ブルジョワ — 近代経済人の精神史』（Sombart [1913] 1920）、1994年に『ユダヤ人と経済生活』（Sombart [1911] 1928）、そして1996年には『戦争と資本主義』（Sombart 1913b）を相継いで翻訳・刊行した。つまり、金森氏は、ゾンバルトが『近代資本主義』改訂のための「準備作業」として執筆した4冊のモノグラフのすべてを訳出されたわけである。これにより、われわれはゾンバルトの1910年代の経済思想に接近しやすくなったばかりではなく、ゾンバルトとヴェーバーとの「起源論争」の推移をかなりの程度日本語で追うことができるようになった。この意味で、金森氏の訳業の果たした功績は大きいといわなければならない。

1990年代以降のわが国における最も重要な研究は、田村信一氏の論稿（田村1996；1997）である。田村氏は、これまでわが国ではまったく顧みられることのなかったゾンバルト初期の代表作『近代資本主義』初版を詳細に検討し、その意義を明らかにされるとともに、初版と改訂された第2版との相違点にも注意を払われた。田村氏によれば、初版と第2版との「最大の相違」は、「初期資本主義観が180度転換したこと」にある。すなわち、初版では「妨害」要因として把握された「初期資本主義の発展に対する国家の政策的意義」、たとえば「君侯の奢侈・軍隊の需要・大都市の大量需要・植民地の需要と国家的労働者政策」といったファクターが、第2版では「大経営成立の促進要因として決定的に重視されるようになったのである。その原因については、詳しく論じられてはいないもの⁽¹²⁾、田村氏も指摘されるように、こうした初期資本主義観の転換は、「近代資本主義の発展史にかんする研究」という副題の付された『奢侈と資本主義』と『戦争と資本主義』にもすでに確認されるものであり、これ以降、国家の諸活動が果たす役割は、ゾンバルトにおける「近代資本主義」生成の議論のなかで決定的に重視

されることになった。こうした論点のほかにも、田村氏は、金井新二氏の研究(金井 1991)を引き継ぎつつ、ヴェーバーの「先行者」としてのゾンバルト『近代資本主義』初版の「資本主義的精神」論のもつ意義を明確に強調されている。さらに、田村氏には、ロッシヤー、シュモラー、ゾンバルトという 3 世代の線上でドイツ歴史学派の展開を捉えようとした力作(田村 1998)もある。かくして、1990 年代のわが国におけるゾンバルト研究は、田村氏の築かれた成果を通じて著しい前進を示すこととなった。

さて、2000 年に入ってから、たとえば、ゾンバルトの資本主義成立の理論(=「地代蓄積説」)に対するベロウの批判と、この両者の議論にヴェーバーがどう対応したのかを包括的に考証された牧野雅彦氏の労作(牧野 2003)やゾンバルトの人種理論を「ネガティブ・パラダイム」という枠組みを援用しつつ検討された村上宏昭氏の研究(村上 2003)などすぐれた成果が提出されているが、そうしたなかでも特筆に価するのは、ビーレフェルト大学に提出された学位論文を公刊した竹林史郎氏(Takebayashi 2003)の作品である。竹林氏は、本書で膨大な一次資料を綿密に考証することによってドイツ歴史学派生成期の学問的状況を再構築されているが、氏はゾンバルトにかんする分析でもこれまで注目されてこなかった重要な論点を析出されている。まず、ゾンバルトの「近代資本主義」論の前提としてマルクス、A. トゥーン以来の議論を継承した彼の家内工業研究の意義が強調される。ゾンバルトにとって家内工業の歴史的成立は、「資本主義的生産様式」および「近代資本主義的階級形成」の萌芽として捉えられたのであり、それゆえ「家内工業の歴史」を探究することは、「資本主義の歴史」を考察することと無関係ではありえず、否それどころか、家内工業研究の延長上に『近代資本主義』初版が著されたことがはっきりと指摘される。次に、初版における「手工業」と「資本主義」の概念規定にマルクス『資本論』第 1 巻からの強い影響が窺われること、ゾンバルトの「資本主義的精神」は、ブレンターノとシュモラーの「商業精神」をもとに彫琢された概念であること、さらにゾンバルトの中世商業観は、ベロウの研究成果に多くを負っていたことなど、豊富な関連文献の解析によって新事実が次々と明らかにされる。こうして、竹林氏によって初期ゾンバルトの家内工業観から資本主義研究へといたる学問的発展の過程が、とりわけマルクス、エンゲルスとの継承関係にも留意しつつ再構成されたことは、研究史上きわめて意義のあることであり、氏の研究は、この 1 点だけをとっていても高く評価されなければならない。

以上、われわれは、大正期から戦中・戦後を経て現代にいたるまでのわが国におけるゾンバルト研究の歩みを戦後ドイツの重要な研究成果をも視野に収めながら振り返ってきた。それは、簡単に総括すれば、戦前・戦中のマルクスに比肩しうるほどの熱烈な受容の時期を経て、戦後の長い停滞期を迎えつつ、1990年代以降のドイツ本国における重厚な研究成果に呼応するような形で今新たにゾンバルト再評価の気運が高まりつつある状況にある、といえるだろう。ただし、これまでの研究史の概観からも明らかなように、戦後間もない時期の研究はもとより、近年の卓抜なモノグラフにあっても、本論文が重視するような問題関心において、すなわちゾンバルトの企業家観と信用および株式会社論を支柱として彼の現実の「盛期資本主義経済」に対する認識を検討しようとする研究は、その重要性にもかかわらず、依然としてほとんど皆無であると言って差し支えない。本論文は、研究史におけるこうした欠落を少しでも埋め合わせつつ、ゾンバルトの資本主義論が歴史的な「近代資本主義成立史」論の枠組みにとどまるものではなく、現実に展開されている資本主義経済との彼なりの知的格闘のなかで形成された議論であったこと、さらには同時代を代表する一級の知識人、経済学者たちとの相互的な学問的交流ないし影響関係のもとで彫琢された議論であったことを、経済思想史・学説史研究の観点から論証しようとするものである。

Ⅲ. 本論文の構成

以上から、本学位請求論文の構成は次のようになる。まず本論は全4章から成っているが、前半の2つの章では「盛期資本主義経済」における「指導的経済主体」として規定されたゾンバルトの企業家にかんする議論が考察され（第1章）、それとの関連で彼のユダヤ的資本主義論が検討に付される（第2章）。これによってわれわれはゾンバルトの経済学体系の中核をなす企業家の特性を具に知ったうえで、さらに続く後半の2つの章では彼の企業家論と密接に結びつく信用論（第3章）、株式会社論（第4章）についてそれぞれ当時の有力な経済学者たちの議論との継承関係にも注意を払いながら比較分析を行う。先に見たように、従来のゾンバルト研究では、アップル (Appel 1992)、レンガー (Lenger 1994)、田村 (1996; 1997; 1998; Tamura 2001)、Takebayashi (2003) などごく一部のモノグラフを除いてもっぱらヴェーバーとの関係にばかり関心が集中しており、それ以外の論者、たとえば本論文が注目しているシュンペーターやハーン、ある

いはリーフマンやヒルファディングといった経済学者、知識人との学問的關係については未だ必ずしも十分な分析が行われていない。ゾンバルトとヴェーバーが特に深い学問的親交によって結ばれていたことは、周知のようにヴェーバーがハイデルベルク大学の自身の後任にゾンバルトが就くことを希望したり (Honigsheim 1963, 168 : 訳 19) , あるいは「近代資本主義の起源」をめぐる両者の認識の相違以降も『アルヒーフ』 (= 『社会科学・社会政策雑誌』) の編集作業をともに協力して進めていたことから明らかであるが、しかしそうした事実はいうまでもなくゾンバルトとヴェーバー以外の同時代知識人との密な学問的繋がりやを否定するものではないだろう。ゾンバルト研究のさらなる発展のためにも多様な知識人、経済学者たちとの議論の接点を浮き彫りにしたうえで彼の資本主義理論の源泉を探る試みが必要不可欠であるように思われる。後半の 2 つの章では特にそうした点にも意を用いながら検討が行われている。

それでは、ここで各章の論旨を簡潔に摘記しておこう。

まず第 1 章「ゾンバルトの企業家論 — 『指導的経済主体』としての企業家概念の形成」では、ゾンバルトの経済学体系において企業家という存在とその「指導者」としての役割が決定的に重視される理由を、主として彼の初期の代表作である『近代資本主義』初版 (Sombart 1902a) をテキストとして解説する。本書の「序言」では、「近代資本主義」を考察するにあたってのゾンバルトの方法論的な意識が企業家との関連できわめて明瞭に語られており、それゆえ本書はゾンバルトの「近代資本主義」研究がその初期の段階から企業家を軸として展開されていることを理解するうえで格好のテキストとして考えられる。次いで、同書における企業家像ならびに資本主義的精神論を分析したのち、ゾンバルトの企業家像にかんするより立ち入った考察を 1909 年の論文「資本主義的企業家」(Sombart 1909) を用いて行う。これによってゾンバルトの提示した企業家像の基本的特性、ないしその類型的諸機能、さらには、その気質にいたるまで詳細に見たうえで、かかる資本主義的企業家像が、彼の場合、現実に活躍する同時代の大企業家たちをモデルとして構成された概念であったことを確認する。さらに、本章では、ゾンバルトによって彫琢された企業家像が、彼の動的な資本主義経済把握にとって重要であるばかりではなく、『経済発展の理論』のなかでシュンペーターによって示された周知の革新的企業家像 (Schumpeter 1912 ; 1926) にも著しい影響を及ぼしていたことを論証する。これまでの研究では、ヴェーバーとシュンペーターとの思想的継承関係ばかりが注目されてきた嫌いがあるが (吉田 1974 ;

Osterhammel 1988), 本章では, 企業家を中軸とするシュンペーターの資本主義理解は, ヴェーバーよりもむしろゾンバルトに負ったものであることを明らかにし, 両者の資本主義観の類似性を浮き彫りにしていきたい。

続く第2章「『ユダヤ人的特性』と企業家活動の展開 — 『盛期資本主義経済』に対する認識との関連で」では, 第1章で分析された「指導的経済主体」としての企業家像に最も適合的な人種・民族としてゾンバルトがユダヤ人を想定していたことを明らかにする。従来の研究では, ゾンバルトの『ユダヤ人と経済生活』(Sombart 1911) は, もっぱらヴェーバーとの「資本主義起源論争」の枠組みでのみ取り上げられることが多かったように思われるが, 本章では, この著作は「企業家」論文の続編として執筆された性格の強いものであること, したがって現実の「盛期資本主義経済」を牽引する担い手が備えるべき資質として, ゾンバルトがユダヤ人のもつ「企業家的なエレメント」に注目していたという新しい解釈を提示する。さらに本章の後半では, 企業家が自らの経済活動を遂行するうえで不可欠である資本調達の問題との関連から, 彼の信用理論を取り上げている。ゾンバルトは, 信用制度が成立するための前提を「債権・債務関係の物象化 (= 客観化)」のうちに認めており, それを実現させるための主要なファクターとして彼はとりわけ有価証券の役割を重視していた。すなわちゾンバルトは, 有価証券の発生を「信用関係物象化の外的表現」として見なしたうえで, 有価証券とユダヤ人企業家たちの特性との間に緊密な親和性を見出しつつ, 現実に展開されている「盛期資本主義経済」を有価証券の普及によって急速に拡大した「ユダヤ的資本主義」と同義のものとして捉えようとしていたのである。このことを確認したうえで本章では, 「盛期資本主義経済」に特有の企業形態である株式会社にかんするゾンバルトの議論にも言及し, 人的結合や財産の多寡に関係なく, 誰もが資本出資に関与することが可能な株式会社を, ゾンバルトが企業家を主軸とした動態的な経済発展を実現させるための最も重要な「信用機関」として捉えていたことを浮き彫りにする。なお, ゾンバルトの株式会社論については, 本論文第4章で特にヒルファディングの株式会社論との比較という研究視角からさらに詳細に分析・考察されることになる。

次に第3章「信用創造理論の系譜とゾンバルト — 『動態的信用理論』の受容をめぐって」では, 株式に代表される有価証券とならんで, ゾンバルトが資本調達のためのもう1つの非常に重要な手段として捉えていた銀行による積極的な与信政策, いわゆる「信用創造」が, H. D. マクラウドを起点とする同時代の「動態

的信用理論」(＝「新しい信用理論」)の興隆を背景として主張された議論であったことを論証する。信用学説史上初めて体系的な信用創造理論を提唱したマクラウドは、「信用」を「将来収益に対する現在の権利」として把握する視点を確立し、ここに信用が「無」から「創造」される契機を認めたが、こうした彼の視角は、ドイツ語圏ではシュンペーターと L. A. ハーンによって継承されていた。すなわち、シュンペーターは、「信用」を「将来の給付やこれから生産されるべき財貨についての証明書」と規定したうえで、「新しく創造される購買力の可能量」が企業家の革新を通じて創出される「将来の財貨」によって保証されていると主張し、またハーンもマクラウドやシュンペーターと同様の立場を堅持しつつ、銀行の積極的な与信政策が将来的な生産力の向上をもたらす最も重要な要因であることを力説した。ゾンバルトはこうした同時代の「動態的信用理論」(＝「新しい信用理論」)から実に多くの示唆を受けており、かくして彼は、「信用」を「貨幣所有のない購買力」として定義し、信用創造の行われる根拠を企業家の革新によって実現される「余剰生産」のうちに見出そうとした。要するに、企業家による革新的な活動を経済発展における最重要の「原動力」として捉える点で、ゾンバルトは同時代のシュンペーターやハーンと見解を共有していたのであり、彼が「動態的信用理論」(＝「新しい信用理論」)を受容したのも、かかる資本主義観のうちにこそその最大の原因があったことを本章では明らかにしている。

最後に第4章「ゾンバルトの株式会社論 — 資本調達プロセスの『民主化』と経営者支配の論理」の課題は、ゾンバルトの株式会社論の特徴とその経済学説史上における意義を、同時代を代表するユダヤ人経済学者であり、ゾンバルト自身その存在を強く意識していたヒルファディングの株式会社論との比較検討を通じて明らかにすることにある。ロバート・リーフマンによって「証券資本主義」と命名された帝政期ドイツの経済的状況、すなわち「資本の証券化」とそれにとともなう株主の広範な分散化、さらには株式会社形態の大規模企業の急激な増加といった諸状況は、ヒルファディングのみならず、ゾンバルトにとってもとりわけ19世紀中葉以降の「盛期資本主義経済」を象徴する最も重要な特徴として認識されており、それゆえ、彼らはほぼ同時期に証券および株式会社にかんする本格的な研究を開始した。しかし、両者の株式会社論は、— 本論において詳しく見るように — その議論の核心である株式会社支配論において著しい対照をなす。すなわち「資本の証券化」にもとづく「全資本の動産化」を強調するヒルファディングが大株主による経営権の掌握のうちに株式会社支配の本質を見出すのに対して、

「資本関係の物象化」を説くゾンバルトはヒルファディング的な大株主支配の現実を見据えながらも、株式会社を「所有と経営の分離」が実現された民主的な資本調達システムとして捉えようとするのである。株式会社の「経営」とは、株主からの「信用」によって選別された才能ある企業家がになうべきであるというのがゾンバルトの一貫して変わらぬ認識であり、かかる認識をもつゾンバルトからすれば、たとえ大株主であっても、企業家としての資質・能力を欠いた者が直接その経営に関与することは許されないのである。かくして、本章では、企業家による経営支配のうちにゾンバルトが「動的な経済発展」の萌芽を認めていたということを、彼の株式会社にかんする言説から浮き彫りにしていきたい。

以上、全4章の検討を通じて、本学位請求論文の掲げたタイトルと副題、すなわちゾンバルトの企業家観と信用さらには株式会社論に焦点を合わせ、これらの検討を通じて彼の「近代資本主義」論の中核を占める「盛期資本主義経済」に対する認識を解明するというわれわれの研究課題は、あらまし達成されることになるであろう。なお、本論文では、全4章の議論にくわえて「補論」としてドイツ語のマニュスクリプトを配している。これによっても本論文の研究課題ならびにその分析内容をおおよそ掴むことは可能である。

注

- (1) いうまでもなく、ゾンバルトの名声は日本にのみとどまっていたのではなく、ベルリン大学の彼のゼミナールには世界中からその指導を求めて多くの若き優秀たちが集っていた。なかでも、産業連関論（投入・産出分析）の創始者で、1973年にノーベル経済学賞を受賞したワシリー・レオンティエフ（Wassily Leontief, 1906-1999）は、その代表格といえよう。レオンティエフは、1928年、22歳のときに博士号を取得し（学位論文『循環としての経済』（*Die Wirtschaft als Kreislauf*, 1928））、ゾンバルトの助手も勤めた。また、宗教哲学・ユダヤ教研究で著名なユリウス・グットマン（Julius Guttman, 1880-1950）やメンガー研究者であり、主著『限界効用理論の歴史』（*A History of Marginal Utility Theory*, 1965）で知られるエミール・カウダー（Emil Kauder 1901-+）もゾンバルトのゼミナリストであった。さらに現代オーストリア学派の旗手として名高いルートヴィヒ・ラックマン（Ludwig Lachmann, 1906-1990）も、ゾンバルトの指導のもと博士号を取得している（学位論文『ファシスト的国家と法人経済』（*Faschistischer Staat und korporative Wirtschaft*, 1930））。このように、ゾンバルトのゼミナールは国際的にも令名の高い学者を多数輩出し

ており、「きわめて影響力の大きいベルリン大学の頭脳集団」(Backhaus 1996d, 129)との形容を与えられるほどであった。彼のゼミナールは、「非常に厳粛」で、たえず「学問的な雰囲気」に包まれていたという(Backhaus 1996d, 116)。日本からも1922年にベルリン大学に留学中であった当時30歳の大塚金之助(1892-1977)が「二年も順番を待ってののち」(大塚 1969, 32)によろやくゾンバルトのゼミナールへの入室を許可され、彼のもとで学んでいる。大塚の回顧録は、ほかのいかなる資料よりも当時のゾンバルト・ゼミナールの様子を克明に伝えており、また本論文のテーマにも密接に関連する興味深い内容を含んでいるので、少し長くなるが当該箇所をかいつまんで引用しておこう。

ゼミナールの時間は、毎週金曜日の夜の七時から九時までだった。ゾンバート教授の若い二度目のコリーナ(Corina)夫人もかならず出席する。……ゼミナール部員は十五人だった。部員の基準は高く、普通学生のゼミナールのようではなかった。国籍別では、ドイツ人九人、ソ連人二人、ブルガリア人一人、ハンガリー人一人、インド人一人、日本人一人だった。性別では、男性一人、女性四人である。男性のうち、一人はソ連の大学教授で客員、四人はすでにドクター(それぞれのゼミナールは、ミュンヘンのマクス・ヴェーバー、フライブルクのフッサール、ハイデルベルクのリッカート、それにソ連のドクター)、一人はハンガリーのドクターで共産主義者、一人は鉱山労働組合から勉強のために派遣されていた労働者、一人はインドの革命家、一人はぼくだった。女性四人のうち、一人はブルガリアの大学教授で客員、一人はブレスラウのドクター……一人は一男性部員の妻でドクター……[この省略は大塚のもの]という具合だった。/二時間のゼミナールの半分は報告、あとの一時間が討論にあてられた。報告テーマは共通で、「指導者」(Führer)の社会学的研究だった。それが、資本主義社会の指導者としての企業家、社会主義社会における指導者、カーライルの英雄論、マクス・シェラー(Max Scheler)の倫理学、マクス・ヴェーバーの指導者概念、インド労働運動の指導者などに分割されて各員がこれを分担した。この「指導者」という言葉は、のちに非常に重要な意味をもってくる。日本では、のちに、ヒトラーのことを「総統」と呼ぶようになるが、そのドイツ語は「指導者」であり、その下に無数の大小の指導者が配置されるようになる。教授がなぜ「指導者」を報告テーマにえらんだかは、当時のぼくにはよくわからなかった。/報告がおわると討論である。討論にはいるまえに、教授は、いつも、「あまり興奮しないように」と注意するが、教授自身がときどき興奮して、ゼミ

ナル指導者が討論相手になってしまい、はては、激怒して、デスクをたたきつけることもあった。こういうときには、教授夫人がやさしく教授の手の上に自分の手を重ねて、「そう興奮してはいけません」となだめるのだった。／教授をこのように興奮させるのは、ゼミナールのなかの左翼だった。その先頭に立ったのは、ハンガリーの共産主義者だった。もう一人は鉱山労働者、もう一人はインドの青年で、故国を追われ十年近くになる革命家である。……一度討論が始まると、これらの部員は、指導教授をふくめてののこりの全員の一言一句に反対する。指導教授は、討論のはじめに、「科学的対論の範囲内で討論するように」と念をおすことをけっして忘れなかった。これは、当然のことを言っているだけのことのように見えるが、このあたりまえのことがなかなか実行されない。これが、当時のゾンバート・ゼミナールの空気だった。（大塚 1969, 32-33）

上記の大塚の回想に見られるように、男女を問わずゼミナリストの大半が博士号を取得しており、すでに大学教授の地位にある者も2名含まれている。かくして、「構成員の質の水準の高いことにおいて当時のドイツ大学のどれにも劣りはしない」（大塚 1969, 33）のが、ベルリン大学のゾンバルト・ゼミナールだったのであり、またゾンバルト自身が「興奮して」、場合によっては「激怒して」討論に加わらざるを得なかったという大塚の証言からしても、「普通学生のゼミナール」とは、かなり質を異にする、水準の高いゼミナールが行われていたと推察できる。

ところで、当時（1922年）のゾンバルト・ゼミナールの研究テーマが「指導者 Führer」の社会学的研究であったという事実はきわめて重要である。なぜなら、一本論文第1章で詳しく見るように、—ゾンバルトは自身の「近代資本主義」研究の初期の段階から「指導者」としての資本主義的企業家の果たす役割に注目しており、とりわけ第1次大戦以前における「盛期資本主義経済」の形成・展開にあたっては、企業家による「指導 Führung」がその「原動力」となったと考えていたからである。また、大塚も論及しているように、この11年後にヒトラー政権が成立するという歴史的事実を勘案してみても、この時期にゾンバルトが「指導者」の問題に関心を寄せていたということは、それ自体注目に値する。なお、ゾンバルト・ゼミナールおよび教育者ゾンバルトの実像については、直接の弟子であったフランツ・ミュラーによる回想（Müller 1996）も参照。さらに、ゾンバルトの学問的影響力の大きさが国際的に波及していたということについては、その死（1941年）に際してドイツの学術誌のみならず、たとえば『エコノミック・ジャーナル』にも追悼文が掲載されているという事実（筆者は『ユダヤ人と経済生活』と『ブルジョワ』を英訳したエプスタイン）から

も明らかである (Brinkmann 1941 ; Weber 1941 ; Wiese 1941 ; Epstein 1941) .

- (2) 1940年に梶山力によって『近代資本主義』第2版第3巻の一部(2分冊全60章のうち第1分冊「序文 Geleitwort」を含めて第1章「資本主義的企業家の意義 Die Bedeutung des kapitalistischen Unternehmers」から第15章「資本主義経済に対する信用の意義 Die Bedeutung des Kredits für die kapitalistische Wirtschaft」まで)が訳出され、次いで1942-1943年には岡崎次郎によってその第1巻の一部(2分冊全62章のうち第1分冊「第2版への序文 Geleitwort zur zweiten Auflage」を含めて第1章「経済生活の基本的事実 Die Grundtatsachen des Wirtschaftslebens」から第2分冊第39章「手工業経済における資産形成 Die Vermögensbildung in der handwerksmäßigen Wirtschaft」まで)が訳出された。いずれも達意の名訳ではあるものの、残念ながら全訳は果たされなかった(梶山力は『近代資本主義』第3巻の翻訳・刊行後間もない1941年に32歳の若さで病没している)。ちなみに第2巻(Sombart [1916] 1987b)についてはまったく訳出されていない。このような翻訳事情のために『近代資本主義』第2版全3巻を邦語にて鳥瞰するためには、各巻の要旨を過不足なく叙述した、木村(1949)が今日なお有益である。もとより、第2版だけではなく1902年に公刊された『近代資本主義』初版(Sombart 1902ab)も邦訳されてはいないが、全2巻からなる初版にかんしては、田村信一氏の労作(田村 1996 ; 1997)によってその全容をつかむことが可能である。なお、『近代資本主義』は、初版・第2版ともに英訳も行われていない(Peukert 2000, 17)。英語圏におけるゾンバルトの著作の翻訳ならびにその研究史については、センによる詳細な研究(Senn 1996ab)を参照。
- (3) すでに知られているように、「起源論争」は、ゾンバルトが『近代資本主義』初版で「近代資本主義」の形成を内面から推し進める起動力としての「資本主義的精神 kapitalistischer Geist」を「営利衝動 Erwerbstrieb」と「経済的合理主義 ökonomischer Rationalismus」との結合体として把握する視点を提示した(Sombart, 1902a, 378-397)のに対して、ヴェーバーが論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で西欧近代の発展に寄与する「資本主義の精神 der Geist des Kapitalismus」からゾンバルトの重視する「衝動的な営利欲」を排除し、かかるエートスの淵源を「禁欲のプロテスタンティズム」、わけてもカルヴァン派に帰属するピューリタンたちの強靱な職業倫理と徹底した合理的な生活態度に求めた(Weber 1904-1905, 107 : 訳 355)ことに由来する。以降、論争はゾンバルトが『近代資本主義』の改訂のために公刊した一連のモノグラフ(Sombart [1911] 1928 ; 1913a ; 1913b ; [1913] 1920)と、改訂された『近代資本主義』第2版(Sombart [1916] 1987ab)

で自説の強化をはかり、それに対してヴェーバーが大幅に改訂した「倫理」論文 (Weber 1920) で徹底した反論を加えるという経過をたどった。つまり、両者は実に 15 年にも及ぶ白熱した「起源論争」を展開したのである。「資本主義の精神」の概念規定をめぐるヴェーバーのゾンバルトへの批判については、「倫理」論文のほかに Weber (1923, 300-315: 訳 234-258) も参照。なお、かかる両者の「起源論争」の推移を簡潔かつ的確に整理した近年の研究としては、Lehmann (1993; 1996, 94-108), あるいは諸田 (1996) がある。ヴェーバーの「倫理」改訂作業については、安藤英治の研究 (安藤 1992) が有益な視座を提供している。また、改訂されたヴェーバー「倫理」論文に見られるゾンバルトに対する数多の言及については、住谷 (1993) によってその詳しい紹介・分析がなされている。

- (4) ゾンバルトが「盛期資本主義時代」として規定する期間は、1760 年代から第 1 次世界大戦が勃発する直前、つまり 1914 年までの 150 年間である。その地理上の中心地は、19 世紀前半にはイギリス、次いでアントウェルペン、パリ、ベルリン、ミラノをはじめとする西ヨーロッパ、最後の 30 年間はアメリカ合衆国東部であったとされる (Sombart 1927, X II ; X V : 訳 4; 8)。
- (5) このように資本主義起源論の観点からゾンバルトを批判的に考察する研究は、これ以降も繰り返しあらわれている。たとえば、丸山 (1963; 1964) や小笠原 (1988) などを参照。
- (6) ゾンバルトは、『近代資本主義』第 2 版の第 1 巻において、「経済システム」について次のように述べている。

経済学の中心概念は、経済システムの概念 Begriff des Wirtschaftssystems である。これをもって私の意味するのは、一定の性質をもつ経済様式 Wirtschaftsweise , すなわちそのなかにあつて一定の経済志向 Wirtschaftsgesinnung が支配し、一定の技術 Technik が用いられている、経済生活の一定の組織 Organisation のことである。経済システムの概念において、経済生活の歴史的に制約された特性は 1 つの概念的なまとまりへと統合される。それ以外の一切の経済学的諸概念は、この上位概念、あるいは基礎概念にもとづいて整理されなければならない。(Sombart [1916] 1987a, 21: 訳 26)

このように、ゾンバルトは「経済システム」を構成するファクターとして「経済志向」(個々の経済主体の活動を規定する精神的要因)、「技術」(経済主体がその目的を遂行するために用いる一定の方法)、「組織」(あらゆる個別の経済遂行の根底にある一定の秩序)の 3 つをあげ (Sombart [1916] 1987a, 13: 訳 16) , さしあつ

て「自給経済 Eigenwirtschaft」, 「手工業 Handwerk」, 「資本主義 Kapitalismus」を経済史上における主要な「経済システム」として確定する (Sombart [1916] 1987a, 23: 訳 28). そのうえで, ゾンバルトは各経済システムに特有の「経済志向」(=「精神 Geist」・「経済原理 Wirtschaftsprinzip」), 「技術」, 「組織」(=「形態 Form」)をそれぞれ概念的に明確化し, 各「経済システム」を体系的に把握しようとした。たとえば, 「経済システム」としての「資本主義」を想定する場合, その支配的な「経済志向」(=「精神」・「経済原理」)としてゾンバルトが注目するのは, 「営利追求の原理 Erwerbsprinzip」と「経済的合理主義 ökonomische Rationalismus」である。同様に「資本主義」の「技術」としては「科学的無機的方法 wissenschaftlich - anorganische Verfahren」や「革命的方法 revolutionäre Verfahren」が, さらに「組織」(=「形態」)としては「流通経済的 verkehrswirtschaftlich」組織や「貴族的 aristokratisch」組織がそれぞれ該当する概念としてあげられている (Sombart 1931a, 258-261)。こうして, これら 3 つの各概念が相互に重なり合うことによって「経済システム」としての「資本主義」が成立するとされるのである。ゾンバルトの「経済システム」とは, 「経済理論」の観点から「経済史」を把握しようとする意図から導出されたゾンバルト独自の概念であったが, これは後に歴史的諸事象を総体的かつ包括的に把握するための理論的手段として, ザリーンやシュピートホフによってポジティブに評価され, 彼ら二人の彫琢した「直観的理論 anschauliche Theorie」の基礎となった (原田 2001; 2008)。ゾンバルトの「経済システム」論について詳しくは, Sombart (1925a; 1929b; 1929c; 1931c) も参照。

(7) こうした木村の認識は, 『経済分析の歴史』におけるシュンペーターの次の指摘ともびたりと符合するものである。シュンペーターは次のように述べている。

彼 [=ゾンバルト] の『近代資本主義』…… は, 一般経済史のタイプとかシュモラーの『綱要』のタイプとかのいずれとも等しく区別されるべき第 3 のタイプの歴史学派的総合を代表するものである。…… それは力点がむしろ理論化 reasoning の方に置かれた 1 つの理論史 *histoire raisonnée* であり, かつ社会状態についてのフレスコの連続という意味において [歴史でなしに] 体系 system の方に力点が置かれた体系史 *systematized history* にほかならない。(Schumpeter 1954, 817-818: 訳 5, 1718)

さらに同時代にはヴィーゼも, 「純粋学問的な観点から見たゾンバルトの重要性は, とりわけ体系的に整序された思考を歴史感覚に結びつける才能にこそある」と捉えており, かくして「シュモラーとは違って, ゾンバルトは歴史家 *Historiker* というよ

りもむしろ体系家 *Systematiker* である」と指摘している (Wiese 1933, 255) .

- (8) ヴェブレンは、ゾンバルト『近代資本主義』初版の書評 (Veblen 1903) を執筆している。この書評において興味深いのは、ヴェブレンが『近代資本主義』初版の第 1 章でゾンバルトが行っている「経済 *Wirtschaft*」と「経営 *Betrieb*」の区別を決定的に重視しており、それぞれに対して「ビジネス *business*」と「インダストリー *industry*」という訳語をあてていることである (Veblen 1903, 302) . では、ヴェブレンがこのように注目したゾンバルトにおける「経済」と「経営」の区別とは具体的にいかなるものであったのか。彼によれば、「経済」とは、「経済原理が強制する経済活動」 (= 「営利追求」) の実現を「最終的な目標」とする「ある特定の経済形態 *Wirtschaftsform*」のことであり、「価値増殖共同体 *Verwertungsgemeinschaft*」とも言い換えられる。対して、「経営」とは、「ある特定の行動が規則的に反復される統一的に秩序づけられた労働過程 *ein einheitlich geordneter Arbeitsprozess*」のことを意味しており、「労働共同体 *Arbeitsgemeinschaft*」とも言い換えることが可能であるという (Sombart 1902a, 5) . ゾンバルトは、「私にとって経済と経営をこのように区別することは、…… きわめて重要なことである」 (Sombart 1902a, 5-6) と力説している。このような「経済」と「経営」、同じことであるが「企業 *Unternehmung*」と「経営」の区別については、大塚 ([1938] 1969, 30 ; [1964] 1969) も参照。なお、ヴェブレンとゾンバルトの経済思想を比較検討した研究としては、Loader (1991) がある。ちなみに、コモンズとミッチェルは、それぞれ『近代資本主義』第 3 巻の内容を手際よく整理した書評論文 (Commons and Perlman 1929 ; Mitchell 1929) を学術誌に寄稿している。くわえて、ナイト (Frank Hyneman Knight 1885-1972) にもヴェブレンだけでなく、ゾンバルトの資本主義理論に着目した論稿 (Knight 1929) があることを見逃してはならない。

- (9) ただし、ブロッケのこうした認識は、すでに同時代においてシュモラーによっても表明されていた。シュモラーは、『近代資本主義』初版に対する書評論文で、ゾンバルトもまたマルクスと同様、資本主義が究極的には「資本それ自体の帰結」であるかのような印象を与えてしまっていると批判しているが、しかしマルクスが経済的・社会的状況を規定する要因として「機械的・技術的生産過程」だけしか考慮しないのに対して、ゾンバルトが「近代的営利衝動」、すなわち「資本主義的精神」という「心理的要因」を想定していることに対して次のような一定の評価を与えている。

彼 [= ゾンバルト] は、心理的な原因 *psychische Ursachen* だけがあらゆる経済現象を解明するものであることをまったく正確に認識していた。マルクスは、

そうしたことについてなんら予感すら抱かなかったばかりか、正反対のことを信仰していたのである。(Schmoller 1903, 297)

- (10) ここでは一例だけをあげておこう。1902年当時、ブレスラウ大学員外教授であったゾンバルトは、新規の鉄道敷設計画を検討する市議会に列する機会をもち、その席上、自然破壊や鉄道それ自体の騒音、さらには鉄道敷設によって駅周辺に増えるであろう飲み屋からでる騒音などを理由にあげて、その計画に強い反対の意志を表明したという。レンガーは、このエピソードをゾンバルトのなかでその後いつそう鮮明に生じてくる、技術進歩や大都市における大衆文化の発展に対する嫌悪感・不快感を先取りするものとして伝えている(Lenger 1994, 58-59)。このエピソードはまた、いうまでもなくリンデンラウプの指摘するゾンバルトにおける「貴族的転向」(Lindenlaub 1967, 328)の問題とも密接に関連する内容を含むものであるように思われるが、いずれにせよ、手工業の没落と資本主義発展の不可避性について論証した『近代資本主義』初版の刊行と同じ年に、ゾンバルトがドイツにおける資本主義発展の象徴ともいべき鉄道敷設の問題に対してかかる見解を表明していたという事実は、それ自体きわめて興味深い。
- (11) バックハウス編纂のこのゾンバルト研究論集に収められた各論文の内容については、1990年代以降のドイツ歴史学派にかんする研究動向を追った池田幸弘氏による最新のサーヴェイ(Ikeda 2008)によって詳しく紹介されている。池田氏は、本論集所収のゾンバルトの経済学を扱った各論文が目する研究テーマを、1. ゾンバルトの動態的経済学、2. 企業家概念、3. 資本主義の歴史的分析、4. 農業の重要性、の4つに分類されている(Ikeda 2008, 88)。
- (12) 田村氏は、その後発表された論稿(Tamura 2001)でこの問題についてさらに立ち入った分析を行われている。田村氏によれば、初版にはない第2版の特徴としては、第1に「国家の経済的役割」が真剣に議論されていること、第2に「資本主義の将来にかんして悲観的見解」が提示されていることがあげられるが、後者についていえば「彼 [=ゾンバルト] 生来の、ロマン主義的な、資本主義に対する懸念が先鋭化した」(Tamura 2001, 113)ということにほかならない。対して、前者は「経済における国家の決定的役割を強調するシュモラーの重商主義観の核心をゾンバルトが受容」(Tamura 2001, 114)したことを意味するという。シュモラーは、「重商主義」を「近代国民国家が旧態依然たる社会的経済的構造を解体し、近代国民経済を促進する改革的政策」として把握していたが(Tamura 2001, 108)、第2版で展開されたゾンバルトの国家論、すなわち「初期資本主義経済」に対する国家の政策的役割を重視する

彼の議論は、まさしくこうした「シュモラーの重商主義論を発展させようとする重要な試み」(Tamura 2001, 115)であった。ただし、田村氏によれば、ゾンバルトは、シュモラーとは異なりエコロジー的視点から「重商主義の歴史的限界」についても認識していた。たとえば、戦争、あるいはそれによって引き起こされる軍事需要の拡大は、ゾンバルトにとって一方では王侯貴族の奢侈とならんで「初期資本主義的国民経済の主な動脈」として見なされたが、しかし他方ではそれは、企業活動に対して破壊的な影響を及ぼし、果ては文明の存続それ自体をも脅かしかねない負のファクターとしても捉えられていた (Tamura 2001, 114-115)。

第1章 ゾンバルトの企業家論

— 「指導的経済主体」としての企業家概念の形成 —

I. はじめに

ゾンバルトは、彼の資本主義研究の集大成ともいうべき大作『近代資本主義』第3巻 (Sombart 1927) のなかで、「努力、目的、意志の動きをもった生きていく人間」としての企業家を「盛期資本主義経済」を主導する「唯一の原動力」であると見なしている。彼によれば、「盛期資本主義」という「歴史上の特殊な時代」を分析し、その特質を浮き彫りにするためには、この時代の「歴史的な原動力」である企業家の「動機」を解明することがなによりも重要となるのである (Sombart 1927, 9-10 : 訳 30-31)。もとより、ゾンバルトのかかる認識は『近代資本主義』第3巻にいたってようやく表明されたものではもちろんなく、彼はそれ以前にも「経済的指導者」としての企業家の果たす役割の重要性を繰り返して説いていた。たとえば、ゾンバルトは『近代資本主義』初版を刊行する前年に行われた講演で、現今の「資本主義経済システム」を主体的に形成しているのは企業家 (=「商人的組織者」) にほかならないと明言しており (Sombart 1901, 64)、また自らの資本主義研究を体系的に要約した論稿のなかでも、機械化・客観化を普遍的に志向する「資本主義的企業」においてこそ、かえって強力な指導者的資質を備えた企業家の存在意義が高まることになることと力説していた (Sombart 1925b, 20)。すなわち、ゾンバルトは一貫して企業家を資本主義経済の中核に位置づけようとしていたのであって、それゆえ彼の「近代資本主義」論、わけてもその核心をなす「盛期資本主義経済」に対する認識を正確に把握するためには、単に「資本主義的企業」だけではなく、その内部で活動を行う「生き生きとした核心」 (Sombart 1909, 717 ; 1925b, 15) である企業家をも分析対象に据えることが不可欠となるのである。

ところが、こうした重要な位置を占めるにもかかわらず、ゾンバルトの企業家論にかんする研究は、未だほとんど進展を見せていないのが実情である。たとえば、企業家論史を扱った代表的なモノグラフであるヘバートとリンク (Hébert and Link 1988)、あるいはイエーガー (Jäger 1990) のいずれの研究においても、ゾンバルトの企業家像についてはごく簡単にその革新性が指摘されているに過ぎず、その具体的な内容についてはまったく立ち入った分析がなされていない。

またレンガー (Lenger 1994) は、これまでヴェーバーのカリスマ的指導者との親縁性でのみ捉えられてきたシュンペーターの企業家像に対して、ゾンバルトの企業家概念が及ぼした影響を看過すべきではないという注目すべき見解を提示しているものの (Lenger 1994, 234; 459) , 両者の企業家像が具体的にいかなる点で類似しているのかについては詳しい考証を避けている⁽¹⁾。さらにプリシング (Prisching 1996; 2000) は、ゾンバルトの企業家観を正面から扱ってはいるものの、しかし初期ゾンバルトの代表作である『近代資本主義』初版、あるいは彼の企業家観を論じるうえで不可欠の論文「資本主義的企業家」がまったく検討されておらず、それゆえ彼の研究にはテキスト選定における不備があることを指摘せざるをえない。また、プリシングの論稿は、総じて近代的企業家層の歴史的な生誕にかんするゾンバルトの議論を紹介することにウエートが置かれており、それゆえ、現実の企業家をゾンバルトがいかに捉えていたのかについての考察は必ずしも十分には行われていない。

以上のような先行研究の抱える問題点に鑑み、本章ではまず『近代資本主義』初版の「序言」の叙述に注目しつつ、ゾンバルトがいかなる方法論的な視角のもとに企業家を機軸として同時代の資本主義社会を考察するようになったのかを明らかにしていく。次いで、彼の企業家観を、その基本的特性や「企業家」と「商人」に代表される類型的諸機能にいたるまで詳細に分析したうえで、その「気質」についても検討を行う。最後に、以上の考察をもって明らかにされたゾンバルトの革新的企業家像の特性とシュンペーターのそれとの類似性・継承性についても論証していきたい。

II. 「近代資本主義」研究における方法論的視角

ゾンバルトは『近代資本主義』初版の「序言」において次のように述べている。現実のなかで絶えず新たに生起する社会的諸現象の「究極的原因 letzte Ursachen」とは、「生きている人間の動機 Motivation lebendiger Menschen」にはほかならない (Sombart 1902a, X VIII) 。このことは、繰り返し強調されるべき「社会科学の最高規範」であり、したがって「社会的現象世界を解明するためには、〔その現象世界に〕第 1 に影響を及ぼす人間の行為の原因ないし原動力あるいは〔行為の〕動機ないし目的系列を吟味することが推奨される (Sombart 1902a, X IX)」。

このように、ゾンバルトは「行為する人間の動機系列」を社会的現象世界を解明するための唯一のファクターとして重視し⁽²⁾、さらにこの「動機系列」を時代を問わず万人に共有される経済感覚・人間の本源的欲求・エゴイズム・経済活動への衝動といった「無数の経済的動機」から峻別する(Sombart 1902a, X X I)。ここでゾンバルトが、シュモラーとヴァーグナーを引き合いに出しつつ、彼らが動機の複雑さを強調しすぎたためにかえって「個別現象の場合ですら、ありうべき動機全体との因果的結合を行うことに成功しなかった」ことを厳しく批判している点に注目しておこう(Sombart 1902a, X IX-X X)。ゾンバルトによれば、「動機の浩瀚な一覧表」を作成することは、たとえ社会経済的諸事象に対する「解明の可能性」を高めることがあったとしても、それは決して「解明そのもの」を導くものではないのである(Sombart 1902a, X X)。こうして、ゾンバルトは、「全時代に妥当性を要求する普遍的社會理論の構築を、われわれは未来永劫にわたって放棄しなければならない」と主張したうえで、自らの研究課題を次のように述べている。

われわれの最重要課題としてむしろ立ち現れてくるのは、特定の歴史的に限定された経済時代をそれぞれ異なった理論で定式化すること、である。……この歴史的社會理論 *historische Sozialtheorie* によって行われるのは、そのつどの、つまり特定の時代に優位を占める、経済生活を主として生じさせる原因となる動機系列を発見することである。…… / 究極的原因にまでさかのぼるということは、ここで主張される見解の意味においては次のことを意味する。すなわち、特定の時代の経済生活を優位に支配する指導的經濟主体 *führende Wirtschaftssubjekte* の動機系列からの統一的に整序された解明、である。(Sombart 1902a, X X I)

見られるように、ゾンバルトのいう「経済理論」とは、全時代に効力を発揮する抽象的な「普遍的社會理論」(=「普遍的経済学」)ではなく、「特定の経済時代」に固有の社会現象をその「究極的原因」である「指導的經濟主体」の動機にまでさかのぼって解明しようとする「歴史的社會理論」(=「歴史的心理学 *historische Psychologie*」)であった(Sombart 1902a, X X I)⁽³⁾。彼によれば、このように「特定の経済時代」に応じて異なった理論が必要とされる理由は、一義的には社会科学がそもそも「厳密な法則性を適用しうるいかなる客体も有してはいない」

(Sombart 1902a, X VIII) ことに起因しているが、より具体的には「社会生活に影響を及ぼす心理的因果系列」が「常に特定の歴史的に形成された環境のなかで作用している」(Sombart 1902a, X X VII) からにはほかならない。たとえば、「近代的経済生活の原動力」としての「資本主義的精神」は、ヨーロッパ中世という独特の世界、すなわちある特定の自然、特定の人種、特定の法秩序や因襲的規範、さらには技術的能力や精神的文化の一定の水準を備えた世界のなかでこそ初めて発展することができたのであり、それゆえ仮にそうした精神が活動するための前提条件が別の形態で満たされていたとするならば、資本主義的精神の影響力は今日われわれの知るそれとはおよそ異なるものになっていたであろう (Sombart 1902a, X X VIII)。ゾンバルトはこのように主張する一方で、「近代国民経済学の重要な理論的潮流」である「オーストリア学派」が、こうした事情をなんら考慮することなくひたすら抽象理論にのみ没入している有様を「致命的誤謬」として強く非難している (Sombart 1902a, X X VII)。特定の時代状況に即した「社会的環境」に関連させることなく経済的動機を追跡しようとするのは、彼にとって「全くのナンセンス」であるとともに「明らかな論理的誤謬」でもあった (Sombart 1902a, X X VII-X X VIII)。かくて、ゾンバルトにあっては、特定の限定された時代に焦点を合わせた「近代資本主義の理論 *Theorie des modernen Kapitalismus*」は成立しうるが、全時代に普遍的に妥当する「資本主義そのものの理論 *solche [=Theorie] des Kapitalismus schlechthin*」はけっして容認されえないのである (Sombart 1902a, X X VIII)。

これまでの議論を通じて、ゾンバルトが社会現象における「究極的原因」を「指導的経済主体」という「生きている人間の動機」のうちに求めていたこと、そしてこの「指導的経済主体」の動機を特定の時代に固有の「社会的環境」との関連において捉えようとしていたこと、さらにはこの単一究極の動機を起点として特定の経済時代における本質的特徴を統一的に解明しようとしたこと、以上三点が確認された。こうしたゾンバルトの研究視角には、すでに述べたように、従来の歴史学派とオーストリア学派双方に対する鋭い批判が内包されていたのであるが、しかしながら単なる批判にのみ終始しているわけではなく、とりわけ彼の「〔歴史的〕社会理論」は、シュモラーの「歴史的方法」を克服しつつ、さらには方法論争で先鋭化した「経験と理論とのかの対立」をも調停しようとする強い意志のもとに構築された概念であった。ゾンバルトは次のように述べる。

読者がこの序言のわずかな暗示からでもすでに推察できるように、私が社会理論 *soziale Theorie* のもとで考えているものは、…… あまねく歴史的精神によってたっぷりと浸されている。／ しかし、私の確信によれば、心から賞賛しかつ敬愛している恩師シュモラーは、もし私が自らの研究方法を彼の意味で歴史的方法 *historische Methode* と称するとすれば、かつて自らメンガーとその学派に対して表明したように、私を〔歴史的方法という〕殿堂から追放するであろう。私を彼と彼の学派から分かつものは、素材を構成的に整序することであり、究極的原因から統一的解明を行うという根本的な要請であり、あらゆる歴史的諸現象を1つの社会的システムへと構成することであり、要するに私が特殊理論的 *das spezifisch Theoretische* と呼ぶものである。…… 私は、しかしそれにもかかわらず、自身が歴史主義 *Historismus* に対立しているとは思わないし、当然、あらゆる国民経済学的理論とも対立してはいないと考えている。むしろ私は、自身の考察方法において両者がもはや敵対関係にあるのではなく、より高度な統一へと調和されることになるかと信じているのである。(Sombart 1902a, X X IX)

歴史的諸事実ないし様々な経験的素材は、ただ無差別に収集・蓄積すればよいというものではなく、それらは一定の「理論」にもとづいて構成的に「整序」されなければならない⁽⁴⁾。すなわち、現実における多種多様な歴史的諸現象を統一的体系的に把握するためには、「経済生活の類型的構成 *typische Gestaltung*」(Sombart 1902a, X X IV) を確立させることが不可欠であるとゾンバルトはいうのである。このような理論的観点から要請された「経済生活の類型的構成」は、ゾンバルトにあっては、先にも触れたように「行為する人間の動機系列」を唯一の指標として導かれることになるのであるが、かかる動機系列の淵源を抽象的普遍的な人間の動機一般にではなく、特定の経済時代に優位を占める「指導的経済主体」の動機のうちに見出そうとしたこと、まさしくこの点に、われわれは「歴史」と「理論」との、つまりはドイツ歴史学派とオーストリア学派との「敵対関係」を解消し、互いの欠落した部分を補い合うことで、両者を「より高度な統一」へと高めようとするゾンバルトの「特殊理論的」な方法論的立場の一端を看取することができるのである。

さて、以上の叙述からゾンバルトの「歴史的社会理論」における主要な分析視角が、まずもって「指導的経済主体」とその「動機系列」の考察に向けられてい

たことが明らかとなった。ゾンバルトによれば、「特定の時代の経済生活」を「資本主義経済」と想定した場合、その「指導的経済主体」とは「企業家」であり、こうして「企業家」以外の構成要因である「賃金労働者」や「消費者」は、「資本主義経済」における「歪流」，「例外」さらには「偶発的動機系列」の担い手として分析対象から明確に排除される（Sombart 1902a, X X II）。要するに、ゾンバルトの方法論的認識では、「歴史的生の衝突から生じる偶発的要因を控除することなしには、およそ社会的諸事象における唯一の客観的原理的な連関はなんら主張されえない」（Sombart 1902a, X X II）のである⁽⁵⁾。彼にあつては、「企業家」こそが「資本主義経済」における「真の原動力」であり、あるいは「恒常的な影響力を及ぼす決定的な動機系列」の担い手であった。では、ゾンバルトは、このような「指導的経済主体」としての「企業家」を具体的にいかに考察しているのだろうか。次節では、この点について検討したい。

Ⅲ. ゾンバルトの企業家観

1. 「事業への関心」にもとづく客観的利潤追求

ゾンバルトによれば、「資本主義」およびその独自の経済形態である「資本主義的企業」の目的は、なによりも「利潤の再生産」ないし「資本の価値増殖」を実現させることにあつた（Sombart 1902a, 195）。その際、特に注目されるのは、ゾンバルトが「資本主義的企業」を「手工業」から峻別する「決定的メルクマー」として営利活動の「抽象性」とそれにともなう利潤獲得の「無限性」を強調していることである。彼は次のようにいう。

とりわけ重要なのは、そこ〔＝「資本主義的企業」〕において展開される活動にあつては、一個人ないし多数の人間の質的・量的に限定された欲望はもはや基準として働くことはなく、資本主義的企業の業績の質と量は、資本の価値増殖という非人格的観点のもとでのみ考察されうる、ということである。……資本主義的企業の目的は、抽象化され、かくて無限化される。……われわれは、資本主義的企業のこうした本質的特徴を確認することによって、明らかにこれを営利経済の最も完璧な類型として特徴づけることができるであろう。（Sombart 1902a, 196）

ゾンバルトの認識では、「欲望充足原理」にしたがう伝統的・静態的な「手工業」経済システムとは正反対に、「営利原理」の支配する革新的・動態的な「資本主義」経済システムにあつては、「資本の価値増殖」が強制力によって押し付けられた「客観的必然性」として現れており、それゆゑ経済主体たる企業家は自らの利己心から切り離されて、企業の利潤上昇だけに意を致すようになる。こうして、「本来著しく人間的な心的気分」と見なされてきた企業家の利潤欲ないし営利衝動は、企業組織の目的そのものへと「客観化される」のである（Sombart 1902a, 197）。

ゾンバルトは、このように利潤追求という「主観的な動機」の「客観化」を企業家の備えるべき特性として重視し、かくて企業の投下資本に対する利潤をともなつた回収という極めて現実的・客観的な動機に衝き動かされる人物として彼を描き出そうと努める。ゾンバルトによれば、「〔資本主義経済において〕常に重要なのは、最終的に、物的資産にもとづくかの剰余が、資本主義的企業家の手中に残るといふこと」であり、換言すれば「元帳の借方と貸方とが資本主義的企業の有利になるように残高をともなつて決算されること、こうした結果のうちこそ資本主義的組織において企てられる行動のあらゆる成功と内容が閉じ込められている」のであつた（Sombart 1902a, 197）。

こうして、彼は、企業家活動の本質を規定する主な要因として、「計画的・組織的 disponierend・organisierend」、「計算的・投機的 kalkulatorisch・spekulativ」、「合理主義的 rationalistisch」という3つの機能を掲げるのであるが（Sombart 1902a, 197-199）、ともあれ、われわれはここで特に、「計算と投機との並存」という「まったくもつて風変わりな心理的混合」のうちに、ゾンバルトが企業家の「精神構造」における核心を見出そうとしている点に注目しておこう（Sombart 1902a, 198）。すなわち、彼によれば、「最も高潔なる企業家類型」とは、「客観的な計算感覚を持ち合わせながらも、創造的な投機を大胆に遂行する人物」（Sombart 1902a, 198）のことにほかならず、そうした企業家の行動を統率する心理的起動力としての「資本主義的精神 kapitalistischer Geist」は、投機的冒険的な「利潤追求 Gewinnstreben」ないし「営利衝動 Erwerbstriebe」と緻密な計算感覚、つまり「複式簿記 doppelte Buchführung」⁽⁶⁾によって裏付けられた「経済的合理主義 ökonomischer Rationalismus」との「有機的統合」によって初めて形成されることになると捉えられているのであつた（Sombart 1902a, 207-208, 391）⁽⁷⁾。

さて、以上のような『近代資本主義』初版の議論を受けて、ゾンバルトは、1909年『社会科学・社会政策雑誌』上に発表した論文「資本主義的企業家」(Sombart 1909)において企業家にかんするいっそう立ち入った考察を展開している⁽⁸⁾。彼は、この論文のなかで、ラーテナウをはじめとして、ジーメンス、カーネギー、ロックフェラー、ロートシルトなど当代を代表する企業家たちの伝記、回顧録、手紙、等々の史料を具に検証し、それを足がかりとして近代資本主義経済における企業家像を構築しようと試みるのであるが、その作業は方法論的な観点からいえば、「近代の全企業家において遂行されている機能から典型的なものを抽出し、それを理念型的な *idealtypisch* 全体像へと統合する」(Sombart 1909, 724) ことを意味していた。つまり、ゾンバルトは同時代のすぐれた企業家たちの思想、行動様式を分析することを通じて、方法の面ではヴェーバー的な「理念型」という術語を用いつつも、「盛期資本主義経済」に即応した、より現実的な企業家像を彫琢しようと企てたのであった。以下では、この「企業家」論文に依拠しながらゾンバルトの提示した企業家像の特質をさらに具体的に浮き彫りにしていきたい。

まず注目されるのは、ゾンバルトが『近代資本主義』初版と同様、この論文においても企業家の最も基本的な特性を「客観的な営利衝動」のうちに見出そうとしていることである。その際、ゾンバルトが特に関心を寄せているのは、電機大企業 AEG 社の総裁も務めたヴァルター・ラーテナウの『回顧録』(Rathenau 1908)のなかにある次のような記述であった⁽⁹⁾。

私は、まだ一度として儲け *das Verdienen* がその職業の主要な課題であるような大企業家や大企業家を見たことがないし、個人的な貨幣利得に執着する者は、およそ大企業家であるはずがないと主張しておきたい。(Rathenau 1908, 81)

ゾンバルトは、ラーテナウのこの指摘を支持し⁽¹⁰⁾、これを受けて企業家を企業家たらしめる特徴は、「事業への関心 *das Interesse an seinem Geschäft*」⁽¹¹⁾にほかならぬと述べている (Sombart 1909, 701)。つまり、企業家にとって個人的な快楽や富の享楽は、なんら自己の活動を推進する力とはならず⁽¹²⁾、彼の目標はあくまで「事業の成功」、「企業の繁栄」を達成することに置かれるのであって、それなくして彼は「企業家」を名乗る資格をもたないとゾンバルトは考える

のである。かくて、彼はいう。

こうした〔利潤追求という〕きわめて主観的な動機は、企業家にとって、ただちに彼の事業のために客観化される。…… / …… 資本主義的経済過程における原動力は、事業に対する企業家の関心、企業の繁栄に対する彼らの配慮のうちにこそある。(Sombart 1909, 706) ⁽¹³⁾

このような利己心を完全に超越した企業家の事業欲、「事業への関心」は、「資本主義的企業家」から 4 年後に公刊された『ブルジョワ』においては「生命力 Lenenskraft」ないし「生命エネルギー Lebensenergie」とも言い換えられている。ゾンバルトは、これを「すべての企業家的態度の不可欠の前提」として捉え、これによって企業に利潤をもたらそうとする欲望なり行動意欲なりが企業家のなかに醸成され、さらに企業の遂行にとって必要な行動力が企業家に対して付与されることになると見なしている (Sombart [1913] 1920, 257: 訳 266)。

こうして、資本主義経済にあつて「生命力」ないし「生命エネルギー」を備えた企業家は、望むと望まざるとにかかわらず、企業における利潤の向上、物的資産における価値の増殖の追求を自らの「使命」として自覚することになる。彼は「利潤の亡者」であるがゆえに利潤を欲するのではけっしてなく、「資本主義的企業家」であるがゆえに利潤を獲得しようと努める。かくて、「〔企業家の〕動機は個人的な恣意から離れ、客観化される」のである (Sombart 1909, 708)。

ゾンバルトは、このように『近代資本主義』初版のなかですでに指摘していた企業家の営利衝動における「客観化」というテーゼを、「企業家」論文においても繰り返し主張している。彼によれば、個々の企業家の人生観、価値判断、格率といった「精神的諸特性」は、すべからず資本主義的経済システムの「客観的理念」である「最大利潤の追求」に即応したものでなければならず (Sombart 1909, 750)、ゆえに私欲を排除した「客観的な営利衝動」は、企業家に必須の資質とみなされたのであった⁽¹⁴⁾。

2. 「資本主義的企業家」を構成する 2 つの要素 : 「企業家」と「商人」

さて、企業家のもつべき基本的特性に対するゾンバルトの認識については、あらまし述べられた。そこで次に、われわれは、「資本主義的企業家」を構成する類型的諸機能にかんするゾンバルトの見解を見ていくことにしよう。彼は、さしあ

たつて次のように述べている。

私にとって、資本主義的企業家の特徴に対する理解を最も容易に媒介するよ
うに思えるものは、2つの本質的に異なる性質をもつ生の現れ *Lebens-
äußerungen* が1つの単位へと結びつけられるという認識である。すなわち、
資本主義的企業家のなかには同時に2つの精神が住みついており、……そ
の両精神は資本主義的企業家の精神が最も純粹に、かつ最も高度に展開する
ところにあつて完全に調和し、共通の仕事を成し遂げるのである。(Sombart
1909, 728)

ゾンバルトによれば、「資本主義的企業家」に内在する「2つの精神」とは、「企
業家 *Unternehmer*」と「商人 *Händler*」のことであるが、彼は一方で「企業家」
を「課題を実現し、課題の実現のために生涯を捧げる人物」として、他方で「商
人」を「儲かる仕事を行おうとする人物」としてそれぞれ定義している。そして、
ゾンバルトは前者を目標へ向かう「不屈の前進」を維持するという意味で「不変
的なもの」と見なし、後者を市況に応じた「自在な順応」を特徴とするという意
味で「可変的なもの」と捉え、この相反する2つの要素が資本主義的経済主体の
なかで「調和」、「統合」されて初めて純然たる意味での、すなわち現今の「盛
期資本主義経済」を主導する「資本主義的企業家」が構成されることになると解
している(Sombart 1909, 728-729) (15)。ところで、「企業者の機能」を「一方
では、『経営』の指揮者、組織的統括者として、他方では私法上の危険負担を負
い、マーケティング能力と利潤追求欲とを持つ『商人』として、二重に、かつ統
一的に把握しようとした」のは、ほかならぬシュモラーであったが(田村
1993, 295)、ゾンバルトはこうした師の議論を参考にしながら、彼自身の企業
家像を彫琢していったように思われる。

では、ゾンバルトはこの「企業家」と「商人」をそれぞれ具体的にどのように
分析・考察しているのであろうか。彼によれば、「企業家」とは、1. 技術革新を
行い、新しい生産、輸送手段等を構想する「発明家 *Erfinder*」、2. 新しい販路を
開拓する「発見者 *Entdecker*」、3. あらゆる障壁を打倒する堅固なる意志をもつ
「征服者 *Eroberer*」、4. 企業内において人々をまとめる「組織者 *Organisator*」
という4つの「人間類型 *Menschentypen*」が融合した存在であるが(Sombart
1909, 730-732)、なかでもゾンバルトが最も重視しているのは「組織者」として

の機能であった。彼によれば、「組織する」とは、「多くの人間を幸福かつ有益な活動へとつなぎ合わせる事、つまり人と事物を最大利潤をもたらすように配列すること」を意味し、それゆえ「組織者」は「人間を能力に応じて評価し、ある特定の目標に適した人間を大きな一群のなかから見つけ出す才能」と「自分以外の人間を働かせるという才能」を備えていなければならない。要するに、ゾンバルトは「組織者」としての「企業家」の機能から「資本主義経済における指導者」としての役割をになう「企業家」の姿を導き出そうとするのであるが、その場合、「企業家」にとっての「自分以外の人間」、すなわち「働かせる」べき対象は、いうまでもなく「労働者」であった。

…… [企業家にとって] もう1つの非常に重要な課題は、各労働者を最大限の能力を発揮するのにふさわしい場所に配列することと、…… 能力に見合った最高の成果を出すように彼を励ますことである。(Sombart 1909, 732)

この一文だけでもゾンバルトが「企業家」を主、「労働者」を従とみなし、資本主義経済を展開させる起動力として「企業家」の果たす指導的役割の方によりいっそうの期待をかけていたことは明白であるが、これに続く彼の以下の言葉は、「労働者に対する企業家の優位」という彼の基本的な立場をさらに鮮明にするものといえるだろう。

仮に労働者がまだなんらの道理ももつことができていないとすれば、彼は体系的に教育されなければならない。そのことは初期資本主義時代にあつては、無論今日よりもいっそう頻繁かつのっぴきならない形で姿を現した課題であった。(Sombart 1909, 733)

労働者を自らの責任とリスクにもとづいて活動する独立した生産者として把握し、その意味で「彼(=「労働者」)もまた企業家である」と力説したブレンターノ(Brentano 1907, 19; 25-27; Jäger 1990, 722)とは対照的に、ゾンバルトにあつては「労働者」と「企業家」との間に越境しえない力関係が存在していることが強調される。上記引用文からも明らかなように、ゾンバルトの認識では、「労働者」とは「企業家」による「教育」を受けなければならない存在として把握されており、それゆえ彼にあつては「労働者」ではなく、あくまで「企業家」こそ

が資本主義経済を形成するための最も重要な「原動力」(Sombart 1909, 698)として見なされたのであった。すなわち、ゾンバルトにとっての企業家とは、世紀転換期以降、農業から商工業へと産業構造が本格的に転換しつつあった「新しいドイツ」を主導する「革命的な力 revolutionäre Kraft」にほかならなかったのである(Sombart 1903, 76)。そして、まさしくここにわれわれは、資本主義発展の原動力(=「資本主義の精神」の担い手)として「産業的中産身分 Mittelstand」、すなわち「資本家層」、「企業家層」とならんで「労働者層」の存在をも重視したヴェーバー(Weber 1904, 26: 訳 115)とゾンバルトとの決定的な分岐点を看取することができるのである(大塚 [1964-1965] 1969, 20-23)。

ところで、このように労働者を資本主義経済に馴致し、組織を主導する「企業家」の最高目標は、「被傭者および労働者の意識のなかにあつて個々人の利益を企業の利益と同一視させる」ことにあつた(Sombart 1909, 733)。それゆえ、「企業家」は「労働者」に対して怠惰や利己的な享楽を禁ずるとともに、彼らが「企業の利益」のために「分業」して働くことこそが、企業内において最大利潤を生み出す合理的経営を可能とし、ひいては彼ら個々人の利益をももたらす契機となることを説かなければならない。ゾンバルトの場合、「企業家」はあたかも未熟な「労働者」を啓蒙する「伝道師」であるかのように捉えられているのである⁽¹⁶⁾。

さらにゾンバルトは、一企業内における労働者の統率のみならず、独立した個別企業同士を有機的に結びつけてその生産性を向上させることも「企業家」の役割であるとみなしている。

今日の偉大なる企業家の最も重要な機能は、多くの個別企業を 1 つの総体としての事業へと相互に関連づけ、収益性の高いものとする事、すなわち、より広い範囲において経営の結合 *Kombination* を遂行することにある。(Sombart 1909, 733)

「企業家」は、「最大利潤の追求」という大前提のもと、労働者を陶冶し、かつ各企業を自在に「結合」させる「組織者」としての機能を発揮する。その結果、従来の生産要素、経営形態ではまったく考えることのできなかつた高い収益がもたらされることとなった。要するに、ゾンバルトのいう「組織者」としての企業家の機能は、「革新者」としてのそれと密接に関連しているのである。かくして、われわれは、ゾンバルトの企業家像のシュンペーターの企業家観への影響という経

経済学説史研究におけるきわめて興味深い問題に逢着することになるのであるが、この問題にかんする立ち入った検討は後に譲り、ここではゾンバルトにおいて「資本主義的企業家」を構成するもう一方の重要な側面とされる「商人」についてその特徴を明らかにしておこう。

すでに言及したように、「商人」とは「儲かる仕事」を行う人物のことであり、したがって彼の基本的な行動原則は「安く買い、高く売る」、より詳しくいえば「(商品に対する) 需要が最も高まった時機に、最も受容能力のある市場で、そのなかでも最も支払い能力のある人々に対して商品を売却する」(Sombart 1909, 736) という一点に集約される。そして、かかる行動原則を維持して利潤を得るためには、「商人」は第 1 に「投機的計算家 *spekulierender Kalkulator*」、第 2 に「事業家・交渉人 *Geschäftsmann, Verhändler*」でなければならないとゾンバルトはいう (Sombart 1909, 735-736)。

もちろん、誰も彼もが「儲かる仕事」になどありつけるはずはなく、ゆえに「商人」を構成する「投機的計算家」および「事業家・交渉人」という 2 つの特性もまた「企業家」における種々の人間類型と同様、ごく一部の俊才だけに与えられた「特権」にほかならない。この特権的な性格を踏まえたうえでゾンバルトは、「商人」の一方の特性である「投機的計算家」を「投機 *Spekulation*」と「計算 *Kalkulation*」とに分けて考察しているが、このうち「計算」とは、『近代資本主義』初版以来、一貫して複式簿記にもとづく正確な収支決算を意味している。

対して、「投機」とは、「個別の事例に対する正確な結論を市場全体の評価から導き出すこと」(=「経済的診断 *ökonomische Diagnose*」) を意味し、具体的には以下のように換言される。

投機とは、市場のあらゆる現存する諸現象を概観し、その連関において認識すること、2, 3 の諸事象をそれがもたらす結果において正確に評価すること、ある兆候を適切に判断すること、将来的な発展の可能性を的確に検証し、とりわけ絶対的な確信を持って 100 の結合のなかから最も有利な結合を見つけ出すことを意味する。(Sombart 1909, 736)

このように投機とは、類いまれなる洞察力、ないし卓抜な先見性をもつ行為として定義され、これをもって「商人」は数多存在する生産要素の潜在的な「結合」のなかから最大利潤を約束する唯一の「結合」を選択することができる。かくし

てわれわれは、ゾンバルトの規定する「投機」が、ヴェーバーと同じように、「計算」と結びついた概念として提示されていることを確認しておく必要があるだろう⁽¹⁷⁾。

「投機」，「計算」とならんでゾンバルトが「商人」の特性と考えるのは、「交渉」（ちなみに「事業」とは「交渉」にもとづいて取引を行うこと）の才能である。いうまでもなく，「商人」は「投機」と「計算」の才を備えるだけではその本来の目的である「儲け」を得るまでにはいたらない。買い手に対していかに商品が購入に値すべきものであるかを説き，実際に購入させるという説得の術，すなわち「交渉」の能力に長じていなければ利得を手にすることは不可能であろう。ゆえに，商品が売れる時機と場所，さらには「買い手」となるべきはずの特定の人物までも探知した「商人」は，次には様々な手練手管を通じて時間をかけて当の「買い手」を説得し，実際に商品を購入するよう仕向ける「交渉」を行わなければならないのである。

ゾンバルトによれば，「交渉」の核心は「〔買い手の〕関心を喚起し，信用を獲得し，購買意欲を覚醒すること」にあった（Sombart 1909, 739）。つまり，「交渉」とはあからさまな脅し、恐喝などの「外的な *außer*」強制手段ではなく，直接の対話，あるいは「広告 *Reklame*」などを通じて「買い手」の心のなかに無意識のうちに購買意欲を芽生えさせる「内的な *inner*」強制手段として定義され，「買い手」は意志に反してではなく，たとえどれほど「商人」による暗示ないし示唆が大きく働いているとしても，表向きはあくまで自身の判断から商品を買うかどうか決断するとされる。ここにわれわれは，「広告」が消費者の欲望を喚起する影響力の大きさ⁽¹⁸⁾についてのゾンバルトのすぐれた考察をも看取することができるであろう⁽¹⁹⁾。

以上見たように，「投機」，「計算」と「交渉（事業）」の才能を兼ね備えているのが「商人」であり，この「商人」がすでに述べた「企業家」と統合されることによって真の「資本主義的企業家」が誕生するということが，これがゾンバルトの主張の骨子であった。そして，論文「資本主義的企業家」における，以上のような「企業家の機能」にかんする叙述は，内容の基本線はほとんど変更されることなく，しかし「資本主義」にかんする新しい定義が加筆された形で⁽²⁰⁾『ユダヤ人と経済生活』第9章「資本主義的経済主体の諸機能」のうちに継承されることとなるのである⁽²¹⁾。

3. 企業家の気質

さらにゾンバルトは、「企業家の気質 *Unternehmernaturen*」⁽²²⁾、とりわけ「企業家の精神 *Unternehmerpsychen*」に固有の特性を『『知的』および『道徳的』特性」と規定している (Sombart 1909, 740)。すなわち彼は、企業家の内面的な本質が「知性 *Intellekt*」と「道徳 *Moral*」にあると見なし、両気質について精緻な分析を企てるのである。彼によれば、企業家のもつ「知性」とは、「感情」に対置される概念であった。ゾンバルトは、企業家の気質を芸術家のそれに対比させることによって、この点を浮き彫りにしている。

…… 資本主義的企業家と芸術家とは、まったく異なる源泉から彼らの魂を汲み取っているように思われる。前者は目的志向的であり、後者は目的敵対的である。前者は知的・主知主義的であり、後者は感情的である。前者は厳しく、後者は柔和で穏やかである。前者は冷静であり、後者は惑乱しやすい。前者は世間に精通しており、後者は世間に無知である。(Sombart 1909, 748)

企業家たるもの「感情」に押し流されることなく、「知性」にもとづいて冷静かつ論理的に事柄を考察することができなければならない。しかも彼は、「迅速な理解」や「鋭敏な判断」を要求され、さらには現状に満足することなく、絶えず目標に向かって邁進する「強靱な性質」をも備えておく必要がある。その意味で、企業家は「芸術家」と同じく、「手工業者」、「年金生活者」や「享楽主義者」、「学者」さらには「道学者」ないしそれに類する人々の気質ともなんら交わるところがない。むしろ企業家は、「将軍」ないし「政治家」と共通の人間類型に属するものである (Sombart 1909, 748)。ゾンバルトによれば、企業家とは、「自己を貫徹し、あらゆる権力に抵抗して彼の自我を主張し、他者をして彼の意志と行為とに服従せしめようとする」ニーチェ的な「権力への意志 *Wille zur Macht*」を有する者であり、芸術家や宗教家に特有の「瞑想」、「享楽」を嫌悪し、けっして現世逃避することのない企業家こそが世界を征服し、かつ創造する資格を保持する者なのである (Sombart [1916] 1987a, 327: 訳 477)⁽²³⁾。こうしてゾンバルトは、「資本主義」を企業家という「個々の傑出した人間の作品」として規定するとともに、彼ら少数のすぐれた経済主体の命令によって統率される「資本主義的企業」を、かかる意味で「貴族的組織 *aristokratische Organisation*」とし

て特徴づけようとするのであった (Sombart [1916] 1987a, 836) .

ところで、ゾンバルトは、労働者を主導する企業家には、二重の意味で「強靱な性質 *robuste Naturen*」がなければならないと指摘している。すなわち、第 1 に「課せられた仕事をやり遂げ、障害を克服する強靱さ」であり、第 2 に「生の考察、生の評価における強靱さ」である (Sombart 1909, 747) . このうち第 1 の点についてはすぐに得心できるが、第 2 の「生の考察、生の評価における強靱さ」とは、いかなる性質を意味しているのであろうか。実は、これは先に見た「労働者」に対する「企業家」の位置づけと密接に関連する問題なのである。

すでに知ったように、ゾンバルトの場合、「企業家」と「労働者」との間柄は「主従関係」として認知されており、そこでは「最大利潤の追求」という至上命令のもと、「企業家」が未熟な「労働者」を「教育する」という構図ができあがっていた。言葉を換えれば、現実の資本主義経済にあって「企業家」は「強者」であり、「労働者」は「弱者」であった。支配する側にある「企業家」は、かかる事実を厳然と見据え、自己と労働者との間にある、この如何ともし難い「生の差別化」とでもいうべき経済生活の現実をしかと受け止めなければならない。そこには「情」の介在する余地は微塵もなく、「冷酷さ」のみが求められる。これが企業家のもつべき「生の考察、生の評価における強靱さ」の意味であった。ここにおいてもわれわれは、多分にニーチェ的な色彩を帯びた、偉大なる企業家像を窺い知ることができよう。

ゾンバルトのいう企業家の「知性」にかんする見解は以上のように概略されるが、ではもう一方の気質である「道徳」にはいかなる意義が付されているのであろうか。ゾンバルトは、なるほど「傍若無人」、「冷酷」、「厚顔無知」といった道徳的側面から見ればマイナスとされる諸々の「気質」が企業家に備わっていたこと、そしてこうした「道徳的良心の呵責から切り離された気質」が企業家に対して勝利、成功をもたらしたという歴史的事実を、とりわけヴェルナー・ジーメンスの書簡等を通じて浮き彫りにしてはいた (Sombart 1909, 744-746) .

しかしながら、それらは現実に活躍する同時代の大企業家たちの本性を表すものではなく、彼らの「能力」の一側面に過ぎず、それゆえゾンバルトは、「現代の資本主義的企業家を道徳的に零落した人物と見なすことは今や完全に間違っている」と断じている (Sombart 1909, 746) . すなわち、信頼、義務に対する忠実さ、几帳面さ、等々の「美德」なくしては、企業家はもはや事業内外における種々の関係（たとえば、企業内における労働者の統率や企業間同士の合理的結合）を維

持することができなくなり、ゆえに彼は利潤追求を断念せざるを得なくなる。かくて、ゾンバルトは道徳的気質を資本主義的企業家に「不可欠な条件」と見なすのである (Sombart 1909, 747)。

以上、企業家に固有の気質とされる「知性」と「道徳」について、われわれはゾンバルトの言明に鑑みて具に述べてきた。これらの両気質を併せもつ「企業家」とは、非凡な才能を備えた崇高な人格者以外の何者でもないといえよう。では、これまでの検討を通じてその全貌がおおよそ明らかになったゾンバルトの企業家像は、今日なおアカデミズムの内外で高い関心を寄せられているシュンペーターの企業家概念に対していかなる影響を及ぼしていたのであろうか。次節では、従来の経済学説史研究においてほとんど看過されてきたこの問題について分析していきたい。

4. 革新的企業家像の継承：ゾンバルトからシュンペーターへ

シュンペーターが動的な企業家の機能について初めて言及したのは、周知のように、処女作『理論経済学の本質と主要内容』(Schumpeter 1908)の刊行から2年後の1910年に発表した「経済恐慌の本質について」(Schumpeter 1910)と題された論文においてであった(伊東・根井 1993, 119; 根井 2001, 33)。シュンペーターは、そのなかで次のように述べている。

経済発展の本質は、これまで定められた静態的用途に当てられていた生産手段が、この経路から引き抜かれ、新しい目的に役立つように転用されることにある。この過程をわれわれは新結合の遂行 **Durchsetzung neuer Kombination** と呼ぶ。そして、これらの新結合は、慣行的な静態の結合のように、いわば自ずから自己を貫徹するものではない。それらは、少数の経済主体にのみ備わっている知性 **Intelligenz** とエネルギー **Energie** を必要とする。こうした新結合を遂行することこそ、企業家の真の機能がある。(Schumpeter 1910, 284)

このように、シュンペーターは、企業家という「少数の経済主体」ないし「指導的人格 **führende Persönlichkeiten**」の能力を媒介として初めて、「経済が新しい軌道へと導かれていく」ことを強調する。彼によれば、「静態的な経済過程が、原則として統一的な手法であらゆる経済主体によって遂行されるのに対して、

新結合はただ少数者によってのみ把握されているに過ぎない」のであり、したがって企業家という「ごく少数の者たちだけが新しい軌道への一步を踏み出す決意をし、新しい前人未到の道に分け入る」資格を有するのである (Schumpeter 1910, 283) .

シュンペーターは、こうして少数の指導的な企業家たちによって遂行される生産過程の「新結合」のうちに動態的な「経済発展」の核心を見出したが、ここで表明された彼の認識は、1912年に公刊された『経済発展の理論』初版においてさらに敷衍されている。すなわち、そこでは「企業家」は、「活動的ないし動態的な個人」(Schumpeter 1912, 128)として規定され、また「鋭い知性と旺盛な想像力を備えた少数の人々」(Schumpeter 1912, 163)として見なされるとともに、さらには静態的軌道からの逸脱を主導する「経済発展の原動力 Agens der wirtschaftlichen Entwicklung」(Schumpeter 1912, 147)としての明確な役割を与えられているのである。

くわえて、シュンペーターは『経済発展の理論』初版において初めて企業家の行う「新結合」の具体的な事例を掲げている。すなわちそれは、「新しい財貨の生産」、「新しい生産方法の導入」、「新しい販路の開拓」、「新しい企業の創設」、の4つである (Schumpeter 1912, 159) . これに『経済発展の理論』第2版では、「原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得」が追加され、いわゆる「五結合」が出揃うことになるのである (Schumpeter 1926, 100-101: 訳 182-183) . シュンペーターの場合、企業家は、このように経済領域において「新結合」の遂行を企てる「動態的人間」として把握されており、それゆえ彼のいう「企業家」とは、「経済の指導者であり、現実の指導者であって、静態の経営者のように単なるうわべだけの指導者ではな」かった (Schumpeter 1912, 172) . シュンペーターの経済学体系にあっては、「新結合」を主軸とする「企業家」の「動態的行動」こそが「経済発展の根本原理」として重視されるのである (Schumpeter 1912, 180) .

以上のような甚だ簡潔な描写だけをもってしても、われわれは、シュンペーターの経済認識、とりわけその中核を占める企業家像が、先に見たゾンバルトの企業家観にきわめて近い概念として提示されていることに気づかされるであろう。このことは、言い換えれば、シュンペーターがゾンバルトの企業家像からなにがしかの示唆を与えられ、それをもちろんすべてとはいわないまでも、ある程度受け入れていた可能性が高いということを意味している。こうした点を踏まえたうえで、両者の企業家概念を改めて詳細に比較・検討して見た場合、その類似性な

いし継承性は、ただ単に生産要素の様々な組み換えを実現させることによって「革新者」としての機能を果たす「組織者」のうちのみ見出されるばかりではない。たとえば、企業家の行う「新結合」の主な事例としてシュンペーターの挙げている「新しい財貨の生産」・「新しい生産方法の導入」は、ゾンバルトのいう「発明家」の機能に対応しているし⁽²⁴⁾、「新しい販路の開拓」は、いうまでもなく「発見者」の機能に該当している。さらに、シュンペーターは、自ら立てた計画を断固実現するために大多数の者たちを強制的にしたがえる権威ある「指導者 **Führer**」に企業家をなぞらえているが (Schumpeter 1912, 185) ⁽²⁵⁾、これはゾンバルトの人間類型論でいえば、まぎれもなく「征服者」に相当する概念といえよう。

以上の比較分析からも明らかなように、ゾンバルトとシュンペーターの企業家像は、その機能上の核心部分において著しく類似しており、かくてゾンバルトの企業家概念がシュンペーターのそれにある一定の影響を及ぼしていたということは、ほとんど疑い得ないように思われる⁽²⁶⁾。ただし、その一方でわれわれは、シュンペーターがゾンバルトの企業家像を必ずしも全面的に受け入れていたわけではないということにも留意しておく必要があるだろう。たとえば、ゾンバルトが「企業家」とならんで資本主義的企業家を構成するもう1つの側面として重視する「商人」、すなわち「投機的計算家」と「交渉人」としての機能は、シュンペーターの企業家像においては、それほど重視されてはいない⁽²⁷⁾。またシュンペーターの企業家観では、ゾンバルトと同じく、自己のための「享樂的な剰余 **Genußüberschuß**」を追求する可能性は「自己の使命の履行ではなく肉体的死滅の兆候」であるとしてはっきりと否定され (Schumpeter 1926, 137: 訳 244)、さらに企業家の備えておくべき気質として「知性」のもつ重要性も認められてはいるものの、しかしながら「道徳」のもつ意義がゾンバルトのように強く説かれることはないのである。とはいえ、こうした若干の相違点は、「組織者」に象徴されるゾンバルトの革新的企業家像、あるいは「指導的経済主体」として労働者をしたがえる彼の企業家観が、同時代人であるシュンペーターに与えたであろうインパクトを否定するほどには大きなものではないように思われる。レンガー (Lenger 1994, 234) がいみじくも指摘したように、「彼 [=ゾンバルト] がシュンペーターによってその後すぐに経済領域における指導者的機能 **Führerfunktion auf dem Gebiet der Wirtschaft** として把握された企業家概念にかんする非常に多くの論点を先取りしていた」ことはこれまでの考察から見ても

まぎれもない事実であり⁽²⁸⁾、その意味では、ゾンバルトの企業家像がシュンペーターのそれに及ぼした影響は、— その継承性の確かさを断定することまではできないとしても — きわめて大きなものがあったとって差し支えないのである。

IV. おわりに

本章では、特にゾンバルトの企業家観に焦点を合わせて検討を行ってきたが、そこで明らかになったことは、彼が企業家を資本主義経済を形成する「究極的原因」(=「指導的経済主体」)としてはっきりと認識しており、それゆえ彼にあっては、企業家こそが「資本主義経済システム」の本質的特徴を把握するための最も重要な鍵概念の1つとして捉えられていたということである。この点を踏まえ、以下では結論を述べることにしたい。

本章の考察から明らかとなったように、ゾンバルトはラーテナウをはじめとする同時代の「盛期資本主義経済」を主導する有能な大企業家たちをモデルとしてそれに相応しい資本主義的企業家像を彫琢した。このことは、ゾンバルトが歴史的な「資本主義起源」論の枠を超えて、「現代の」資本主義経済の分析にも強い関心を抱いていたことを示す1つの有力な証左にほかならないが、ともあれ彼によって構築された資本主義的企業家像を改めて要約すれば、こうである。それは、まず①私欲を超越した事業欲(=「事業への関心」)を自らの行動規範に据えるとともに、②企業内での労働者の教育と統率ないし個別企業間同士の有機的結合を遂行する「組織者」、すなわち「革新者」としての機能と「計算」、「投機」、「交渉」の才能に秀でた「商人」としての機能をそれぞれ状況に応じて行使し、さらに③冷徹なる「知性」と暴利を抑制する「道徳」を性格上の気質として備えた、あらゆる種の天才的な人間類型として描き出されていた。

このようなゾンバルトの企業家にかんする考察は、「組織者」、「征服者」、「発見者」など個別の「人間類型」に分類してその特質を解明しようとする発想それ自体にすでにすぐれた独創性が看取され、その分析内容も当時においては卓越した水準にあったといえることができる。このことは、ゾンバルトの提示した企業家像が、先に確認されたように、現在なお経済学および経営学において関心の的であり続けているシュンペーターの企業家観に対して少なからぬ影響を及ぼしていた可能性があると考えられることから明らかであろう。その意味で、ゾンバル

トの企業家論は、経済学説史的にも、きわめて重要かつ興味深い論点を提供するものといえるのである。もとより、ゾンバルトの企業家論は、ただシュンペーターとの継承性という観点からのみ注目されるべきものでないことはいうまでもない。それは、『ユダヤ人と経済生活』(Sombart 1911)に代表されるゾンバルトの「ユダヤ的資本主義」論にも密接に関連する議論なのであり、かくして次章において本格的に検討されるように、彼の「盛期資本主義経済」に対する認識を把握するうえでその礎石をなすものといえるのである。

注

(1) 同時代にハイニシュも、「シュンペーターの企業家像は、……ゾンバルトを手本にしている」と指摘していたが(Hainisch 1915, 218)、肝心のゾンバルトの企業家像にかんする分析・論及がまったくないために、その指摘は具体性に乏しく、説得力を欠いたものとなっている。

(2) 政治、経済を含めた一切の社会的諸現象の究極的原因を人間の動機に求めるというゾンバルトの見解は、先に引用した前年の講演のなかにも見出すことができる。彼は次のように述べている。

…… 経済的諸事象の原因としては、常に人間の目的意識的行為の動機だけしかあり得ないということを明確にしておかなければならない。経済的なものは、…… 生きている人間を原因とする場合にのみ考えることができるのである。
(Sombart 1901, 65)

(3) クルーゼ(Kruse 1990, 155)は、ゾンバルトが、かかる「歴史的社会理論」という独自の方法的枠組みをもってシュモラーに代表される「歴史学派のパラダイムの限界を意識的に乗り越えようとした」と指摘している。

(4) ゾンバルトは、晩年、恩師シュモラーを回想したエッセイのなかで次のように述べている。

…… われわれは、今日シュモラーの『一般国民経済学要綱』に目を通すたびに、そのなかにある夥しい、圧倒的な数の史料によって繰り返し驚嘆することになる。しかし、この史料の豊富さはまったくもって喜ぶべきことではない。なぜなら、それはわれわれを高め、かつ啓発させるよりもむしろ圧迫し、かつ混乱させるものだからである。その理由は、死んだ史料を蘇らせるのに不可欠な整序的原理 *ordnende Prinzip* が欠落しているという事実にある。(Sombart 1938, 1946)

(5) ゾンバルトはこのような方法論的認識を一貫して保持していた。たとえば、『近代資本主義』第2版の第3巻のなかでも、彼は次のように述べている。

歴史上特有の動機、それは経済状態のように大量現象を明確にすべき場合には、それ自身大量に出現するものであり、その担い手としてはある特定の人間集団が認識されることになる。それゆえ、われわれの着目すべきことは、かかる大量の動機をその類型的特徴 *typisches Gepräge* において明らかにすることであり、偶発的あるいは特殊の動機があるならば、それを除外せねばならない。かかる動機が有効に作用しうるためには、それは決定的・支配的・卓越的・優勢的・優位的な動機でなければならないのである。したがって、われわれはまた大量に現れ、おそらくまた類型的であったとしても、影響を及ぼさない動機があるとすれば、それをも除外する必要がある。その1つの例は資本主義経済における消費者あるいは労働者の利害であって、それはたかだか歴史事象における副次的原因として考えられ得るに過ぎないのである。(Sombart 1927, 9-10: 訳 31-2)

ちなみに、企業家の動機を優勢的な動機と見なし、その分析を通じて資本主義経済の本質を解明しようとするゾンバルトのこうした方法論的視角はヴェブレンによっても継承されている。ヴェブレンは、『近代資本主義』初版の翌々年に公刊された名著『営利企業の理論』第1章「序論」のなかで次のように論じている。

理論家が、とくに近代的な経済現象を解明することを目指す場合には、彼のアプローチの方向は、企業家 *business man* の立場から出発しなければならない。というのは、これらの現象の進路が導かれるのは、まさしく企業家の立場からであるからである。近代的な経済状況にかんする理論は、なによりもまず企業家の動機、目的、方法および影響をとまなう企業取引 *business traffic* の理論でなければならない。(Veblen 1904, 4: 訳 7)

すでに触れたように、ヴェブレンはゾンバルトの『近代資本主義』初版に対して書評を執筆しているが(本論文「序論」参照)、そこでは彼はゾンバルトの研究方法について詳しく論及しているわけではない。しかしながら、上記引用文に見られるように、「近代的な経済現象を解明する」にあたって「企業家の立場から出発」すべきであると主張し、かくて「企業家の動機」に着目するヴェブレンの研究視角には、明らかにゾンバルトの議論からの影響が垣間見える。すなわち、ヴェブレンもまた、ゾンバルトと同じく、企業家を「自ら指導を行う *self-directing* ただ一人の偉大なる経済的ファクター」であるとはっきりと指摘し、なおかつ「現代を経過し、次の将来へと

移っていく文明生活の過程に対する理論的探求にとっては、企業家とその事業に匹敵するだけの重要性をもつ文化状況のファクターは、1つとして存在しない」(Veblen 1904, 3: 訳 6) とまで断言していたのである。ヴェブレンの企業家概念については、高(1991)を参照。なお、企業家論を軸に据えたゾンバルトとヴェブレンの経済学体系にかんする本格的な比較検討の作業は、筆者の今後の研究課題としたい。

- (6) ゾンバルトは、特にルネサンス期イタリアにおける計算・計測技術の発展、わけでもフラ・ルカ(Fra Luca)によって学問的に確立された複式簿記を「特殊資本主義的合理性の完成された表現」(Sombart 1902a, 394)と見なしており、資本主義的な事業遂行の合理化・体系化に果たしたその役割を高く評価している。複式簿記に対するゾンバルトのこうしたポジティブな評価は、『ブルジョワ』(Sombart [1913] 1920, 164-169: 訳 174-178)、『近代資本主義』第2版(Sombart [1916] 1987b, 110-138)にも確認できる。もっとも、シュナイダー(Schneider 1996, 44)は、シュマーレンバッハの議論を援用しつつゾンバルトが「近代資本主義」の生成に対して複式簿記が果たす役割を過剰に高く評価し過ぎていると苦言を呈している。
- (7) 『近代資本主義』初版において、かかる企業家像と対極にある人間類型としてゾンバルトが析出するのは、「前資本主義的商業活動」を担う「中世商人」である。彼によれば、「中世商人」とは、手工業者と同様、「身分相応の暮らし」を維持するための生計費を獲得することのみ意を致す「技術的労働者 *technischer Arbeiter*」にほかならず(Sombart 1902a, 175)、かくて彼らにあっては、「近代資本主義の母胎」ともいべき新しい販路の開拓に対する欲求は完全に欠如していた(Sombart 1902a, 176)。くわえて、欲求充足的な「ナールシク^{ナールシク}の理念 *Idee der Nahrung*」によって支配された「中世商人」においては、「資本主義的企業家」にとって不可欠の「計画」・「計算」・「投機」の才能もなに1つ確認することができない。彼らの「事業遂行」は、こうして「経済的合理主義」とあらゆる側面で相容れることなく、「徹底して経験的・伝統的な」枠組みのなかにとどまることになるのである(Sombart 1902a, 177-178)。以上からゾンバルトは「中世における商業の完全に非資本主義的な性格」と「前資本主義的商業の手工業性」(Sombart 1902a, 180)をはっきりと指摘している。
- (8) ポイカート(Peukert 2002, 28)は、「ゾンバルトの『資本主義的企業家』(1909)にかんする生き生きとした叙述は、近年の企業家をテーマとした夥しい数の文献を鑑みても、なんら乗り越えられてはいないように思われる」と述べており、彼の企業家観に内包された普遍性と現代性、わけでも企業家の動機と機能的な諸類型に注目したうえでその特徴を剔出した功績を高く評価している。

(9) 「企業家」論文では、本論でも触れたように、ジーメンス、カーネギー、ロックフェラーといった大企業家たちの発言が随所に引用されているが、なかでもラーテナウの『回顧録』からの引用は突出して多く、企業家概念を形成するにあたってゾンバルトがラーテナウから受けた影響は、極めて大きいものがあったように思われる。

(10) ヴェーバーは、ゾンバルトの「企業家」論文の翌年に公にした論稿「資本主義の『精神』にかんする反批判」(Weber 1910) のなかで、ゾンバルトがラーテナウのこの言説に注目していることに対して、以下のような好意的な評価を与えている。

ゾンバルト (Sombart 1909, 701) は、まったく正当にもラーテナウのような大企業家の発言 (その『回顧録』での) に通じている。ラーテナウは、「まだ一度として儲けがその職業の主要な課題であるような大企業家や大企業家」を知らない、という。そして、彼は「個人的な貨幣利得に執着する者は、およそ大企業家であるはずがないと主張しておきたい」と述べている。このすべてをフランクリンも、彼の勸告 Predigt をまったく損なうことなしに述べるであろうし、またピューリタンならばますますもってそのようにいうだろう。彼らすべてにとって富の獲得は、…… なにほどか副次的なもの etwas Akzessorisches なのである。(Weber 1910, 195, Anm. 26a : 訳 110)

ちなみにヴェーバーのこの論稿は、ラッハフェール (Felix Rachfahl) の論文「カルヴィニズムと資本主義」(Kalvinismus und Kapitalismus, 1909) に対する反論として執筆されたものであるが、上記の引用文以外にもゾンバルトの「企業家」論文に言及した箇所は、本文に 1 箇所 (Weber 1910, 198 : 訳 : 100), 注記に 2 箇所 (Weber 1910, 197, Anm. 29 : 訳 111 ; 198, Anm. 30 : 訳 112) あり、その評価はいずれも好意的である。

(11) ゾンバルトが「事業への関心」を有する「企業家」として挙げているのは、F. ハルコルト (鉄鋼業), A. L. ゾンバルト (砂糖産業), A. クルップ (鋳鋼業), B. H. シェトラウスベルク (鉄道業), W. ジーメンス (電機産業) である (Sombart 1909, 703)。

(12) ポーレ (Pohle 1910, 17-8) もまた、ゾンバルトやラーテナウと同様、自らの享樂のためだけに金儲けをしようとする者は、本来の意味での企業家ではあり得ないと見なしたうえで、「事業のための労働が自己目的の性格を備えている企業家だけが成功を収めることになる」と主張している。ただしポーレは、「近代資本主義」の解明にあたって企業家の動機を重視するゾンバルトの研究手法に対しては疑問を呈している。

(13) シュモラーもまた、大企業における「有能かつ能力ある指導者 Leiter」とは、た

だ単に金儲けの精神 *Geist des money-making*」においてではなく、「かの高貴なる職業義務の精神 *Geist jener höheren Berufspflicht*」において事業を営むべき存在であることを強調していた (Schmoller 1890, 393) . また、「企業 *Unternehmung*」を「因襲的共同体 *sittliche Gemeinschaften*」,あるいは「公的造営物 *öffentliche Anstalten*」として捉えるシュモラー (Schmoller 1890, 399) にあつては、経済的指導者たる企業家は、単に生産や商売に対してだけではなく、社会的秩序や労働者の生活に対しても明確な責任をになうべき存在であることがはっきりと指摘されている (Schmoller 1890, 408) .

他方で、本論に見られる企業家の利潤追求へ向けた動機づけにかんするゾンバルトの規定には、「経済騎士道 *Economic Chivalry*」の精神に貫かれたマーシャルの企業家像をも彷彿とさせるものがある。マーシャルにあつては、「企業家」は自身の利得のためではなく、「公」に還元し得るような「事業の成功」を勝ち取ることに生き甲斐を見出す高潔なる人士として捉えられており、それゆえ大衆の利益に貢献する新しい「事業の成功」を開拓することこそが「企業家」の「最高の榮譽」であると見なされていた (Marshall 1907, 15) . マーシャルの経済騎士道論について詳しくは、斧田 (1971) を参照。

- (14) ゾンバルトがこのように「客観的な営利衝動」,つまり私利私欲を超越した純粋なる「事業への関心」を企業家にとって不可欠の基本的特性と捉えるのに対して、ヴェーバーは「私利私欲の超越」という意味ではゾンバルトと見解を共有しつつも、しかしながら企業家のもつべき特性として事業欲よりもむしろ禁欲の意義を突出させたところにゾンバルトとは異なる彼独自の観点があつた。ヴェーバーは次のようにいう。

…… 資本主義的企業家の理念型 *Idealtypus* は、…… 卑賤なあるいは上品な成金根性とは似ても似つかぬものである。かかる企業家は見栄や不必要な支出を好まないばかりか、故意に権勢を利用したり自己の社会的名声の表徴を身につけることを喜ぼうとしない。別言すれば、彼の生活態度には …… 前に引用したフランクリンの説教 *Predigt* に明らかに現れている、一種の禁欲的色彩が存するのである。…… こうした企業家は巨富を擁しながら、自己のためには一物ももたない *hat nichts* — ただ職務の履行 *Berufserfüllung* という、非合理的な意識をもっているに過ぎないのである。(Weber 1904, 31: 訳 121-2)

- (15) このように、ゾンバルトは「企業家」と「商人」の結合体を「資本主義的企業家」と見なしているが、このようにあえて区別する場合を除いては「企業家」と「資本主

義的企業家」とは、彼の場合、基本的に同じ意味で用いられていると考えて差し支えない。したがって本論文でもゾンバルトにおける「企業家」と「資本主義的企業家」をあえて厳密に区別することなく用いている。

- (16) 以上のような「企業家」と「労働者」との関係にかんするゾンバルトの理解にも、シュモラーからの影響が看取される。シュモラーの場合、「企業者」は「市場向けの商品生産＝流通の主体（企業家）」であり、それゆえ「人的・物的資源の合理的 …… 組織者（経営者）」としての機能を果たすが、その際、「被雇用者の道徳的・心理的資質を教育・陶冶する精神的指導者」としての役割もになっていた（田村 1993, 297）。

なお、「労働者」を「企業家」の従者と見なすゾンバルトの主張は、その後も一貫して繰り返されている。たとえば、『社会学事典』に寄稿した論文(Sombart 1931b)のなかでも、ゾンバルトは、「労働者」を「自己の経済 *eigene Wirtschaft* においてではなく他人の経済 *fremde Wirtschaft* において労働する人物」として捉えており、「労働者」とは、あくまで「労働の受け手 *Arbeitnehmer*」であり、要するに企業家の利益のために奉仕する存在であって、その意味で「非自立的労働者 *unselbständige Arbeiter*」とでもいうべき存在にほかならないと指摘している（Sombart 1931, 1）。

- (17) 著名な『取引所論』からも見て取れるように、ヴェーバーも「投機」を市況に対する深い理解と正確な計算によって裏付けられた行為として捉えており、これを「取引所流通の最高度に発展した商業活動」（Weber [1896] 1924/2000, 294/625：訳 59）であると評価していた。彼はさらに、市場経済において正常な価格形成と資源配分を実現させるためにも「投機」は不可欠であると力説している（Weber [1896] 1924/2000, 318/651：訳 89）。また講義録である『経済史』のなかでも、ヴェーバーは「資本主義的経営の前提条件」の1つとして「投機」を挙げている。彼によれば、財産が「有価証券」の形態で自由に譲渡されるようになって資本主義的経済活動に一定の持続的な影響を及ぼす投機が「合理的投機」であり、たとえばジョン・ローの企画や南海会社泡沫事件はこれに属する。他方、こうした制度的前提を欠いた単なる買占めが「非合理的投機」であり、この類型の典型例としては、チューリップ恐慌が挙げられている（Weber 1923, 246-251：訳 135-142）。なお、ヴェーバーとゾンバルトとの「投機」理解にかんする共通性に注目した研究としては、恒木（2005）がある。

- (18) ゾンバルトは、『近代資本主義』第3巻第34章「競争 *Die Konkurrenz*」でも、「盛期資本主義時代」における企業家たちが顧客の独自の判断に任せるよりも、むしろ彼自らの意図に顧客を強制させるために「広告」を盛んに利用していると指摘している。

ゾンバルトは、このような「広告」を媒介として顧客を獲得しようとする企業家同士の競争のことを「暗示競争 Suggestionenkonkurrenz」と呼んでいる (Sombart 1927, 559)。ゾンバルトの認識では、「あらゆる経済関係の脱人格化 Entpersönlichung」 (= 「物象化 Versachlichung」) が確立された「盛期資本主義経済」においては、商品を購入させようとする企業家の「暗示」もまた個人対個人のそれから「広告」を媒介とした不特定多数の人々を対象としたものへと変質していくのである。つまり、「広告」による「見知らぬ購買層」 (= 「大衆」) への暗示こそが商品の売れ行きを決定的に左右する重要な要因となるのである。

- (19) たゞしわれわれは、「広告」という商業活動に対して、ゾンバルトが比較的早い段階から強い不快感を表明していたという事実にも止目しておかなければならない。レンガー (Lenger 1994, 168) が指摘するように、ゾンバルトは 1908 年の時点で「広告」を「資本主義的無教養の最もおぞましい兆候の一つ」として厳しく非難していたのである。さらにゾンバルトは『ブルジョワ』のなかでも「近代の広告が、最終的な結論として、美学的にも不快感をもよおすものであり、道徳的にも恥知らずなものであることは、そのための理由づけの言葉を必要としないほどに今日ではあまりにもわかりきった事実となっている」 (Sombart [1913] 1920, 232 : 訳 241) とまで主張している。こうしたゾンバルトの「広告」に対する酷評の原因は、本論文の「序論」でもすでに指摘された『近代資本主義』初版から第 2 版にいたる過程でのゾンバルト自身の資本主義に対する認識の変化の問題とも密接に関連しているように思われるが、この問題にかんする本格的な検討作業は別の機会に譲らざるをえない。

- (20) ゾンバルトは、『ユダヤ人と経済生活』第 9 章の冒頭で「資本主義」を次のように定義している。

われわれは、2 つの異なる人口群 — 一方は生産手段の所有者で、同時に指導的業務を遂行する者と、他方は無所有の単なる労働者 — が規則的に協働している流通経済的組織のことを資本主義と呼ぶ。しかも、この組織では、資本の代表者 (経済的過程の開始と実行のために必要な物的財産の蓄えの代表者) が経済主体である。このことは、つまり彼が経済の方法と方向とを決定し、その結果についての責任を負うことを意味する。 (Sombart [1911] 1928, 186 : 訳 243 「序論」でも触れたように、『ユダヤ人と経済生活』には、長野敏一氏と金森誠也氏による訳書が存在するが、本論文では全訳である金森訳の該当ページ数のみ併記する)

ゾンバルトは、『ユダヤ人と経済生活』における以上の叙述を踏まえたくうえで、改

訂された『近代資本主義』第2版では、「資本主義」をさらに次のように定義している。

われわれは、資本主義を以下に特徴づけられた一定の経済システムとして理解する。すなわちそれは、2つの異なる人口群、すなわち指揮権を有すると同時に経済主体でもある生産手段の所有者と（経済客体としての）無所有の単なる労働者とが市場を介して結びつけられ、規則的に協働している流通経済的組織のことであり、そしてそれは、営利追求の原理と経済的合理主義とによって支配されている。（Sombart [1916] 1987a, 319：訳 466）

- (21) その後、『ブルジョワ』では本質的な企業家機能として特に「征服者」、「組織者」、「商人」の3つの機能が強調され（Sombart [1913] 1920, 69-76：訳 80-87）、さらに『近代資本主義』第2版では、「組織者」、「商人」、「計算と家政」の3つが企業家の備えるべき重要な機能的特性として列記されている（Sombart [1916] 1987a, 322-324：訳 470-472）。つまり、ゾンバルトにおいて一貫して企業家機能の中樞を占めているのは、「組織者」と「商人」であるといえよう。
- (22) 本節で検討される「企業家」論文のなかの「企業家の気質」にかんする叙述の一部は、『ブルジョワ』にも収載されている（Sombart [1913] 1920, 256-259：訳 265-267）。
- (23) 「企業家」論文のうちに「ごく少数の英雄的人格を大衆の運命から切り離そうとする」ゾンバルト独特の思想的傾向を読み取ったミッツマン（Mitzmann 1973, 239）は、のちに「1910年までにはニーチェの支配者道徳 *Herrenmoral* がゾンバルトの新しい資本主義的企業家観のなかにはっきりと取りこまれた」（Mitzmann 1988, 140：訳 112）と主張している。またアップル（Appel, 1992, 169-175）も、ニーチェの死後公刊された『権力への意志』（*Der Wille zur Macht*, 1906）がゾンバルトに対して多大な影響を及ぼしたと指摘している。とはいえ、両者の思想的継承関係は、研究史上未だ十全に論証されるまでにはいたっておらず、この問題については今後の検討課題としたい。
- (24) ただし、シュンペーターが一貫して企業家を「発明家」から区別すべきであると明言していることからわかるように（Schumpeter 1926, 129：訳 231；1947, 152）、単に新しいアイデアを創出するだけでは企業家としての機能を果たしているとはいえない。彼にあつてはむしろ既存の生産手段を用いて実際に「新結合」を遂行する企業家の行為それ自体のもつ意義が重視されているのである。もっともシュンペーターのこの認識は、ゾンバルトにも共通するものである。彼は、企業家とはただ発明する

だけで満足してしまう存在ではなく、計画実現へ向けた、征服者としての「行為への意志 Wille zur Tat」にこそ、その本質があると強調している (Sombart [1913] 1920, 70: 訳 81) .

(25) シュンペーターは、『経済発展の理論』第 2 版で企業家に内在する「指導者」としての特質を次のように説明している。

指導者という類型 *Typus der Führers* を特徴づけるものは、まず事物を見る特殊な方法であり、…… また 1 人で衆に先んじて進み、不確実なことや抵抗のあることを反対理由と感ぜない能力であり、さらに …… 権威 *Autorität*, 重々しさ *Gewicht*, 他人を服従させる力 *Gehorsamfinden* といった言葉で表すことができる、他人への影響力である。(Schumpeter 1926, 128-129: 訳 230)

見られるように、シュンペーターにおいてもゾンバルトと同様、企業家は「他人を服従させる力」を備えた権威ある「指導者」として捉えられている。その意味で、企業家は「指導する者」、労働者は「指導される者」という明確な認識がゾンバルトと同じくシュンペーターにもある。シュンペーターによれば、企業家は対資本の関係では労働者の利害の代弁者であり、対労働者の関係では資本の利害の代弁者であり、かくて「終局的には、〔企業家は〕ほかのあらゆるグループの代弁者となっている」(Schumpeter [1927] 1985, 166: 訳 100) のである。したがって、シュンペーターにあつては、「指導者」としての企業家とその「従者」としての労働者との間に先鋭的な利害対立が生まれることはほとんどないと見なされている。シュンペーターの認識では、「革新」を遂行する「指導力」を備えた企業家だけが資本主義過程における唯一の「変革主体」なのであり、かかる観点から彼は、「抑圧され、弱体化された階級」である労働者層のうちに体制変革の動因を見出そうとするマルクス的な資本主義進化のヴィジョンをはっきりと否定することになるのである (大野 1971, 170) .

なお、以上のような指導者的役割を重視するシュンペーターの企業家観には、ニーチェに端を発する 19 世紀末の「エリート理論」の強い影響が見られるということが、すでに先行研究 (März 1983, 99: 訳 131-132; Santarelli and Pesciarelli, 1990, 689) によって指摘されている。また塩野谷 (1995, 206-209) も、シュンペーターにおける「企業者概念の想源」として当時の哲学的思潮を形作っていた「指導者社会学」の影響に注目している。それは、あらゆる集団には支配する少数者が必ず存在すると述べたヴィーザーの「少数の法則」をはじめとして、ニーチェの「超人」、ベルクソンの「生の飛躍」、パレートの「エリート循環論」、タルドの「模倣論」、ヴェーバーの「カリスマ論」、オルテガの「創造の哲学」等々に代表される思想であった。も

つとも塩野谷氏は、これら先行する人間類型論に類似性が見られるとはいえ、シュンペーターの企業家概念の独自性はなんら失われることはないと強調する。氏によれば、シュンペーターの「独創性」は、「指導者類型」と「服従者類型」という「社会的な人間類型の二分法を経済の静態・動態の二分法の基礎として適用し、企業者と単なる経営者の区別を導いたことにあ」った。なお、当時の「指導」および「指導者」にかんする学術的理解については、Wieser (1927) をも見よ。

- (26) シュンペーターは、『国家学事典』に寄稿した論文「企業家」(Schumpeter 1928)でもゾンバルトの「企業家」論文と『ブルジョワ』を参考文献として掲げているし (Schumpeter 1928, 486-487) , またゾンバルトの『近代資本主義』第 3 巻に対する書評論文 (Schumpeter 1927) でもゾンバルトの企業家にかんする叙述を「本書のハイライト」(Schumpeter 1927, 362) であると指摘し、その分析を高く評価していた。直接的な継承関係を断言することはできないとはいえ、シュンペーターがゾンバルトの企業家観から大いに啓発されていたことは確かであるように思われる。

ちなみに、シュンペーターは、ゾンバルトの『近代資本主義』初版と改訂された第 2 版に対しても次のようなポジティブな評価を与えている。

唯一ここで挙げる必要がある彼 [=ゾンバルト] の著作『近代資本主義』(*Der moderne Kapitalismus* 1902, 2nd, 1916-1927) は、そのしばしば中身に欠けている縦横の才気によって専門の歴史家たちにショックを与えた。彼らは、この書物のなかに、彼らが真の研究と呼びうるであろうなものをも看取し得なかった。— 実際、この著作で用いられる資料はことごとく 2 次的な文献ばかりである。— そして、彼らはその多くの不注意な点に対して抗議をさしはさんだ。けれども、ある意味においてこの著作は、歴史学派の頂点をきわめる業績であり、その誤謬においてすら甚だ刺激的である。(Schumpeter 1954, 816, n. 14 : 訳 5, 1715)

- (27) ただし、シュンペーターのいう企業家の「洞察 Blick」という特性は、「経済的診断」として規定されたゾンバルトの「投機」に酷似した概念である。シュンペーターは、企業家による経済活動の一切の成果は「洞察」にかかっているとしたうえで、それを以下のように説明している。

…… それ [=洞察] は、事態がまだ確立されていない瞬間においてすら、その後明らかとなるようなやり方で事態を見通す能力であり、人々が行動の基準となる根本原則についてなんの成算ももち得ていない場合においてすら、またまさにそのような場合においてこそ、本質的なものを確実に把握し、非本質的な

ものをまったく除外するようなやり方で事態を見通す能力である。

(Schumpeter 1926, 125: 訳 (上) 224)

- (28) レンガーはさらにスウェドベリのシュンペーター研究 (Swedberg 1991, 35) を引き合いに出しつつ、本書がシュンペーターの企業家概念をヴェーバーのカリスマ的指導者との関連性ばかりで捉え、「いっそう近くにある、時代的にも直接先行するゾンバルトの企業家論文」を完全に無視していることを「歴史的コンテクストを歪めた、近年の文献に見られるヴェーバー偏重の典型」であると厳しく批判している (Lenger 1994, 459, Anm. 69)。なお、八木 (1988, 161, 注 13) も、「資本主義論や企業者論の社会的側面においては、シュンペーターはしばしば比較のおこなわれるヴェーバーよりもゾンバルトに近い」と指摘しているし、またメルツ (März 1983, 98-99: 訳 131) も、シュンペーターの企業家概念の形成に強い影響を及ぼしたと思われる「2人の重要な経済学者と社会学者」として、それぞれゾンバルトとヴィーザーの名前を挙げている。さらに、最近ではエブナー (Ebner 2002, 12) も、ゾンバルトの企業家論が彼の資本主義論の中核を占めるにとどまらず、シュンペーターの革新的企業家像の着想にも大きな刺激を与えていたと明言している。

第2章 「ユダヤ人的特性」と企業家活動の展開 — 「盛期資本主義経済」に対する認識との関連で —

I. はじめに

ゾンバルトは、よく知られているように、近代資本主義経済を主体的に形成する担い手としてとりわけユダヤ人の果たす役割を重視している。1911年に公刊された『ユダヤ人と経済生活』(Sombart [1911] 1928)は、こうしたゾンバルトの考えが最も鮮明に打ちだされた著作として名高いが⁽¹⁾、その「序論」のなかで彼はユダヤ人と資本主義との密接な連関を解明しようとする自身の試みについて、さしあたって以下のような強い自負を表明している。

実際、私は、ユダヤ人の資本主義に対する適性を説明した叙述部分、すなわち本書の第2部は、ユダヤ人の近代国民経済の建設への関与を事実として述べた第1部と同様、その根本思想においてほとんど揺るがされることはないと考えている。それらは修正されたり、(まずなにより)補完されたりすることはあるかもしれない。しかし、その思考過程の正当性については、なんら否定されることはないのである。(Sombart [1911] 1928, IX : 訳 14)

では、ゾンバルトはユダヤ人のもついかなる性質ないし特性のうちに「近代資本主義」、わけても同時代の「盛期資本主義経済」を統率していくために相応しい「適性」があると考えていたのであろうか。また、ユダヤ人が本格的に「盛期資本主義経済」を主導していくことができた経済的な起動力としてゾンバルトは具体的にいかなる制度上のファクターを想定していたのであろうか。これらの問いを考察するにあたって、われわれが予め議論の前提としておかなければならないことは、前章で詳論されたゾンバルトの資本主義的企業家にかんする分析である。なぜなら、ゾンバルトは1909年の「企業家」論文で自ら提示した現今の「盛期資本主義経済」に即応する企業家像を与件としたうえで、かかる企業家像とユダヤ人に固有の「諸特性」との緊密な関係を論証することを『ユダヤ人と経済生活』における主要な研究課題として設定していたからである。すなわち、『ユダヤ人と経済生活』は、本来それだけで検討に付されるべきテキストではなく、先行する「企業家」論文をたえず念頭に置きながら、それと一体となって解釈され

なければならないものなのである。

従来の研究史⁽²⁾が等閑に付してきた以上の論点をふまえたうえで、本章の前半ではまず資本主義ないし資本主義的企業家と「ユダヤ人的特性」との連関について、要するに双方における「内面的な親和関係」をゾンバルトがいかなる点に見出しているのかということ、彼の人種問題に対する認識にも注意を払いつつ論究する。次いで、後半では「指導的経済主体」としてのユダヤ人企業家たちが同時代の「盛期資本主義経済」を牽引するうえでゾンバルトが不可欠と見なしていた制度的要因、すなわち証券制度について検討を行う。その際、本章では特に株式ないし株式会社がユダヤ人企業家たちによる営利活動の推進・展開にとってどれほど重要な役割を果たしていたのかという点について、ゾンバルトの議論に即しながら明らかにしていきたい。

II. 資本主義的企業家像と「ユダヤ人的特性」との親和関係

資本主義的企業家における「客観的な営利衝動」という基本的特性、ないし「企業家」と「商人」に典型的に現われる機能的構成要素、あるいはその気質にかんする前章での分析から、ゾンバルトによって提示された資本主義的企業家像の全容は、あらまし明らかになったと思われる。そこで、本節ではまずかかる資本主義的企業家像とユダヤ人ないしユダヤ人的特性との「内面的な連関」についてゾンバルトがいかに把握していたのかという問題に考察の視点を移していくことにしたい。

先行研究（Lenger 1994, 188；田村 1996, 32, 注 29；村上 2003, 7）が指摘するように、ゾンバルトが資本主義経済の発展に対するユダヤ人の果たした役割を明確に強調し始めるのは、1903年に公刊された『19世紀のドイツ国民経済』においてである⁽³⁾。ゾンバルトは、その浩瀚な著作の第6章「民族」のなかで「ユダヤ的エッセメントの特徴 *Einschlag jüdischer Elemente*」が「近代資本主義経済」の興隆に著しい貢献を果たしたと指摘し、「19世紀に形成されたわれわれの経済生活は、ユダヤ人の貢献を抜きにしてはまったく考えることができない」、したがって「近代資本主義経済とユダヤ的経済 *jüdische Wirtschaft* とは同一の概念である」とまで断定したうえで、次のように述べている。

経済生活の近代的発展という立場に立つならば、資本主義的活動の展開とか

くて強力な生産力の解放とを進歩として捉えるならば、あるいは一国が現今の世界市場に対して占めている地位を重視しようとするならば、…… ユダヤ人という経済主体の存在は、最大の長所の 1 つとして認められなければならない。(Sombart 1903, 128)

ゾンバルトは、近代資本主義経済の発展に資する「ユダヤ的エレメントの特徴」として、「意志による支配 *Vorwalten des Willens*」(いかなる困難に直面しても、所期の目標を貫徹しようとする事)、*「利己心 Eigennutz*」(律法ないし営業道徳に違反しない限りで、最大利潤の実現を追求すること)、「精神的資質の抽象性 *Abstraktheit ihrer Geistesbeschaffenheit*」(あらゆる質的なものを量的なものへと還元すること)を挙げているが(Sombart 1903, 129-130)、わけでもユダヤ人と資本主義との結びつきを決定的なものたらしめ、ユダヤ人に対して資本主義経済における「指導者的役割 *Führerrolle*」を付与しているものは、彼らのもつ「抽象的資質 *abstrakte Veranlagung*」であった(Sombart 1903, 131)。すなわち、彼によれば、ユダヤ人の思考様式を特徴づけているものは、なによりも「質的な価値に対する無関心」と「具体的なもの・個別的なもの・人間的なもの・生命あるものを評価する能力の欠如」であり(Sombart 1903, 131)、それゆえユダヤ人の「あらゆる経済的諸機能は、その質的具體性を奪われ、貨幣との関連においてのみ、つまり抽象的量的明確性においてのみその姿を現す(Sombart 1903, 132)」こととなる。ゾンバルトは、こうした抽象性を志向する「特殊ユダヤ人的精神」が「利潤の再生産」ないし「資本の価値増殖」を至上命令とする「資本主義」(=「資本主義的企業」)の非人格的性格とすぐれて適合的な関係にあると捉えつつ、「資本主義の本質が経済生活のなかで純粹に貫徹されればされるほど、ユダヤ人的特性 *jüdische Eigenart* がますます多くの活動の場を獲得することになる」(Sombart 1903, 133)と指摘している。

このように、ゾンバルトは、1903年の時点ですでに「ユダヤ人」と「資本主義」との緊密な関係について論及していたが、彼のかかる認識がいつそう積極的な形で主張されることになるのは、「企業家」論文から2年後の1911年に上梓された『ユダヤ人と経済生活』においてであった。ゾンバルトは、本書の冒頭、ユダヤ人を「近代資本主義の建設者」と改めて規定し(Sombart [1911] 1928, VII : 訳 12)、「現代の経済生活」(=「盛期資本主義経済」)が「ますますユダヤ人の影響を受ける度合いを深めている」との認識を示したうえで(Sombart [1911]

1928, VIII : 訳 13) (4), ユダヤ人と資本主義および資本主義的企業家との内面的な関連性についてさらに本格的な分析・考察を展開している。

『ユダヤ人と経済生活』の構成においてまず注目されるのは、われわれが前章で検討した論文「資本主義的企業家」の核心部分ともいべき企業家の類型的諸機能について論じた箇所、すなわち「企業家」と「商人」にかんする叙述が、ほぼそのままの形で「ユダヤ人の資本主義に対する適性」という表題が付された第2部の第9章「資本主義的経済主体の諸機能」へと転載されていることである。すでに見たように、ゾンバルトは、「発明家」・「発見者」・「征服者」・「組織者」という4つの人間類型からなる「企業家」が、「投機的計算家」と「事業家・交渉人」によって構成される「商人」と有機的に統一・結合されることによって初めて真の資本主義的企業家が誕生することになると見なしていたが、彼はかかる理想的な企業家像に現実においてもっとも相応しい民族としてはっきりとユダヤ人を想定していたのである。その意味では、『ユダヤ人と経済生活』は、ゾンバルトにとって単に「資本主義の成立にかんする最初の心理学的研究」(Lindenlaub 1967, 315)であるとか、あるいは『近代資本主義』改訂のための準備作業として公刊された一連のモノグラフの端緒(Lenger 1994, 219)であるといった評価は、もちろん間違いではないけれども必ずしも正鵠を得たものとはいえない。むしろ重視されなければならないのは、本書が企業家論文の続編として執筆された性格を強くもっているということなのである。すなわち、本書でゾンバルトが課題とした最も重要なテーマの1つは、資本主義的企業家の特徴とユダヤ民族に固有の資質との「内面的な親和関係」を論証することにあつた。

さて、ゾンバルトのかかる研究目的が明瞭に果たされることになるのは、第2部の第12章「ユダヤ人の特性」においてである。ゾンバルトはこの章で「資本主義に奉仕するユダヤ人の性質」にかんしてかなり立ち入った考察を試みているが、その際、彼は、資本主義ならびに資本主義的企業家に明確な親和性を有するユダヤ人に独特の「諸特性」を浮き彫りにすることに自らの精力を注いでいる。ちなみに、「ユダヤ人の特性」について論及したこの第12章にかんしては、同時代の著名な歴史家であり、ゾンバルトの論敵でもあつたゲオルク・フォン・ペロウも高い評価を与えている。ペロウは、『ユダヤ人と経済生活』に対する書評論文で中世期におけるユダヤ人の経済活動にかんするゾンバルトの記述には歴史的な事実とは異なる点が多々あり、また資本主義の生成に対してユダヤ人が計り知れない貢献を果たしたとするゾンバルトの主張にも、「しばしば止むことのない数多

くの誇張した表現」(Below 1912a, 619)が見出されると批判しているが、しかし「ユダヤ人の特性」を分析した第 12 章にかんしてだけは例外的に以下のような賞賛を与えているのである。

私 [=ベロウ] は、ゾンバルトによって企てられたユダヤ人の特性を描き出そうとする試みを好意的に評価したい。たしかに、ここでもまた歴史的な部分の証明は、不十分なものである。…… しかしながら、ゾンバルトの著作のこの箇所 [=第 12 章] においては、きわめて多くの事柄が消えることなく後世に残されるであろう。彼は、ユダヤ人が今日示している特性についての考察を通じて、一連の卓抜な、精密かつ的確な見解を表明しているのである。(Below 1912a, 624-625) ⁽⁵⁾

では、ベロウをしてこのような高い評価を与えしめた、ゾンバルトによって提起されたユダヤ人に特有の「諸特性」とは、具体的にはいかなるものであったのだろうか。こうした「諸特性」のなかでもゾンバルトがまず筆頭に掲げているものは、ユダヤ人のもつ「卓越した精神性 *überragende Geistigkeit*」, すなわちユダヤ民族の「主知主義 *Intellektualismus*」である。この言葉が意味するのは、「精神的関心や精神的能力が、(手仕事による) 肉体的関心や肉体的能力を支配すること」であり、ユダヤ人にあっては、明らかに「知性が肉体にまさっている」(Sombart [1911] 1928, 313: 訳 407) と考えられる。彼らは一切の感覚的、感情的、直感的な世界とはまったく無縁で、「本能的知性」のみを唯一の拠りどころとし、ひたすら抽象的な世界へと沈潜する傾向がある。このような「具体性を欠く気質」, 「感覚的にはまったく精彩のない精神的傾向」こそがユダヤ人を特徴づける「主知主義」の内容にほかならず、この意味で彼らは、「純粹に精神を志向する人間」として見なされている。ゾンバルトによれば「ユダヤ人が世界を理解するために獲得しようとするカテゴリー」とは、なによりも「合理的な解釈」のなかにだけ存在しているのである (Sombart [1911] 1928, 319: 訳 415)。

次に、ゾンバルトが注目する特性は、ユダヤ人の目的意識、すなわち目標達成へと邁進する彼らの「目的志向性 *Zielstrebigkeit*」である。ユダヤ人は、自らの設定した目標の実現のためには、たとえいかなる抵抗にあつたとしてもけっして簡単にあきらめることはない。彼らはあらゆる困難に粘り強く対峙し、所期の目標を達成させるために「強靱な意志」をもってこれを克服しようと努めるのであ

る (Sombart [1911] 1928, 322 : 訳 419) . さらに, ゾンバルトは「可動性 *Beweglichkeit*」, 要するに迅速に事態を認識し, ただちにこれに対処するという「精神の可動性」あるいは「精神の活発さ」をユダヤ人の特性として挙げている.

以上にくわえて, ゾンバルトは「ユダヤ人の本性」といっても過言ではない「不断性 *Rastlosigkeit*」, つまり休むことなくたえず勤勉であり続けようとする彼らの性格と, いかなる国民的特質に対しても常に柔軟に対応することのできる「適応能力 *Anpassungsfähigkeit*」をユダヤ人のもつ重要な特性として列挙している (Sombart [1911] 1928, 323 : 訳 420) . ゾンバルトによれば, ユダヤ人という民族はいつまでも自らを異質的存在として感じることはない. なぜなら「彼 [=ユダヤ人] は, すべてのなかに入りこみ, すべてのに順応する」ことができるからである. 言い換えれば, ユダヤ人は「もしドイツ人でいたいならばドイツ人であり続けるし, イタリア人の方が都合がよいと思えば, イタリア人になる」のである. ゾンバルトは, こうしたユダヤ人の「異常な適応能力」のなかにこそ, 彼らの特質の独自性が最も明瞭に現われていると指摘している (Sombart [1911] 1928, 325-326 : 訳 423) .

以上, 見てきたようにゾンバルトは, 1. 「主知主義」, 2. 「目的志向性」, 3. 「可動性」, 4. 「不断性」, 5. 「適応能力」を「ユダヤ人的特性」として析出しているが, 彼の認識では, ユダヤ人のもつこれら一連の「諸特性」は, 「資本主義」の本質と密接に結びつくものであり⁽⁶⁾, かくて彼は「資本主義の根本理念とユダヤ人の本質の根本理念とは, まさに驚くべきほどの一致を示している」(Sombart [1911] 1928, 328 : 訳 427) と断定する. では, 資本主義とユダヤ人に共通の「根本理念」とは, ゾンバルトにおいてさしあたりいかなる点に見出されているのだろうか. 彼は, ここで双方における「内在的な連関」を示す象徴的なメルクマールとして, 『19世紀のドイツ国民経済』の時と同様, 一切の質的關係を量的関係へと還元する「抽象性」に注目している. ゾンバルトは次のように述べる.

資本主義的本質が純粹に貫徹されればされるほど, それだけますます純粹にあらゆる資本主義的本質の抽象性 *Abstraktheit* がその姿を現すことになる. それゆえ, これは, 今やその抽象性がはっきりと認められるユダヤ的精神とも正確な対応を示すこととなる. 資本主義は, その最も内的な本質からすれば, 抽象的である. なぜなら, そのなかではすべての質的なものが, 純粹に量的な交換価値との関係にもとづいて消滅してしまうからである. すなわち,

資本主義のなかでは、多くの精彩のある技巧的な活動に代わって、ただ1つの商人的な活動が登場するのであり、多くの色彩にとんだ枝葉に分かれた関係 **Branchenbeziehungen** が、ただ1つの純粋な業務関係によって置きかえられることになるのである。(Sombart [1911] 1928, 329: 訳 428)

このように資本主義と「ユダヤ的精神」との親和性を再度指摘したうえで、さらにゾンバルトは、上に列挙したユダヤ人の「諸特性」が、「資本主義的企業家」の本性に完全に合致するものであることを論証しようとする。彼は次のように述べる。

ユダヤ人は、とりわけ彼の目的志向性と、強い意志の緊張 **Willensspannungen** とによって、すぐれた企業家 **Unternehmer** へと成育する。ユダヤ人の精神的な可動性は、彼をして常に新しい生産の可能性と新しい販路の可能性とを発見せしめるためのよすがとなる。ユダヤ人の局部的に人間を洞察する能力 **partielle Menschenkenntnis**, すなわち特別な目的のために、まさしくある人間の特別な適性を捉えしめる能力は、彼に対して組織を創造する資格を付与する。有機的なもの、自然なもの、成長するものに対するユダヤ人の感覚の欠如は、彼にとってなんの障害にもならない。なぜなら資本主義社会では、有機的、自然的、生成的なものはなにもなく、あるのはただ機械的、技巧的、人工的なものばかりだからである。最大の資本主義的企業でも、随意にそれぞれの目的に応じて拡大し、分解し、変化させることのできる人工的機構に過ぎない。それは常に目的に沿ってつくられたものである。しかも、……直感的洞察から出た不可分な全体としてではなく、眼前の要求にしたがう個々の目的行動によって、各部が互いに隣接してつくられているのである。この意味で — 巨大な資本主義的企業の創造者としての — ユダヤ人は、おそらくまた天才的な組織者 **Organisator** でもあろう。(Sombart [1911] 1928, 331-332: 訳 430-431)

ゾンバルトは、このように「資本主義社会」を有機的な生命体としてではなく、「資本主義的企業」を雛型とする機械的、人工的な機構として把握し、かかる性質をもつ「資本主義」と感覚、感情を退け、ひたすら抽象性ないし知的・主知主義的な合理的解釈だけを追求するユダヤ人の「特性」との間に揺るぎなき「内面的

親和関係 *innere Verwandtschaft*」(Sombart [1911] 1928, 329: 訳 428)があることを指摘する。しかも、ユダヤ人に内在している「目的志向性」,「強靱なる意志」,絶えず新しい生産手段を発明し,未知の販路を開拓しようとする「可動性」,休むことなく働き,明日の利益のために今日の犠牲をなんら厭うことのない「不断性」,状況に応じて柔軟にあらゆる事態に対応する「適応能力」,鋭い「洞察力」と卓越した「計算能力」,さらにはすぐれた「組織者」としての機能に代表される「企業家」的才能と「投機家」・「交渉者」としての非凡な「商人」的才能,こうした様々なユダヤ人のもつ「諸特性」は,すでに前章で明らかにされたゾンバルトの規定する「資本主義的企業家」の資質とも大きく重なるものであった。かくて,ゾンバルトは,「最高の資本主義的業績を成し遂げるには,ユダヤ人の特性ほど適した特性はない」(Sombart [1911] 1928, 333: 訳 432)とまで断言するのである。

このように,ゾンバルトは「資本主義的企業家」論文において自ら提示した理想的な現実の企業家像の特徴が,まさしく「ユダヤ人」という固有の民族のうちに最もはっきりとした形で体现されていることを強調する。ゾンバルトの認識では,「ユダヤ人」とはただ単に衝動的な「営利欲」のみを有しているのではなく,これに加えてさらに「計算」にもとづく客観的合理的な思考様式をも備えた存在として把握されており,要するに彼らこそが「資本主義的精神」の担い手たる企業家として最も相応しい存在であると捉えられているのであった。

さて,以上の考察をもってゾンバルトが資本主義的企業家像とユダヤ人ないしユダヤ人的特性との「内面的な連関」をいかに把握していたのかという本節の課題はほぼ果たされたように思われるが,最後にこれまでの議論との関連でゾンバルトの「人種問題」に対する認識について一言しておきたい。まず,われわれがなによりも注意しておかなければならないことは,「指導的経済主体」としての企業家の資質とユダヤ人の「諸特性」とを結びつけようとするゾンバルトの見解は,「民族的資質」あるいは「生物学的遺伝」に対する彼の過剰な期待から導き出されたものではないということである。ゾンバルトは,そうした「民族精神」にもとづく人種決定論的な立場を,まったく現実を反映させることのない「偽りの幻影」であると厳しく戒めている。すなわち彼によれば,「民族精神」とは「たかだかわれわれの観念世界のなかで,思考の補助手段としての地位を占めているに過ぎない」ものなのである(Sombart [1911] 1928, 302: 訳 394)。くわえて,ゾンバルトは,『ユダヤ人と経済生活』第13章「人種問題」のなかでも,「人種論

者」あるいは「人種理論」に対して、次のような正面からの批判を行っている。

…… ユダヤ人の精神的特性は、人種的観点から基礎づけられるものなのだろうか。人種信仰の独断的主張者であれば、もちろん「然り」と答えるだろう。しかし、これに対して批判的な立場を示そうとするわれわれは、「否」と答えなければならない。〔人種理論によって〕これまで証明されたものは、皆無である。／ おそらく、人種論者 *Rassentheoretiker* の論証を追究する価値はあるだろう。それは、彼らの一切の主張がいかに空虚であるかを見るためであり、彼らが、認識上のためらいによってなんら曇らされることのない〔人種理論に対する〕信仰にもとづいて、きわめて疑わしい妥当性しかもたない命題をいかにして打ち立てているのかを見るためである。…… 人種理論 *Rassentheorie* のほとんどの主張者は、彼らが打ちだした主張の正当性を支えるための経験にもとづく証拠を提出する努力をなに一つしてはいない。…… / 今やこうした命題の正当性を支える説得力のある証拠はなに一つ提出できないのだということを、はっきりと言明しておくことが重要である。
(Sombart [1911] 1928, 384-385 : 訳 491-492)

このように、ゾンバルトは、「資本主義的企業家」と親和関係にあるユダヤ人のもつ「諸特性」を「人種」あるいは「人種理論」という観点から説明することに強く反対している。要するに、彼にあっては、ユダヤ人に独特の「諸特性」とは、「民族的資質」や「生物学的遺伝」へと単純に還元されるものでは断じてないのである。そのことは、ゾンバルトが「肉体的(人類学的)特徴と人間の心的態度 — 個体ならびに集団類型として — の関係については、われわれはなに一つ知ってはいない」(Sombart [1911] 1928, 385 : 訳 492) と強調していることから明らかであろう⁽⁷⁾。それでは、このように人種理論からのアプローチを明確に否定するゾンバルトは、ユダヤ人的特性をもたらす淵源を一体どこに見出していたのだろうか。実は、この問いに対する回答は『ユダヤ人と経済生活』のなかでははっきりとした形で用意されてはいない。なぜなら、ゾンバルトは、「人種論者」による論証の不備を上記のように批判する一方で、「環境論者 *Milieutheoretiker* がユダヤ人の今日の特性をなんらかの歴史的偶然性のせいにしようとするならば、彼らの論証もまた説得力のあるものではない」(Sombart [1911] 1928, 389 : 訳 497-498) と主張しており、「人種論者」に対してばかりではなく「順応狂信者

Anpassungsfanatiker」や「環境狂信者 Milieufanatiker」と呼ばれる人々に対しても厳しい批判の眼を向けていたからである。

こうして、ゾンバルトが上記の問いに対して明確な回答を与えることになるのは、改訂された『近代資本主義』第2版においてであり、その第8節「企業家層の生成」のなかで初めて彼は、「ユダヤ人」が「資本主義的企業家」に相応しい独特の「諸特性」を備えるにいたった直接的原因を「異邦性 Fremdheit」というユダヤ人の置かれた特殊な「社会的諸条件 soziale Bedingungen」(Sombart [1916] 1987a, 882)、換言すれば、「外的生活諸条件 äußere Lebensbedingungen」(Sombart [1916] 1987a, 910)のうちに求めるようになったのである。

以上の議論を簡潔に総括しておけば、『ユダヤ人と経済生活』において、人種理論にも環境理論にもどちらにも与することのなかったゾンバルトは、『近代資本主義』第2版にいたって環境理論の方へと鮮明に軸足を移しつつ、ユダヤ人と資本主義的企業家との「内面的な連関」を成立させる最も重要な原基を、ユダヤ人に特有の客観的な「社会的諸条件」のうちに見出したということがいえるだろう。では、数多くの民族のなかでもユダヤ人と最も密接な「内面的親和関係」を有する企業家は、「指導的経済主体」として「盛期資本主義経済」においてどのような形で本格的な営利活動を推進・展開していくのだろうか。次節では、ゾンバルトの信用理論、特に証券論と株式会社論に注目しながらこの問題について検討したい。

Ⅲ. 企業家活動の展開と証券制度：「盛期資本主義経済」の一類型としての「ユダヤ的資本主義」

ゾンバルトは『近代資本主義』第3巻第1章「資本主義的企業家の意義」のなかでこう述べている。第1次大戦以前に隆盛を極めた「盛期資本主義経済」における「ほかに類例のない特徴」とは、なによりもまず「経済生活における指導の全体が資本主義的企業家へと移譲されたこと」(Sombart 1927, 11: 訳 34)にある。企業家は、もはや国家機関による監督、後見をまったく必要とせず、文字通り「経済主体」として資本主義経済システムを統括する唯一の「組織者」として姿を現す。彼らは、いかなる公的機関の拘束も受けることなく自らの意志だけを抛り所として自由な営利活動に邁進する。その意味で、「この時代 [= 盛期資本主義時代] の全体は、彼ら [= 企業家] の精神によって刻印されている」(Sombart

1927, 12 : 訳 35) といっても過言ではない。ここでゾンバルトは、かかる指導的な企業家の主な職能として、1. 「資本と労働との結合」、2. 「生産の方向と量の決定」、3. 「生産と消費との結合」を挙げているが、こうした一切の活動が企業家のリスク、責任において行われる経済形態、すなわち企業家が利益と損失とのあらゆる機会を請け負う「企業的経済 *unternehmungswirtschaft*」とは、彼の見るところでは、「盛期資本主義時代」に特徴的な経済形態であった。

…… 近代資本主義経済の原動力 *treibende Kraft* は資本主義的企業家であり、ただ彼のみである。彼を欠いてはなに一つ行われることはない。したがって、彼は唯一の生産的 *produktiv*、つまり創設的、創造的な力である。…… あらゆる他の生産要素である労働と資本とは、彼に対して従属の関係に立つものであり、彼の創造的行為によって初めてその生命を与えられる。技術のあらゆる発明もまた、彼によって初めて生けるものとなる。(Sombart 1927, 12 : 訳 35)

労働、資本、さらには新しく開発された技術であっても、それ自体ではなんらの利潤も生み出すものではなく、それらが高い収益性、生産性を獲得するためには、企業家を主体的な媒介として各々が有機的に結合される必要がある。こうした企業家による利潤獲得へ向けた「創造的行為」が最大限発揮されることになるのが「盛期資本主義時代」における大きな特徴の1つであり、極論すれば「盛期資本主義経済は、少数者〔＝企業家〕の創造的イニシアチブからその全構造を作り出した」(Sombart 1927, 12 : 訳 35)とまで断言される。その際、われわれは特に、ゾンバルトが「国際的な企業家階級の構成」の変化に注目しつつ、「盛期資本主義時代においては、その指導的地位がますますゲルマン民族を中心とする諸国家へと重心を移していること」、さらには「もう1つの重要な事実」として「あらゆる国においてユダヤ人が経済生活の指導に、ますます著しく関与していること」を統計資料にもとづいて強調している点に注目しておこう(Sombart 1927, 21-22 : 訳 48)。すなわち、ゾンバルトは『19世紀のドイツ国民経済』から『ユダヤ人と経済生活』を経て『近代資本主義』第3巻にいたるまで、実に4半世紀近くにわたって一貫して「指導的経済主体」としてのユダヤ人企業家たちの果たす役割の重要性を説き続けているのであり^⑧、彼らの企業家的才能が十全に発揮されるための制度ないし組織的な基盤が確立されたところに「盛期資本主

義経済」の最大の特質を見出そうとしているのである。ゾンバルトが「盛期資本主義時代」を「人類史上の独自のエピソード」、あるいはただ1度かぎりの現象である「歴史的個体 *historisches Individuum*」(Sombart 1927, X III : 訳 7)として把握した主な理由は、まずもってこの点にあったといえよう。

ところで、企業家がこのように天才的な創造性と革新性を存分に発揮し、旧弊を打破する「新しき指導者」として自らの経済活動を遂行していくためには、それを支えるに足る十分な資本供与が絶えず保証されていなければならない。しかし「初期資本主義時代」に典型的に見られるような、「私有財産」と「資本」とが分かちがたく結びついた「個人企業 *Einzelunternehmung*」においては、企業家は「所有者兼企業家」としての役割を負わせられ、彼の経済活動は否応なしに自己の資産額による制約を受けることとなる。否それどころか、かかる状況下にあっては、仮に才能、資質があるとしても企業家の地位を手にするすらできない、という事態が出来る(Sombart 1927, 20 : 訳 46)。ここにゾンバルトは、企業家を資本所有の必然性から解放し、「純粋な企業家類型」を創造するための「最も重要な方策」として「信用」の観念を重視するようになった(Hintze 1929, 485)。

もとより、この20世紀初頭にあつて、ゾンバルトだけが企業家の経済活動における「信用」のもつ意義を説いたのではなかったことはいうまでもない。たとえば、当時公刊された『国家学事典』第4版において、その「信用」の項を執筆したL. A. ハーンは、「信用 *Kredit* の目的は、もっぱら、ある特定の経済主体に対して、彼のもつ資産額を越えて、ほかの経済主体の財貨、あるいはサービスを彼の意のままに用いる可能性を付与することにある」(Hahn 1923, 944)という明確な定義を与えている。そして、こうしたハーンの規定するような「信用」と「企業家」との関係について、逸早く卓抜な見解を提示したのは、周知のようにシュンペーターであった。

次章で詳しく検討されるように、ゾンバルトもまたシュンペーター、ハーンに代表される同時代の「動態的信用理論」(=信用創造理論)から多大な影響を受けていたのであるが、しかしユダヤ人をプロトタイプとする企業家が「盛期資本主義経済」においていかにして縦横に経済活動を展開するにいたったのかという本節の課題を解明するためにまず取り上げなければならないのは、ゾンバルトの証券理論、すなわち有価証券にかんする議論である。ゾンバルトによれば、証券が「盛期資本主義経済」において果たした最も重要な役割とは、従来、個々の人格

性、人的結びつきを媒介として成立していた債権・債務の信用関係を「脱人格化」させたこと、要するに「債権・債務関係」の「物象化」を確立させたことにあった。彼は、「証券原理」をさしあたって以下のように定義している⁽⁹⁾。

証券原理 *Effektenprinzip* とは、債務（あるいは債権）関係が完全に物象化 *Versachlichung* されることであり、それが証書として対象化されることである。この証書は、いわゆる有価証券 *Wertpapier*, すなわち証券 *Effekt* であって、それを所持していることによって権利が証明される。／この証書は代替可能な有価物であり、それゆえ容易に譲渡することができる。だから、それは便利な商品なのである。（Sombart 1927, 185：訳 308）

このように、ゾンバルトは、有価証券を「脱人格化・物象化された信用関係」を誕生させるための不可欠なファクターであると見なしていた。もっとも、彼のこの認識は、すでに『ユダヤ人と経済生活』のなかで明確に表明されていたという点を看過してはならないだろう。ゾンバルトは、本書の第 6 章「経済生活の商業化」⁽¹⁰⁾において、「一枚の有価証券のなかには、…… 人格的債務関係ではなく、物象化された債務関係（または債権関係、つまり広義の信用関係）が体化されている」、したがって有価証券の発生は「信用関係物象化の外的表現」であると指摘したうえで、その役割について次のように述べていたのである。

まったく一般的にいえば、信用関係は次の場合に物象化 *versachlicht* される。すなわち、〔信用関係は〕もはや 2 人の互いに親しい者同士の個人的合意からではなく、互いに未知の人々の人間的組織の体系を通じて、客観的規範にしたがい、規格化された形式のなかで成立するのである。有価証券は、まさしくこの組織の結節点を形成し、そのなかで未知の者同士の債権・債務関係が客観化 *objektiviert* される。そして有価証券をもつことによって、常に新しい債権者が信用関係のなかに入りこんでくる。かくて、非人格的信用関係 *unpersönliches Kreditverhältnis* は、有価証券によって基礎づけられる。（Sombart [1911] 1928, 62：訳 101）

見られるように、『ユダヤ人と経済生活』のなかで有価証券のもつ役割がこれほど鮮明に論じられているのはきわめて示唆的である⁽¹¹⁾。なぜなら、人格、場所

を問わず、自由に譲渡可能な「可動性 *Beweglichkeit*」および「抽象性 *Abstraktheit*」(＝「適応能力 *Anpassungsfähigkeit*」)を有し、「その内的本質において流通する *in der Verkehr* べく定められている」(Sombart [1911] 1928, 91: 訳 136) 有価証券は、ユダヤ人の経済活動の推進・展開にとってきわめて重要な起爆剤となったことが容易に推測されるからである(佐伯 2000, 243-248)。公に認められた国土をもたず、それゆえ世界中に拡散し、どこにおいても「異邦人 *Fremde*」ないし「半市民 *Halbbürger*」として企業家活動を営まざるを得ない「抽象的な存在」であるユダヤ人にとって、人種、国籍をなんら問うことなく自由な債権・債務関係の締結を可能にする有価証券の存在は、彼らの経済活動を支える中枢といっても過言ではない。

前節で確認したように、ゾンバルトは、資本主義的企業家とユダヤ人的特性との親和関係を浮き彫りにし、企業家の有する代表的な機能的類型である「組織者」と「商人」、さらには「知性」と「道徳」(特に営業上備えておくべき道徳)という内面的な気質にいたるまで双方の間には悉く強い結びつきが見られるという事実を論証していた。かくして、ユダヤ人が異国の営利活動においてたえず著しい成功を獲得することができたのは、一面ではたしかに彼らのもつ企業家としての経営の才覚に負うところが大きかったとあって差し支えあるまい。しかしながら、ユダヤ人企業家たちがただ一企業における収益の増加の指導者ないし立役者にとどまることなく、世界的レベルでの金融市場の成立にも深く関与し、まれに見る強固なユダヤ・ネットワークを実現させたうえで、「初期資本主義経済形態から盛期資本主義経済形態への加速度的な転換」(Sombart [1916] 1987a, 896)を成し遂げることができた真の源泉は、彼らによって自在に駆使された「有価証券」、わけでも「無記名証券 *Inhaberpapier*」⁽¹²⁾にもとづく脱人格的物象的な「信用取引」が確立されたことにあったとゾンバルトは見なすのである。

こうしてゾンバルトは、現実の「盛期資本主義経済」を、有価証券の普及によって急速に拡大した「ユダヤ的資本主義」のうちに類型化して捉えようとする。有価証券とユダヤ人の結合がもたらす国境を越えた大規模な資本の移動と、それにとともなう本格的な企業家活動の展開は、彼にとって「盛期資本主義経済」を映し出す鏡であった。かくて、ゾンバルトにとっての「盛期資本主義時代」とは、そうした意味での「証券制度」が完成された時代にほかならなかったのである。

すべての証券、殊に資本形成にとって重要な種類の証券として前に掲げたも

のの起源は、…… 初期資本主義時代にまでさかのぼる。けれども、証券の時代 *Das Zeitalter der Effekten* なるものは、ようやく盛期資本主義時代になってからのことである。証券制度 *Effektenwesen* はこの時代において完全な構成に達するのである。(Sombart 1927, 200 : 訳 331-332) (13)

このように、「証券の時代」と呼ばれる「盛期資本主義経済」にあつては、たとえば「貨幣券 *Geldnote*」, 「紙幣 *Papiergeld*」, 「裏書(譲渡)手形 *indossierter [girierter] Wechsel*」, 「社債 *Obligation*」, 「抵当証券 *Pfandbrief*」など、実際に様々な種類の証券が市場を流通していたが、そうした数ある証券のなかでも「最も重要なもの」の1つとしてゾンバルトが特に注目するのは、「株式 *Aktie*」 (=「配当証書 *Dividendenschein*」)であつた(Sombart 1927, 185-186 : 訳 308)。ゾンバルトは、19世紀中葉以降、「ユダヤ的資本主義」の興隆と軌を一にするかのように本格的に普及していった「株式」について、その意義を次のように述べている。

株式は、任意の所有者に対して、彼にとって個人的にはまったく関係のない企業の資本と利潤へ関与する権利を与える。ある個人とある企業との関係は、単に人格的な協働から解放されるばかりではなく、その人に属している財産能力からも解放される。企業に対する個人の関係は、…… 抽象的な貨幣総額のなかに客観化 *objektiviert* される。(Sombart [1911] 1928, 63 : 訳 101)

こうして、ゾンバルトは、「初期資本主義時代」の「個人企業」とは明確に区別される、現今の「盛期資本主義時代」に固有の企業形態として「株式会社 *Aktiengesellschaft*」を想定する(14)。ゾンバルトも指摘するように、ドイツは、普仏戦争直後の1872年から1874年にかけて未曾有の「会社設立ブーム時代 *Gründerjahre*」を迎え、このわずか3年間のうちに新たに創設された株式会社の数は857にも及んでいた(Sombart 1903, 97) (15)。1850年から1870年までに新規創業された株式会社の総数がわずか295に過ぎなかったことを考えてみても、この時期の創業数が統計的に見ていかに破格のものであつたかが理解されよう。さらに、1890年代、特に1895年から1899年にかけての5年間の株式会社の新規創業数は、実に1290にも達している(Sombart 1903, 98 ; Moll 1923, 155 ;

Spiethoff 1955, Tafel, 2) . 19 世紀中葉以降、ドイツはこうして重工業、とりわけ鉄道業を基幹産業としながら株式会社形態の大企業を中心とした本格的な経済発展を成し遂げていくことになるのである。

さて、ゾンバルトはこうした「盛期資本主義経済」を牽引する「株式会社創設事業」にもユダヤ人企業家たちが積極的に関与していたという事実に注目する。すなわち、彼によれば、「ユダヤ人がかかる資本主義の動的な性質の高揚期、つまり株式会社創設事業 *Gründungsgeschäft* の発展期に再三にわたって重要な役割を果たしたことは、…… ほとんど疑う余地がない」(Sombart [1911] 1928, 121 : 訳 170) のである。ゾンバルトは、すでに 1840 年代に「最初の鉄道主 *Eisenbahnkönige*」として君臨していたロートシルト家の圧倒的ともいうべき国際的な金融活動ないし企業活動を端緒として、それ以降、1871 年から 1873 年の「会社設立ブーム時代」に際しても、とりわけベルリンで創業された主要な新規大企業の創設者のうちユダヤ人がその大半を占めていたということを理由に掲げて、「まさしく驚くべきほど多数のユダヤ人が、あらゆる企業〔の創設〕に関与していたに違いない」と主張している。要するに、株式会社の創業にあたっては、「ほとんどの場合、ユダヤ人がその推進者であり、ユダヤ人でない者は被推進者(ある種のわら人形 *Strohmänner*) であった」(Sombart [1911] 1928, 123 : 訳 172) と見なされているのである。

とはいえ、ゾンバルトによれば、ユダヤ人はただ株式会社の創業・創設にのみ関わっていただけではない。彼らは、創業以降の株式会社における実際の「経営」でも企業家としての本来有している才能を十分に発揮することになったとゾンバルトは考えている。むしろ彼の認識では、ユダヤ人企業家たちは、「株式会社という非人格的な企業形態」(Sombart 1903, 223) のなかでこそ「抽象的存在」である自らの特質を逆に生かすことができるようになったのである。ここにわれわれは、ゾンバルトがユダヤ人企業家たちと株式会社というシステムとの間に存在するある種の内的な適合性、すなわち親和関係をも見出そうとしていたという事実を確認することができよう。

では、ユダヤ人企業家たち、ないし彼らの営利活動に有利に作用する株式会社に特有の経済的メルクマールとしては、具体的にはなにが考えられるであろうか。まず挙げられるのは、「所有と経営の分離」が遂行された株式会社においては、ユダヤ人企業家たちはもはや莫大な自己資本の必要性に煩わされることはなく、「純粋な企業家」として「経営」それ自体に、つまり「企業のための客観的な利

潤追求」という彼らの本来の「使命」にのみ専念することができるようになるということである。他方で、彼らに対する資本の提供は、企業家としての彼らの才能、手腕を評価し、配当利益に期待を寄せる不特定多数の株主によって行われる。つまり、株主は、企業の担い手がユダヤ人であるかどうかといったことには一切関心をもたず、ただ「将来における反対給付」を得ることができるという企業家への「信頼」のもとに「株式」を購入するのであって、この意味でゾンバルトは、「株式会社」を、1つの「信用機関 Kreditanstalten」(Sombart 1927, 21: 訳 47)として捉えている。

くわえて、「信用」が「株式」の形で証券化されたことにより、株式会社にあってはもはや親族や友人、知人といった人格的な結びつきや財産の多寡に関係なく、ある一定の貨幣を有する者であれば誰でも株主になることができた。かかる企業体では外部資本の調達を拡大していくうえで、もはやなんらの社会的制限も存在せず、あらゆる者が「資本家」となる資格を所持している。要するに、「個人的な債権・債務関係」に代わって「集団的な債権・債務関係」が現れるのであって、しかもその関係の記載された「証書」(「株式」)は、金銭を通じて譲渡可能であり、容易にその所持者(株主)を変更することができた。かくて、「資本形成は今やこの〔＝局地的〕限界を突破し、それは国民的 national となり、ついには国際的 international となった」(Sombart 1927, 222: 訳 373)なのであって、これによりユダヤ人企業家たちは莫大な外部資本を常時手中にすることができるようになったのである。株式会社におけるこの資本調達のプロセスは、まさしく「取引関係の脱人格化 Entpersönlichung」、すなわち「物象化」によって実現されたものであり、これはいうまでもなく「あらゆる経済事象が商取引へと解消されること」という意味でゾンバルトが「経済生活の商業化」と命名した現象にほかならない⁽¹⁶⁾。その内的本性としての「抽象性」を堅持するユダヤ人企業家たちは、こうした「物象化」された「信用機関」である株式会社の創設を介してはじめて潤沢な資金のもと自らの営利活動を推進・展開することが可能となったのである。

これまでの議論を通じて、ユダヤ人をプロトタイプとする企業家の十全たる営利活動は「信用」、とりわけ「有価証券」にもとづく信用取引によって保証されるとゾンバルトが考えていたことが明らかにされた。ゾンバルトの経済学体系にあっては、企業家は既存の生産方法を改良したり、あるいは経営形態を刷新したりすることによって絶えず「特別利潤 Extraprofit」(Sombart 1927, 35: 訳 67-68)を獲得しようとする天才的な「革新者」として位置づけられているが、企

業家のそうした営利の才能は、彼以外の人々の経済生活を支えるためにも必須であり、だからこそ他の人々は企業家に対して「信用」、すなわちその代替物としての「資本」を付与したのであった。ゾンバルトは次のようにいう。

正常な経済の運営と、したがって各人の経済的生存とは、経済主体〔＝企業家〕のあらゆる経済計画の成功を前提とするのであり、その成功に対する信頼 *Vertrauen* のうえに成り立っている。（Sombart 1927, 223：訳 374）

既述のように、この「信頼」（＝「信用」）は、実際には種々の有価証券によって具現されていったが、なかでも特に「株式」は現実に真の企業家を選出し、彼の活動を信任する役割を果たしたのであり、その意味で「盛期資本主義時代」を象徴する「証券」であった。すなわち、ユダヤ人企業家たちは「株式」を介して不特定多数の人々からの「信用」（＝「資本」）を受け取り、これを後ろ盾として革新的な事業計画を考案、遂行し、もって企業の利潤向上を確実に実現させていったのである。このような個々の企業家たちによってなされた各企業における収益の増加は、畢竟、全体としての資本主義経済の発展を後押しし、「盛期資本主義経済」を招来させる引き金となった。「信用は資本主義経済の拡張を現実にした」とゾンバルトが述べる時（Sombart 1927, 219：訳 368）、その内実は、とりもなおさず、以上のような企業家、わけでもユダヤ人企業家たちを中心として達せられる「経済発展」のプロセスが確立されたことを意味していたのである。

IV. おわりに

本章では、ゾンバルトの彫琢した資本主義的企業家像、すなわち「企業家」と「商人」から成る類型的諸機能を有し、かつ「知性」と「道徳」を主な内面的気質として備えた企業家像が「ユダヤ人的特性」と親和関係にあることを明らかにしたうえで、かかるユダヤ人企業家たちの営利活動を支える外的要因としてゾンバルトによって決定的に重視された有価証券、そのなかでも特に株式のもつ役割とその意義について検討した。「異邦性」という独特の社会的諸条件を通じて、一方では「組織者」としての革新的資質と他方では「商人」としての「投機」、「計算」、「交渉」のすぐれた能力を涵養したユダヤ人は、さらに「主知主義」、「目的志向性」、「可動性」、「不断性」、「適応能力」といった資本主義的企業家に

適格的な一連の「諸特性」をも兼ね備えていた。かくて、彼らは 19 世紀中葉以降の「盛期資本主義経済」を牽引する「原動力」・「指導的経済主体」たる企業家として最も相応しい民族であると見なされたのである。

しかし、ゾンバルトは、こうした固有の「諸特性」をもつユダヤ人企業家たちの卓越した指導力ないし経営手腕だけをもって現今の「盛期資本主義経済」が実現されたと考えていたわけではなかった。なぜなら、彼らの企業家的才能が最大限に発揮されるためには、資本調達簡易化を実現させる「信用制度」の発展、就中、ユダヤ人との関連でいえば「証券原理」の浸透ないし「証券制度」の確立がなによりも重要な意味をもっていたからである。要するに、ゾンバルトは有価証券を媒介とした脱人格化された債権・債務関係の成立、すなわち「信用関係の物象化」を「盛期資本主義経済」を特徴づける決定的なメルクマールとして重視していたのであった。

こうして、ゾンバルトはかかる「信用関係の物象化」を推進する有価証券として特に株式に注目し、債権・債務の契約関係が脱人格化された企業形態である株式会社の創設によって、ユダヤ人企業家たちのもとに巨額の資本が集積することになったと指摘する。つまり、彼によれば、その内的本性において「可動性」と「抽象性」を有する株式は、同じく「可動性」、「抽象性」を内的な特質として備えたユダヤ人の企業家たちと緊密に結びつこうとする傾向があるのである。かくて、ユダヤ人は株式を介して獲得した資本を用いて自由な企業家活動に邁進し、その生来の「異邦性」・「無国籍性」からドイツのみならずヨーロッパを中心とした世界各国で企業収益の向上に著しい貢献を果たした。ゾンバルトは、かかる意味で現今の「盛期資本主義経済」をユダヤ人たちが有価証券と結合しつつグローバルな企業家活動を推進・展開する時代として把握したのである。

注

- (1) レンガーによれば、プレスラウ大学からベルリン商科大学に移った 1906 年以降、ゾンバルトは精力的に講演活動を行っていたが、その際彼の引き受けた講演の中心的なテーマは、ユダヤ人が資本主義の発展に対して果たした役割と彼らの将来についてであったという (Lenger 1994, 187)。彼のこの講演は特に教養市民層からの注目を集め、毎回多数の聴衆が会場を埋め尽くした。ゾンバルトはこの 1 回の講演によって 400 マルクから多い時では 1000 マルクもの報酬を受け取り、かくて「講演料がゾンバルトの生計にとってますます重要な役割を果たした」(Lenger 1994, 180)。他方で、

この講演の内容をとりまとめた著作である『ユダヤ人と経済生活』は、発売後ただちに初版 8000 部が完売し、ゾンバルトはこれによって版元であるドゥンカー・ウント・フンブロット (Duncker und Humblot) 社から得た印税 3000 マルクで自宅の脇を通る 50 メートルほどの大きな路地を購入した (Lenger 1994, 185; 445, Anm. 105)。さらに『ユダヤ人と経済生活』の英訳権の売却 (1911 年) と引き換えにゾンバルトは 1000 マルクを得たという (Lenger 1994, 180; 443, Anm. 69)。ちなみに、『ユダヤ人と経済生活』は、エプスタイン (Mortimer Epstein, 1880-1946) によって英訳 (全訳) され、*The Jews and Modern Capitalism* というタイトルで 1913 年、フィッシャー・アンヴィン (T. Fisher Unwin) 社より出版された。なお、エプスタインは『ブルジョワ』の英訳 (全訳) も手がけており、*The Quintessence of Capitalism: A Study of the History and Psychology of the Modern Business Man* というタイトルで 1915 年、同じくフィッシャー・アンヴィン社より公刊している。

(2) 『ユダヤ人と経済生活』の刊行後、Feugtwanger (1911) , Oppenheimer (1911) , Below (1912a; 1912b) , Guttman (1913) などの書評が出された。これらの書評ではいずれも、後述するように、資本主義に適合する「ユダヤ人的特性」にかんするゾンバルトの考察にポジティブな評価が下されている。しかし、これらの書評のなかで『ユダヤ人と経済生活』に直接先行するゾンバルトの業績として「企業家」論文に言及しているものは、Feugtwanger (1911, 411) だけである。ただしフォイクトヴァンガーにあっては、単に「企業家」論文が文献として挙げられているに過ぎず、資本主義的企業家の特質と「ユダヤ人的特性」との内在的連関をゾンバルトがいかにかに把握していたかについての立ち入った分析はまったくない。こうした傾向は、『ユダヤ人と経済生活』における資本主義と「ユダヤ人的特性」との関係について論及した近年の研究成果 (たとえば、Rehberg (1988) , Ludwig (1996) , 佐伯 (2000) など) についてもいえることである。唯一の例外は、Lenger (1994, 194) であり、『ユダヤ人と経済生活』(特にその第 2 部「ユダヤ人の資本主義に対する適性」) に直接繋がる研究としてゾンバルトの「企業家」論文が初めて意識的に言及された。しかし、このレンガーにおいても、資本主義的企業家と「ユダヤ人的特性」との内的親和性についてテキストにもとづく具体的な論証はなされていない。

(3) とはいえ、ゾンバルトは、前年の『近代資本主義』初版においてすでに経済史的な見地から、資本主義経済を主導するユダヤ人企業家たちの役割について言及している。彼によれば、単なる「生計手段の獲得」という前資本主義的な経済志向とはまったく異質の、貨幣獲得それ自体が最高の目的と見なされるような、「資本主義的精神」に

根ざした観念が「いつ、どこで、どのようにして生まれたのかについては、永遠に不可解な闇に包まれることになるだろう」。しかし、こうした観念を受け入れることができたのは、「経済活動による営利以外に羨望する貨幣を手に入れるほかの権力手段をもたない人々」、つまり「身分の低い人々 *Leute niederen Standes*」(Sombart 1902a, 388)であったに違いない。ゾンバルトの推測によれば、彼らは、「およそ魂を高揚させることのない冷徹な性格の持ち主」であり、「冷静な計算と事柄を理性的に捉える能力を備え、別種の行為を容易に見通すことのできる才能を備えた人々」であったと考えられる。さらに彼らは、「経済生活の日常的な仕事を任せうる信頼性」と「信用業務を通じて、貨幣から実際に貨幣を作り出す本能的な感覚」をも備えておく必要があっただろう。ゾンバルトは、このように「資本主義的精神」の担い手として相応しい人物の条件を推論したうえで、次のように述べている。

それゆえ、西ヨーロッパにおける営利衝動の急速な展開にとっては、数多くの異民族的要素(ユダヤ人)がヨーロッパ民族のなかに入って啓蒙役を果たしたことは明らかである。たしかにユダヤ人は、彼らのしばしば抑圧された地位と、またさらには彼らの人種的な素質も与って、資本主義的精神の生成に著しい関与を果たしたのである。／しかしながら、人はこうした方面でのユダヤ人の影響を過大に評価してはならないように私には思われる。イタリアの諸都市においてでさえ彼らの数は、決定的な影響を果たすことができるほど大きくはなかった。ジェノヴァでは12世紀には2つのユダヤ人家族が住んでいただけであった。ピサ、ルッカ、マントヴァにはごくささやかな共同体があったにとどまる。ヴェニスだけが1152年に1300名のコロニーを記録している。……いずれにせよ、彼らユダヤ人とならんで、アーリア人からなる新しい人間が大量に姿を現したのである。これらの場合には、まずさしあたり都市外の者との取引に営利衝動発展のための余地が与えられた。つまり、地域間交易、商人や小売商人のもとの、営利衝動は数世紀の間に次第に発展していったのである。(Sombart 1902a, 390)

上記の引用文から明らかなように、ゾンバルトは『近代資本主義』初版では、「資本主義的精神」の生成に対してユダヤ人が果たした役割について必ずしも全面的な支持を与えているわけではなく、その影響にかんしては「過大に評価してはならない」というように一定の留保をしている。しかし、ゾンバルトが多くほかの民族に比べてユダヤ人を「資本主義的精神」の担い手として最も適した民族と考えていたことには疑いの余地がなく、彼は自身の資本主義研究の初期の段階から資本主義および資

本主義的精神と「ユダヤ人的特性」との間の親和性を強く意識していたと考えられる。

- (4) ただしゾンバルトは、引用文に続けて、大銀行の取締役や監査役にユダヤ人の名前が少なくなってきたことを例に挙げつつ、資本主義経済に対する「ユダヤ人の影響がごく最近になって減少し始めている」とも指摘している (Sombart [1911] 1928, VIII : 訳 13) . 彼によれば、大銀行を含めて資本主義的企業は、「もはや以前と同じような特殊な商人的特性を要しない官僚機関へとますます変化してきている」のであり、このことは、とりもなおさず「官僚主義が商業主義に代わって出現した」ことを意味する (Sombart [1911] 1928, IX : 訳 13) . ゾンバルトは『近代資本主義』初版においてすでに「その最奥の特性が商人的性質、つまり計算的投機的な活動の優位によって特徴づけられた」「資本主義的文化時代」が将来的には必然的に「社会主義的・共同体的文化時代 *socialistisch-genossenschaftliche [Kulturepoche]*」へと変質していくと予言しており (Sombart 1902, XXXII) , また「企業家」論文のなかでも企業家の冒険者の性質が官僚的な性質へと変化していく傾向を避けがたい「企業家の運命」 (Sombart 1909, 723) として語っていたが、第1次大戦以降のいわゆる「晚期資本主義 *Spätkapitalismus*」の到来についてゾンバルトは、1911年の時点でより明確な形で意識するようになったといえることができる。とはいえ、彼の「晚期資本主義」論が企業家における「資本主義的精神の死滅」という問題とリンクして論じられるようになるのは、『ブルジョワ』以降のことであり (Sombart [1913] 1920, 463 : 訳 473) , この問題にかんする彼の持論が全面的に展開されるのは1928年にチューリヒで開催された社会政策学会での報告「資本主義の転化」 (Sombart 1929, 23-41) およびその4年後に公刊された小冊子『資本主義の将来』 (Sombart 1932) においてであった。ゾンバルトの「晚期資本主義」論については、レボヴィックスによる開拓的な業績 (Lebovics 1969, 49-78) を嚆矢として、柳澤 (1989, 169-194 ; 1998) , Appel (1992, 79-85) , Lenger (1994, 332-357) , Priddat (1996) , Chaloupek (1996) などが参照されるべきである。なお、Chaloupek (1995) は、ゾンバルトとシュンペーターの晩期の経済思想に着目しつつ詳細な比較考証を行っている。また、最近では柳澤 (2001a ; 2001b ; Yanagisawa 2001) が、ゾンバルトの「晚期資本主義」論がヴァルター・ラーテナウの新経済体制論とともに戦前日本の統制経済論に及ぼした思想的影響について綿密な分析・検討を加えている。
- (5) ベロウは同年、別の雑誌に寄稿した『ユダヤ人と経済生活』の書評でも同様の評価を与えている。彼は次のようにいう。

ゾンバルトにおいて最も進んで受け入れることができるのは、ユダヤ人の特性

にかんする一般的性格を考察している部分である。すでに見たように、彼によって試みられたユダヤ人の特性についての歴史的な解明は疑念にさらされているにもかかわらず、そこには数多くの精密な、かつ疑いなく的確な考察が見出されるのである。(Below 1912b, 134)

なお、オッペンハイマーも、「ゾンバルトは、ユダヤ人の特性 *Eigenart*, その心理的類型を全体として正確に把握しているように思われる」(Oppenheimer 1911, 897)と述べており、ペロウと同様好意的に評価している。

- (6) ルートヴィヒ (Ludwig 1996, 206) は、ゾンバルトが近代資本主義経済に適合的なこれらユダヤ人の「諸特性」を剔出したことを「ユダヤ精神にかんするゾンバルト独自の分析の成果」として評価している。なお、ゾンバルトの議論に即して「ユダヤ人と資本主義の内的連関」について検討した最近の成果としては、佐伯 (2000, 236-240) がある。また、榊原 (1958, 611-612) も、「ユダヤ人の民族的特性」が「資本主義的適格性」をもつとするゾンバルトの主張を分析・紹介している。他方、レンガーは、『ユダヤ人と経済生活』の刊行当時において「ユダヤ主義と資本主義との親和関係の原因を探求しようとするゾンバルトの試みを退けようとする批評家はいなかった」と述べたうえで、「ゾンバルトの著作の最も徹底した批判者たち」でさえ、彼によって提起された「非常にすぐれた問題設定」の重要性は明確に認識していたと指摘している (Lenger 1994, 193)。ちなみに、レンガーがここでいう「ゾンバルトの著作の最も徹底した批判者たち」とは、『社会科学・社会政策雑誌』上に『ユダヤ人と経済生活』にかんする 63 頁にも及ぶ長大な書評論文を執筆したグットマン (Guttman 1913) と同じく『シュモラー年報』に書評を寄稿したフォイクトヴァンガー (Feugtwanger 1911) のことを指している (Lenger 1994, 447, Anm. 29)。すでに触れたように、ゾンバルトの経済史的な叙述については徹底した批判をくわえたペロウも、あるいはオッペンハイマーも「ユダヤ人の特性」にかんする彼の分析・叙述には高い評価を与えており、資本主義ないし資本主義的企業家とユダヤ人の有する「諸特性」との内面的な連関を論証しようとするゾンバルトの試みは、同時代において総じて好意的に受け入れられていたように思われる。『ユダヤ人と経済生活』に対する同時代知識人の評価については、村上 (2003, 10; 2006, 12) も参照。

- (7) ゾンバルトは次のようにも述べている。

…… ある特定の精神的かつ肉体的特徴の長期にわたる恒常性を立証したとしても、そのことがとりもなおさず、精神的特性は血に固着したものだという仮定を正当化しないということを、この際はっきりと強調しておかなければなら

い。なぜなら、すでに述べたように、われわれは、身体的本性と精神的本性との現在の関連について、確定的なことはなにも一つということができないからである。そうである以上、ある民族のなんらかの肉体的および精神的特徴の恒常性が、内的関連のないまま存在している可能性、すなわち、互いにばらばらの独立した因果系列に由来する可能性を、われわれは認めなければならない (Sombart [1911] 1928, 384-385 : 訳 491-492)

この引用文からも明らかなように、ゾンバルトは、ある民族の「血」や「肉体的特徴」から安易にその「精神的特性」を演繹しようとするには、きわめて慎重かつ批判的であった。なお、のちにシュンペーターは、『ユダヤ人と経済生活』を例に挙げて、「私の知る限り、いやしくも人種 *race* という要素を有意義に利用した唯一の著名な経済学者はヴェルナー・ゾンバルトだけである」と述べている (Schumpeter 1954, 792, n. 19 : 訳 5, 791)。

(8) その現代における代表的なユダヤ人企業家として、ゾンバルトはヴァルター・ラーテナウを想定していたように思われる。すでに前章でも触れたように、ゾンバルトは自らの資本主義的企業家像の彫琢にあたって、父エミール・ラーテナウの後継として AEG 社総裁を務めたヴァルター・ラーテナウからきわめて大きな影響を受けていた。ゾンバルトは、『近代資本主義』第 3 巻でも、「資本主義的企業家の本質」を解明するために不可欠の文献として、先に検討した彼の「企業家」論文 (Sombart 1909)、『ブルジョワ』 (Sombart [1913] 1920) および『社会経済学綱要』所収の論文「近代資本主義の原理的特性」 (Sombart 1925b) とならんで、シュンペーター『経済発展の理論』初版 (Schumpeter 1912) やヴェブレン『営利企業の理論』 (Veblen 1904) などを掲げているが、それらにくわえてここでもラーテナウの『回顧録』 (Rathenau 1908) を重要な参考文献の 1 冊として挙げている (Sombart 1927, 3 : 訳 23)。なお、ゾンバルトは『ユダヤ人と経済生活』でも、すぐれた「商人」的資質をもった代表的な企業家としてラーテナウの名前を挙げているし (Sombart [1911] 1928, 133-134 : 訳 184)、また『ブルジョワ』でも、現代における「盛期資本主義の精神 *hochkapitalistischer Geist*」を体現する才能豊かな「近代的経済人」の 1 人としてラーテナウに関心を寄せている (Sombart [1913] 1920, 216-217 : 訳 227)。もっとも、ラーテナウ自身はユダヤ人の企業家たちに「モデルネ」の酵素を見ようとするゾンバルトの見解に対して終始批判的な態度を示していた (Lenger 1994, 210 ; 小野 1996, 101)。

(9) ゾンバルトは、「盛期資本主義時代」に特有の信用取引の原理として、「証券原理」

のほかに「銀行原理」と「現金のない支払いの原理」を挙げている (Sombart 1927, 183 : 訳 304) . この 2 つの原理については、次章において考察する.

- (10) この章は、『ユダヤ人と経済生活』が刊行される前年の 1910 年に同名のタイトルで『社会科学・社会政策雑誌』第 30 巻と第 31 巻に独立論文として発表されている (Sombart 1910a ; 1910b) . つまり、「企業家」論文 (『社会科学・社会政策雑誌』第 29 巻所収) を執筆し終えたゾンバルトがただちに取り組んだ研究テーマが「経済生活の商業化 Die Kommerzialisierung des Wirtschaftslebens」という問題だったのである. 彼によれば、「経済生活の商業化」とは、すべての経済事象が、「商取引 Handelsgeschäfte へと解消すること」、換言すれば、「あらゆる盛期資本主義的な商取引の中心機関である証券取引所 Börse へと従属すること」を意味しており、したがって、それは、「国民経済の証券取引所化 Verbörsianisierung der Volkswirtschaft」として捉えられる (Sombart [1911] 1928, 60 : 訳 98) . ゾンバルトは、この「経済生活の商業化」によって引き起こされる諸事象について次のように論じている.

まず、信用の物象化 (あるいはより一般的には、債権の物象化) とその有価証券への客観化 Objektivierung (具体化 Verkörperung) と呼ばれる過程が実現する. 次に、この過程に動化 Mobilisierung , あるいはそうしたドイツ語が好まれるならば、この債権およびその債権者の市場化 Vermarktung という名のもとに知られている過程が現われる. しかしこの 2 つの過程は、債権 (有価証券) の作成を目的とする独立した諸企業 [=株式会社] の形成によって、すなわち営利企業の創設によって完成されるのである. (Sombart [1911] 1928, 60-61 : 訳 99)

上記の引用文に続けてゾンバルトは、これらすべての過程で「ユダヤ人が創造的な関与を果たしたこと」、否それどころか「こうした展開において表現された近代経済生活の特徴が、まさしくユダヤ人の影響のおかげでつくられたものであること」を指摘している. 要するに、ゾンバルトにあっては、信用の物象化・債権の動化あるいは市場化、さらには株式会社の創設、といった「盛期資本主義経済」を特徴づける一連の諸事象は、ユダヤ人企業家たちの「創造的な関与」のもとで達成された過程であると理解されているのである. ちなみに、グットマンは、先に触れた『ユダヤ人と経済生活』の書評論文のなかで「信用業務は、[ゾンバルトのいうように] けっしてユダヤ人によって支配されているのではない」(Guttman 1913, 160) と厳しく戒めてはいるものの、しかし「近代的信用制度の成立に対するユダヤ人の関与についてのゾン

バルトの解説」, とりわけ「ゾンバルトがこの章 [=第6章] で扱っている信用制度の歴史」は、「本書の最も素晴らしい, かつ最も才気あふれる部分の1つ」であり, ゾンバルトは「正真正銘の熟達さでもって, 資本主義経済の発展においていたるところで実現された漸進的な物象化の過程を追跡している」と一定の評価を与えている (Guttman 1913, 158). なお, ゾンバルトの「経済生活の商業化」論を扱った邦語研究としては, 恒木 (2005) がある. また, 当該期ドイツにおける証券取引所の地域的特性と証券取引所に対するユダヤ人の関与については, 山口 (2006) を参照.

(11) ただし, ゾンバルトは『ユダヤ人と経済生活』より以前, 『19世紀のドイツ国民経済』第9章「銀行と取引所」のなかでも, 証券は, 「その内的本質によれば, 商業主義 *Commercium* に依存している」(Sombart 1903, 224) と述べているし, さらに「証券の世界は, 非人格的關係という目に見えない網のなかに解消されており, そしてこの世界は, もっぱら量 *Quantität* によってのみ支配されている」(Sombart 1903, 232) とも指摘している. かくして, 「経済生活の商業化」におけるゾンバルトの証券ないし証券取引所論は, 『19世紀のドイツ国民経済』の第9章の議論を継承・発展させたものであると考えられる.

(12) ゾンバルトは, ユダヤ人が「信用関係の物象化」を推進する過程で, 「無記名証券」が決定的に重要な役割を果たしたと考えている. 彼は, 「無記名証券」の役割について次のように論じている.

債務関係の物象化への努力が, 無記名証券のなかで初めてその純粋な表現を見出したことは疑い得ない. 無記名証券のなかで初めて義務化の意志が人格的な源泉から解放されることになった. …… 才気あふれる学者が表現したように, 無記名証券は, 「人間の精神が, 直接与えられた自然関係から解放される」ことを意味する. そしてそれは, 債務関係を脱人格化し *entpersönlichen*, 物象化する *versachlichen* ための適切な手段である. (Sombart [1911] 1928, 77: 訳 118)

ゾンバルトによれば, この「無記名証券」にもとづいて「人格的信用関係の最後の残滓が消滅した」(Sombart, [1911] 1928, 77: 訳 119) という. なお上記の引用文中, ゾンバルトが「才気あふれる学者」と呼んでいるのは, クンツェ (Johannes Emil Kuntze, 1824-1894) のことである. ゾンバルトは, 彼の著作『無記名証券の理論』(*Die Lehre von der Inhaberpapieren*, 1857) について, 「今日でもクンツェの労作を, 少なくとも問題の原理的扱いにかんするかぎり凌駕するものは出ていない」と述べて高く評価している (Sombart [1911] 1928, 452, n. 178: 訳 578).

(13) ゾンバルトは、「あらゆる面で当時の経済生活を冷徹かつ明瞭に映し出す鏡」である「アダム・スミスの壮大なる学問体系のなかに証券、証券取引所、あるいは証券取引業務にかんする学説のための余地がなんら残されていないという事実ほど、当時の独特な国民経済の姿 — 完成された初期資本主義経済 — を現在の国民経済 [= 「盛期資本主義経済」] との対比においてよりよく特徴づけるものはない」と述べている。すなわちゾンバルトによれば、『国富論』は「証券制度」がまだ一般化する以前の「初期資本主義時代」を分析の対象に据えた作品であり、それゆえ「証券取引所については一言も言及されることのない国民経済学の完成された一体系」なのである (Sombart [1911] 1928, 112-113, : 訳 160-161) 。他方で、ゾンバルトは、アダム・スミスとほぼ同時期に「信用と証券取引所の重要な意義を論じている一冊の著作」として、あるいは「そのすべての視野が未来を見つめている著作」としてポルトガル系ユダヤ人であるピント (Isaac de Pinto, 1715-1787) によって 1771 年に公刊された『信用・流通概論』 (Traité du credit et de la circulation, 1771) を挙げている。この著作についてゾンバルトは次のように述べている。

ピントの著作には、公的信用 öffentlicher Kredit (一般には信用関係の物象化) を擁護するために、さらには職業的証券取引や証券投機などを正当化するために 19 世紀に提出された、ありとあらゆる議論が詳細かつ正確に盛り込まれている。アダム・スミスが証券取引所がまだ未発達な国民経済時代でもって自らの学問体系を締めくくっていたのとは逆に、ピントは、自らの信用理論によって近代を、つまり株式投機が経済現象の中心となり、証券取引所が経済という肉体の心臓部 Herzen des Wirtschaftskörpers となった時代を切り開いたのである。 (Sombart [1911] 1928, 113 : 訳 161)

(14) 『ユダヤ人と経済生活』と『近代資本主義』第 3 巻を主要テキストとしてゾンバルトの株式会社論を考察したモノグラフとしては、鈴木 (1981) がある。なお、本論文第 4 章では、特に株式会社支配論の観点からゾンバルトの株式会社論をヒルファディングのそれと対比させつつ検討している。

(15) ただし、ここでゾンバルトがいわゆる「会社設立ブーム時代」を 1872 年から 1874 年としていることは、事実誤認 (もしくは誤植) であるように思われる。一般に、ドイツにおける「会社設立ブーム時代」とは、1871 年から 1873 年の期間を指しており、事実、統計資料を見ても 1871 年の株式会社創業数は 207、1872 年が 479、1873 年が 242、というように突出した数字を示しているのに対して、1874 年の創業数は 90 となっており、以降 1880 年まで新規創業数が 100 を超えることは一度もないのである

(Moll 1923, 155 ; Spiethoff 1955, Tafel. 2) . したがって、統計資料に依拠する限り、「会社設立ブーム時代」における実際の株式会社の創業数は 928 であり、ゾンバルトのいう 857 よりも明らかに多くなる。もっとも、ゾンバルトは、本論で後述するように『ユダヤ人と経済生活』では「会社設立ブーム時代」を 1871 年から 1873 年までと正確に規定している (Sombart [1911] 1928, 123 ; 456, Anm. 265 : 訳 172 ; 586) .

- (16) ゾンバルトは、『ユダヤ人と経済生活』で「経済生活の商業化」と呼んだ現象を『近代資本主義』第 3 巻では、「経済関係の非固定化 Entkonkretisierung der wirtschaftlichen Beziehung」あるいは「財産の気体化 Verflüchtigung des Vermögens」とも言い換えている。ゾンバルトの認識では、「今日ではもはや財産とは、古い時代のように形のある実体的な価値対象 Wertobjekt , たとえば土地, 産業経営あるいは運輸機関に対する処分権 (この土地, この工場, この船舶が私のものである) ではなくて, ますますただ単に社会的所得の一定の分け前に対する請求権を意味するに過ぎなくなってきている」のであり, 債権者が「無記名証券の形で出資証券を所持することによって, この請求権を有している」ことが, 「盛期資本主義時代」における財産所有の主要な形態であると指摘している (Sombart 1927, 223 : 訳 373-374) .

第3章 信用創造理論の系譜とゾンバルト

－ 「動態的信用理論」の受容をめぐって －

I. はじめに

ヴェルナー・ゾンバルトの後期の代表作『近代資本主義』第2版の第3巻は、その副題が示すように、「盛期資本主義時代」の経済的特質を解明することを目的としている。ゾンバルトは、本書で「盛期資本主義経済」の生成・発展に寄与する主要なファクターとして特に「資本主義的企業家」、「国家」および「近代的技術」の3つに注目し、それらを順次分析しているが、それにくわえて彼はさらに「資本調達」の問題との関連から「信用」が経済発展に対して果たす役割にも大きな関心を寄せている。とりわけゾンバルトは、「信用」を媒介として「企業家が資本所有から分離していく傾向」が促進され、これによって自己資本の制約を受けることのない「純粋な企業家類型」が創出されることになったと認識しており (Sombart 1927, 14: 訳 37), この意味で彼にとって「信用」は、まさしく「近代的技術」とならんで 19 世紀中葉以降の「盛期資本主義経済」の興隆・展開を実現させるための「動態的推進力」とまで見なされている (Sombart 1927, 220: 訳 368)。したがって、ゾンバルトの信用理論に立ち入った考察を行うことは、従来その議論の核心が「動学」の領域にあると評されてきた (Schumpeter 1908, 18: 訳 66) 彼の経済学体系の内容をより具体的に把握するうえで不可欠の作業となるといえよう⁽¹⁾。

上記の問題意識から本章では、経済思想史研究におけるゾンバルト・ルネサンスを主導してきたアッペル (Appel 1992) やレンガー (Lenger 1994) が分析対象として設定しておらず、またバックハウス編纂のゾンバルト研究論集 (Backhaus 1996abc; 2000) のなかでさえ主要テーマの扱いを受けていないゾンバルトの信用観を、主として彼以前の信用理論との継承関係を視野に収めながら検討する。課題の具体化にあたっては、まず『近代資本主義』第3巻においてゾンバルトが同時代の信用理論の動向を評した興味深い次の言説に着目したい。

古くから信用の本質については、2つの根本的に異なる見解が並存してきた。われわれは、その対立をイギリス的とスコットランド的、あるいは静態的と動態的と呼ぶことができる。この2つの傾向が、古典的に表現されている著

作としては、K. クニース『貨幣と信用』第2巻『信用』1876-1879年(Karl Knies, *Geld und Kredit*, Band II, *Der Kredit* 1876-1879)とH. D. マクラウド『信用の理論』全2巻1889年(Henry Dunning Macleod, *Theory of Credit*, 2 Vol. 1889)を挙げることができる。／ つい最近まで、信用の本質についての静態的見解が優勢であった。むしろ絶対的支配を得ていたといっても差し支えない。この問題にかんする最も大部なモノグラフであるJ. v. コモルツィンスキーの著作『信用の国民経済的理論』1903年(Johann von Komorzynski, *Die nationalökonomische Lehre von Credit*, 1903)の375ページには、率直にこう書かれている。「信用が資本創造力をもつというかつての誤謬は、今日では克服されたものとみることができる」と。／ [しかしながら]それ以来、状況は一変した。今日では、われわれは動態的信用理論 *dynamische Kreditlehre* が勝利の歩みを始めているとはっきりといえることができる。現在、動態的信用理論はドイツの文献のなかでは、J. シュンペーター『経済発展の理論』1912年(Josef A. Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1912)とL. A. ハーン『銀行信用の〔国民経済的〕理論』1920年(Ludwig Albert Hahn, [*Volkswirtschaftliche*] *Theorie des Bankkredits*, 1920)によって代表されている。この理論はまた諸外国、ことにアメリカおよびフランスの文献のうちにも多数の支持者を有している。…… / 以下の叙述において示される見解もまた、原則として動態的信用理論の正当性を認めている。私の努力したことは、2つの見解を合わせて1つの総合へと達することであったが、…… しかし動態的理論それ自体をいっそうよく基礎づけ、そのなかの誤謬を取り去ることにあった。(Sombart 1927, 148-149: 訳 248-249)

上記の引用文から明らかなように、ゾンバルトは、マクラウドによって提唱され、『近代資本主義』第3巻刊行当時(1927年)にあってはシュンペーターとL. A. ハーンによって代表されていた「動態的信用理論」こそが「盛期資本主義経済」に相応しい信用理論であると見なしており、かかる理論の「正当性」をいっそうよく基礎づけることに自らの研究課題を定めている。

ところで、ゾンバルトがここでいう「動態的信用理論」とは、その起点にマクラウドの名前が挙げられていることからわかるように、具体的には「信用創造理論」のことを指すと考えられるが、ではゾンバルトはその理論のいかなる点に

「正当性」を見出し、またそれを実際どのように受容したのであろうか。これらの問いを考察するために本章では、まずマクラウドからシュンペーターを経てハーゲンへといたる「動態的信用理論」(＝「信用創造理論」)の系譜を概観する。そのうえでゾンバルトの信用理論においてそれらの理論的特質がどういった形で再現されているのかを彼に即して内在的に明らかにしていきたい。

Ⅱ. 近代的信用理論の生成：H. D. マクラウドの信用創造理論

研究史 (Wagner 1937, 148 ; 麓 1953, 180 ; 1956, 212 ; 鈴木 2004, 169) が教えるように、信用学説史上はじめて体系的な信用創造理論を構築したのがスコットランド出身の法学者 H. D. マクラウド (Henry Dunning Macleod, 1821-1902) であった。マクラウドは、法貨としての貨幣の成立を前提としてその延長上に信用制度が展開されるという 19 世紀前半までの支配的信用理論とは正反対に、信用こそが論理的にも歴史的にも貨幣に先行する本源的存在であるとす独自の信用観を提唱しており、その意味で、彼は、研究史上、近代的信用理論生成の先駆けとなった人物として位置づけられている (Schumpeter 1954, 1115, n. 7 : 訳 6, 2348 ; 二階堂 1993, 161) ⁽²⁾。そこで本節では、まず彼の信用論研究の集大成ともいべき大著『信用の理論』(Macleod 1889-1891, 1ed., I-II ; 1893-1897, 2ed., I-II) ⁽³⁾に拠りながら、その信用概念の基本的な内容を検討していくことにしたい。

マクラウドは、本書の冒頭、経済学を「交換の科学 Science of Exchanges」であると規定したうえで、「交換可能性 Exchangeability」にこそ富の本質があると指摘している (Macleod 1889, 1ed., I, 1-5)。彼によれば、およそ貨幣を媒介として交換され売買されうる可能性をもつものはすべて富である。その際、マクラウドはこうした交換可能性を有する富を、1. 「有形物 Material Things」、2. 労働力に代表される「人的能力 Personal Qualities」、3. 「抽象的権利 Abstract Rights」という 3 つの種類に区分している (Macleod 1889, 1ed., I, 29)。ここで「抽象的権利」とは、公債、銀行券、小切手、為替手形、株式などの請求権にくわえて、事業の営業権、著作権、特許権なども含めた信用取引上の権利のことを意味している。マクラウド自ら『信用の理論』第 2 版で書きくわえているように、アダム・スミスから J. B. セー, J. S. ミルにいたる古典派経済学者たちは、有形物や人的能力ないし労働力を「市場で売買されうる商品 marketable commodity」

であるとはっきりと認識していたものの、しかしながら彼らは「抽象的権利」を商取引の対象として捉えることまではできなかつた (Macleod 1893, 2ed., I, 42-43) . かくして、マクラウドの信用理論を古典学派のそれと区別する決定的なメルクマールとは、まさにこの「抽象的権利」が高度に発展した経済社会における信用取引の必要不可欠なファクターであることを明確に主張した点にこそあったのである (二階堂 1993, 162) .

さて、経済学における富の本質を「交換可能な権利 Exchangeable Right」のうちに認めたマクラウドは、次に「所有権 Property」にかんする精緻な分析を展開している。すなわち、彼は所有権を先に列挙した 3 種類の富にほぼ対応させる形で、1. 「有体または有形所有権 Corporeal or Material Property」, 2. 「無形所有権 Immaterial Property」, 3. 「無体所有権 Incorporeal Property」という 3 つの形態に区別している (Macleod 1889, 1ed., I, 45-46) . 「有体または有形所有権」とは、「特定の有体物 corpus」, つまり動産・不動産を含めた「特定の物 matter」に対する権利のことであり、他方で「無形所有権」とは、人間の精神的知的能力、とりわけ彼自身の労働・サービス、さらには労働によってもたらされた収益までを含めた無形資産を支配する権利のことを意味している。これに対して、マクラウドは「無体所有権」を「将来、ある人がほかのある人に対して一定の額の貨幣を請求する権利」として定義している。ただし、ここで注意しておかなければならないのは、マクラウドのいう「無体所有権」とは、「一定の額の貨幣」という特定の有体物を支配するための権利ではなく、債権者が債務者に対して貸与していた貨幣の返済など一定の行動を請求するという「行為についての権利」として捉えられているということである。この「無体所有権」=「行為についての権利」という考え方こそは、マクラウドの信用理論の核心を占めている決定的に重要な観念であった。彼は次のように述べる。

もし商人がその名のおりの良い信用 Credit を享受しているならば、彼は市場に出向き、貨幣ではなく、将来貨幣を支払うという約束によって財を買う。すなわち、彼は行為についての権利 Right of Action を自らに対して創造するのである。その財は、まさに貨幣で支払ったかのように彼の財産になる。それは売買あるいは交換である。行為についての権利とは、財に対して支払う価格である。それは信用 …… と名づけられる。なぜならそれはある一定の額の貨幣に対する権利ではなくて、その商人から将来ある額の貨幣を

請求するという行為についての権利にすぎないからである。(Macleod 1893, 2ed., I, 15)

このように、マクラウドにとって「信用」とは、貸与された一定額の貨幣を支配する権利ではけっしてなく、将来において一定額の貨幣の支払いを請求するという「行為についての権利」にほかならなかった。言い換えれば、彼は「信用」を「将来収益に対する現在の権利」として把握しており、さらに「信用」の真の機能を「将来収益の現在価値を交易のなかに導入すること」のうちに見出そうとしたのである(Macleod 1889, 1ed., I, 80)。「信用」にかんするマクラウドのこの論理からすると、たとえばある企業の株式の総額は、単に当該企業における現存の所有権の価値を示しているだけではなく、その企業の「将来収益を含めたうえでの現在の価値」を表していることになる。マクラウドは、株式や公債、為替手形などの請求権のほか、事業の営業権、著作権、特許権など「抽象的権利」全般に対して支払われる貨幣総額が、いずれも「将来収益の現在価値」を明示したものであることに注意を喚起している(Macleod 1889, 1ed., I, 80)。

ともあれ、マクラウドは、このように「信用」に対して未来に対する請求権としての性格を与えることによって(=「信用」に対する時間概念の導入)、古典学派の経済学者たちにはまったく欠落していた信用観、すなわち信用が「無」から「創造」されるという独特の新しい観念を導き出すことができたのであるが(二階堂 1993, 167) (4)、彼によれば、かかる信用創造を本質的業務とみなし、これを積極的に遂行する唯一の機関が銀行であった。彼は次のようにいう。

われわれは、銀行および銀行家の本質は要求払いの信用を創造し、発行することにあると考えている。そして、この信用は流通し、かつ貨幣のあらゆる目的を果たすように意図されている。それゆえ銀行とは、貨幣を貸借する店舗 office for borrowing ではなくて、信用の製造所 Manufactory of Credit なのである。(Macleod 1890, 1ed., II-1, 364)

見られるように、マクラウドは銀行に対して単に「貨幣を貸借する店舗」としての役割しか認めようとしない従来の「媒介的銀行理論」を厳しく批判しつつ、その本質的な機能が「近代的銀行理論」としての信用創造にあることを明確に指摘している(麓 1953, 181; 1956, 217)。すなわち「銀行とは、要求払いの信用・

債務または行為についての権利を創造することによって、将来に支払われる貨幣・信用・債務または行為についての権利を購入する取引業者」(Macleod 1894, 2ed., II-1, 585)にほかならず、それゆえ「信用の販売店舗 a shop for the sale of credit」(Macleod 1890, 1ed., II-1, 374)として理解されるべきものなのである。マクラウドの以下の主張は、こうした彼の銀行ないし銀行家とその機能に対する基本的な認識を鮮明に表すものといえるであろう。

実をいえば、銀行家は貨幣の取引業者ではない。銀行家は貨幣を貸し付けたりはしない。彼らの唯一の機能は、信用を創造し、発行すること、すなわち他の債務を創造し、発行することによって貨幣と債務を購入することにある。……銀行家はけっして貸したいと思う人と借りたいと思う人との間の媒介業者として機能することはない。彼らはもっぱら自らの信用でもって、ある者からは貨幣を、他の者からは行為についての権利を購入するのである。(Macleod 1890, 1ed., II-1, 375) (5)

ところで、マクラウドが「信用」を「将来収益に対する現在の権利ないし現在の価値」であると繰り返し強調している(Macleod 1890, 1ed., II-1, 390; 397; 418)ことからわかるように、彼にあつては「信用」とは、将来的な利潤獲得を最高の目標として創造されるものであり、したがってその機能的特徴はいうまでもなく「資本」と同一のものとして捉えられている。彼は次のようにいう。

利潤をもたらすものはすべて資本である。それゆえ、銀行信用が貨幣と同様の利潤をもたらす限り、信用が貨幣と同様に銀行にとって資本であるということは極めて明白なことである。(Macleod 1890, 1ed., II-1, 376)

マクラウドは、このように「信用」と「貨幣」をともに「資本」と規定し、さらには新商品を開発するうえで不可欠な「購買力 Purchasing Power」としても捉える一方で(Macleod 1890, 1ed., II-1, 396)、同じ「資本」(=「購買力」)としての機能を果たしながらも両者の間には決定的な相違点があることも看過することはなかった。すなわち、「貨幣」が「過去に実現された収益からなる資本」であるのに対して、「信用」は「将来期待される収益からなる資本」として把握されなければならないのである(Macleod 1890, 1ed., II-1, 396) (6)。そし

て彼の認識によれば、資本が過去に実現された収益にのみ限定されている「貨幣」よりも、将来的な収益を見込んだうえで、保有する現金の何倍もの貨幣を資本として創造することのできる「信用」の方が、近代的な産業の発展に対してははるかに重要な貢献を果たしたのであった。こうして、マクラウドは改めて古典学派の信用観、わけても信用が現存する資本の単なる移転に過ぎず、けっして新しい資本を創造するものではありえないとする J. S. ミルの見解⁽⁷⁾に対して真っ向から批判をくわえつつ (Macleod 1890, 1ed., II-1, 418-422), 新規事業の創設や新商品の開発などその初期段階で莫大な資本を必要とする新しい経済活動の展開にとっては、「信用」にもとづく資本の増加・拡充がなによりも必要かつ有効な措置であると見なしたのである。たとえば彼は次のように論じている。

信用とは、過去のいかなる商取引にも依存するものではないし、また現存する商品をただ譲渡するためだけに用いられるものでもない。それは、新しい商品を作るという明確な目的のために創造されるのである。もし信用創造が行われたいとするならば、新商品はまったく存在しなくなるか、あるいはいずれにせよ、まとまった貨幣が蓄積されるまで非常に長い期間にわたって〔その開発は〕引き延ばしにされることになるであろう。(Macleod 1890, 1ed., II-1, 399)

上記引用文からも明らかなように、マクラウドは「信用」を既存の生産システムを再編し、動的な経済発展を志向していくために欠かすことのできない決定的に重要なファクターであると捉えていたのであった。それでは、古典学派とは一線を画するこうしたマクラウドの近代的信用観は、彼以降の経済学者によっていかに継承され、さらには発展させられていったのであろうか。次節では、シュンペーターと L. A. ハーンの信用理論を分析することを通じて、この過程を考察したい。

Ⅲ. 「動的信用理論」の展開：シュンペーターと L. A. ハーンの信用創造理論

よく知られているように、シュンペーターは、資本主義経済の特質を非連続的かつ飛躍的な経済発展を志向する動的過程のうちに見出し、かかる発展の原動力として体系内部における指導的な「企業家」の革新的経済活動(=生産手段の

「新結合」の遂行)を重視している (Schumpeter 1910, 275-285 ; 1912, 147-164 ; 1926, 92-102 : 訳 169-187 ; 1928a, 482-483) .

シュンペーターによれば, 「経済発展とは, 本質的に現存の労働用役および土地用役をほかに転用すること」を意味しており, この「根本観念」から彼は, 「新結合の遂行は労働用役および土地用役を慣行の用途から奪い取ることによって行われる」という独特の命題を確立する (Schumpeter 1912, 199 ; 1926, 140 : 訳 251) . すなわち, 企業家は「生産手段市場において循環場裡の生産者よりもいっそう高い価格を提供し, 自分の必要とする数量の生産手段を彼らの手から奪い取る」 (Schumpeter 1926, 107 : 訳 192) ことによって, 「新結合」を実現させようとするのである.

シュンペーターの認識では, この新結合に必要な「購買力」は, 既存の収益への依存によって成り立つものではなく, それは「信用」を媒介として「無から創造される」ものでなければならない⁽⁸⁾. こうして彼は, かかる「購買力」を企業家に対して供給する「唯一の金融源泉」として, 「銀行による貨幣創造 Geldschaffung durch die Banken」を重視するのである (Schumpeter 1926, 108-109 : 訳 195-196) . シュンペーターは, 「銀行家の機能」について次のように論じている.

…… 銀行家は, 常に購買力 *Kaufkraft* という商品の仲介商人 *Zwischenhändler* であるのではなく, またこれを第一義とするものでもなく, なによりもこの商品の生産者 *Produzent* である. しかも現在ではすべての積立金や貯蓄はことごとく銀行家のもとに流れ込み, 既存の購買力であれ新規に創造される購買力であれ, 自由な購買力の全供給はことごとく彼のもとに集中しているのが常であるから, 彼はいわば私的資本家たちにとって代わり, 彼らの権利を剥奪するのであって, 今や彼自身が唯一の資本家となる. 彼は新結合を遂行しようとするものと生産手段の所有者との間に立つ. …… 彼は本質的に発展の 1 つの現象である. 彼は新結合の遂行を可能にし, いわば国民経済の名において新結合を遂行する全権能を与えるのである. 彼は交換経済の最高監督官 *Ephor der Verkehrswirtschaft* である. (Schumpeter 1926, 110 : 訳 197-198)

それでは, この「唯一の資本家」であり, 「交換経済の最高監督官」でもある

銀行（ないし銀行家）は、いかなる担保にもとづいて企業家に対して信用の供与を行うのであろうか。この問題について、シュンペーターは、さしあたり次の 2 つの場合を区別する必要があると述べている（Schumpeter 1912, 206 ; 1926, 146-147 : 訳 262）。すなわち第 1 に、「企業家がなんらかの財産をもっていて、これを銀行に担保として供給しうる場合」と、第 2 に、「企業家が貸与された購買力によってえた財貨を担保にする場合」である。第 1 の場合には、企業家の信用獲得は、実際きわめて容易に行われるであろうが、しかしこれは純粋な意味での事の本質を表すものではない。なぜなら、シュンペーターの認識では「企業家機能は、原理上、財産所有に結びついてはいない」からである。これに対して、第 2 の場合には、信用の供与が先行し、少なくとも原理的には、またたとえ短時間とはいえ、なんの担保も存在しないことになる。つまり、この場合には「最初なんらの新しい財貨も対応しない購買力が創造される」のである。シュンペーターは、このような「購買力の時間的譲渡」を可能にする信用のことを「将来の給付やこれから生産されるべき財貨についての証明書」（Schumpeter 1912, 207 ; 1926, 147 : 訳 263）であると規定したうえで、「新しく創造される購買力の可能量」は「現存の財貨」によってではなく、「将来の財貨」によって保証され、かつ制約されていると主張している（Schumpeter 1926, 165, Anm. 18 : 訳 290）⁹⁾。かくして、企業家の革新を通じて創出される将来の財貨に依存する信用の総額は、信用が過去の給付や既存の財貨によって保証されているにすぎない場合に比べてはるかに大きなものとなる。「信用という建造物は現存の貨幣的基礎をこえるばかりでなく、現存の財貨的基礎をもこえる」（Schumpeter 1912, 206 ; 1926, 147 : 訳 263）ことになるのである。

以上の考察から明らかなように、シュンペーターにあっては、企業家の革新が「経済発展」のための独立変数としてまず前提されており、信用創造による貨幣供給はその革新活動に依存する従属変数として捉えられている（塩野谷 1995, 212 ; 野田 2000, 15）。要するに、シュンペーターにおける「信用」ないし「信用創造」とは、「革新の貨幣的補完物 the monetary complement of innovation」（Schumpeter 1939, 111 : 訳, I, 162）を意味しており、換言すれば「新結合」を遂行する企業家に対して、「追加的信用 zusätzlicher Kredit」（Schumpeter 1926, 140, Anm. 1 : 訳 252 ; Wagner 1937, 227-257），すなわち「経済発展」（＝「生産力の向上」）を実現させるための新しい「購買力」を供給する手段にほかならないのである。かくて、シュンペーターは「信用」を次のように定義している。

信用とは、本質的には企業家に譲渡する目的でなされる購買力の創造であつて、彼に対して単に既存の購買力 — すなわち、既存の生産物にかんする証明書 — を譲渡することではない。購買力の創造は、原則として、封鎖的でない経済 *nichtgeschlossene Wirtschaft* [=資本主義経済]において経済発展が遂行される方法の特徴づけるものである。信用は、企業家が財貨に対する正常な請求権を獲得する以前に、彼らに対して経済的な財貨の流れに対する門戸を開くのである。…… 信用供与は、経済を企業家の目的に服従させる命令、彼が必要とする財貨に対する指図、彼に対する生産力の委託、という働きをする。このようにして初めて、経済発展が遂行され、静態 *statischer Zustand* の域を脱するのである。そして、このような機能こそが近代信用機構の礎石をなすのである。(Schumpeter 1912, 214; 1926, 153: 訳 273. なお、引用文における「静態」は、第2版では「単なる循環 *bloßer Kreislauf*」と言い換えられている)

上記の引用文に見られる「購買力」を、われわれは「資本」と読み替えることもできるであろう。すなわち、シュンペーターによれば、「資本とは、企業家が彼が必要とする具体的財貨を自分の支配下におくことができるようにする梃子にほかならず、また新しい目的のために財貨を意のままに用いる手段、あるいは生産に新しい方向を指令する手段にほかならない」(Schumpeter 1912, 226; 1926, 165: 訳 291) のであり、「資本」とはまさしく「企業家の自由に委ねられる基金の総額」、言い換えれば「生産手段を静態的軌道 *statische Bahnen* から引き抜く力の大きさ」を意味していた (Schumpeter 1912, 236; 1926, 174: 訳 304. なお、引用文における「静態的軌道」は、第2版では「従来の軌道 *bisherige Bahnen*」と言い換えられている)。

このように、「購買力」を「資本」と同一視するシュンペーターの見解は、前節で検討したマクラウドの議論に共通するものといえるが、しかしながらシュンペーター自身は、彼の資本概念に対するマクラウドの影響を否定している⁽¹⁰⁾。とはいえ、「信用」が無から創造される誘因を革新の導入によってもたらされる「将来的な財貨」のうちに見出そうとするシュンペーターの見解には、「信用」の本質を「将来収益に対する現在の権利ないし現在の価値」として把握したマクラウドの考察からの影響がはっきりと認められるのであり、そうした意味でシュンペ

ーターの議論は、マクラウドを起点とする動態的信用理論の系譜に明確に位置づけられるべきものと考えられる⁽¹¹⁾。

さて、以上に見てきたような、マクラウド、シュンペーターに代表される近代的信用観を継承しつつ、ドイツにおける信用創造理論のさらなる普及・展開のために重要な役割を果たしたのが「フランクフルトの銀行家で通貨理論家」としても令名を馳せた L. A. ハーン (Ludwig Albert Hahn, 1889-1968) であった。主著『銀行信用の国民経済的理論』(Hahn 1920, 1. Aufl.; 1924, 2. Aufl.; 1930, 3. Aufl.)⁽¹²⁾で、全取引に占める現金取引の比率が逡減傾向にあることに注目したハーンは、現代を「現金節約経済 bargeldsparende Wirtschaft」と命名し、さらにその発展の極限として「無現金経済 bargeldlose Wirtschaft」を想定する (Hahn 1920, 24, 71; 1930, 22, 63; 訳 65, 135; 大北 1943, 6-7; 三上 1980, 558)。 「無現金経済」では、企業家の購買力は銀行の与信業務によって創造され、生産手段または財貨購入に際しての彼らの支払いは、銀行の貸方残高 Guthaben の譲渡を通じて行われる。つまり、ここでは「有体支払手段」としての現金ではなく、「信用支払手段」、わけても小切手または振替口座 Girokonten を介してあらゆる決済が行われることになるのである。

このように、「無現金経済」を想定するハーンにあっては、銀行信用の源泉は、いうまでもなく、公衆によって委託された預金にのみ限定されてはいない。彼は、すべての与信業務は先行する受信業務に依存するというマクラウド以前の古典学派的な信用理論、あるいはクニースに典型的な「静態的信用理論」、つまり「信用媒介論」(麓 1956, 184) に対して真っ向から異を唱えつつ、銀行の与信業務は受信業務に絶えず先行し、その預金形成は、信用供与ののちに初めて生ずる、という「動態的信用理論」(=「信用創造理論」) に特有の立場を堅持するのである。ハーンは次のようにいう。

銀行の受動的業務を最初に可能にし、これを呼び起こすためには、銀行の受動的業務、特に預金業務が先行するのではなく、一般的にもまた個々の場合においても銀行の能動的業務が先行されなければならない。銀行の受動的業務は、それに先立つ信用供与の反映にほかならないのである。(Hahn 1920, 29)

こうして、ハーンは、マクラウドやシュンペーターと同様、能動的な与信業務

とその帰結としての購買力の創造に銀行の本質的機能を認めたいうえで (Hahn 1920, 120) , 「信用の供与がなければいかなる資本財も生産され得ないし, 生産手段の形成という意味でのいかなる資本形成も行われ得ない」 (Hahn 1920, 121) と指摘する. かくして, ハーンは『銀行信用の国民経済的理論』第 3 版で「信用の拡大が生産増加的な作用を及ぼす」 (Hahn 1930, 120 : 訳 227) こと, 言い換えれば「生産的信用」 (Ellis 1934, 327) あるいは「信用の生産性」 (八木 1988, 182) を力説するようになるのであるが, ハーンによれば, ここには一つのディレンマが存在していた. すなわち, 「一方において, 生産のみが財貨を造りだし得るのであるが, 信用の供与それ自体は生産でない」ということは, 理論上争いがたい事実である. しかしながら「他方において, 信用の資本創造力 *kapitalschaffende Kraft des Kredites* は実際にはこれまた否定し得ない」のである (Hahn 1930, 130 : 訳 242) .

では, こうしたディレンマはいかにして解決されるのであろうか. ハーンは次のようにいう.

国民経済的意味における資本, すなわち生産設備の現在高が, 一国における生産の増大を通じてのみ増加され得るという立場に立つ限り, このディレンマから逃れる道を見つけることはできない. このような立場は誤りである. 資本形成は財貨生産 *Güterproduktion* の問題ではなくて, 分配すなわち財貨分配 *Güterverteilung* の問題である. しかも時間的 *intertemporal* ならびに人的関係 *interpersonal* における財貨の分配の問題なのである. (Hahn 1930, 130 : 訳 242)

このように, ハーンは「資本形成」の問題を分配関係の変化との関連において捉えようとし, 信用創造による需要の変化が, 財貨の分配を時間的ならびに人的関係において変化させることによって, 「生産の増加」を促進させると主張する (13). この点にかんしてハーンの議論に依拠しつつさらに具体的な説明をくわえるならば, およそ次のようになるだろう (Hahn 1930, 130-131 : 訳 243-244) . すなわち, 信用の供与によって購買力を獲得した企業家は, 資本主義的生産方法の典型である「迂回生産」を開始する. 周知のように, この迂回生産は, 社会的生産物 *Sozialprodukt* の消費を一定期間延期・制限することによって, 当該生産物の将来的な数量を増加させるものである. つまり社会的生産物の消費を一定の期

延期・制限するということは、「時間的關係における財貨の分配」を変化させることにほかならず、これが結果として資本増加をもたらす原因となるのである。他方で、この迂回生産はまた各人間の財貨分配にも変化を生じさせる。たとえば、信用によって購買力を得た企業家が石炭を生産的に消費しようとする場合には、これまで石炭を家庭用燃料として使用していた一般の消費者たちは、彼らの貨幣所得が上昇しない限り、需要の増加による石炭価格の騰貴のためにその消費を強制的に制限されることになるであろう。こうした「人間的關係における財貨の分配」の変化が、将来的な資本増加を招来させるための必要不可欠な前提であることは疑い得ない。

以上の簡潔な整理からもわかるように、ハーンにあっては、信用によって企業家に付与された購買力は、「財貨を生産的使用のために轉換させ、かつ轉換させたままにしておくための手段」(Hahn 1930, 139: 訳 257) として見なされているのであるが、ここでさらに注目すべきことは、彼がこの購買力を「資本」と同一の概念として捉えているということである。ハーンは「資本」を次のように定義している。

資本とは、財貨およびサービスを強制的に迂回生産に入らしめ、これらを一定期間そこに留めておく抽象的な力 *abstrakte Macht* に等しい。この〔抽象的な〕力は、信用の方法で供与された購買力 *Kaufkraft* によって具現化されており、その引渡しは原則として銀行の貸方残高 *Bankguthaben* の譲渡の形式で行われる。(Hahn 1930, 138: 訳 256)

上記の引用文からも明らかなように、ハーンにおける資本概念は、「資本財」としての財貨的性質からは完全に切り離されており、それは財貨分配を実現させるための「抽象的な力」(=「購買力」)として理解されている。こうしたハーンの資本観は、彼自らも認めるように、まぎれもなくシュンペーターの「資本の購買力理論 *Kaufkrafttheorie des Kapitals*」の影響を受けつつ形成されたものにほかならない(Hahn 1930, 5, 132: 訳 36, 246; Schumpeter 1912, 255; 1926, 189: 訳 332)。すなわち、シュンペーターと同様、ハーンもまた信用創造による企業家への資本=購買力の供与が経済発展のための最も重要なファクターであることを確信していたのである。

では、マクラウドを起点とし、シュンペーター、ハーンへと継承された「動的

信用理論」は、ゾンバルトにおいていかに受容され、かつ展開されたのであろうか。次節では、これまでの検討を踏まえつつ分析対象の射程をゾンバルトへと拡大し、彼における信用理論の内容を考察していきたい。

IV. ゾンバルトにおける「動態的信用理論」の受容と展開

ゾンバルトが彼の信用理論について体系的な考察を展開することになるのは、「盛期資本主義経済」の分析に研究の焦点を定めた大著『近代資本主義』第3巻 (Sombart 1927) においてであった。その第2編第1部「資本」に属する2つの章、すなわち第14章「信用とその発展」および第15章「資本主義経済に対する信用の意義」で、ゾンバルトは、マクラウドからシュンペーターを経てハーンへといたる「動態的信用理論」の成果を十分に踏まえつつ、「盛期資本主義経済」の展開・発展にとって「信用」がいかなる役割を果たしているのかという問いに対して彼なりの回答を与えようと模索するのである⁽¹⁴⁾。

ゾンバルトによれば、「信用」とは、形式的には「貨幣所有のない購買力 Kaufkraft ohne Geldbesitz」を意味しており、与信および受信という行為は、「将来の反対給付の約束に対して購買力を供与（受領）すること」として定義される。信用業務ないし信用取引の意味で用いられる「信用」とは、「ある給付が即座に反対給付を伴わずに、ただ将来における反対給付を約束する取引」のことにほかならず、このような視角からゾンバルトは「信用の本質」について次のように論じている。

給付と反対給付との時間的分離という客観的要素と、期待という主観的要素、— すなわち、将来において反対給付が実現されることに対する信頼 Vertrauen — とが結合されていることは、…… 信用の本質に属することであると私は考える。この信頼は、債務者の人格的な確かさ persönliche Sicherheit に対する信頼である必要はなく、…… 客観的關係 objective Verhältniss にもとづくものである。（Sombart 1927, 175：訳 291-292）

こうして、ゾンバルトは、マクラウドやシュンペーター、あるいはハーンと同じく「将来における反対給付の約束」とそれが実現されることに対する「信頼」のうちに「信用」（＝「購買力」）が供与される根拠を見出そうとするのであるが、

ともあれ、ここでは特にゾンバルトがこの「信頼」の拠りどころを債務者ないし受信者の「人格的な確かさ」に求めているのではなく、かかる人的結びつきを超越した「客観的關係」にもとづくものとして捉えている点に注目しておこう。ゾンバルトの認識では、「盛期資本主義經濟」における債権・債務關係は、すでに前章でも確認したように、個々の人格性を媒介として成立するものではあり得ず、その關係は「脱人格化 Entpersönlichung」(=「物象化 Versachlichung」)されたものとして把握されなければならないのである。

以上のように自らの基本的な信用觀を整理したゾンバルトは、次に「信用の種類」を個人的消費のために供与される「消費的信用 Konsumtivkredit」と事業目的のために供与される「生産的信用 Produktivkredit」とに區別し、後者のみを分析対象に据えることを明言したうえで、この「生産的信用」をさらに「流通信用 Zirkulationskredit」と「生産信用 Produktionskredit」という2つの種類に區別している(Sombart 1927, 175-176: 訳 292)。ゾンバルトによれば、「流通信用」とは、「単に資本の構成部分を別の形態の資本に転化させること」、マクラウド流に言えば「現存の商品を移転させること」を目的として供与されるに過ぎないのに対して、「生産信用」とは、「企業の有する資本額を拡大・増加させること」、これもマクラウドにならば「新しい生産物を作り出すこと」を目的として供与される(Sombart 1927, 176: 訳 293)。この2種類の信用を明確に區別したうえでゾンバルトは、「資本主義の発展に対する銀行の重要性」が、歴史的には「生産信用を供与しはじめるとともに、その程度に応じて増大していった」と指摘しているが(Sombart 1927, 198: 訳 328)、このような彼の認識は、実はこれよりほぼ4半世紀前に公刊された『19世紀のドイツ國民經濟』(Sombart 1903)でもすでにはっきりと強調されていたことであつた。すなわち、その著作の第9章「銀行と取引所」のなかで、ゾンバルトは、ドイツにおける現今の銀行の金融活動が「流通信用を与えることにけっして限定されてはおらず、その主要な課題の1つは、まさしく生産信用の供与 Erteilung von Produktionskredit にこそ求められる」と力説したうえで、その役割を次のように述べていたのである。

私が生産信用と呼ぶのは、企業家の自由裁量に委ねられた価値総額 Wertbetrag を拡大する信用、したがって資本を価値増殖する信用のことである。そのような信用を供与する銀行、したがって直接的あるいは間接的に資本主義的企業の創設ないし拡大に関与する銀行は、…… 生産信用銀行

Produktionskreditbanken と呼ばれなければならないであろう。(Sombart 1903, 215)

上記の引用文からまず確認されるのは、ゾンバルトがここでも「銀行」が供与する「生産信用」を「資本を価値増殖するための信用」として捉えているということである。『近代資本主義』(初版, 1902年)を上梓して以来, ゾンバルトは一貫して「資本主義およびその独自の経済形態である資本主義的企業の目的」が, まずもって「資本の価値増殖」(=「利潤の再生産」)を実現させることにありと繰り返し説いているのであるが(Sombart 1902a, 196; [1916] 1987a, 321: 訳 468; 1925, 4; 1931a, 258), かかる目的の実現のためには, 銀行による「生産信用」の供与が不可欠であるとゾンバルトはいうのである。このような意味で, 彼はこの「生産信用」のことを「拡張信用 *Erweiterungskredit*」または「拡大信用 *Ausdehnungskredit*」とも言い換えているのであった(Sombart 1927, 176: 訳 293)。

では, ゾンバルトはかかる「生産信用」のために必要な資金の「源泉」についてはいかに把握しているのだろうか。彼によれば, 「信用」を源泉別に分けると, 社会的所得ないし現存する資本をある者から他の者へと譲渡する「委譲信用 *Übertragungskredit*」と信用資金を「無」から創造する「指図信用 *Anweisungskredit*」(=「信用創造 *Kreditschöpfung*」)という2つの場合が想定される(Sombart 1927, 177: 訳 294)。ここでゾンバルトが「指図信用」, つまり「信用創造」という場合には, それはただ単に個々の与信者や受信者の資産を越える額の購買力が供与されることを意味するのではなく, いわゆる「社会の資産 *Aktiva der Gesellschaft*」, すなわち社会全体における従来の「生産力 *Produktivkraft*」(=「これまでに費やされた労働量のうちに現れている一定の程度の作業能率」)を超える額の購買力が供与されることを意味している(Sombart 1927, 178: 訳 296)⁽¹⁵⁾。ゾンバルトの認識では, 「委譲信用」が, 単にある者から他の者へと現存する資本を移転させるに過ぎず, これによつては基本的に生産の「方向 *Richtung*」が変化するだけでその「規模 *Ausmaß*」が拡大することはあり得ないのに対して, 「指図信用」の場合には, 既存の労働力のストックを超える額の購買力, つまり「追加労働によつてのみ充足され得る」購買力が供与されることになり, それゆえこれは将来的な企業収益の増加ならびに生産力の拡充に多大な貢献を果たすものとして理解されている(Sombart 1927, 178: 訳 296)

(16).

こうして、ゾンバルトは資本の価値増殖を目的とする「生産信用」の系譜に「指図信用」(＝「信用創造」)を位置づけたうえで、「資本主義経済の拡張」に対してそれが果たす役割を高く評価する。とはいえ、前章までの考察からも明らかのように、ゾンバルトが動的な「経済発展」を実現させるための「原動力」として重視しているのは、あくまで「指導的経済主体」としての企業家による革新的経済活動にほかならない。企業家の遂行する「革新」が「経済発展」のための独立変数であり、信用創造による貨幣供給(＝資本調達)はその革新活動に依存する従属変数であるという先にシュンペーターで確認した構図は、ゾンバルトの認識にもほぼそのまま妥当するものといつてよい⁽¹⁷⁾。すなわち、たとえすぐれた資質を備えた企業家であっても潤沢な資金に恵まれていなければその革新的才能を存分に発揮することはできないと確信するゾンバルトにとっては、持続的な企業家活動を保証するための「信用」(＝「生産信用」・「資本」)とそれを実際に供与する「信用組織」(＝「銀行」)の存在は、動的な「経済発展」を遂行するうえで必要不可欠であると見なされたのである。ゾンバルトは次のようにいう。

かつては、— つまり初期資本主義時代にあつては — 企業家は自身富裕であるか、富裕な人の子であるか、あるいは富裕な人と関係をもっていなければならなかつた。だからある者は企業家としての才能をもつていても貨幣がなく、ある者は貨幣があつても企業家としての才能、あるいはその意志をもたない、という事態がしばしば起こらざるを得なかつた。今日〔＝「盛期資本主義時代」〕では、富裕な者は自ら企業家にならなくとも、その貨幣を容易に資本として用いることができる。また、資力のない者もいっそう容易に貨幣を手にすることができる。資力のない企業家に彼の必要とする資本を供給する方法は、…… いうまでもなく株式会社と信用組織である。とりわけ、信用組織こそは、資力の乏しい者にも企業家活動を営むことを可能にするものである。(Sombart 1927, 20-21: 訳 46-47)

このように、ゾンバルトは「無資産者を企業家活動にまで引き上げたこと」、換言すれば「企業家活動の実践が貨幣所有に結びつけられていた初期資本主義時代の偶発性が除去された」という点に「信用」ないし「信用組織」である「銀行」(あるいは「株式会社」)の意義を認めている。すなわち、「銀行」とは個人的な

出自や人格に関係なく、最もすぐれた経営手腕を発揮する者（＝「資本主義的意味における最も有能な人物」）であれば誰であろうと継続的に「資本」（＝「購買力」）を提供しようとするのであり、この意味で、ゾンバルトにとって「銀行」は「株式会社」とならんで「天才のための足場 Stütze für das Genie」（Sombart 1927, 220：訳 369）として称されるのに相応しい機関であった。

さて、ゾンバルトが「銀行原理 Bankprinzip」を「集合的貸付基金 kollektiver Leihfond を利用する信用供与の原理」（Sombart 1927, 183：訳 304）として定義していることからわかるように、通常、銀行はできるだけ多くの人々からその貯蓄額を自己に貸し付けさせて1つのまとまった基金を造り出し、これを基礎として企業家に対して信用（＝資本）の供与を行う。言い換えれば、「受信業務によって受け入れた預金をもって、銀行の与信業務の大部分は融通される」（Sombart 1927, 184：訳 305）のである。しかしながら、ゾンバルトによれば、「盛期資本主義時代」における銀行は、このように受信業務に依存した形で与信業務を行うことはほとんどない。なぜなら、この時代の銀行は、総じて「現金のない支払いの原理 Prinzip der bargeldlosen Zahlung」にもとづいて信用取引を行うのが一般的になるからである。すなわち、銀行はもはや「実質的支払手段 substantielle Zahlungsmittel」としての現金を用いることなく、単なる「記帳 Buchung」、要するに「支払われるべき金額を当該目的のために設定された口座の借方あるいは貸方に記入すること」（＝「口座振替」）を介して信用の供与を行うようになるのである（Sombart 1927, 187：訳 310）⁽¹⁸⁾。かくして、ゾンバルトの認識では、「盛期資本主義経済」にあつては、「あらゆる大規模な銀行経営において、銀行原理は現金のない支払いの原理と結びつけられている」（Sombart 1927, 188：訳 312）のであり、これによって「信用」は貨幣ないし金保有の制限から解放され、「生産信用」、殊にその一類型である「指図信用」が飛躍的な発展を示すことになるのである。

以上に見たようなゾンバルトの信用観、すなわち現金を必要としない銀行の与信業務を重視するゾンバルトの見解には、いうまでもなく前節までに検討したマクラウドやシュンペーターの信用創造理論、あるいはとりわけハーンの「無現金経済論」からの影響がはっきりと投影されている。同時代に隆盛を極めていたこれらの「動的信用理論」（＝「新しい信用理論」）からゾンバルトがいかにより多くの示唆を与えられていたかということは、この一点をもってしても否定し得ないといえるであろう。しかしながら「生産信用」（＝「指図信用」）が「資本主義経

済の拡張」を導く原因について論じたゾンバルトの以下の主張は、彼が「動態的信用理論」から決定的な影響を受けていたという事実を裏づけるうえで、よりいっそう有力な証左となるものであるように思われる。ゾンバルトは次のようにいう。

信用は、— わけても生産信用の形態において — 企業家に対して生産の拡大および生産方法の改良を強制することにより、これ [= 「資本主義経済の拡張」] を促進させるものである。なぜなら、生産信用とは、いうまでもなく将来において生産が増加される場合にのみ、その正当性を有するものだからである。生産信用は、将来において余剰生産 *Mehrproduktion* が行われるだけ、それだけの分量しか常に供与されることはない。なぜなら、借り入れられた金額は、余剰生産をもってはじめて返済可能となるからである。信用によって購買する生産者は、（その信用が生産信用である場合には）将来の生産によって果たされる約束でもって支払いを行っているのである。それは、個々の企業家にとっては当たり前のことであり、これによって彼らのなかには拡張欲 *Ausdehnungsdrang* が植えつけられ、さらにそれは拡張強制 *Ausdehnungszwang* へと変化していくのである。その信用が真の指図信用である場合には、すなわち、われわれの用語にしたがえば社会の資産を超過する信用である場合には、こうした個々の企業家が引き起こす生産の拡大は、同時にまたあらゆる経済的生産の増加を意味するものであり、そしてそれはあらゆる経済的生産力の上昇にもとづくものである。（Sombart 1927, 220-221：訳 370）

上記の引用文から明らかなように、ゾンバルトにとって「生産信用」の供与は、なによりも「将来における余剰生産」を実現させることによって正当化されている。なぜなら、企業家が銀行からの「生産信用」をさしあたり無担保で受領し得るのは、彼がそれを用いて近い将来「余剰生産」を達成し、その収益の一部を負債の返済に充てるという企業家と銀行双方に合意された「約束」が存在しているからなのである。こうして、企業家は「生産信用」、わけても「指図信用」（＝「信用創造」）を通じて、将来的な収益を得ようとする「拡張欲」を促進され、結果としてこのことが国民経済全体における生産力の向上をもたらす一因になるとゾンバルトはいうのであるが、こうした彼の論理には、明らかにマクラウドによって

確立された近代的信用観の強い影響が垣間見える。なぜなら、ゾンバルトは、「信用」の真の機能が「将来収益の現在価値を交易のなかに導入すること」にあると捉えたマクラウドの見解に基本的に同意しており（Macleod 1889, *led.*, I, 80; Sombart 1927, 221: 訳 370）、まさしくこの点に信用が「無」から「創造」される原因を見出そうとしているからである。ゾンバルトにとっては、こうした銀行による「指図信用」、つまりは信用創造にもとづく「資本」の調達（＝「購買力」の供与）こそが「経済発展」の根幹である企業家の革新的才能を最大限に引き出すための最も重要な推進力の1つとして見なされているのであった。

このようなゾンバルトの見解が、信用創造による企業家への資本＝購買力の供与を「経済発展」のための最重要なファクターとして捉えたシュンペーターやハーンの立場と著しく符合するものであることは、ほとんど疑う余地のない事実とってよいであろう。かくして、ゾンバルトもまたマクラウドによって提唱され、シュンペーターを経てハーンへと受け継がれた「動態的信用理論」の正統なる継承者の1人であったといえるのである。

V. おわりに

本章では、ゾンバルトの信用理論が多分に彼以前もしくは彼と同時代の「動態的信用理論」からの強い影響のもとで構築されたものであることを明らかにした。本論で述べたように、ゾンバルトは『19世紀のドイツ国民経済』（1903年）ですでに企業家の営利活動に対する銀行による信用供与のもつ意義を説いてはいたが、しかし彼がとりわけ「信用創造」（＝「指図信用」）の「経済発展」に及ぼす重要性を認識し、それをことさら強調するようになったのは、マクラウド、さらにはシュンペーターやハーンの信用論研究の成果を受容したことにその最大の原因があったと考えられる。そうした受容・継承関係の具体的な内容、要するに双方の信用理論における内的な関連性がいかなるものであったのかについては、すでに前節で検討ずみのことであろう。その要点を今一度摘記するならば、こうである。すなわちゾンバルトは、「信用」を「将来収益に対する現在の権利」と解したマクラウドや「新しく創造される購買力の可能量」が「将来の財貨」に依存すると捉えたシュンペーターの論理に与しつつ、ここに銀行が現金の保有量による制約を受けない能動的な与信業務を遂行する根拠、つまり「銀行原理」と「現金のない支払いの原理」とが結合する根拠があると主張する。これは、間違いなくハーン

の「無現金経済論」も念頭に置いたうえで提示された見解であったといえるが、ゾンバルトがこのように「動態的信用理論」を積極的に受容した背景には、明らかに一貫して企業家ないし彼による革新的行動を経済発展の最も重要な「原動力」と見なしていたゾンバルト自身の資本主義把握があったと考えられる。すなわちゾンバルトは、「盛期資本主義経済」における企業家の営利活動には「信用創造」にもとづく莫大な資本供与が不可欠であることを認める一方で、そうして企業家に供与された「信用」(＝「資本」)は、企業家の「革新」を通じて必ずや銀行に対する負債を償却してもなお余りある「余剰生産」を実現させることになると確信していたのであった。マクラウドを起点とし、同時代にシュンペーターやハーンによって代表されていた「動態的信用理論」とは、このような意味でゾンバルトが彼の資本主義観に照らしてほとんど違和感なく受容することのできる内容を備えた理論であったのである。

注

- (1) シュンペーターと同じく、ワグナー (Wagner 1937, 268) も資本主義の本質を「動態現象および発展現象」として捉え、かつ「資本主義理論」を「発展理論」として特徴づけた代表的な経済学者としてマルクスとゾンバルトの名前を挙げている。そのうえでワグナーは、「2人の著者 [=マルクスとゾンバルト] にあつては、金融および信用というファクターは、資本主義の生成において重要な役割を果たしている」とはっきりと指摘している。ゾンバルトの信用理論を正面から検討したモノグラフが未だ存在しない今日の研究状況において、同時代を代表する信用学説史家であったワグナーによる上記の指摘はきわめて重要な意味をもつといわなければならない。もっとも、このワグナーもマクラウド、シュンペーター、ハーンという信用創造理論の系譜を精査しながらも、かかる「動態的信用理論」をゾンバルトがどう受容したのかという本章が重視する問題についてはまったく分析することはなかった。
- (2) シュンペーターは、『経済分析の歴史』のなかの「信用理論」を扱った箇所ですらのように述べている。

今日でも、貨幣、通貨、および銀行業務にかんするテキストは、法貨としての貨幣が支払いと貸付との唯一の手段であるような状態の分析から始まっているのが、そうでない場合よりも多いように思われる。次いで、資本主義社会をして生産と消費との日常業務を遂行させている貸付と借入、債権と債務の巨大なシステムが、貨幣に対する請求権または信用という道具を導入して一步一步と構想

されている。その際、この信用という道具は、法貨の代用物として作用し、かつまた実際に法貨の機能に多くの点で影響を与えはするものの、しかし法貨のもつ基本的な役割を金融構造の理論的描写のなかからは、けっして排除するものではないとされている。…… / …… しかし論理的にいえば、現実社会の信用取引に到達するために、鑄貨 — 現実論に譲歩して、鑄貨にさらに不換政府紙幣を付け足す場合でさえ — から出発するのが、果たして最も有効な方法であるか否かはけっして明瞭ではない。〔それよりもむしろ〕まず最初にこれらの信用取引から出発して、資本主義金融をもって債権債務を相殺してその差額を繰り越していく手形決済制度として見なす — したがって貨幣による支払いは一つの特例な場合に過ぎず、なんら特別の重要性をもつものではなくなる — のがもっとも有効な方法であるかもしれない。換言すれば、貨幣の信用理論 **credit theory of money** のほうが、信用の貨幣理論 **monetary theory of credit** よりも、おそらくはより好ましいものであろう。(Schumpeter 1954, 717: 訳 4, 1503-1504)

上記の引用文に続けて、シュンペーターは、「ソートンからミルにいたるイギリスの指導者たちは、信用構造の探究をなしたし、またこれによって、貨幣分析に対する彼らの主要な貢献となっている発見」、要するに「信用の貨幣理論の観点をもってしては適切に述べられなかった発見」をなすことができたが、「しかし彼らは、これらの発見の理論的な意味内容の完成、すなわち体系的な貨幣の信用理論の構築を成し遂げることができなくて、原理的には依然として信用の貨幣理論に膠着していた」(Schumpeter 1954, 718: 訳 4, 1504) と述べている。シュンペーターによれば、かかる「信用の貨幣理論」から「貨幣の信用理論」への転換を果たしたのがマクラウドの功績であり、つまり「貨幣の信用理論のアウトラインはマクラウドの著作のなかにこそ見出される」(Schumpeter 1954, 718, n. 2: 訳 4, 1505) のである。

- (3) マクラウドのこの著作は、初版 (Macleod 1889-1891, 1ed., I-II) と第 2 版 (Macleod 1893-1897, 2ed., I-II) が公刊されている。筆者の確認した限りでは、初版と第 2 版の間には、新たに書き下ろされた章がたしかに一部存在するもの (たとえば「グレシャムの法則」についての検討を行っている第 5 章「貨幣鑄造の理論 The Theory of the Coinage」)、章・節の構成および叙述の内容について基本的にはそれほど大きな変更は加えられてはいないように思われる。しかし、そうはいつてもマクラウド自身の加筆と修正により、第 2 版の文章の方が初版よりも精密に整理され、かつ彼の真意をより正確に表していると思われる箇所があることも事実である。それゆ

え、本章では主として初版のテキストに依拠しながらも、初版との比較検討をしたうえでマクラウドの意図がより明快に文章として表現されていると筆者が判断した場合には第2版のテキストから引用を行うことにする。なお、二階堂（1993, 160）によれば、マクラウドが『信用の理論』で提示した近代的信用観の骨子は、1855-1856年に出版された彼の著作『銀行業の理論と実際』(Theory and Practice of Banking, 1ed., 1855-1856) のなかにもすでに見出すことができるという。

- (4) 二階堂（1993, 168）によれば、『信用創造』を認めるか否かは、時間概念に基づいて信用を理解しうるかどうかにかかわっているのであるが、さらにその根底には、信用を『行為についての権利』として把握し、『無体所有権』を取引の対象としてとらえる視点が確立しているか否かにかかわっている。これにくわえて二階堂氏は、マクラウドのこうした「信用への時間概念の導入」という発想は、ただ「古典派と決別する信用観念の礎」を据えただけにとどまらず、のちにオーストリア学派によって本格的に展開された「資本利子」論の先鞭をつけることにもなったと指摘している。

- (5) マクラウドは次のようにも述べている。

銀行のメカニズムについてなにも知らない素人の著述家たちは、ロンドンの銀行がヴェニスやアムステルダムといったほかの都市の銀行と同様、単なる預金銀行に過ぎない、すなわち銀行が信用創造を行うことはなく、その全業務は顧客から借りた貨幣を貸し出すことにあると断言している。しかしながら、そのような考えは、まったくの誤りである。銀行は、今やその帳簿のなかに信用なし預金を創造することによってあらゆる発展を作り出しているのである。

(Macleod 1890, 1ed., II-1, 371)

- (6) マクラウドは将来的な収益を見込んだうえで「信用」が生みだす資本のことを「生産資本 Productive Capital」という用語でも表現しているが(Macleod 1890, 1ed., II-1, 397), ゾンバルトも言及していたように(Sombart 1927, 148-149: 訳 248-249) 「信用」を「資本」と同一視し、その生産力向上に対する貢献を強調するマクラウドの見解(=「動的信用理論」)に対しては、「静的信用理論」を唱導する当時の代表的な信用理論家たちによって厳しい批判がなされた。なかでも、クニースとならぶ静的論の双璧であるコモルツィンスキーは、「信用の資本理論 Kapitaltheorie des Kredits」(Wagner 1937, 149)として規定されるマクラウドの信用観、すなわち信用が資本創造力をもつとする彼の認識を強く非難している(Komorzynski 1903, 355, 364-378)。

- (7) ミルは、『経済学原理』第3編第11章「貨幣の代用物としての信用について」の

第1節を「信用は生産手段の創造ではなく、その移転である」と題して次のように述べていた。

信用の性質について世間の人々が抱いている混乱した観念の見本として、われわれは、信用の国家的重要性についてしばしば使用される、あの誇張された言葉をあげることができる。信用はたしかに偉大な力をもつものである。しかし、多くの人々が想像しているように、魔力をもつものではない。それは、無からあるものを想像しうるものではないのである。信用の拡張は資本の創造に等しいものであるといわれ、あるいはあたかも信用は実際に資本であるかのようにいわれることのなんと多いことであろう。大体、信用は他人の資本を使用することに対する許可に過ぎないものであるから、その信用によって生産手段が増加するはずはなく、ただそれが移転されるに過ぎないのであるが、そもそもこのようなことを指摘する必要があるということは、奇異なことであると思われる。もし借り手が使用しうる生産手段と労働を雇用する手段とが、彼に与えられた信用によって増加するとすれば、貸し手の分がそれだけ減少するわけである。

(Mill [1848] 1965, 527: 訳, 三, 150-151)

このように、ミルは信用の資本創造力を明確に否定したうえで、「信用はある人の手からほかの人の手への資本の移転に過ぎない」と指摘している。ただし、ミルによれば、その「移転」とは「資本を生産に有効に使用するよりすぐれた能力をもった人への移転」(Mill [1848] 1965, 528: 訳, 三, 152)を意味する。すなわち、ミルにおける「信用」とは、「一国の経済的才幹 *industrial talent* をいっそうよく生産の目的のために活用する手段」、より具体的には、自分自身の資本はもたないが事業を営む手腕には長けた「勤労階級 *industrious classes*」、すなわち「生産者 *producer*」や「商人 *dealer*」の産業的才能を「公の富の増進に向かわせるための手段」として捉えられているのである (Mill [1848] 1965, 529: 訳, 三, 154)。

(8) シュンペーターは次のように述べている。

…… 新結合は既存の結合と違って、すでに流入しつつある収益によってはまかなうことはできないから、新結合を遂行しようとするものは、貨幣あるいは貨幣代替物についての信用を求め、これによって必要な生産手段を購入しなければならない。このような信用を供与することは明らかに資本家と呼ばれる範疇の経済主体の機能である。またこれは明らかに経済を新しい軌道に押しやり、その生産手段を新しい目標に奉仕させるための資本主義的経済形態の種差 *differentia specifica* として十分に役立つだけの重要性をもっており、単に中

中央指導機関の強権的命令の行使に依存しているあらゆる非交換経済や計画経済の方法とは対立するのである。(Schumpeter 1926, 104-105: 訳 188-189)

見られるように、シュンペーターは信用ないし信用創造を「資本主義的経済形態」の核心ともいふべき「新結合」を実現させるための不可欠なファクターとして捉えている。つまり、シュンペーターにとっては、「新結合」(=「革新」)とそれを支える「信用創造」は、中央集権的な「非交換経済」や「計画経済」から「資本主義経済」を明確に区別させるメルクマールでもあるのである。のちの『景気循環論』のなかでもシュンペーターは、「資本主義とは、……信用創造を意味する貨幣借入の方法によって革新が遂行される、あの私有財産経済の形態である」(Schumpeter 1939, 223: 訳, II, 332)とはっきりと主張している。なお、厳密に言えば『経済発展の理論』では、初版でも第2版でも「革新 Innovation」という言葉はまだ使われておらず、一貫して「新結合 *neue Kombination*」が用いられている。塩野谷氏は、シュンペーターが「革新」という言葉を用いるようになるのは、『景気循環論』以降のことであると指摘しているが(塩野谷 1995, 392, 注5), しかし1928年の論文「資本主義の不安定性」のなかでもすでにシュンペーターは「新結合」の意味で「革新」という言葉を用いている(Schumpeter 1928b, 378: 訳 125)。

(9) 『経済発展の理論』第2版で加筆されたこの注記はハーンの信用理論の構成に対してコメントされたものであるが、いうまでもなくシュンペーター自身の信用観の特徴にも符合するものである。

(10) シュンペーターは次のように述べている。

ホーレー (F. B. Hawley) もわれわれとまったく同じ地盤に立っている。彼はわれわれとまったく同じく資本の本質を購買力という要因に認め、われわれとまったく同じく資本を企業家と生産手段との間に置いている。しかしなによりも広く知られているマクラウド (MacLeod) の著作を挙げるべきである。私がこの学者をこれまで挙げなかったのを読者が驚くのは当然であろう。……私はこの誤解された人に喜んで正当の地位を与えるが、急いで強調したいのは、私がまったく独立に、まったく異なる道を経て、まったく異なる目的のために、彼と同じく資本は一定の意味において購買力であるという結論に達したことである。……しかし、彼が購買力創造の事実こそわれわれの経済生活の組織の本質的要素であると認識したことは、たとえ彼がこの認識によってそれ以上多くのことを達成しなかったとしても、マクラウドの功績として常に認められなければならないであろう。この事実は、今日一般にますます多くの注目を惹きつつある。

(Schumpeter 1912, 254-255 ; 1926, 188-189 : 訳 330)

上記の引用文にくわえてシュンペーターは、「彼 [=マクラウド] の法律的説明や彼の全体の調子が、特に好ましい信頼できる印象を与えないことも否定できない」としながらも、ロツシャー、クニースに代表される当時の「支配的理論」(=「静態的信用理論」)が「彼 [=マクラウド] に対していかに酷薄であったかは驚くべきことである」と述べたうえで、マクラウドを「非常に独創的な思想家」であったと高く評価している (Schumpeter 1912, 254, Anm. 3 ; 1926, 188, Anm. 13 : 訳 331) .

(11) マクラウドの信用創造理論と次世代のシュンペーターないしハーンの信用創造理論との継承関係について論及した主な先行研究としては、Diehl (1927) , Honegger (1929, 12-14 ; 18-23) , Ellis (1934, 317-334) , Wagner (1937, 150-164) , 三輪 (1949 ; 1952 ; 1963, 110-118) , 麓 (1953, 181-190 ; 1956, 211-227) , 石川・飯田 (2003) , 鈴木 (2004, 165-181) などがある.

(12) シュンペーターは『経済発展の理論』第2版第3章「信用と資本」の第1節「信用の本質と役割」に、初版にはなかった新しい注記を付して次のように述べている.

以下において本質的に〔初版以来〕なんらの変更もくわえずに述べられている議論は、この間にハーン『銀行信用の国民経済的理論』(*Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits*, 1. Aufl. 1920, 2. Aufl. 1926) の研究によって貴重な確証と改善を受けた。問題の認識を本質的に推し進めたこの独創的かつすぐれた著作を、読者に対して強く推奨しておきたい。(Schumpeter 1926, 140, Anm. 1 : 訳 251 なお引用文中、「2. Aufl. 1926」とあるのは、「2. Aufl. 1924」の誤りである)

シュンペーターをしてこのような高い評価を与えしめたハーンのこの著作は、同時代の知識人、経済学者に対して絶大な影響を及ぼすこととなった。たとえば、『銀行信用の国民経済的理論』第2版に対する書評論文を執筆したゴットフリート・ハーバラー(当時ウィーン大学、のちにハーバード大学でシュンペーターの同僚)は以下のように指摘する.

アルバート・ハーンは疑いなく最近のドイツ貨幣理論史に卓越した地位を占める資格がある。学界が彼の著作を無視したというハーンの苦情(第2版への序文9頁)は、今や失せてしまった。近年ではまさしくハーン文献 *Hahnliteratur* ともいふべき事態が現われている。貨幣および信用にかんする著作でハーンの学説に立ち入った分析を行わないものはほとんどないかのように思える。しかも事実、ハーンの理論は最大の注目に値するのである。(Haberler 1927, 803)

上記の引用文中、ハーバラーの指摘する「ハーン文献」については、ハーン自らが『銀行信用の国民経済的理論』第3版の「序文」において、その主要な著作を列挙しているが（Hahn 1930, XIV. Anm. 2: 訳 16-20）、そのなかにはもちろんシュンペーターの『経済発展の理論』第2版や次節で検討されるゾンバルトの『近代資本主義』第3巻も含まれている。なお、『銀行信用の国民経済的理論』の初版と第2版は、ハーン自らいうように（Hahn 1924, XI）、「第2版への序文」がくわえられたことを除いては、内容、叙述ともにまったく変更はない。第3版では第2版刊行以降の国内外での夥しい反応（＝「ハーン文献」）をふまえて著しい加筆・修正が施されたが（麓 1953, 188, 注 56; 1956, 221, 注 6）、初版と第2版の「基本的な理論」は第3版でもほぼそのまま維持されているという評価もある（Ellis 1934, 333）。ハーンの信用理論の梗概については、Hahn（1923）も見よ。またシュンペーターとハーンとの継承関係については Haenel（1925）を参照。さらに、「理論的志向をもつ実務家」としてのハーンの生涯を知るには、晩年に公刊された回顧録（Hahn 1963）が有益である。ハーンのキャリアの簡潔な紹介としては、Büttner（1982, 151）、Ziemer（1971, 229, Anm. 137）もある。

ところで、ハーンの信用理論は、欧米のみならず、同時代の日本でも強い関心をもって迎えられていた。たとえば、難波田（1933）は現今の「新しき信用理論」の代表的文献として『銀行信用の国民経済的理論』に注目していたし、また波多野（1937, 142-189）、新庄（1937, 10-50）、中谷（1938, 141-168）もハーンの所説を内在的に検討している。くわえて、やや時代は下るが麓（1953, 191-209）も先行研究に依拠しつつハーンの議論を考察している。近年の研究では、ハーンとシュンペーターとの関連について指摘した八木（1988, 182-183）あるいはハーンのレーデラーに対する影響について論じた雨宮（2005, 41-42）がある。さらに野田（1994; 1998）もハーンの信用創造理論を詳細に分析している。

（13） ただしハーンは、すでに『銀行信用の国民経済的理論』初版（および第2版）でも、信用の拡大によって生み出された「分配の变化 *Aenderung der Distribution*」が国民経済における「生産の上昇 *Steigerung der Produktion*」を惹起すると強調していた（Hahn 1920, 137; 1924, 137）。とはいえ、初版の議論は第3版におけるほど明確に整理された形で提示されていない。

（14） シュンペーターおよびハーンの「動態的信用理論」がゾンバルトへ及ぼした影響については、『ドイツ社会主義』（Sombart 1934）の訳者である難波田春夫も関心を示していた。難波田（1933）は次のように指摘している。

1920年フランクフルトの一銀行家、アルベルト・ハーンの『銀行信用の国民経済的理論』が現われてより、「信用」に関する理論は、相対立する二つの群に分れた。／ハーンは、彼自らもいふ如く、この画期的な学説への暗示をシュンペーターより受けているのであって、これら二人の銀行家及び学者より発した「新しき信用理論」は、いまや独逸を越えて、英国とくに米国に拡がっている。この学説に与する主要なる人々としては、独にあっては、前記の二人の他に、ゾムバルト、レーデラー、英にあっては、ロバートソン、ホートレイなど、周知の学者があげられやう。／もつとも、いまこれら諸学者によって唱へられる信用学説の源を、更に遠くに求めるならば、我々はマクラウド及びジョン・ロオの二人があることを見出さう。とくに前者は一千頁にあまる大著によって、「新しき信用理論」の先駆をなした。（難波田 1933, 327）

ただし、ここでの難波田の目的はハーンの信用理論を考察することであり、それゆえゾムバルトがそれをいかに受容・継承したのかについての立ち入った分析までは行われていない。しかし、上記の指摘にとどまるとはいえ、難波田はマクラウドを端緒とし、シュンペーター、ハーンによって展開された「新しい信用理論」の動向を同時代においてきわめて正確に捉えていたといつてよい。さらに付言しておけば、かかる動態的信用理論とゾムバルトとの継承関係について明言しているのは、「新しい信用理論」の潮流を最も早い時期に批判的に紹介した Diehl (1927, 148)、あるいは戦前を代表する信用創造理論のサーヴェイである Honegger (1929, 30) を除けば、今なお難波田だけである。

(15) ゾンバルトによれば、「真の創造的信用 *die echte schöpferische Kredit*」とは、このように「社会の資産」を超えて信用（＝購買力）の供与がなされた場合のことを指すのであって、単に個々の与信者ないし受信者の資産を超過する信用の供与が行われたからといって、それをもって信用が「無から創造された」と見なすシュンペーターやハーンの見解は適当とはいえないと批判している（Sombart 1927, 179：訳 297）。これに対してシュンペーターは、『近代資本主義』第3巻に対する書評論文で、「彼〔＝ゾムバルト〕が信用創造 *Kreditschöpfung* を扱うその手法については、危険なしとはしない」と距離をおきながらも、ゾンバルトによる「信用」の定義や種類別の区分、さらに概念構成それ自体は、「素晴らしく、しかも壮大な〔信用にかんする〕概観を提供している」と述べており、全体としてゾンバルトの信用観にポジティブな評価を与えている（Schumpeter 1927, 368）。

(16) ゾンバルトによれば、かかる生産力の拡充に寄与する信用供与の限界は、最終的に

は与信者である銀行によって決定される。マクラウドやシュンペーターと同じく、「信用は、貸し付けた金額が将来回収される確実性のある限り付与することができる」というのがゾンバルトの基本的な認識であり、したがって銀行はいうまでもなく「当該受信者が借り受けた金額を返還する確実性ないし蓋然性」を正確に見極める能力を備えていなければならない。すなわちゾンバルトは「客観的に正当な銀行家の決定が信用に対してその許されうる限界を与える」(Sombart 1927, 179: 訳 298) と把握するのである。

以上の銀行ないし銀行家の役割を前提としたうえで、ゾンバルトはさらに「信用付与の客観的条件」すなわち「信用の拡大に与えられている限界」を規定する要因として「一国における現金保有の大きさ」または「金保有の大きさ」を重視している。なぜなら、彼の認識によれば「銀行券の発行は金保有量と一定の量的関係をもって行われている」からであり、それゆえ特に現金支払いの場合には銀行が供与する信用は必然的に「金保有の大きさによって制限を受けることになる」(Sombart 1927, 180: 訳 300) からである。ゾンバルトは、『近代資本主義』初版 (Sombart 1902b, 8-9) でも、その翌年ハンプルクで開催された社会政策学会での報告 (Sombart 1903, 124) でも、1890年代後半のカリフォルニアおよびオーストラリアでの金鉱の発見、さらにはそこからの貴金属の流入を「盛期資本主義経済」の発展を推進する信用拡大の重要な原因と見なしていたが (田村 1997, 225)、彼のかかる見解は『近代資本主義』第3巻でも保持されていたと考えられる。

(17) ブロックはゾンバルトとマルクスとの資本観の相違について以下のように説明している。

マルクスにとって、歴史事象の主体は、自生的な発展法則をもった神秘的で超人間的な力としての資本 *Kapital* であった。ゾンバルトにとって、それは、シュンペーターにおけると同様に — 経営する人間自身、近代的な企業家であって、彼は、生産手段の所有者として、資本主義的企業を経営する。すなわち、欲望充足に目を向ける、前資本主義的な企業形態とは反対に、無制限の利益の追求から出発する企業を経営するのである。ゾンバルトの資本概念は、マルクスの場合のように実体的 *substantiell* ではなく、機能的 *funktionell* である。すなわち、企業家の行為に依存している。(Brocke 1972, 140: 訳 230)

ゾンバルトの認識では、企業家は「かの価値増殖を追求する貨幣総額 [= 資本] の管理人 *Verwalter*」であり、言い換えれば、「資本という力の請負人 *Beauftragten der Kapitalmacht*」にほかならない (Sombart 1906, 6)。したがって、ブロックが

指摘するように、ゾンバルトにおける「資本」は、シュンペーターと同じく「企業家の行為」を介してはじめて「機能」するものと考えられており、その意味で資本そのものに「自生的な発展法則」を見出すマルクスとは基本的な認識を異にしている。ゾンバルトにあっては、企業家の経済活動が第一義であって、信用によって供与される「資本」のもつ意味合いは副次的なものなのである。このようにゾンバルトにおける企業家の役割に着目しつつ、マルクスとゾンバルトの資本観の相違を剔出したブロッケの分析はきわめて鋭いといわなければならない。なお、マルクスとシュンペーターの資本観、あるいはそれと密接に関連する経済発展のメカニズムに対する両者の認識の相違については、たとえば、金指（1987, 254）を参照。

- (18) シュミット (Schmidt 1920, 57-64; 1924, 333-337) あるいは居城 (2001, 125-128) が指摘するように、1900年代初頭のドイツでは、預金業務を基礎とした銀行の振替取引が支払決済の手段として最も頻繁に用いられるようになっていた。わけても「銀行のなかの銀行」であるライヒスバンクは全国的な支店網を通じて振替決済システムを浸透させ、かくて「現金のない支払い取引」の発展のために中心的な役割を果たした。

第4章 ゾンバルトの株式会社論

— 資本調達プロセスの「民主化」と経営者支配の論理 —

I. はじめに

ゾンバルトの経済学、とりわけその資本主義理論は、同時代のシュンペーター以来、幾多の論者によって動的な「経済発展の理論」として評価されてきたのであるが (Schumpeter 1908, 18: 訳 66; Parsons 1928, 656; Lindenlaub 1967, 317; Hagemann and Landesmann 1996), その理由は、これまでの考察からも明らかのように、彼が「指導的経済主体」としての企業家による革新的行動を自らの経済学体系の中核に位置づけようとしていたからにはほかならない。しかし、ゾンバルトは、ただ企業家という1人の卓越した個性の力だけをもって資本主義経済の発展が実現されると素朴に考えていたわけではもちろんない。ゾンバルトは、企業家の経営手腕が十全に発揮されるための組織的な基盤として、前章で検討された信用創造を遂行する銀行とならんで「資本主義的企業」の典型的形態である株式会社の果たす役割もまたきわめて重視していたのであり (Sombart 1927, 20-21: 訳 46-47; 738-739), それゆえ彼の経済理論の特質、わけでも「盛期資本主義経済」に対する彼の認識をより正確に把握するためには、経済主体たる企業家にくわえて、銀行とならぶ「信用機関」として規定された彼の株式会社にかんする考察にも立ち入った分析を行うことが不可欠となるのである⁽¹⁾。

上記の問題意識から本章では、まずゾンバルトと同時代にドイツにおける証券および証券制度の著しい発展に注目し、株式会社形態の大企業が資本主義経済に対して及ぼす影響力の大きさを強調したロバート・リーフマンの議論を取り上げる。次いで、リーフマンと同じく「資本の証券化 (=株式化)」とそれにもとづく「全資本の動産化」という観点から「創業者利得」という独特の収益概念を導出し、大株主による寡頭支配の論理を提唱したヒルファディングの株式会社論を検討する。そのうえで、特にヒルファディングの議論との相違点に着目しつつ、株式会社を資本調達の「民主化」が実現された「信用機関」として把握し、ヒルファディング的な大株主支配の現実を見据えながらも、企業家による経営支配の論理を重視したゾンバルトの株式会社論を分析する。かかる検討作業を通じて、ゾンバルトの「盛期資本主義経済」に対する認識をより具体的に明示化することが本章における最終的な課題である。

II. リーフマンの証券資本主義論

ゾンバルトが指摘したように (Sombart 1927, 151 : 訳 253) , 帝政期ドイツの経済的特質を「現存する資本の大部分が証券へと体化されていること」(=「資本の証券化 Effektivierung des Kapitals」)にあると見なしたうえで、この時代を「資本主義の最終段階」としての「証券資本主義 Effektenkapitalismus」と命名したのがロバート・リーフマン (Robert Liefmann, 1874-1941)であった⁽²⁾。リーフマンの認識では、現今の国民経済における一切の信用取引は、「有価証券 Wertpapier」を媒介として展開されているが、この有価証券は、実際には、「貨幣証券 Geldpapier」と「資本証券 Kapitalpapier」という2つの形態に区別される。ここで「貨幣証券」とは、貨幣を単に交換手段ないし支払手段として体化している証券、すなわち、手形、小切手、銀行券、あるいは支払い債務証書などを表すものに過ぎないのに対して、「資本証券」とは、永続的収益に対する請求権を体化している証券、つまり「収益証券 Ertragspapier」のことを意味している (Liefmann 1909, 30 ; 1923, 20)。リーフマンは、株式 Aktie や債権 Obligation といった収益請求権を備えた資本証券を簡潔に「証券 Effekten」とも言い換えているが、彼によれば、このように絶えず収益性を追求する証券の最も重要な特性は、なによりもその「代替可能性 Vertretbarkeit」にあった。リーフマンは、かかる証券の「代替可能性」が引き起こす独特の経済的メルクマールとして、さしあたり「非人格的資本主義」と「資本の動産化」という2つの現象に注目する。

証券の代替可能性は、非人格的資本主義 unpersönlicher Kapitalismus と呼ばれる現象をもたらす。すなわち、それは、資本が完全に人格から解放され、有価証券においてのみ確認され、証券それ自体が収益請求権の主体となるということである。証券の代替可能性は、証券のうちに体化されたすべての資本、それゆえ土地、建物、工場、鉄道など現存する資本のいわゆる動産化 Mobilisierung を生じさせる。……証券を媒介として、収益に対する永続的な請求権は、脱人格化 entpersonalisiert される。……証券へと体化されたそうした物的資本の収益請求権は、貨幣や貨幣証券と同様、容易に他者へと譲渡されうる。(Liefmann 1909, 31 ; 1923, 21-22 ただし、「証券を媒介として、……」の一文は、第4版における加筆部分である)

このように、代替可能性を基本的特性として有する証券は、一方では、「資本投下 Kapitalanlage の最も適した形態」であると同時に、他方では、「貨幣資本調達 Geldkapitalbeschaffung の最もすぐれた形態」としても機能する。リーフマンによれば、「証券 Effekten」とは、単に土地、建物などの物的財貨に対する支配権・請求権を表明するものではなく、「物的財貨によって、将来獲得されうるであろう貨幣収益に対する請求権」(Liefmann 1923, 22)を体化したものにほかならない。こうして、物的資本に対する証券形態の付与(=「資本の証券化」)が実現されることによって、土地、建物に代表される不動産もまた、信用取引上、代替可能なものへと転換され(=「全資本の動産化」の確立)、このことが国民経済の発展、わけても所得獲得や資産形成の促進にとって決定的に重要な貢献を果たしたのである。

リーフマンは、このように現代に特有の「証券資本主義」の核心が「資本の証券化」とその帰結として生じる「全資本の動産化」にあることを指摘したうえで、さらに彼は、証券の特性である「代替可能性」が、中世イタリアにおけるコンメンダ的な人格的關係に依拠する出資形態 — すなわち、個人的な信頼を基礎とする債権・債務関係 — を解消させることになったと指摘する(Liefmann 1909, 31-32; 1923, 22-23)。証券へと体化された資本のもつ「代替可能性」は、資本調達に際しての債権者と債務者との個人的な繋がりを完全に無用化するとともに、かかる債権・債務関係の「非人格化」により、近親者に限らず、ある程度の資産を保持する者であれば誰でも任意に企業への出資に参加することができるようになった。鉄道・化学・電気産業の各分野にとりわけ明瞭に見出されるような「何千人もの株主が出資する大企業〔=株式会社〕の成立」は、かくて「資本の証券化を通じて初めて可能になった」(Liefmann 1909, 33)のである。

以上のように、主として資本調達の簡易化ならびにそれにもとづく近代的企業形態(=株式会社)の形成という観点から「資本の証券化」および証券の特性である「代替可能性」を積極的に評価したリーフマンではあったが、しかし彼は、現代の「証券資本主義」、あるいはその支配的企業形態としての株式会社に胚胎している負の側面についてもけっして看過することはなかった。すなわち、「資本の証券化は、資本収益、つまり利子だけにしか関与せず、まるまる不労所得だけを享受する人々の環を著しく拡大させている」(Liefmann 1909, 32; 1923, 23)という認識がそれである。

債権者と債務者、出資者と企業ないしその経営者との間の關係が未だ人格的な

結びつきに依存していたヨーロッパ中世においては、資本投下した債権者は、債務者である当該企業が信用を受けるに値する能力＝「信用適格性 Kreditwürdigkeit」を備えているのかどうかを個人的に絶えず監督しなければならないという責任を負わされていた。要するに、債権者には、資本投下のあとも継続的に債務者たる企業の経営状態 — 具体的には「収益請求権の安全性 Sicherheit」 — を監督するという少なからぬ労力をともなう任務が課せられていたのであり、それゆえ、当時、純粹な意味で不労所得を享受することができたのは、ただ土地貴族や土地成金などごく一部の特権的な地主層だけに限られていた。ところが、「資本の証券化」が一般に普及し、収益請求権が証券（＝株式）へと体化されると、人格的信頼にもとづく債権・債務関係は消滅し、債権者たる株主はもはや企業の実際の経営状態にはなんら留意することなく、監督責任からも解放され、ひたすら企業収益としての利子にのみ関心を抱くようになる。すなわち、債権者（＝株主）が出資を行う理由は、経営者および企業家と個人的に親密な関係にあるからではなく、単に「自分以外の何百・何千ものほかの資本家たちが同じ種類の証券の所有者であり、彼と同様、債権者ないし出資者になっているというその状況に対して信頼を寄せている」（Liefmann 1909, 36；1923, 24）からに過ぎなくなるのである⁽³⁾。

こうして、「資本の証券化」が確立された結果として、「不労所得を受領する者の数は、著しく上昇することになった」のであるが、ここからさらに出来したのは、「彼ら〔＝不労所得者〕と大多数の賃金労働者との対立が先鋭化した」という事態であった。リーフマンは、株式会社内において発生したこの両者の対立のうちこそ「証券資本主義の発展が引き起こした主要な欠陥がある」（Liefmann 1909, 33；1923, 26）と指摘している。

このように、リーフマンは、「証券資本主義」ないしその典型的企業形態たる株式会社の抱える問題点を的確に捉えたうえで、それを鋭く剔出していたのであるが、しかし、にもかかわらず「資本の証券化」およびそれにもとづく株式の分散化が現今の国民経済に対してきわめて重要な役割を果たしているという彼の確信は、これによって少しも揺らぐことはなかった。なぜなら、リーフマンの認識では、「証券資本主義」とは、「そもそもそれ自体としてはなんら拝金主義的な影響を及ぼすものではなく、むしろ大経営から流出する所得をよりよく分配する可能性を提供する」（Liefmann 1923, 29）システムにほかならないからである。リーフマンは次のようにいう。

証券資本主義が不労所得の獲得を容易にし、証券取引所を介して、本質的に不労所得とみなされる投機利潤までも促進させたことは疑う余地がない。しかしながら、私は …… まさしく証券制度がよりよい所得分配の基礎となり、およそわれわれの経済組織の発展のための礎石となりうるということを …… 当然のこととして見なしている。なぜなら、技術的経済的な諸理由（密集した大規模な国民大衆を扶養する必要性）から、今日大経営が必要不可欠であるとするならば、証券資本主義は、これら大企業の収益をより多くの人々に分配するための手段となるからである。（Liefmann 1923, 30-31）

上記の引用文から明らかなように、リーフマンは半ば一極集中的に大企業によって生みだされた収益をできるだけ多くの人々に分配することを可能にした点に「証券資本主義」の真の意義を認めている。「資本の証券化」を通じてもたらされた株式の分散化により、大企業の就労者のみならず、それ以外の不特定多数の人々にもその純収益を獲得する機会が与えられることになったのであり、リーフマンは、このように社会的地位や身分の高低にかかわらず、だれもが企業利潤の分け前に与ることができるようになり、かくて「国民所得のよりよい分配」が実現されたことを「証券資本主義」ないしはその支配的企業形態としての株式会社の創出した最大の功績として積極的に評価したのであった。

さて、リーフマンの証券資本主義論の具体的な内容についてはおおよそ以上のように概括されるが、では、リーフマン自身は彼以外の経済学者による証券制度あるいはそれと密接に関連する株式会社論を中心に据えた同時代の資本主義研究の動向をいかに捉えていたのであろうか。この問題にかんしてリーフマンは次のように論じている。

証券とは何であり、証券資本主義とはどのように解釈されるものなのか。本書の初版（1909年）が刊行されて以来、証券制度 *Effektenwesen* への取り組みは、まさしく現代的〔な課題〕になったといえよう。おそらくそれ以前にもすでに、資本の非人格化 *Unpersönlichwerden des Kapitals*、動産資本の支配 *Verherrschen des mobilen Kapitals* についての指摘はなされ、今日の国民経済に対するその意義が強調されてはいたであろう。しかし、歴史学派の支配下にあつては、だれ一人としてこの現象を体系的に研究し、そのな

かに国民経済の近年における発展の核心を見出そうと考える者はいなかった。経済学のテキストが証券制度について語るものがどれほど少なかったかを想起してみればよい。本書初版以前に、〔経済学の〕テキストのなかではほとんどそれ〔＝証券制度〕について語られることはなかったのである。しかしながら、本書初版の刊行以降は、証券制度に対する様々な取り組みが開始され、それについての特別の講義までが行われている。……就中、ヒルファディングとゾンバルトは、私が証券資本主義と呼ぶものに関心を示してきた。

(Liefmann 1923, 18)

上記の引用文から看取されるように、リーフマンは、証券制度・証券資本主義にかんする自身の研究の先進性を強く自負する一方で、近年における資本主義経済の発展に対する証券の役割の重要性をはっきりと認識している代表的な経済学者として、とりわけヒルファディングとゾンバルトの2人の議論に注目している(4)。では、ヒルファディングとゾンバルトの資本主義研究において、証券および証券制度は、実際いかなる位置づけを与えられているのであろうか。また現実の資本主義経済システムに対して証券、わけても収益請求権を備えた資本証券である株式の果たす役割はどのように考察されているのであろうか。次節では、この2人のうち、まずリーフマンと同様に「資本の動産化」という観点を重視したヒルファディングの証券(＝株式)理論を取り上げる。その際、本稿では、ヒルファディングの株式会社論、特にその支配論に焦点を合わせつつ検討を行うことにしたい。

Ⅲ. ヒルファディングの株式会社論 : 創業者利得形成のメカニズムと大株主支配の論理

ヒルファディングは、「資本の動産化 擬制資本」⁽⁵⁾と題された『金融資本論』第2編の第7章「株式会社」のなかで、個人企業と区別される株式会社の本質的性格を次のように論じている。

われわれがまず第1に考察する産業株式会社は、なによりもまず産業資本家の機能の変化を意味する。なぜなら、それは個人企業にあっては偶然的に現れるにすぎないこと、すなわち産業企業家の機能からの産業資本家の解放を

原則としてともなうからである。この機能変化は株式会社に投下される資本に、その資本家にとっては純粹な貨幣資本の機能を与える。貨幣資本家は、債権者としては、生産過程における彼の資本の使用にはなんら関わることはなく、…… ただ彼の資本を引き渡して一定期間の経過後に利子とともに回収しさえすればよい。…… 同様に株主も単なる貨幣資本家として機能する。彼が貨幣を引き渡すのは、その代わりに …… ある収益を受け取るためである。その際、彼は貨幣の大きさを任意に決めることができ、この額以上には責任を負わない。(Hilferding [1910] 1955, 137-138 : 訳 206)

見られるように、ヒルファディングは「産業企業家の機能からの産業資本家の解放」という「産業資本家における機能変化」を導いた点に株式会社の経済的特質を見出す一方で、この「機能変化」が株式会社に投下される資本(=株式資本)に貨幣資本の性格を与えたことにより、その所有者である株主もまた貨幣資本家と同様の機能的特徴を備えることになったと指摘する。全資本を特定の企業に投下し、その資本を引き戻すためには企業全体を売却するよりほかはない産業資本家とは対照的に、株主は収益請求権としての株式の売却によって彼の資本を随時回収しうるのであり、したがって貨幣資本家と同一の地位にある。そして、このような「株式の売却可能性」(=「資本の動産化」)は、特有の一市場としての「証券取引所 Effektenbörse」によって作り出される。かくして、この市場の成立が株式資本に完全なる貨幣資本の性格を与えるのである(Hilferding [1910] 1955, 140-141 : 訳 210)。ヒルファディングは次のようにいう。

貨幣資本投下のための市場を作り出すことは、取引所の本質的機能である。これによって、貨幣資本としての資本の投下可能性が初めて広範囲に与えられるからである。なぜなら、資本が貨幣資本として機能するためには、資本は、第 1 には恒常的収入 — 利子 — を生まねばならず、第 2 には元本そのものが還流せねばならないか、またはそれが実際に還流しなくても常に利子請求権の売却によって還流可能にされなければならないからである。取引所は資本の動産化 *Mobilisierung des Kapitals* をはじめて可能にした。(Hilferding [1910] 1955, 194 : 訳 286-287 なお、引用文中の「資本の動産化 *Mobilisierung des Kapitals*」は訳文では「資本の動員」となっている)

このように、証券取引所を媒介として「資本の動産化」が実現されると、自由な貨幣資本、つまり価値増殖を待って遊休している大きな貨幣総額は、それが貸付資本としてその本来の機能において確定利子付貸付への投下を競争するのと同様に、利子生み資本 *zinstragendes Kapital* として株式への投下を競争するようになる。こうして、種々の投下可能性をめぐる貨幣資本の競争は、「株式の価格を確定利子付投下の価格に接近させて、株主にとって産業利潤からの収益を利子に帰着させる」（Hilferding [1910] 1955, 141：訳 210）。すなわち、「株式の価格は支配的利子率で資本還元された額にまで接近し、それに対する配当は利子にしか当たらなくなる」（中田 1993, 202）というわけである。ヒルファディングの認識では、こうした株式配当の利子への帰着（＝「配当の利子化」）は、「株式制度および証券取引所の発展とともに進行する 1 つの歴史的過程」にはほかならない。要するに、「株式企業が普及する限りでは、今や産業は、産業資本へのその転化がこれらの資本家に平均利潤ではなく、ただ平均利子〔＝利子化した配当〕をもたらささえすればよいという貨幣資本をもって経営される」（Hilferding [1910] 1955, 141：訳 211）のである。

しかしながら、ヒルファディングによれば、ここには「1 つの明瞭な矛盾」が露呈せざるをえない。一般に、「株式資本として用立てられる貨幣資本」は、もちろん産業資本へと転化されるが、この資本は「正常な事情のもとでは、やはり平均利潤をあげるであろう」。そもそも株式会社が、ただ利子だけを株主にもたらしような収益を分配するために、その商品を平均利潤以下で売り、利潤の一部を自発的に放棄するなどということは、まったくの「ありえない想定」といわなければならない。なぜなら、資本主義的企業の雛形である株式会社の目的は、あくまで「最大限可能な利潤の獲得」を実現させることにこそ向けられているからである（Hilferding [1910] 1955, 141：訳 211）。

そうだとすると、しかし株式会社の生み出す「利潤のほかの部分」、すなわち「平均利潤マイナス利子」＝「本来の企業家利得に等しい部分」は、一体どこに消えたのであろうか。

「配当の利子化」にともなう企業家利得部分の行方を以上のように問うたうえで、ヒルファディングはこの疑問に対する回答を与えるために、まず個人企業の株式会社への転化によって生ずる「資本の二重化」の論理を明らかにする。彼は次のようにいう。

個人企業の株式会社への転化によって、資本の二重化が生じたように見える。しかし元来の株主によって前貸しされた資本は、決定的に産業資本に転化されていて、ただかかるものとしてのみ現実存続している。貨幣は、生産手段の購買手段として機能し、生産手段に支出され、したがって決定的にこの資本の循環過程からは消え去った。……したがって、以降の株式売買に際して支払われる貨幣は、けっして株主によって最初に引き渡されて費消されている貨幣ではない。それは、株式会社の資本の、企業の資本の、構成部分ではない。それは、資本還元された収益証券の流通のために必要な追加貨幣である。同様に、株式の価格もけっして企業資本の部分として想定されているのではない。それは、むしろ資本還元された収益取分である。かかるものとして、それは、企業に固定されている総資本の可除部分、したがって相対的に固定的な大きさとして規定されているのではなく、支配的利子率で資本還元された収益であるにすぎない。それゆえ、株式の価格は、現実に機能しつつある産業資本の価値（または価格）に懸かるのではない。なぜならば、株式は企業において実際に機能しつつある資本の一部分に対する指図証ではなく、収益の一部分に対する指図証だからである。したがって、その価格は、第 1 には利潤の大きさ …… に懸かり、第 2 には支配的利子率に懸かっている。（Hilferding [1910] 1955, 142：訳 212-213）

かくて株式は、収入請求権、将来の生産に対する債務請求権、収益指図証である。この収益が資本還元されて、このことが株式の価格を成立させるので、この株式価格において第 2 の資本が存在するように見える。この資本は純粹に擬制的 *rein fiktiv* である。現実に存在するものは、産業資本とその利潤だけである。しかし、このことは、この擬制資本 *fiktives Kapital* が計算上では現に存在していて株式資本 *Aktienkapital* としてあげられることを妨げるものではない。（Hilferding [1910] 1955, 143：訳 213）

上記の引用文から明らかなように、「資本の動産化」を契機として個人企業から転化した株式会社においては、「現実に機能しつつある産業資本」とは区別される第 2 の資本、すなわち「擬制資本」としての性格を備えた「株式資本」が成立する。元来の株主によって前貸しされた資本は、一方では産業資本に転化され、再生産過程における生産手段と労働力の結合によって資本の価値増殖運動 $G-$

$W < \frac{P_m}{A} \dots P \dots W' - G'$ を展開しているが、他方ではこの貨幣資本額は株式の形態へと分割・証券化され、産業資本の現実の循環とはもはやなんら関わりをもつことのない「資本還元された収益請求権」（＝「将来の生産に対する債務請求権」）として証券市場で自由に売買されるようになる。かくて、再生産過程の外部にある証券市場・株式市場で「第 2 の資本」が成立し、それが擬制資本としての株式資本の独自の流通運動 $A - G_2 - A$ を形成・展開するのである。

このように、個人企業の株式会社への転化による「資本の二重化」の論理を導きだしたうえで、ヒルファディングは、さらに将来的な収益の資本還元において成立する「擬制資本」、それゆえ「株式資本」の総額が「初めに産業資本に転化された貨幣資本と一致することを要しない」（Hilferding [1910] 1955, 144：訳 214）という注目すべき論点を打ち出す。彼によれば、この差額は「利潤を生む資本の利子を生む（配当を生む）資本への転化」から生ずるのであり、言い換えれば、それは「平均利潤を生む資本と平均利子を生む資本との差額」に等しい。すなわち、「株式会社の創立に際して、株式資本は …… 企業の利潤が個々の株式所有者に彼の投じた資本に対して利子程度の配当を分配できるように算定される」（Hilferding [1910] 1955, 150：訳 224-225）のであるが（＝「配当の利子化」）、このように株式資本が擬制資本に等しく設定されることによって産業資本（＝現実資本）との間に必然的に生まれる差額、ヒルファディングは、「この差額」こそを「創業者利得 *Gründergewinn*」として見なしているのである。したがって、それは、「利潤を生む資本の利子生み資本形態への転化」から生ずる「利得の源泉」（Hilferding [1910] 1955, 144：訳 215-216）にほかならない⁽⁶⁾。彼は次のようにいう。

創業利得または発行利得 *Gründungs- oder Emissionsgewinn* は、利潤でも利子でもなく、資本還元された企業家利得である。その前提は、産業資本の擬制資本への転化である。…… 平均利潤マイナス利子は企業家利得を規定し、企業家利得は、支配的利子率で資本還元されて、創業利得をなす。（Hilferding [1910] 1955, 249：訳 363-364）

上記の引用文から看取されるように、ヒルファディングにあつては、「平均利潤マイナス利子」で規定される「企業家利得」は、株式市場（＝擬制資本市場）における支配的利子率によって資本還元されたうえで、「創業者利得」として一

括してあらわれると把握されている。「諸資本家の一会社」(Hilferding [1910] 1955, 157: 訳 236)としての株式会社の設立にあたっては、その払込資本の大きさに応じて大株式所有者として企業の支配者集団を形成する少数の創業者(=大株主および銀行)とそれ以外の多数の中小所有者から成る被支配者集団(=一般株主)への二極化が進行しているが、その際、一般株主が単なる「利子程度の配当」にしか与りえないのに対して、企業における株式資本の過半を占める大株主には、直接生産活動に従事しなくとも初めから「将来収益の一括先取り」としての莫大な「創業者利得」の取得が約束されている。創業者利得のメカニズムは、かかる意味において、「所有集中にもとづく支配集中」というヒルファディングの株式会社論に特有の資本支配の論理⁽⁷⁾をきわめて明瞭に映しだしているのである。彼は次のように述べる。

以前は資本主義的所有は主として利潤の蓄積によって生じたが、今では擬制資本の創造が創業利得 *Gründungsgewinn* の可能性を与える。それとともに、利潤の一大部分は、ただひとり産業資本に擬制資本の形態を与えうるところの、集積された貨幣権力の手に引き渡される。しかしこの利潤は、株主の配当のように年々の分散的収入として彼らに流入するのではなく、資本還元されて創業利得として、貨幣形態で直ちに新たな資本として機能しうるような相対的に見ても絶対的に見ても大きな額として流入するのである。このように、すべての新設企業は、予めその創業者たちに 1 つの貢税 *Tribut* を支払うのであるが、創業者たちはその代わりになにをしたのでもなく、またけっしてその企業になにか関わりをもつ必要もないのである。それは、大きな貨幣権力の手にまた新たに大きな貨幣額を集積する一過程である。(Hilferding [1910] 1955, 197-198: 訳 291-292)

ヒルファディングは、以上のように「創業者利得」の本質を「一般株主によって創業者たちに支払われる 1 つの貢税」として捉える一方で、証券市場を媒介とする「所有の株式所有への転化」(=「資本の動産化」)にともなう株式制度の普及・拡大とともに「株式会社の支配者〔=大株主〕は、彼以外の他人〔=中小株主〕の資本をも自己の資本と同様に支配する」ようになったと指摘する。すなわち、証券市場における株式の所有運動については、「他人の資本に対する支配力が最大の重要性をもち、ほかのなにを措いても企業の支配が最大の意義をもつ」

とされるのである (Hilferding [1910] 1955, 157-158 : 訳 236-237) .

こうして、大株主は株式会社の指導機関たる役員会の一員として、第 1 には役員配当の形で利潤の分け前を、第 2 には企業の管理に影響を及ぼす機会を与えられ、「他人資本の集積された力の代表者」として再生産過程の外部から企業における経営方針の策定に積極的に関与するようになる (Hilferding [1910] 1955, 160-161 : 訳 240) . これに対して、中小株主は「より少ない権利しかない所有者 *Eigentümer minderen Rechts*」(Hilferding [1910] 1955, 175 : 訳 260) ⁽⁸⁾と見なされ、今やあらゆる場面で大株主の決定に従属せざるをえない立場に置かれている。中小株主は単なる「一総体の一構成員」として剰余価値請求権を与えられているにすぎず、彼らは大株主のように生産の行程に対して決定的に関与することは許されない。要するに、株式会社とは、中小資本家たちが「その管理について容喙しえないような一会社」にほかならず、そこでは「生産資本に対する現実の処分権は、〔全株式総数から見れば〕そのただ一部分を実際に抛出したにすぎない人々〔＝少数の大株主〕に帰属する」(Hilferding [1910] 1955, 175 : 訳 261) ののである。

このように「所有集中にもとづく支配集中」という株式会社における大株主支配の現実を直視したうえで、ヒルファディングは、前節で見たリーフマンのように株式所有による資本の分散化傾向を「資本の民主化」に結びつけて捉えようとする見解を「小ブルジョア的理論」と呼び、暗にこれを批判している (Hilferding [1910] 1955, 199 : 訳 294) . だが、このことは、ヒルファディングが株式会社のもたらす経済的メリットの諸側面までも否定していることを意味するものではない。周知のように、彼は個人企業と比較した場合の株式会社の経済的優位性、すなわち資本調達・蓄積・創業の容易さ、あるいは「競争戦」・「価格戦」・「信用利用」におけるその優越性を十分に認識しており (Hilferding [1910] 1955, 165-175 : 訳 247-260) , それゆえ株式会社の経済的特質を解明することは「近代資本主義の発展の理解にとって決定的な重要性をもつ」(Hilferding [1910] 1955, 137 : 訳 205) とまで断言しているのである。

しかしながら、こうした経済的メリットを有するにもかかわらず、ヒルファディングにおける株式会社とは、その創業者利得形成のメカニズムに象徴的にあらわされているように、あくまで「所有集中にもとづく支配集中」の機構として、つまりは「大株主による寡頭支配」を本質的特性とする機構として把握されるべきものであった⁽⁹⁾。それは、「多数株式の所有者に少数に対する無限の支配権」

(Hilferding [1910] 1955, 175 : 訳 261) を与えるとともに、いわゆる「所有と経営の分離」を確立させながらも、その内実は、本来再生産過程の外部にあるはずの所有者階級が「経営」(=「産業」)をも掌握するシステムとして描きだされており、したがって「所有」(=大株主・銀行)の側からの産業支配という視角に著しく力点が置かれている。言い換えれば、「非活動階級の利益が活動階級の利益に対し優位に立つ傾向」(野田 2004, 17)が強調されているのである。

では、このように「所有」の側からのアプローチが前面にあらわれるヒルファディングの株式会社論に対して、ゾンバルトのそれはいかなる特徴を有しているのであろうか。次節では、ヒルファディングとの対比を念頭におきつつゾンバルトの株式会社論を検討したい。

IV. ゾンバルトの株式会社論 : 資本調達プロセスにおける「民主化」と企業家による「経営」支配の論理

ゾンバルトが証券制度およびそれと密接に関連する企業形態である株式会社について初めて自説を展開することになるのは、彼自らいうように(Sombart 1927, 151 : 訳 253), 1903年に公刊された著作『19世紀のドイツ国民経済』(Sombart 1903)においてであった。ゾンバルトは、本書で「証券 Effekten」をリーフマンと同じく「本質的に代替可能な有価証券」あるいは「資産総額に対する権利を認める法的証書」として規定し、この有価証券を媒介として債権・債務の契約関係が従来の「質的に刻印された人格的關係に代わって、非人格的な、したがって純粹に量的な貨幣關係」へと轉換されることになったと指摘する。ゾンバルトは、こうした債権・債務の契約關係における非人格化の過程をマルクスにならって「物象化 Versachlichung」と命名し(Sombart 1903, 219), さらにこの人格的關係の物象化への傾向が「資本主義的企業の株式と債券のなかで特にはっきりと現れている」(Sombart 1903, 221-222)と力説する。すなわち、彼の認識では、「その本性にならって非人格性へと突き進む資本主義的關係は、……近代株式会社において最も純粹かつ最も首尾一貫した形で表現されている」(Sombart 1903, 222)のである。

このように、「債権・債務關係の物象化」が確立された株式会社においては、もはや人格的な結びつきに依存しなくともそれなりに富裕な人であれば誰でも株式を購入し、当該企業の収益から配当を受ける権利を得ることができる。また、株

式所有者の企業に対する責任は、合名会社の場合のように無限に課されるのではなく、投下した金額の高さに応じて厳密に制限されており、しかも株主は所有する株式をいつでも任意に他者へと譲渡することが可能である。こうして、ゾンバルトは、株式会社をより広い範囲にわたる一般大衆からそれぞれごくわずかの貨幣額を収集することにより、1つのいっそう大きな資産総額を形成する「資本調達の新しい形態」として捉えたうえで、「資本主義の民主化とその最終的な安定」とがまさしく株式会社という大企業形態において初めて実現されることになったと主張するのである (Sombart 1903, 92)。

『19世紀のドイツ国民経済』で示された証券および株式会社に対する以上のようなゾンバルトの認識 — とりわけ債権・債務関係における「物象化」を重視する彼の視角 — は、すでに本論文第2章でも触れられたように、その後の彼の著作のなかでも繰り返し強調されている。たとえば、『ユダヤ人と経済生活』第6章「経済生活の商業化」⁽¹⁰⁾において、ゾンバルトは次のように述べている。

有価証券においては、…… 人格的ではなく、物象化された *versachlichtes* 債務関係 (あるいは債権関係、つまり広義の信用関係) が体化 *verkörpert* されている。それゆえ、有価証券の成立は信用関係物象化の外的表現である。有価証券の成立それ自体は、物象化という連鎖の一つの環をなすに過ぎない。物象化とは、あらゆる盛期資本主義の本質にとって、ほかのいかなる過程よりも特徴的な現象なのである。(Sombart [1911] 1928, 61: 訳 100)

さらにゾンバルトは、改訂された『近代資本主義』第2版においても、「最も純粹なる資本主義的企業」(Sombart [1916] 1987b, 153)である株式会社を特徴づける決定的なメルクマールが、「徹頭徹尾遂行された資本関係の物象化 *Versachlichung des Kapitalverhältnisses*」(Sombart [1916] 1987b, 151)にあることを指摘し、そこにおいて資本家が企業から解放され、「事業 *Geschäft*」が企業家という人格から分離される傾向が現れることに注目している。

このように、ゾンバルトは「物象化」という特性を有するがゆえに株式会社を「資本主義の本質に相応しい企業形態」(Sombart 1927, 728)として見なすのであるが、株式会社におけるこうした債権・債務関係の「物象化」、言い換えれば「未知の者同士の債権・債務関係の客観化」(=「非人格的信用関係」の成立)(Sombart [1911] 1928, 62: 訳 101)が今日の資本主義に対してもたらす経済的

メリットとして、彼はさしあたって 1. 株式会社それ自体の存在の永続性, 2. 貨幣資本の容易な調達, 3. 信用を媒介としたより大規模な資本主義の拡大可能性, の3つを挙げている (Sombart 1927, 728) . なかでも, ゾンバルトの見るところでは, 株式会社の創立による資本調達の簡易化とそれにもとづく (株式) 資本形成の拡大は, 「盛期資本主義経済」の発展にとって著しく重要な役割を果たすものであった (Sombart 1927, 200-201 : 訳 331-332) .

さて, それでは「盛期資本主義経済」の生成・発展のために不可欠なファクターであると規定される「資本」とは, ゾンバルトにとってそもそもいかなる概念として把握されているのであろうか. ゾンバルトは, 「資本主義」 (= 「資本主義的企業」) の最大の目的が, 「利潤の再生産」ないし「資本の価値増殖」を実現させることにあると把握しているが, その際, 彼はかかる目的を実現させるために用いられる物的資産のことを「資本」と呼んでいる (Sombart 1902a, 195) . 要するに, ゾンバルトにおいて「資本」とは, 「資本主義的企業」の至高の目標である「最大限可能な利潤獲得」を達成させるための手段にほかならず, そうした意味で彼は「資本」を「資本主義的企業の物的基礎」 (Sombart 1927, 134 : 訳 227) と表現している. くわえて, すでに見たようにゾンバルトが株式会社を「資本主義的企業」の典型的形態として捉えていることを想起するならば, 彼における「資本」とは, まさしく「株式会社の資本」を措いてほかにはない (Sombart 1927, 134 : 訳 227) (11).

こうして, ゾンバルトは, 「資本」を株式会社が「資本主義的生産」を遂行するために必要とする「生産基金 Produktionsfonds」と同義のものを見なしたうえで (Sombart 1927, 132 : 訳 223-224) , かかる観点から高利貸し財産を「資本」と同一視しようとする見方を厳しく批判している. すなわち, 彼によれば, 「他人に貸して貸付利子を受けとる貨幣と, 資本主義的企業の根底に存在する基礎との間には, 明らかに著しい相違がある」 (Sombart 1927, 133 : 訳 225-226) のであり, 「資本」と高利貸し貨幣とは徹底して区別されなければならないのである (12).

株式会社における「資本主義的生産」を遂行するための「生産基金」として「資本」を把握するゾンバルトの見解は, さらに資本主義的生産活動をともなうことなく, つまり利潤の獲得を実現させることなく, ただ利子の取得を可能にするに過ぎない「1つの特殊な構成体」, すなわち「擬制資本」を「資本」の範疇に含める立場への批判をも引き起こすことになる. ゾンバルトは次のようにいう.

今や、ここに 1 つの特殊な構成体について述べておかなければならない。それは、厳密な意味ではなんら資本ではなく、資本の種類のうちにも掲げることとはできないのであるが、しかし真実の資本との間に多くの共通する特徴を有しており、そのために多くの人々が誤ってそれを資本であるとし、またしばしば資本と混同されているものである。すなわち、それは利子の取得を可能にする貨幣総額（法律的に言えば財産）であって、資本主義的企業の基礎として用いられるのではないものである。それは、つまるところ擬制的な量 **fiktive Größen** に過ぎないのであって、けっして現実の価値をあらわすものではない。むしろ利子の資本化 **Kapitalisierung der Rente** によって計算上生じるに過ぎないものであり、したがって利子率あるいは利潤率の高さ、あるいは資本化の比率に応じて、それぞれ異なった大きさを示すものである。／ この構成体に最初に注目したのは、おそらくシスモンディ …… であって、彼はこれを想像資本 **Capital imaginaire** と名づけた。次いで、それは特にマルクス …… によって詳細かつ根本的に扱われたのであり、それ以来、擬制資本 **fiktives Kapital** の名で知られているものである。この名称は、私にはあまり適当なものではないように思われる。もし強いて資本という語でそれを呼ぶならば、消極資本 **negatives Kapital** と呼ぶか、あるいはむしろ — 商用語にならって — 受動資本 **passives Kapital** と呼んだほうがよかったであろう。だが、最もよいのは資本という語をまったく用いずに、利子基金 **Rentenfonds**、利子元本 **Rentenstock**、利子財産 **Rentenvermögen** という言葉を用いることであると思ふ。／ …… いわゆる資本市場 **Kapitalmarkt** — これは取引所の通り語であるが — を形成している金額の大部分は、こうした利子基金であり、消極資本なのであって、それは真実の資本とはなんの関係ももたないのである。（Sombart 1927, 136-138：訳 230-233）

上記の引用文から明らかなように、ゾンバルトの認識では、「擬制資本」とは、「利子の資本化によって計算上生じるに過ぎないもの」であり、それは株式会社における利潤獲得、生産力の向上に実際に貢献するものではありえない。したがって、それは「資本」の名を冠するに価するものではなく、むしろ「利子基金」・「利子元本」あるいは「利子財産」とでもいったほうが適したものである。ゾンバルトは、こうして引用文中に見られるシスモンディやマルクスの議論にくわえ

て、前節で検討したヒルファディングの擬制資本論、つまり「株式資本の擬制資本化」（＝「利潤を生む資本の利子を生む資本への転化」）という論理とその分析それ自体に対しては高い評価を与えながらも（Sombart 1927, 128：訳 217），計算上生ずるに過ぎない利子の取得を可能にする「擬制的な貨幣総額」を「資本」と呼ぶことには反対している。

このように、ゾンバルトがヒルファディングによって考察された「擬制資本」概念を「利子基金」ないし「利子元本」として把握すべきであると主張する背景には、資本観に対する認識の相違とならんで両者の株式会社論、とりわけその支配論に対する理解の相違があるように思われる。すなわち、ヒルファディングにあっては、前節で見たように、擬制資本と現実資本との差額である創業者利得の一括先取りにもとづく大株主の寡頭支配、要するに再生産過程の外部にある所有の側からの産業（経営）支配が重視されているのに対して、ゾンバルトにあっては、株式会社の本領は、まずもって生産活動にもとづく利潤獲得にこそあるのであり、その限りで「所有と経営の分離」が明確に説かれている。かくして、ヒルファディングとは対照的に、「所有」よりも「経営」、その「経営」を現実にならう「指導的経済主体」としての「資本主義的企業家」の果たす役割の重要性が強調されている点にゾンバルトの株式会社論における最大の特質があると考えられる。そこで以下では、企業家による経営支配という側面に焦点を合わせつつ、その際看過しえない資本調達の問題にも意を用いながらゾンバルトの株式会社論についてさらに考察を進めていきたい。

さて、「盛期資本主義時代」に特有の企業形態である株式会社（Sombart [1916] 1987b, 162）とそれを率いる「指導的経済主体」としての資本主義的企業家との関係を探るうえで、まず注目しなければならないことは、ゾンバルトにおいては「本来著しく人間的な心的気分」であったはずの企業家の利潤欲ないし営利衝動が、企業組織の目的それ自体へと「客観化される」と把握されていることである。彼によれば、真の企業家とは、ジューメンズ兄弟にせよ、ラーテナウ父子にせよ、けっして自己の個人的な貨幣欲に執着するようなことはなく、「事業への関心」にもとづいて自ら属する企業の利潤獲得に専心することのできる人物にほかならない。利潤追求という「きわめて主観的な動機は、企業家にとっては、ただちに彼の事業のために客観化される」のであり、資本主義的企業家である以上は、望むと望まざるとにかかわらず、企業における利潤の向上、物的資産における価値の増殖の追求を自らの「使命」として自覚する必要がある。かくて、企業家の「動

機は個人的な恣意から離れ、客観化される」のである（本論文第1章参照）⁽¹³⁾。

ゾンバルトは、このように企業家の営利欲が「資本主義的企業」(＝「株式会社」)の目的へと重ね合わされるプロセスを決定的に重視し、私欲を排除した企業のための「客観的な営利衝動」が企業家に不可欠の資質であることを力説する。このような基本的特性を備えたすぐれた企業家が、一方では労働者を教育・陶冶し、個別企業間の革新的結合を主導する「組織者」として、他方では計算・投機・交渉の才能に秀でた「商人」として機能することによって従来の経営形態では想像にも及ばなかった高い収益を実現させるのである（Sombart 1909, 728-739；1925, 17-20；1931, 271-274）。したがって、ゾンバルトの認識では、機械化・合理化が著しく推し進められた「資本主義的企業」においても指導者的能力を有した企業家の存在意義は、いささかも減じられることはない。彼は次のようにいう。

この機械化された世界のなかで、人間的個性のもつ意味が縮小されたと考えるならば、それは許すことのできない誤謬である。事實は、その正反対である。個々の人間 — もちろん傑出してすぐれた人間 — のもつ意味が今日ほど経済生活において大きかったことは、かつてない。…… / …… 資本主義的企業は、1つの統一体としてますます巨大な、ますます複雑な機械となってくる。けれども、— どんな機械でもそうであるように — この機械を使いこなす人間が必要であり、これは機械が複雑であればあるほど、いっそうすぐれた知性をもつ人間でなければならない。…… / …… すなわち、指導的企業家の頭脳である。（Sombart 1927, 40：訳 75-76）

こうして、ゾンバルトは「資本主義的企業」(＝「株式会社」)の経営にあたっては知的な企業家の指導力が絶えず必要であると指摘し、株式会社において実質的な支配権を握るのは、大株主ではなく、あくまで革新的経済活動を遂行する企業家であることを強調する。すなわち、「株式会社という形態は、意志の強い、かつ才能豊かな企業家的資質を備えた人間が支配を行うためにとりわけ適している」（Sombart 1927, 738）というのである⁽¹⁴⁾。さらに、ゾンバルトは次のようにも述べる。

…… なによりも株式会社において資本主義の要求に合致する肉体が作り出されるのであり、そのなかで初めて資本主義的精神は完全に自由に展開しう

ることになる。株式会社は、大きく、抵抗力があり、柔軟で、不死のものである。株式会社とは、企業家の才能が最も容易に発揮されるための手段である。そして、株式会社とは、冒険意欲にあふれた企業家活動が最大限自由に遂行されうるための基盤である。（Sombart 1927, 739）

資本の証券化ないし株式化を通じて債権・債務の契約関係が「物象化」された株式会社では、個人的同族的企業形態をとる合名会社とは正反対に、誰もが企業への出資に参加することができるようになり⁽¹⁵⁾、いわゆる「資本主義的出資関係の著しい民主化 Demokratisierung」（Sombart 1927, 222：訳 372）がもたらされる。その場合、株主はもはや人格的な結びつきや個人的な関係にもとづいて出資を行うのではなく、その唯一の評価基準は、当該企業の客観的な収益業績、すなわち資本主義的企業家の経営手腕に対する「信用」（＝「信頼」）に求められる。かくして、企業家活動の実践と貨幣所有との結合が偶然性に依拠していた前資本主義的な個人企業・合名会社とは対照的に、株式会社においてははかかる偶然性は完全に除去され、「資本」は最もすぐれた「経営」を行う企業家のもとに帰することになる。要するに、ゾンバルトによれば、「盛期資本主義経済」に固有の企業形態である株式会社とは、資本調達プロセスを介して最も有能な企業家を選別しようとするある種の民主的な「信用機関」にほかならず、その意味でそれは「天才のための足場」としての役割を果たすものなのである（Sombart 1927, 220：訳 369）⁽¹⁶⁾。

これまでの考察から明らかなように、ゾンバルトは株式会社の核心が「資本関係の物象化」にあるとしたうえで、先に見たリーフマンと同様、資本の証券化にもとづく脱人格化された信用関係とその帰結としての資本調達の簡易化および資本形成の大規模化を実現させたことをその本質的特性として重視している。他方で、株式会社に集積された莫大な資本は、「生産基金」として「経営」の担い手である企業家へと委ねられ、彼ら少数の革新者によって利潤獲得・資本価値増殖のための手段として用いられる。ゾンバルトにあっては、このように株式会社における「資本所有」と「経営」の機能とはそれぞれはつきりと区別されており、そこでは企業家は資本所有を含めた一切の「副次的機能」から解放され、「純粋な企業家」として自らの「使命」である「企業のための客観的な利潤追求」にのみ専念することができるようになる。すなわち、株式会社とは、不特定多数の人々が自らの「信頼」を付託するという形で企業に対して出資するというその資本調

達プロセスの観点から見ても、また真に企業家的資質を備えた人物に「経営」の任務にあたらせるというその指導者選別のプロセスの観点から見ても、近代資本主義の生成・発展を支えるうえできわめて適合的なシステムであるとゾンバルトは見なしていたのである。ただし、ゾンバルトの認識では、株式会社を統治・支配する権限を握るのは、これまでも繰り返し指摘してきたように、無数の株主たちではなく、あくまで「選ばれた経済主体」である企業家でなければならない。彼は次のように述べている。

株式会社とは、近代民主主義を映し出す鏡である。すなわち、擬制上では国民（株主）が支配するが、現実には株式会社のなかで様々に構成される少数の権力者たちの一団が支配を行うのである。（Sombart 1927, 735）

分散した大多数の株主からの「信頼」（＝資本）を負託された以上、株式会社における実際の支配権を掌握するのは、「少数の権力者」たる企業家でなければならない。なぜなら、企業家に経営の全権を認めるのでなければ、彼らが本来もっているはずのすぐれた経営能力が十全に発揮されなくなる可能性があり、かくして生産力の減退とそれにともなう経済発展の停滞を引き起こす恐れがあるからである。すなわち「盛期資本主義経済」においては、「ごく少数のとりわけ有能な経済的指導者」としての企業家に対して「より大きな絶対的権力」（Sombart 1927, 746）を与えるべきであるというのがゾンバルトの一貫した立場であって、彼のこうした考えを最も理想的な形で具現化したシステムこそが「少数者支配機構」としての性質を備えた株式会社であったのである。

V. おわりに

本章では、ゾンバルトの株式会社論の特質を主としてヒルファディングの議論との比較検討を通じて描きだそうと努めてきたが、そこで明らかになったことは、ヒルファディングが大株主による産業支配・経営権の掌握のうちに株式会社支配の本質を見出そうとするのに対して、ゾンバルトは、少なくとも理念上では、株式会社を「所有と経営の分離」が確立された民主的な資本調達システムとして捉えようとしていたということである。この点を踏まえたうえで、以下本章の結論を述べることにしたい。

本論で見たように、リーフマンによって剔出された帝政期ドイツの経済的状況、すなわち証券制度の飛躍的な発展と株主の広範な分散化、さらにはそれにもなう株式会社形態の大規模企業の急激な増加といった諸状況は、ヒルファディングのみならず、ゾンバルトにとってもとりわけ 19 世紀中葉以降の「盛期資本主義経済」を象徴する最も重要な特徴として認識されていた。事実、リーフマンの証券資本主義論に少なからぬ刺激を受けたゾンバルトは、「盛期資本主義時代」を「証券の時代」とも形容していたのであり（Sombart 1927, 200：訳 331），証券ないし株式と株式会社にかんする考察は、彼にとって現今の「盛期資本主義経済」の特質を解明するうえで必須の研究課題として見なされたのである。

ヒルファディングの株式会社論がリーフマンと同じく「資本の証券化」による「全資本の動産化」を理論的前提として展開されているのとまさに軌を一にするように、ゾンバルトもまた有価証券にもとづく「資本関係の物象化」つまり「債権・債務関係の脱人格化」を彼の株式会社論の中核に据えていた。すなわち株式を媒介として初めて債権者たる株主はもはや人格的な繋がりに依存することなく、企業に対する資本出資を行うことが可能となったのであり、その際個々の株主が重視したのは、ただ資本主義的企業家の事業遂行能力とそれによって達成された実際の企業収益のみであった。要するに、ゾンバルトの認識では、株式会社の経営は事業の才覚に恵まれた、株主からの「信用」によって選ばれた「指導的経済主体」である企業家が担当すべきものであって、いかに大株主であろうとも企業家としての資質・能力をもたない者は経営に直接関与することを差し控えるべきなのである。

このように、ゾンバルトは企業家を主軸とする動的な経済発展が実現されるための「信用機関」として株式会社を重視したのであり、まさしくそれゆえに、彼は株式会社を「盛期資本主義経済」に特有の「資本主義的企業」として規定した。「物象化された」資本調達システムとしての株式会社形態の大規模企業と、それを組織的な基盤として展開される企業家の革新的経済活動とは、ゾンバルトにとって「盛期資本主義経済」を招来・発展させるための決定的に重要なファクターであったのである。

注

- (1) 近年の重要なゾンバルト研究の成果（Appel 1992；Lenger 1994；Backhaus 1996abc；2000）を含めて、管見の限り、ゾンバルトの株式会社論を正面から分析対

象に据えた外国語のモノグラフは確認することができない。それゆえ、ここでは関連する邦語の研究文献に注目しておきたい。まずゾンバルトの株式会社論を株式会社発生史の観点から批判的に検討したものとしては、大塚久雄の研究（大塚 [1938] 1969, 74-90）がある。大塚はゾンバルトの株式会社発生論を「コンメンダ起源説」として捉え、これを「理論的にも史実的にも到底成立しえない」議論として明確に退けている。ここでは大塚によるゾンバルト批判の正否に立ち入ることはできないが、しかし大塚の関心は総じて「株式会社の発生」にかんするゾンバルトの歴史的な考察に向けられており、それゆえ株式会社が現実の「盛期資本主義経済」に及ぼす影響についてゾンバルトがいかに認識していたのかという本稿の重視する観点にはそれほど詳しい分析を行っていない。

大塚による先駆的な業績以外でゾンバルトの株式会社論を扱ったモノグラフとして逸することができないのは、鈴木芳徳氏の論稿（鈴木 1981）である。鈴木氏は、ゾンバルトの株式会社論の核心が「資本関係の物象化」（氏の表現では「資本関係の物化」）にあることを的確に捉えており、またゾンバルトの証券および株式会社にかんする議論の背景には、同時代を代表する経済学者であったリーフマンやヒルファディングとの相互的な影響関係があったことを示唆している点で注目に値する。ただし、ゾンバルトとヒルファディングとの株式会社論における具体的な相違点までは立ち込んだ考察がなされておらず、本章では鈴木氏によって残されたこの課題の一部を果たすことも意図している。ちなみに、ゾンバルトとヒルファディングとの学問上の繋がりについて一言しておけば、ヒルファディングはゾンバルトの『近代資本主義』初版の刊行後まもなく学術誌に書評論文を寄稿しており（Hilferding 1903）、その経済理論に早くから関心を示していたと推察することができる。なお、本稿のテーマに関連すると思われる近年の研究報告の成果としては、恒木（2006）がある。

- (2) リーフマンの証券資本主義論を検討するにあたり、本稿では彼の代表作である『持株会社と金融会社 — 近代資本主義と証券制度にかんする研究』（Liefmann 1909）をテキストとして使用する。この著作は、1909年に初版が刊行されて以来、1931年の第5版にいたるまでリーフマン自身によって実に4度の改訂がなされているが、本稿では、このうち初版とともに1923年に出版された第4版のテキスト（Liefmann 1923）からも引用を行う。なぜなら、ゾンバルトがリーフマンの著作において証券制度にかんする「原理的な考察が行われている」としてその議論に注目するとき、彼が参照しているテキストが第4版のものだからである（Sombart 1927, 151: 訳 253）。ちなみに、この第4版の副題は「近代証券資本主義にかんする研究」となっており、初

版の副題とは微妙に異なっている。とはいえ、リーフマンが「証券資本主義」、すなわち株式会社がその支配的企業形態となる時代を「近代資本主義」と同義に捉えていたという事実になんら変わりはない。

なお、同時代の日本においてリーフマンの証券資本主義論に逸早く注目し、それを自身の株式会社論に受容したのが、上田貞次郎であった。上田は、主著『株式会社経済論』（上田 [1913/1921] 1975）のなかで株式会社の本質が「事業に対する放資を株券と称する有価証券の形態に引直すに依りて其の売買質入を便利ならしめ、固定したる資本を流動自在なるものに変ずること」にこそあると主張し、株式会社のこの作用をリーフマンにならって「資本の証券化 Effektivierung」ないし「財産の動化 Mobilization」と呼んでいる（上田 [1913/1921] 1975, 81）。さらに、上田は次のようにも述べる。

或る学者は有限責任と云うことに重きを置きて、之れあるがために株式会社は公衆の資本を吸収すと説けども吾人は之れを採らず。有限責任は此の點に関して重要な制度たるには相違なしと雖も株式会社の本領は之れにあらずして株券にあり。（上田 [1913/1921] 1975, 82）

このように、上田の株式会社論の特徴は、有限責任よりもむしろ資本の証券化・株式化とその帰結としての「資本の動化 Mobilisierung」（上田 [1913] 1975, 423）が重視されることにある。この上田と福田徳三および関一との間で株式会社の経済的特質をめぐる大正期に論争が行われたことは、研究史上周知の通りである（晴山 1981, 173-186；鈴木 1983, 144-159）。上田の株式会社論、特に西欧経済思想の影響のもとに彫琢された彼の所有・経営分離論と企業者職分論については、晴山、鈴木両氏の上記研究にくわえて、上田貞次郎没後の記念論集に寄稿された上田辰之助の論稿（上田 1942）が今日なお有益である。近年の重要な研究成果としては、西沢（1995, 155-162）、あるいは柳澤（2008, 45-51）を挙げるができる。

（ 3 ） リーフマンは、このようにみずから企業活動に従事することなく、ただ大企業の収益にのみ与ろうとする不労所得者層ないし金利生活者層が蔓延した現代社会の状況を、地主層が権力を掌握した中世的な「土地貴族主義 Grundaristokratie」あるいは「土地拝金主義 Bodenplutokratie」という用語になぞらえて「商工業拝金主義 industrielle und Handelsplutokratie」という言葉で表現している（Liefmann 1909, 32；1923, 23）。さらにリーフマンは、「こうした類の現象は、資本の証券化を抜きにしてはまったくもってありえなかつたであろう」とはっきりと指摘している。

（ 4 ） ただし、リーフマンのヒルファディングとゾンバルトに対する言及は、この両者が

マルクス主義的な経済理論の影響をあまりに強く受けすぎているという理由から終始批判的なものとなっている。また、特にゾンバルトに対しては、「貨幣証券 Geldpapier と資本証券 Kapitalpapier とのあいだを基本的に区別するという観念」が欠落していると非難している (Liefmann 1923, 20)。

(5) 『金融資本論』における Die Mobilisierung des Kapitals を「資本の動化」と訳すべきであるとする馬場克三氏は、その理由について次のように述べている。

「資本の動化」の概念はヒルファディングによって定立されたものであるが、この言葉は一般には「資本の動員」という訳語をもって現されている。しかし動員というのは分散して存在するものを一定の場所に集中する意味であるのに対して、いまここで重要なことは、決定的に手離されて産業資本となった出資を有価証券の形で代表させ、これを売却可能なものとすることによって、出資者の手許に再び自由にこれを貨幣形態でとりもどす道を開いたこと、産業資本の証券化による可動性、換貨性の付与ということである。それは分散しているものを手許に引きよせるのではなくして、むしろ手許に拘束されるべきものの解放を意味している。したがってヒルファディングの Mobilisierung は言葉通り、ここでは「動化」と訳すべきものである。(馬場 [1964/1978] 1987, 53)

馬場氏によれば、株式会社は「資本の動化」の基礎のうえで「はじめて広く社会の隅々から資本をよび集めることができることになる」のであり、それゆえ『動員』は『動化』の結果として生起するのであって、もしも『動員』の面のみが強調されて『動化』の意義が忘れられるとすると、株式会社理解の重要なポイントが見失われることとなる危険がある(馬場 [1964/1978] 1987, 54)。このように、ヒルファディングを援用しつつ「資本の動化」のうちに株式会社の核心を見出そうとする馬場氏のこの有名な解釈は、後に後藤泰二氏の研究(後藤 1970, 21)によっても継承されている。なお、馬場、後藤両氏のヒルファディング株式会社論把握については、松井編(1983, 157-161)も参照されたい。

ちなみに岡崎次郎訳の岩波文庫版では第2編の表題の Die Mobilisierung des Kapitals は「資本の可動化」と訳されている。しかし、岡崎訳では第2編の本文中にあらわれる Die Mobilisierung des Kapitals に対しては、「資本の可動化」ではなく、しばしば「資本の動員」という訳語が充てられている。近年では中田(1993, 178, 注4)が「資本の流動化」という訳語を用いている。本稿では、前節におけるリーフマンの議論を踏まえたくて「資本の動産化」に訳語を統一する。

(6) ヒルファディングの創業者利得論およびその形成のメカニズムについては、周知の

ように、経営学、会計学、さらには経済学の各分野からすでに数多くのすぐれた研究成果が公にされている。代表的な先行研究として、別府（1964）、後藤（1970）、片山（1972; 1973）、鈴木（1974）、野田（1981）、中田（1993）を、さらに「マルクスの株式会社論の継承と発展」という視角からヒルファディングの株式会社論ならびに創業者利得形成のメカニズムを考察したモノグラフとして高山（1983）を挙げておきたい。

- (7) ヒルファディングの株式会社論を「資本所有の集中にもとづく支配集中機構」として把握する立場をとる主な先行研究としては、後藤（1970）、鈴木（1974）、野田（1981）、中田（1993）などがある。
- (8) 岡崎訳（岩波文庫版）では、*Eigentümer minderen Rechts* は、「不完全権利の所有者」と訳されている。「より少ない権利しかない所有者」という本文中の訳語については、高橋（2007, 54）の解釈にしたがった。
- (9) 株式会社にかんする経済学的な分析を行ったパッソウ（Passow 1922）もまた、ヒルファディングと同じく、株式会社における大株主支配の論理を積極的に提唱した有力な論者の1人であった。パッソウによれば、「大株主は金融上大規模に〔株式会社に対して〕出資しているがゆえに支配機構の構成員であり、彼らは支配機構において議決と投票権をもととするがゆえにそのような規模で出資を行う」。したがって、「大株主としての特性と支配の構成員としての特性とは、相互依存の関係にあり、実際に切り離されえない」ものなのである（Passow 1922, 331）。パッソウはさらにいう。「私見によれば、まさしく大株主と小株主との並存、大株主において行われている『企業家と資本家との兼務』ならびにこの主要な出資者と『単なる資本家』である小株主との対立は、株式会社の典型的な経済的性格の1つである」（Passow 1922, 333）と。パッソウのかかる認識は、『国家学事典』第4版に寄稿された論文「株式会社の経済的性格」（Passow 1923）にも引き継がれている。このなかでパッソウは、株式会社における大多数の株主が平等であるとか、あるいはドイツの株式法 *Aktienrecht* が民主的観点にならって構想されているといった考え方は、まったく実情に即したものとは言い難く、「株式会社の実際の構成は、はじめから貴族的な特徴を帯びており、それは今日においても維持されている」と主張する（Passow 1923, 134）。すなわち、彼によれば、大多数の小株主の企業に対する結びつきはきわめて緩慢であり、彼ら群小株主は企業経営についてなんら正確に把握することはなく、その統治に対して積極的に関与することもない。彼らは株主総会にも出席せず、貸借対照表も読まず、株式を一時的な投機的所有物としか見ていない。にもかかわらず、「こ

の種の株主は実際広い範囲に拡散しており、株式会社制度の発展は、著しくそうした役割に満足する人々の存在によって支えられている」とパッソウは指摘する (Passow 1923, 134) 。これに対して、巨額の出資を行う大株主は、統治機構にあつて直接的な影響力を行使し、永続的に企業に対して結びついている。株式会社における取締役会、監査役会の構成員は、大株主のなかから選出されることが慣例であり、彼らは事業の指導・経営にも強く関わることになる。こうして、パッソウは特に株式会社に対する銀行の影響力の大きさを重視したうえで、「株式会社においては、…… 資本所有と企業経営との完全な分離は見出すことができない」 (Passow 1923, 138) と結論づけている。

他方で、わが国において初めてヒルファディング『金融資本論』に依拠しつつ株式会社における大株主寡頭支配の論理を提唱したとされる中西寅雄 (晴山 1982, 159-160; 鈴木 1983, 159, 注 3) も同様の立場を示している。中西は主著『経営経済学』の第 6 章「株式会社」のなかで次のようにいう。

仮りに株式分散の傾向が存するとするも、この傾向よりして株式会社の民衆化、資本の民衆化を説くを得ない。成程小株主も大企業に依る利子の分配に与ると云う意味に於てはそれは民衆化であろう。が、この意味に於ては公債の発行も民衆化であり、郵便貯金の普及も民衆化である。問題は何人が一般民衆より蒐集されたる貨幣を支配するかである。既に述べたる如く、この蒐集されたる貨幣を支配する者は大株主である。この點に於て株式会社は大株主に依る寡頭支配を本質とする制度である。(中西 1931, 454)

このように、中西は、ヒルファディングあるいはパッソウと同様、株式会社における「所有と経営の分離」を明確に否定し、「大株主の寡頭支配」にこそその核心があると主張している。ヒルファディングにならって株式会社を「資本家の会社」と把握する中西によれば、株式会社における「平等の原則」とは「資本を基礎としたる平等」にほかならず、それゆえ「株主の議決権も原則として資本の大きさに比例する」。かくして、中西は「此の株式会社に於ける平等の原則こそ総てのブルジョア的民衆主義と同様に寡頭政治を容易ならしむる基礎」であると見なすのである (中西 1931, 452) 。中西寅雄の株式会社寡頭支配論について詳しくは、晴山 (1982, 159-181) を参照。

(10) 「経済生活の商業化」については、本論文第 2 章の注 (10) を参照。

(11) ちなみにゾンバルトは、「人的結合体 Personalvereinigung」としての合名会社に対比させつつ「株式会社とは、1 つの資本結合体 Kapitalvereinigung である」 (Sombart 1916b, 152) とも述べている。

(12) ゾンバルトは、さらに次のようにもいう。

われわれが資本という言葉を用いるためには、それらの営利財産は資本主義的企業の枠内において価値増殖されるものでなくてはならない。私人の高利貸しが貸し付ける貨幣は、いかなる意味においても資本でないことはもちろんである。(Sombart 1927, 136 : 訳 230)

(13) このような企業家観をゾンバルトは一貫して保持していたと考えてよい。『近代資本主義』第2版第3巻に見られる次の主張は、その証左となるものといえよう。

資本主義的企業家である以上、どんな場合にも彼は資本主義的企業の繁栄、その事業の成功を — すなわち利潤の獲得を — 欲するよりほかはない。このように資本主義的企業家の主観的目的が資本主義的企業にしたがうこと *Mediatisierung* を、私は利潤追求の客観化 *Objektivierung des Gewinnstrebens* と名づけて、これによって従来、資本主義経済の意味と本質との解釈のうちに残されていた曖昧さを除去することができたと考えている。…… / …… この私の見解は、すべての資本主義的企業家 — 個人的にはいかに営利から遠く離れたところにいる人々であっても — の見解に完全に一致する。まことに事業の繁栄のなかに、すなわちまさに事業の収益のなかにある企業家が、自己の活動の意味を認識していないなどということがどうしてありえるだろうか。(Sombart 1927, 36-37 : 訳 70-71)

上記の引用文に続けて、ゾンバルトは、「ごく少数の、傑出した人々の言葉」として、「われわれは株主のために貨幣を儲けなければならない。それ以外にわれわれの使命はない。われわれの責任は企業が莫大な利潤を生む時にのみ果たされるのだ」というエミール・ラーテナウの発言や、あるいは自らの個人的動機としては常に「公共への奉仕」を説きながらも、その一方で「私と私の事業への出資者のためにそれ相応の利潤をも生み出すのでなければ、私の事業は成功ではなく、むしろ逆にまったくの失敗といったほうがよいだろう」という信念をもっていたヘンリー・フォードの発言を掲げている。つまり、ゾンバルトのいう「企業家の活動の意味」とは、まずなによりも「企業のための利潤追求」とその帰結としての「株主への収益還元」のうちに求められていたと考えられる。なお、ゾンバルトにおける資本主義的企業家の機能的類型的把握については、Sombart ([1913] 1920, 69-76 : 訳 80-87) , Sombart ([1916] 1987a, 322-324 : 訳 470-472) も見よ。またその企業家観の詳細については、本論文第1章を参照されたい。

(14) ただし、このようにいったからといってゾンバルトがヒルファディング的な株式

会社における大株主寡頭支配の現実をまったく看過していたわけではないことにも留意しておかなければならない。ゾンバルトは『19世紀のドイツ国民経済』のなかで「企業の社会的形態への移行が富に対して民主的に作用すると仮定するならば、それは子供じみた考えの証である」とも主張しており、「資本調達が取引所ないし銀行を媒介として行われるようになればなるほど、剰余価値の取得は、ますます少数の人々の手に集中することになる」とはっきりと指摘していた。すなわち、「資本力のある人間がますます容易に国民生産の収益からの乳脂 *Sahne* をすくい取るようになる」(Sombart 1903, 228) という傾向をゾンバルトは鋭く察知していたのである。さらに続けてゾンバルトは、「国民所得のますます多くの部分が金融グループや取引所サークルの手中へ移行するというこの傾向は、一国の社会生活の形成全体にとって最も重要な影響力を及ぼすものである」とも強調している。

このように、株式会社の収益が資本力のある金融グループや取引所サークルにいる一部の大株主によって収奪されつつあることを十分に認識しつつも、しかしながらゾンバルトは、その大株主たちが無条件に企業における経営権を支配・掌握し、その「乳脂」たる収益に与ることができるわけではないと考えていた。ゾンバルトは次のように述べている。

…… 支配する *herrschen* とは、資本主義経済の領域においては、まさしく企業家であることを意味する。大株主がこの支配活動を行きしめるのは、ただ彼が企業家としての知識とその能力を十分に保持している場合にのみ限られる。(Sombart 1927, 737)

この文言からもわかるように、ゾンバルトにあっては仮に大株主が経営支配を行うことがあるとしても、その場合、彼らには企業家的資質(=「経営」に対する才覚)が十分に備わっていなければならないという前提条件が付されている。「ごく少数の、才能豊かな企業家という偉大なるマイスターの手中に権力が集中したことによって、資本主義は本質的な発展を遂げることになった」(Sombart 1927, 747) というのがゾンバルトの基本的な認識である。

- (15) ゾンバルトによれば、株式会社は巨額の外部資本を募るためにも出資者に対して余計な不安を与えることのない「より大きな信用適格性 *größere Kreditwürdigkeit*」を備えておく必要がある。かくて、ゾンバルトは株式会社における「信用適格性」を保証する特徴として、第1に「資本関係の物象化」、すなわち資本が個人の都合や恣意から解放されていること、第2に実体財産の保全が法定されていること、そして第3に業務内容が公開されていること、を挙げている(Sombart 1927, 752-753)。かか

る特性をもつがゆえに、株式会社は、「株式原理を通じておそらくは初めて出現したであろう公衆 Publikum に対して訴えかける」ことができるのであり、こうした「企業への出資を求める公開の呼びかけ öffentliche Anruf」こそが、株式会社をして「社会化 Vergesellschaftung」された組織としての地位を保たしめるのである（Sombart [1916] 1987b, 141）。なお、ゾンバルトは株式会社を「生産力の社会化 Vergesellschaftung der produktiven Kräfte」が実現された組織としても捉えようとしているが（Sombart [1916] 1987b, 151）、彼のかかる見解には株式会社の資本を「個人資本 Privatkapital に対立する社会資本 Gesellschaftskapital」と見なし、かくて株式会社を「個人企業 Privatunternehmungen に対立する社会企業 Gesellschaftsunternehmungen」として規定したマルクス（Marx [1894] 2004, 427：訳 556）からの影響があるように思われる。

- (16) ゾンバルトは、「資本調達プロセスの最大の意義」が「それを通じて新しいタイプの経済指導者が創出される」ことにあるとしたうえで、次のように述べている。

この新しいタイプとは企業家である。…… / 経済生活は、それ [= 資本調達プロセス] を介して傑出した洞察力を備えた人間の指導のもとにおかれることになる。その人物は、個別の企業の発展のためにすぐれた見識と莫大な資金を駆使するだけでなく、なによりも重要なのは、さまざまな企業を結合し、全生産領域を掌握し、かつ支配することができるということである。（Sombart 1927, 759-760）

このような資本調達プロセスを媒介とした有能な企業家の選別という役割は、ゾンバルトの場合、すでに前章でも確認したように株式会社のみならず、「信用創造」を遂行する銀行に対しても求められている。ゆえに、本論でも見たように、銀行と株式会社は、「天才のための足場」として見なされるのである。

結 語

本学位請求論文では、ゾンバルトの「盛期資本主義経済」に対する認識を、特に企業家、信用、さらには株式会社という 3 つのファクターを検討することを通じて描きだそうと努めてきた。その際、筆者はゾンバルトの議論それ自体を内在的に分析するだけではなく、従来の研究ではほとんど注目されることのなかった、ゾンバルトと同時代の知識人、経済学者たちとの相互的な学問的影響関係にも関心を払いながら考察を進めてきた。かかる検討作業によって、ゾンバルトが彼の眼前に展開されていた現実の「盛期資本主義経済」をいかに認識し、それをどのように把握していたのか、さらにはそこでの彼の洞察にはいかなる同時代人との知的な学問上の繋がりが作用していたのかという問題が、多少なりとも明らかになったように思われる。以下では、これまでの考察から得た成果をもとにゾンバルトの「盛期資本主義経済」にかんする議論のいくつかの特徴について摘記・要約し、その内容を総括するとともに、あわせて筆者なりの今後の研究展望も述べることで本論文の「結語」に代えたい。

まず、ゾンバルトの議論のなかでも特に注目すべき点は、彼が自身の「近代資本主義」研究の初期の段階から「指導的経済主体」としての企業家を「資本主義的精神」の唯一の担い手として捉え、かくて企業家を「盛期資本主義経済」を牽引する最も重要な「原動力」として捉えていたということである。ゾンバルトの認識では、現今の「盛期資本主義経済」を主導するのは有能な企業家を措いてほかにはなく、こうして彼は同時代において卓越した力を発揮していた大企業家たち、わけても当時 AEG の取締役であった著名なユダヤ人企業家、ヴァルター・ラーテナウの思想に着目し、主としてこのラーテナウを介して「盛期資本主義経済」の最新の局面に相応しい資本主義的企業家像を彫琢しようと試みたのである。

ゾンバルトによって提示された企業家とは、個人的な私利私欲を超越した、企業ならびに株主のための「客観的な利潤追求」を志向する、ある種の天才的な人間類型としてスケッチされていた。すなわち、企業家は、「事業への関心」にもとづいて、一方では自らしたがえる労働者を「教育」・「陶冶」し、かつ各企業における「経営の結合」を遂行する「組織者」（＝「革新者」）としての側面と、他方では「投機」・「計算」・「交渉」の能力に裏打ちされた「商人」としての側面を兼ね備え、彼の究極の「使命」である「企業における最大利潤の実現」を果たすこ

とに自身の全エネルギーを注入し続けなければならない。そして、企業家のかかる経済活動を根底で支えているものは、事態を常に冷静に把握しようとする「知性」と、暴利を抑え、信頼や義務に対する忠実さを尊ぶ「道徳」という内面的な気質であった。

こうして、ゾンバルトによって構築された企業家像は、特にその「客観的な営利衝動」という基本的性格と「指導者」としての機能、さらには革新的な経済活動の遂行といった主要な諸特徴においてシュンペーターの企業家観に対して少なからぬ影響を及ぼすことになったと考えられるのであるが、そうした両者における継承関係の重要性にも増して看過しえないのは、ゾンバルトがかかる「盛期資本主義経済」に適合的な知的性格を備えた企業家と「現代」のユダヤ人企業家たちとの間に密接な内的連関があると確信していたことである。すなわち、ゾンバルトは、「異邦性」というユダヤ人に独特の「社会的諸条件」によって涵養された彼らに固有の「諸特性」、具体的には「抽象性」、「主知主義」、「目的志向性」、「可動性」、「不断性」、「適応能力」といった一連の特性が、「資本主義」ならびに「資本主義的企業家」と強い「内面的親和関係」にあることを強調し、ユダヤ人を「資本主義的企業家」となるのに最も適した民族として見なしたのである。

さらに、ゾンバルトは自ら「証券の時代」と命名した「盛期資本主義経済」における有価証券の急速な普及と、それにとまなう資本調達拡大にユダヤ人企業家たちが深く関わっていたという事実にも注目した。債権・債務関係の「脱人格化」・「物象化」を促進し、自由に譲渡可能な「可動性」と「抽象性」をもつ有価証券は、「抽象的存在」(＝「異邦人」)としてのユダヤ人企業家たちがグローバルな経済活動を展開するうえで必要不可欠な手段であったのであり、なかでも特に「株式」は、真にすぐれた企業家を選別し、彼の活動を信任するうえで決定的に重要な役割を果たした。かくして、ゾンバルトにとって「株式会社」とは、「盛期資本主義経済」を象徴する企業形態として捉えられ、またさらには1つの「信用機関」(＝「天才のための足場」)として規定されたのである。

さて、本論文では、先にも触れたように、ゾンバルトと同時代の知識人、経済学者たちとの学問的な継承関係、影響関係にも留意しつつ検討を進めてきた。かかる研究視角からゾンバルトの「盛期資本主義経済」にかんする議論を照射して見た場合、まず重要なテーマとして現われるのがゾンバルトにおける「動態的信用理論」の受容という問題であった。マクラウドを嚆矢とする「動態的信用理論」、すなわち信用創造理論は、「信用」を「将来収益に対する現在の権利」として把

握する見方を打ちだし、かくて銀行が「信用」(＝「資本」)を「無」から「創造」することを承認するという、従来にはない積極的な与信政策を提唱する議論であったが、こうした「新しい信用理論」をドイツ語圏に浸透させたのが、シュンペーターであり、あるいはハーンであった。工業後進国ドイツの発展のためには「革命的な力」としての企業家による革新的経済活動とそれを可能にする莫大な資本供与が必須であるとするゾンバルトにとって、「動態的信用理論」はまさしく時代の要請に即応した、きわめて当を得た議論として見なされたのであり、それゆえゾンバルトは、企業家を中軸に据える自身の「近代資本主義」論、就中、その核心をなす「盛期資本主義」論を補完するためにこの「新しい信用理論」を積極的に継承し、かつ受容したのであった。

このような「動態的信用理論」の受容の問題とならんで、本論文では「信用機関」として把握されたゾンバルトの株式会社論にかんしても特にヒルファディングの議論との比較分析という観点から考察を試みた。結論からいえば、ゾンバルトはヒルファディング的な擬制資本論、創業者利得の析出、さらにはそれにもとづく大株主による産業支配という論理をけっして頭から否定したわけではなかった。むしろ彼は、株式会社におけるそうした大株主寡頭支配の現実を認める発言さえしている。しかしながら、株主からの「信用」によって選ばれた企業家による「経営」と、それに依拠した生産力の向上のうちに「経済発展」の真の原動力を見出そうとするゾンバルトにとっては、仮に大株主が「経営」に直接関与するようなことがあるとしても、彼らに企業家としての資質ないし手腕が備わっていない場合には「経営」それ自体が立ち行かなくなり、かくして健全な「経済発展」もまた望めなくなる恐れがあると考えられた。ゾンバルトの認識では、「所有と経営の分離」が確立された株式会社において初めて企業家は革新的な経済活動に専心することができるようになるのであり、それこそがまさに「盛期資本主義経済」を主導する唯一の源泉なのである。

ところで、これまでも繰り返し述べてきたように、本学位請求論文の最大の目的は、現代の、現実の「資本主義」(＝「盛期資本主義経済」)に対するゾンバルトの認識を分析し、その経済学史・経済思想史上における意義を解明することにあつた。筆者のかかる研究目的は、序論でも指摘した通り、従来の研究史の批判的継承を意図して導かれたものにほかならない。すなわち、戦後から 1980 年代までに出された先行研究の関心はほとんどの場合、ゾンバルトとヴェーバーと

の「近代資本主義の歴史的な起源」をめぐる論争に向けられており、そこではしばしばヴェーバー研究の立場からゾンバルトを「批判すべき対象」として駆り出すケースが多かったように思われる。しかし、単に歴史的な「起源論争」という限定的な観点からゾンバルトの議論を追跡するだけでは — もちろんそれ自体は重要なテーマではあるとしても — ，ゾンバルトの「近代資本主義」研究に含まれたさまざまな議論の可能性、多様性を見失うことにもなりかねないという点にもわれわれは十分自覚的でなければならないだろう。実際、1990年代以降に公にされた、多様な側面ないし問題意識からゾンバルトを再評価しようとする数多くの意欲的なモノグラフの登場は、このことを証明しているようにも思われる。

しかし、こうした近年のすぐれた研究成果においても、これまで本論文が考察してきたような分析視角あるいは枠組みを用いてゾンバルトの「盛期資本主義経済」にかんする議論の核心に迫ろうとする試みは、見る限りほとんど皆無であったといっても過言ではない。それゆえ、先行研究にあってはゾンバルトにおける現実の資本主義認識の解明というきわめて重要な問題にかんしては甚だ不十分な理解にとどまっていたといわざるをえないのである。

われわれのこれまでの考察からも明らかなように、ゾンバルトの現実の資本主義認識、すなわち彼の「盛期資本主義」論を包括的かつ体系的に把握するためには、まず第1に資本主義経済を主導・牽引する「企業家」、第2にその企業家の経済活動を十全に展開せしめることを保証する「信用」、さらに第3には「信用機関」としての性格をもつ企業形態である「株式会社」という、以上3つのファクターを検討する作業が不可欠であったのであり、かかる作業を経た後に初めてわれわれは「動的な経済発展の理論」として評価されてきたゾンバルトの経済学体系、すなわち彼の資本主義観の具体的な内容を掴み取ることが可能となったのである。さらに言えば、従来、もっぱら「近代資本主義成立史論」の枠組みにおいてのみ論じられてきたゾンバルトの「ユダヤ的資本主義」論にかんしても、こうした検討作業を通じてようやく、実は同時代の「盛期資本主義経済」の内実を浮き彫りしようとしたゾンバルトの努力の一端であったことが明らかにされたといえるであろう。

ゾンバルトの経済学、わけても企業家を基軸に据える彼の「盛期資本主義経済」にかんする考察は、そのユダヤ人論、信用論、証券論、さらには株式会社論も含めて、今日なお振り返るに価する経済学説史上におけるすぐれた業績・遺産として見なされるべきものである。ゾンバルトの「盛期資本主義経済」の認識に密接

に関連するこれらの議論こそが、まぎれもなく彼の壮大な「近代資本主義」研究の中核を形成していたのであり、しかも企業家論に代表される彼の「盛期資本主義経済」に対する同時代の分析は、すでに見たように、シュンペーター、ヴェブレンをはじめとする当時の第一級の知識人・経済学者たちにも一定の持続的な影響を及ぼしていたのであった。ゾンバルトの「盛期資本主義」論は、その意味で彼の経済学体系の核心を占めるというだけにとどまらず、その議論は国際的にも広く深く波及していたといえるのである。かくして、われわれは、ゾンバルトにおける「盛期資本主義経済」の認識を解明するという本論文の課題を果たし終えたのであるが、しかしゾンバルトの経済思想の全体像をよりいっそう明瞭なものとするためには、ここで浮き彫りにされた議論にくわえてさらにその後の彼の資本主義観、すなわち第1次大戦以降の「晩期資本主義経済」に対するゾンバルトの見解についても詳細な検討を行うことが必要となろう。もとより、こうした課題に対する本格的な取り組みは、本研究の枠外にあり、これについては他日を期したいと思う。

Anhang

Werner Sombarts Auffassung vom Unternehmer, und seine Kredit- und Aktiengesellschaftstheorie : Zur Erkenntnis des „Hochkapitalismus“

Einleitung

Josef A. Schumpeters Ansicht nach war Werner Sombart (1863-1941) zusammen mit Max Weber und Arthur Spiethoff, einer der hervorragendsten Wirtschaftswissenschaftler der „deutschen neueren historischen Schule“ am Anfang des 20. Jahrhunderts (Schumpeter 1954, 815-820). Sein Hauptwerk, „Der Moderne Kapitalismus“ (1. Aufl. 1902), erregte großes Aufsehen unter den Akademikern in Deutschland aufgrund der Wortprägung „Kapitalismus“, ein Terminus, der damals noch nicht bekannt war (Passow 1918, 2-4).

Im „Geleitwort“ zu diesem umfangreichen Werk hält Sombart die „Motivreihen“ der kapitalistischen Unternehmer als die „letzte Ursachen“ für besonders wichtig, auf die der moderne Kapitalismus zurückgeführt wird. Laut Sombart kommen nur die Motivreihen der kapitalistischen Unternehmer als die „führenden Wirtschaftssubjekte“ in Betracht, um die wesentliche Eigenschaft des modernen Kapitalismus, vor allem des deutlich zu machen. Während die Motivreihen der Lohnarbeiter und Konsumenten als die „gelegentliche“, „zufällige“ vollständig abgelehnt werden, glaubt Sombart diejenigen der Unternehmer als die „konstant wirksamen und damit ausschlaggebenden“ zu erkennen (Sombart 1902, X X II). Diese Meinung änderte er auf Lebenszeit nicht.

Er behauptet auch in der neu bearbeiteten Aufgabe seines genannten Werks, deren Schwerpunkt der Forschung auf dem „Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus“ liegt, dass die „Beweggründe“ der kapitalistischen Unternehmer im Gegensatz zu denen der Arbeiter und Konsumenten die

„historisch eigenartigen“ oder die „entscheidenden“, „vorwiegenden“, und „prävalenten“ seien (Sombart 1927, 10). Sombart zufolge war es das besondere Kennzeichen des „hochkapitalistischen Zeitalters“, dass die „*gesamte Leitung im Wirtschaftsleben auf die kapitalistischen Unternehmer*“ übergegangen war, die sich nunmehr aus den Bindungen der Staatsorgane befreiten, als die Wirtschaftssubjekte die alleinigen Organisatoren des wirtschaftlichen Prozesses geworden sind. Er weist darauf hin, dass „gerade die hochkapitalistische Wirtschaft in ihrem gesamten Bau aus der schöpferischen Initiative *der Wenigen* hervorgewachsen ist.“ (Sombart 1927, 11-12)

In diesem Sinn spielten die kapitalistischen Unternehmer eine Rolle als „historische Triebkräfte“, aus denen der moderne Kapitalismus entstanden ist. Sombart beschreibt wie folgt : „Die ‚treibende Triebkraft‘ in der modernen, kapitalistischen Wirtschaft ist also der kapitalistische Unternehmer und nur er. Ohne ihn geschieht nichts. Er ist darum aber auch die einzige ‚produktive‘, das heißt schaffende, schöpferische Kraft, was sich unmittelbar aus seinen Funktionen ergibt. Alle übrigen Produktionsfaktoren: Arbeit und Kapital befinden sich ihm gegenüber im Verhältniss der Abhängigkeit, werden durch seine schöpferische Tat erst zum Leben erweckt. Auch alle technischen Erfindungen werden erst durch ihn lebendig.“ (Sombart 1927, 12) Seiner Meinung nach war der „Kapitalismus“ ohne Zweifel das „Werk einzelner hervorragender Männer.“ (Sombart [1916] 1987, 836) Aus diesem Grund ist die gründliche Untersuchung der Sombartschen Unternehmertheorie unbedingt notwendig, um sein ganzes wirtschaftswissenschaftliches System richtig rekonstruieren zu können. Deswegen besteht die letzte Aufgabe des Verfassers in diesem Artikel darin, das Gesamtbild von Sombarts Lehre des modernen Kapitalismus durch die eingehende Analyse seines kapitalistischen Unternehmerbilds zu skizzieren.

Die bisherige Erforschung der Sombartschen Unternehmertheorie wurde erst durch die Leistungen von Manfred Prisching geprägt, der die grundlegenden Funktionen des von Sombart dargestellten Unternehmers und seine psychischen Charakteristika im Vergleich mit den Unternehmerbildern von Weber und Schumpeter aufarbeitete (Prisching 2000). Weitere Forscher

sind R. F. Hébert und A. N. Link, die Sombarts Unternehmer als dem Schumpeterischen „Innovator“ zusammenfassten (Hébert und Link 1988, 157), H. Jäger, der das Sombartsche Unternehmerbild in Zusammenhang mit Hochindustrialisierung in Deutschland vor dem ersten Weltkrieg überprüfte (Jäger 1990, 720-726), A. Mitzmann, der die Einbeziehung der „Herrnmoral“ Nietzsches in Sombarts Auffassung vom kapitalistischen Unternehmer andeutete (Mitzmann 1988, 140), sowie F. Lenger, der den entscheidenden Einfluss des Sombartschen Unternehmerbegriffs auf den Schumpeters erläuterte (Lenger 1994, 234 ; 459. Anm. 69).

Mit Rücksicht auf diese Arbeiten analysiert der Verfasser zuerst die Eigenart des kapitalistischen Unternehmerbilds ausführlich, das Sombart in seinen früheren Werken und Aufsätzen gestaltete. Dann werden in Beziehung zu der Diskussion Sombarts um den kapitalistischen Unternehmer seine Betrachtung über die Juden und dazu seine Theorie des „Kredits“, der als ein unentbehrlicher Faktor für die Unternehmertätigkeit gilt, erörtert. Darüber hinaus bezieht er sich anhand des Hinweis von F. Lenger auch auf die Diskussion der zeitgenössischen berühmten Wirtschaftswissenschaftler, vor allem auf die Schumpeters, im Vergleich mit der Sombarts. Es ist eine der Hauptaufgaben dieser Untersuchung, die Gemeinsamkeiten der Anschauungen von Sombart und Schumpeter über den Unternehmer und auch ihrer wissenschaftlichen Erkenntnisse der kapitalistischen Wirtschaft hervorzuheben.

1. Die Motivation des kapitalistischen Unternehmers und ihre Objektivierung

In der Entwicklung der Sombartschen Unternehmertheorie ist sein Aufsatz „Der kapitalistische Unternehmer“, der 1909 im „Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik“ veröffentlicht wurde, von eingreifender Relevanz. In diesem Aufsatz versuchte Sombart den „Idealtypus“ des kapitalistischen Unternehmers mit seiner eigenen Methode zu konstruieren, dass er aus „der in einem modernen Allunternehmer betätigten Funktion“ das „Typische“ herausziehe und es zu einem „idealtypischen Gesamt-bilde“ vereinige

(Sombart 1909, 724). Von diesem Standpunkt aus bemühte er sich darum, die verschiedenen Materialien von Biographien, Memoiren und Briefen usw. der vielen großen zeitgenössischen Unternehmer sorgfältig zu überprüfen und dadurch das zur modernen kapitalistischen Wirtschaft geeignete Unternehmerbild zu gestalten.

Dabei hält Sombart zunächst den Ausspruch Walter Rathenaus für zutreffend, dass „wer am persönlichen Geldgewinn hängt, ein großer Geschäftsmann überhaupt nicht sein kann“ (Rathenau 1908, 81), und sieht „*das Interesse an seinem Geschäft*“ als „das lebendigste Interesse des Unternehmers“ an (Sombart 1909, 701). Ihm zufolge geht es dem kapitalistischen Unternehmer nicht um „die persönlichen Annehmlichkeiten und Genüssen des Reichtums“, sondern um „die Sorge für das Blühen und Gedeihen des Geschäfts“. „Seine Befriedigung wird er [der Unternehmer - M.O.] am letzten Ende aus dem geschäftlichen Erfolge schöpfen“ (Sombart 1909, 704), so konstatiert Sombart, und charakterisiert „das Gewinnstreben“ des Unternehmers folgendermaßen : „*dieses eminent subjektive Motiv objektiviert sich für den Unternehmer alsbald in dem Interesse für sein Geschäft.*“ (Sombart 1909, 706)

Aufgrund dieser Betrachtung behauptet er, „daß die treibende Kraft im kapitalistischen Wirtschaftsprozeß das Interesse des Unternehmers an seinem Geschäft, die Sorge um das Wohlergehen der Unternehmung ist.“ (Sombart 1909, 706) Seiner Meinung nach kommt es immer in der kapitalistischen Wirtschaft darauf an, „daß [...] jenes Plus an Sachvermögen in den Händen des kapitalistischen Unternehmers zurückbleibt.“ Deshalb sagt er folgendes : „Daß das Soll und Haben des Hauptbuchs mit einem Saldo zu Gunsten des kapitalistischen Unternehmers abschließe : in diesem Effekt liegen alle Erfolge wie aller Inhalt der in der kapitalistischen Organisation unternommenen Handlungen eingeschlossen.“ (Sombart 1909, 707)

Sombart denkt, diese Feststellung kann von niemandem in ihrer Richtigkeit angezweifelt werden. Das Streben des kapitalistischen Unternehmers ist nach ihm immer auf „das Wohlergehen seiner Unternehmung“, auf „die Blüte seines Geschäfts“ gerichtet. Der kapitalistische Unternehmer

mag wollen oder nicht, er muss nach Gewinn trachten. „Nicht weil er ‚profitwütig‘ ist, *sondern weil er ein kapitalistischer Unternehmer ist.*“ So schließt Sombart wie folgt : „Die Motivation [...] entzieht sich der persönlichen Willkür : *sie objektiviert sich.*“ (Sombart 1909, 708) Aus der bisherigen Darstellung ist es ersichtlich, dass Sombart das Wesen des kapitalistischen Unternehmers im über die „persönliche Willkür“ stehenden Erwerbstrieb, d.h. im „objektivierten Gewinnstreben“ sieht.

2. Unternehmer und Händler

Sombarts Auffassung nach sollte der „kapitalistische Unternehmer“ von zwei ganz unterschiedlichen funktionellen Faktoren, nämlich dem „*Unternehmer*“ und dem „*Händler*“ geformt werden. Er definiert einerseits den „Unternehmer“ als „ein Mann, der eine Aufgabe zu erfüllen hat und dieser Erfüllung sein Leben opfert“ und andererseits den „Händler“ als „ein Mensch, der lukrative Geschäfte machen will“. Und Sombart weist darauf hin, dass „die Konstante“ die Wesenheit des „Unternehmers“ darstellt, weil er ein bestimmtes fernes Ziel unentwegt verfolgen und es unbedingt verwirklichen will. Darum ist der Wechsel in der Zwecksetzung gegen seine Natur. Dagegen macht „die Variable“ den Grundzug des „Händlers“ aus, da seine Aufgabe darin besteht, sein Handeln der jeweiligen von ihm zu erkundenden Marktlage bedingungslos anzupassen. Also muss er Richtung und Art seiner wirtschaftlichen Tätigkeit flexibel wechseln können, sobald es die veränderte Konjunktur verlangt. Sombart behauptet, dass diese „zwei Seelen“, der Unternehmer und der Händler, „im kapitalistischen Unternehmer wohnen“, und „dort, wo das kapitalistische Unternehmertum zu seiner reinsten und höchsten Entfaltung kommt, in inniger Harmonie gemeinsames Werk vollbringen (Sombart 1909, 728-729). Im „Unternehmer“ sieht Sombart vier folgende „Menschentypen“ vereinigt (Sombart 1909, 730-732) : 1. den „*Erfinder*“, der nicht nur die technischen Neuerung einführt, sondern auch die ökonomisch - organisatorisch neuen Formen der Produktion und des Transportes bringt. 2. den „*Entdecker*“, der immer ein neues Absatzgebiet

erschließt und ein räumlich neues Feld für seine Betätigung ausfindig macht. 3. den „*Eroberer*“, der die Entschlossenheit und Kraft besitzen muss, alle Hindernisse, die sich ihm in der Weg stellen, zu überwinden. Und zuletzt erwähnt Sombart als die „bedeutsamsten Unternehmerfunktion“, 4. die des „*Organisators*“. „Organisieren“ heißt nach Sombart „viele Menschen zu einem glücklichen erfolgreichen Wirken zusammenfügen“, in konkretem Sinn, heißt „Menschen und Dinge so disponieren, daß die gewünschte Nutzwirkung uneingeschränkt zu Tage tritt.“ Deshalb muss der „Organisator“ zum ersten über die Fähigkeit verfügen, „Menschen auf ihre Leistungsfähigkeit hin zu beurteilen, die zu einem bestimmten Zweck geeigneten Menschen also aus einem großen Haufen herauszufinden.“ Dann muss er auch das Talent haben, „sie [Menschen – M. O.] statt seiner arbeiten zu lassen.“ (Sombart 1909, 732) Auf diese Weise sieht Sombart die wichtigen Obliegenheiten des Unternehmers als des „Organisators“ darin, „jeden Arbeiter an seine richtige Stelle zu setzen, wo er das Maximum von Leistung vollbringt und ihn immer so anzutreiben, daß er die seiner Leistungsfähigkeit entsprechende Höchstsumme von Tätigkeit auch wirklich entfaltet.“ (Sombart 1909, 732)

Seiner Ansicht nach sind es nicht die zahllosen Arbeiter sondern die wenigen vortrefflichen Unternehmer, die den bedeutenden Beitrag zur Entwicklung der kapitalistischen Wirtschaft leisten, denn er glaubt, dass die Unternehmer in allen Seiten den Arbeitern überlegen seien. Über seine Anschauung des Arbeiters äußert sich Sombart folgendermaßen : „Kann der Arbeiter noch nichts Rechtes, muß er systematisch erzogen werden. Das war natürlich in frühkapitalistischer Zeit eine noch viel häufiger und dringlicher auftauchende Aufgabe als heute.“ (Sombart 1909, 733) Im Gegensatz zu Brentano, der den Arbeiter als der auf seine Rechnung und Gefahr handelnde selbstständige Produzent betrachtet und daher ihn mit Unternehmer gleichsetzt (Brentano 1907, 19), hält Sombart einen Wesensunterschied zwischen dem Unternehmer und dem Arbeiter für selbstverständlich. Er lehnt die Unabhängigkeit des Arbeiters glatt ab und schätzt somit die historische Bedeutung der Führungsfähigkeit des Unternehmers hoch, durch die von „frühkapitalistischer Zeit“ bis „heute“ viele träge und genussüchtige

Arbeiter zu vernünftigen Produzenten erzogen werden sollten.

Anschließend berührt Sombart das Problem der rationellen und zweckmäßigen Betriebsgestaltung, deren Verwirklichung zu der wichtigsten Aufgabe gehört, die dem Unternehmer gestellt ist. Er beschreibt wie folgt : „Endlich liegt es dem Unternehmer ob, dafür Sorge zu tragen, daß die zu gemeinsamer Wirksamkeit zusammengeführten Menschengruppen in quantitativer wie qualitativer Hinsicht richtig zusammengesetzt sind und untereinander [...] in besten Beziehung stehen. [...] Es ist die bedeutsame Leistung der großen Unternehmer unserer Tage, daß sie das Ineinandergreifen vieler Einzelbetriebe zu einem Gesamtwerke möglich und ersprießlich gemacht : die ‚Kombination‘ der Betriebe in weitem Umfange durchgeführt haben.“ (Sombart 1909, 733) Laut Sombart funktioniert der „Unternehmer“ hauptsächlich als der „Organisator“, der sich immer darum bemüht, durch die Ausführung der „Kombination“ vieler Einzelbetriebe und die Erziehung von unreifen Arbeitern zu selbstständigen Arbeitern die Produktivität in einer Unternehmung zu erhöhen. Infolgedessen konnte er sicher die gewaltigen Gewinne erzielen, die in den bisherigen Produktionsverfahren und Betriebsgestaltungen ganz undenkbar waren. Es lässt sich daher daraus zweifellos sagen, dass Sombart den Begriff „Organisator“ im engen Zusammenhang mit der dynamischen und innovativen Unternehmerfunktion charakterisiert.

Diese Betrachtung Sombarts über die Funktion des „Unternehmers“ scheint mit dem von Josef A. Schumpeter als „Innovator“ gefassten berühmten Unternehmerbegriff fast vollkommen übereinzustimmen. Im Folgenden soll nun die Einwirkung des Sombartschen Unternehmerbilds auf Schumpeters Auffassung vom Unternehmer weiter verfolgt werden.

Bekanntlich fasst Schumpeter die dynamische Unternehmerfunktion und ihre Rolle zur wirtschaftlichen Entwicklung in seinem 1910 erschienenen Aufsatz „Über das Wesen der Wirtschaftskrisen“ wie folgt zusammen : „Das Wesen der wirtschaftlichen Entwicklung liegt darin, daß die Produktionsmittel, die bisher bestimmten statischen Verwendungen zugeführt wurden, aus dieser Bahn abgelenkt und in der Dienst neuer Zwecke gestellt werden.

Diesen Vorgang bezeichnen wir als die Durchsetzung neuer Kombination. Und diese neuen Kombinationen setzen sich nicht gleichsam von selbst durch, wie die gewohnten Kombinationen der Statik, sondern es bedarf dazu einer Intelligenz und Energie, die nur einer Minorität der Wirtschaftssubjekte eigen ist. In der Durchführung dieser neuen Kombinationen liegt die eigentliche Funktion des Unternehmers.“ (Schumpeter 1910, 285) Diese Einsicht Schumpeters ist in seinem frühen Hauptwerk „*Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*“ (1. Aufl. 1912) noch mehr erweitert und vertieft worden. In diesem Werk fasst Schumpeter den „Unternehmer“ als „eine Minorität von Leuten mit einer schärfern Intelligenz und einer beweglicheren Phantasie“ auf (Schumpeter 1912, 163) und erachtet ihn als „dynamischer“ und „energischer“ Typus (Schumpeter 1912, 128). So sieht er das Wesen der Unternehmertätigkeit als „das Agens der wirtschaftlichen Entwicklung“ (Schumpeter 1912, 147) in „der Durchführung neuer Kombinationen“, deren Art und Weise er nach vier folgenden Fällen klassifiziert : 1. „Produktion eines noch nicht bekannten Gutes“ ; 2. „Einführung einer neuen Produktionsmethode“ ; 3. „Erschließung eines neuen Marktes“ ; 4. „Gründung einer neuen Unternehmung.“ (Schumpeter 1912, 159) Um diese „neuen Kombinationen“ durchzuführen und zu realisieren, muss der Unternehmer die Rolle als „Führer“ spielen, der kraftvoll aus der Masse emporragt. „Der Unternehmer ist unser Mann der Tat auf wirtschaftlichem Gebiete. Er ist der wirtschaftliche Führer, ein wirklicher, nicht bloß scheinbarer Leiter wie der statische Wirt.“ (Schumpeter 1912, 172) Schumpeter ist der Meinung, dass „das energische Handeln“ des Unternehmers „das Grundprinzip wirtschaftlicher Entwicklung“ sei (Schumpeter 1912, 172).

In der obigen Darlegung wird deutlich, dass die Vorstellung Schumpeters vom „Unternehmer“ und seiner Rolle in der Wirtschaft der Sombarts sehr ähnlich ist. Vor allem zieht Schumpeter, wie oben schon erwähnt, bei seiner Gestaltung des dynamischen und innovativen Unternehmerbilds Sombarts Ausführungen über den Begriff „Organisator“ in Betracht. Aber der Einfluss der Sombartschen Analyse vom „Unternehmer“ auf Schumpeters Unternehmerbegriff beschränkt sich nicht nur auf die Unternehmerfunktion als den

„Organisator“. Beispielsweise passen die zwei von Schumpeter angeführten Fälle der „neuen Kombinationen“, d.h. die „Produktion eines noch nicht bekannten Gutes“ und die „Einführung einer neuen Produktionsmethode“, zur Funktion des „Erfinders“ der Sombartschen „Menschentypen“. Der andere Fall der „neuen Kombinationen“, die „Erschließung eines neuen Marktes“ entspricht natürlich der funktionellen Eigenart des „Entdeckers“. Und auch Schumpeters Ansicht, dass der „Unternehmer“ viele Leuten seinen Zwecken dienstbar machen kann, bezieht sich auf den von Sombart mit einem „Hausvater“ verglichenen Begriff, „Eroberer“.

Aus dieser vergleichenden Analyse ergibt sich, dass Schumpeter unter dem entscheidenden Einfluss von Sombart die dynamische Funktion des Unternehmers aufarbeitet und seine führende Rolle als die Triebkraft der wirtschaftlichen Entwicklung betrachtet.

Bisher wurde aufgezeichnet, wie Sombart den Charakter des Begriffs „Unternehmer“ analysiert. Nun muss vom „Händler“ ausführlich gesprochen werden. „Händler sein“ oder „Händlerfunktion ausüben“ heißt nach Sombart „lukrative Geschäfte treiben“. Aufgrund des Grundprinzips, dass er „billig einkauft und teuer verkauft“, hat der „Händler“ die fertigen Produkte „an die zahlungsfähigste Person am aufnahmefähigsten Markte zur nachfragestärksten Zeit“ zu verkaufen (Sombart 1909, 736).

Für die Bewältigung dieser Aufgabe muss der „Händler“ ihm zufolge 1. „*spekulierender Kalkulator*“ und 2. „*Geschäftsmann, Verhändler*“ sein (Sombart 1909, 736). Unter dem „spekulierenden Kalkulator“ versteht Sombart die Persönlichkeiten, die „ ‚spekulative‘ und ‚kalkulatorische‘ Fähigkeiten mitbringen.“ „Spekulation“ nennt er „die Ableitung richtiger Schlüsse für den Einzelfall aus der Beurteilung des Gesamtmarktes“ und damit begreift er sie als „eine ökonomische Diagnose“. Diese „Diagnose“ legt er weiter folgendermaßen dar : „Es heißt alle vorhandenen Erscheinungen des Marktes überblicken und in ihrem Zusammenhange erkennen ; einzelne Vorgänge in ihrer Tragweite richtig abschätzen ; bestimmte Symptome richtig bewerten ; die Möglichkeiten der zukünftigen Entwicklung richtig abwägen und dann vor allem mit unfehlbarer Sicherheit

aus hundert Kombinationen die vorteilhafteste herausfinden.“ (Sombart 1909, 736) Hier geht es darum, festzustellen, dass Sombart in der Vorstellung der „Spekulation“ das wesentliche Merkmal der Händlerfunktion sieht und sie mit dem vernünftigen Denken, der kühlen Urteilskraft und der rationellen Kalkulation in Verbindung bringt (Sombart 1909, 737).

Aber der Händler muss nicht nur richtig erfassen, wo und wann und wie ein lukratives Geschäft gemacht werden kann, sondern er muss auch durch allerhand Kunstgriffe einem Publikum die Vorzüge seiner Ware dermaßen plausibel machen, dass dieses sich genötigt sieht, die Ware bei ihm zu kaufen. Unter diesem Gesichtspunkt richtet Sombart sein Augenmerk besonders auf die Funktion des „Verhändlers“, der immer durch die „Reklame“ oder die anderen Suggestionen die Kauflust der Kunden zu erwecken versucht. „Interesse erregen, Vertrauen erwecken, die Kauflust wecken : in dieser Klimax stellt sich die Wirksamkeit des glücklichen Händlers dar.“ (Sombart 1909, 737)

Auf diese Weise hält Sombart die „Spekulation“, die „Kalkulation“ und die „Verhandlung“ als die funktionellen Eigenschaften des „Händlers“ für entscheidend wichtig. Und dass dieser „Händler“ in Verbindung mit dem obengenannten Begriff „Unternehmer“ zum wahren „kapitalistischen Unternehmer“ wird, war die Quintessenz der Sombartschen Behauptungen. Nebenbei bemerkt erscheint diese Auffassung Sombarts vom „kapitalistischen Unternehmer“ wieder im neunten Kapitel seines wichtigen Werks „Die Juden und das Wirtschaftsleben“ (1911), das den Titel „Die Funktion der kapitalistischen Wirtschaftssubjekte“ trägt.

3. Unternehmernaturen

Neben den beiden funktionellen Seiten des kapitalistischen Unternehmers betrachtet Sombart auch noch eingehend die ihm eigentümlichen „Naturen“, nämlich die „ ,intellektuellen‘ und ,moralischen‘ Eigenschaften“. Unter „kapitalistischem Unternehmer“ versteht er die „Männer mit prononciert intellectual - voluntarischer Begabung“ (Sombart 1909, 737) und kontrastiert

ihn mit dem „Künstler“. „Man hat den kapitalistischen Unternehmer, namentlich wo er als Organisator Geniales leistet, wohl mit dem Künstler verglichen. Das scheint mir aber ganz und gar verkehrt. Sie beide stellen scharfumschriebene Gegensätze dar. [...] scheinen mir kapitalistische Unternehmer und Künstler aus ganz verschiedenen Quellen ihre Seelen zu tränken. Jene sind zweckstrebig, diese zweckfeind, jene intellektuell - voluntaristisch, diese gemütsvoll ; jene hart, diese weich und zart, jene nüchtern, diese trunken; jene weltkundig, diese weltenfremd.“ (Sombart 1909, 747)

Sombart hält den kapitalistischen Unternehmer für einen kühlen und logischen Menschen, der sich nicht von seinen Gefühlen leiten lässt. Außerdem vertritt er die Ansicht, dass der Unternehmer hohe moralische Anschauung haben müsse. Ohne die „Tugenden“ wie „geschäftlich zuverlässig“ und „pflichttreu“ sowie „ordnungsliebend“ und „sparsam“ würde er außerstande sein, seine Beziehung nach außen wie im Innern des Geschäftsgut zu erhalten. Denn „die geschäftliche Ehrlichkeit und Zuverlässigkeit“ ist nach ihm die „*Conditio sine qua non*“ der kapitalistischen Wirtschaft (Sombart 1909, 747).

Zudem muss der Unternehmer „gescheit, klug und geistvoll“ sein, also rasch in der Auffassung, scharf im Urteil, nachhaltig im Denken und auch mit einem guten Gedächtnis ausgestattet (Sombart 1909, 741). Vor allem sind „die Entschlossenheit“, „die Stetigkeit“ und „die Ausdauer“, „die Rastlosigkeit“ sowie „die Zielstrebigkeit“ die notwendigen Eigenschaften, ohne die der Unternehmer schwerlich bestehen kann (Sombart 1909, 741 ; [1913] 1920, 257 ; [1916] 1987a, 838). Sombarts Meinung nach besitzen solche „Naturen“ der kapitalistischen Unternehmer einen starken Sinn für die materiellen Werte, für die Bewährung des Menschen in irdischen Werken und sind deswegen bedeutend „intellektuell - voluntarisch“ und damit „praktisch - tatkräftig.“ (Sombart [1916] 1987a, 838) Darüber hinaus soll der Unternehmer mit dem unbegrenzten Drang erfüllt sein, „sich durchzusetzen, sein Selbst gegen alle Gewalten trotzig zu behaupten, die andern seinem Willen und Taten zu unterwerfen“, die er unter Anlehnung an F. Nietzsche als

„Willen zur Macht“ bezeichnet (Sombart [1916] 1987a, 327). Aus diesem Grund weist Sombart darauf hin, dass der kapitalistische Unternehmer viele Züge gemeinsam mit „Feldherrn“ und „Staatsmännern“ habe, wohingegen er allem beschaulichen Wesen sowohl des Homo religiosus wie des Künstlers abhold sei (Sombart 1909, 748). Er schreibt folgendes : „Die ‚Unternehmenden‘ sind es, die sich die Welt erobern ; die Schaffenden, die Lebendigen : die Nicht-Beschaulichen, Nicht-Genießenden, Nicht-Weltflüchtigen, Nicht- Weltverneinenden.“ (Sombart [1916] 1987a, 327-328)

4. Das kapitalistische Unternehmerbild und seine „jüdische Eigenart“

Sombart richtete erstmals in seinem großen Buch „Die deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten Jahrhundert“ (1. Aufl. 1903) seine Aufmerksamkeit auf die Rolle der Juden für die wirtschaftliche Entwicklung (Lenger 1994, 188). In diesem Buch und zwar im sechsten Kapitel „Das Volk“ setzt er die moderne kapitalistische Wirtschaft mit der jüdischen gleich und betont, dass die gegenwärtige „hochkapitalistische Wirtschaft“, wie sie sich am Ende des neunzehnten Jahrhundert gestaltet hat, ganz undenkbar wäre ohne die Mitwirkung der Juden. „Stellt man sich auf den Standpunkt der neuzeitlichen Entwicklung des Wirtschaftslebens, betrachtet man die Entfaltung kapitalistischen Wesens und damit die Freisetzung starker produktiver Kräfte als einen Fortschritt, legt man Wert auf den Rang, den ein Land heute auf dem Weltmarkte einnimmt, so kann man gar nicht umhin, die Existenz jüdischer Wirtschaftssubjekte als einen der größten Vorzüge anzuerkennen.“ (Sombart 1903, 128)

Anschließend erachtet Sombart drei Seiten des jüdischen Nationalcharakters als besonders bedeutsam für die Rolle, die die Juden im modernen Wirtschaftsleben spielen : „das Vorwalten des Willens“, „den Eigennutz“ und „die Abstraktheit ihrer Geistesbeschaffenheit.“ (Sombart 1903, 128). Zunächst ist für ihn eine der hervorstechendsten Eigenschaften der jüdischen Rasse ein „durch nichts von seinem Ziele abzubringender Wille“. Neben diesem starken Willen hält er auch noch den jüdischen „Eigennutz“ für den

raschen Aufschwung des Kapitalismus für sehr wichtig, soweit er nicht gegen die Geschäftsmoral ist.

Was aber in besonders hohem Maße den Juden zur „Führerrolle“ in der kapitalistischen Wirtschaft befähigt, war die genannte dritte Eigenschaft, nämlich „*seine abstrakte Veranlagung*.“ (Sombart 1903, 131) Seiner Auffassung nach ist die jüdische Denkart durch „Indifferenz gegenüber Qualitätswerten“ und die „Unfähigkeit, das Konkrete, Individuelle, Persönliche, Lebendige zu würdigen“ charakterisiert (Sombart 1903, 131). Und er ist der Meinung, dass diese jüdische Denkart dem unpersönlichen Charakter des Kapitalismus bzw. der kapitalistischen Unternehmung sehr adäquat sei, die sich die „Reproduktion des Gewinns“ und die „Verwertung des Kapitals“ zum höchsten Ziel setzt. Daher beschreibt er wie folgt : „Je reiner [...] kapitalistisches Wesen im Wirtschaftsleben sich durchsetzt, desto mehr Spielraum erhält die jüdische Eigenart.“ (Sombart 1903, 133)

Ferner versuchte Sombart , die enge Beziehung der Juden zur der kapitalistischen Wirtschaft in seinem umfassenden Werk, „Die Juden und das Wirtschaftsleben“, das zwei Jahre nach seinem Unternehmer - Aufsatz erschien, tiefer und ausführlicher zu betrachten. Im „Vorwort“ dieses Werkes fasst er die Juden als „Begründer des modernen Kapitalismus“ auf (Sombart [1911] 1928, VII) und weist darauf hin, dass „in wachsendem Maße das Wirtschaftsleben unserer Tage jüdischem Einflusse unterworfen ist.“ (Sombart [1911] 1928, VII) Um „jüdisches Wesen im Dienste des Kapitalismus“ deutlich zu machen, behandelt er das Thema „jüdische Eigenart“ im zwölften Kapitel des zweiten Abschnitts, „Die Befähigung der Juden zum Kapitalismus“. Dabei zählt er fünf folgende Eigenarten als jüdische besondere Naturen auf, die von ihren eigentümlichen sozialen und historischen Bedingungen, d.h. „Fremdheit“ oder „Staatslosigkeit“ hervorgebracht wurden : 1. „*Intellektualismus*“, 2. „*Zielstrebigkeit*“, 3. „*Beweglichkeit*“, 4. „*Rastlosigkeit*“, 5. „*Anpassungsfähigkeit*“. (Sombart [1911] 1928, 312-328)

Laut Sombart stehen solche „jüdische Eigenarten“ im engen Zusammenhang mit dem Wesen des Kapitalismus und deswegen behauptet er, dass „die

Grundideen des Kapitalismus und die Grundideen des jüdischen Wesens in wahrhaft überraschendem Umfange übereinstimmen.“ (Sombart [1911] 1928, 328) Aber die „jüdische Eigenart“ soll nach seinem Urteil nicht nur mit den wesentlichen Merkmalen des Kapitalismus, sondern auch mit denen des kapitalistischen Unternehmers fast vollkommen übereinstimmen. Sombart schreibt folgendes : „Zum guten ‚*Unternehmer*‘ bringt der Jude vor allem mit seine Zielstrebigkeit und seine starken Willensspannungen. Zur Auffindung immer neuer Produktions- und Absatzmöglichkeiten verhilft ihm seine geistige Beweglichkeit. Organisationen zu schaffen, befähigt ihn seine partielle Menschenkenntnis, die ihn gerade die besondere Eignung eines Menschen für besondere Zwecke wahrnehmen läßt. Sein Mangel an Sinn für das ‚Organische‘, Natürliche, Gewachsene bereitet ihm keine Hindernisse, da es in der kapitalistischen Welt nichts Organisches, Natürliches, Gewordenes, sondern nur Mechanisches, Künstliches, Gemachtes gibt. Auch die größte kapitalistische Unternehmung bleibt ein Kunstmechanismus, den man beliebig vergrößern, zerteilen, verändern kann, wie es den jeweiligen Zwecken entspricht. Sie ist immer ein Zweckgebilde, niemals entstanden [...] aus intuitiver Schau als unteilbares Ganze, sondern aneinander gesetzt durch einzelne Zweckhandlungen, wie sie der Augenblick erheischte. In diesem Sinn – als Schöpfer großer kapitalistischer Unternehmung – sind die Juden sehr wohl auch geniale Organisatoren‘.“ (Sombart [1911] 1928, 331-332)

Für Sombart war der „Intellekt“ der Juden das wichtigste Merkmal, wodurch sie die Führerrolle im modernen Wirtschaftsleben spielten. Während die Juden eine Abneigung gegen den künstlerischen Sinn und die religiöse Meditation haben und sie vollständig ablehnen, glauben sie fest an die rationale Deutung, die logische Denkart und die sachliche Betrachtung, weil sie großen Wert nicht auf die „qualitative Konkretheit“, sondern auf die „quantitative Bestimmtheit“ legen. Deshalb hebt Sombart hervor, dass die feste „innere Verwandtschaft“ zwischen dieser jüdischen Eigenart und dem Wesen des Kapitalismus als „Mechanisches, Künstliches, Gemachtes“ besteht (Sombart [1911] 1928, 331-332) .

Außerdem führt er, wie oben schon erwähnt, neben diesen intellektuellen

Fähigkeiten noch weitere „jüdische Eigenarten“ an, die zur Entwicklung des Kapitalismus beitragen. Seiner Ansicht nach sind die Juden mit dem Geist der „Beweglichkeit“ erfüllt, der ihnen bei der Auffindung neuer Produktionsmittel und unbekannter Absatzgebiete hilft. Zudem besitzen sie auch den „starken Wille“, alle Schwierigkeiten, die ihnen in den Weg treten, zu überwinden. Es ist insbesondere beachtenswert, dass die Juden mit der „Anpassungsfähigkeit“ an jede nationale Eigentümlichkeit begabt sein sollen. Sombart verweist darauf, dass diese „jüdische Eigenart“ mit der Naturanlage des kapitalistischen Unternehmers eng verwunden sei. Daher behauptet er : „Um höchste kapitalistische Leistungen zu vollbringen, eignet sich keine Eigenart so gut wie die jüdische.“ Auf diese Weise sieht Sombart die Juden als das zum kapitalistischen Unternehmer am besten geeignete Volk an. Seiner Meinung nach waren die Juden die einzigen Träger des „kapitalistischen Geistes“, den die Verbindung des Erwerbstriebes mit dem ökonomischen Rationalismus hervorgebracht hat.

5. Die Unternehmertätigkeit und Sombarts Kredittheorie

Sombart schilderte nicht nur den Charakter des kapitalistischen Unternehmers, sondern untersuchte auch die Bedeutung des „Kredits“ für seine wirtschaftliche Tätigkeit, um den dynamischen Entwicklungsprozess des kapitalistischen Wirtschaftssystems zu verdeutlichen. „Kredit“ bedeutet Sombart zufolge *„Kaufkraft ohne Geldbesitz“* (Sombart 1927, 175) und macht deswegen die Kapitalbeschaffung des Unternehmers sehr leicht. Mit Hilfe vom durch den „Kredit“ erworbenen „Kapital“ konnte der Unternehmer ohne Beschränkung seiner Geldmittel eine schöpferische Idee in die Praxis umsetzen und damit einen höheren Ertrag erzielen. Also betrachtete Sombart den „Kredit“ als einen unentbehrlichen Faktor zur Ausbildung des „reinen Unternehmertum“ (Sombart 1927, 14), der sich von der Notwendigkeit des Geldbesitzes befreite, und zwar zur Förderung seiner innovativen Wirtschaftstätigkeit.

Es unterliegt keinem Zweifel, dass diese Anschauung Sombarts über den

Kredit eine auffallende Ähnlichkeit mit der von Schumpeter aufgestellten Kreditschöpfungslehre hat. Im oben genannten Werk „*Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*“ weist Schumpeter darauf hin, „daß alle wirtschaftliche Entwicklung, wo es keine Verfügungsgewalt der Führer gibt, prinzipiell des Kredits bedarf“ (Schumpeter 1912, 212) und definiert den „Kredit“ als „Kaufkraftschaffung zum Zwecke ihrer Überlassung an den Unternehmer.“ (Schumpeter 1912, 214) Und er sieht die wesentliche Funktion des Kredits darin, „daß die Kreditgewährung es dem Unternehmer ermöglicht, die Produktionsmittel, deren er bedarf, aus ihren bisherigen Verwendungen zu ziehen, [...] und so die Volkswirtschaft in neue Bahnen zu zwingen.“ (Schumpeter 1912, 212) Seiner Meinung nach war der Kredit als „der Hebel dieses Güterentzuges“ (Schumpeter 1912, 214) für die Entwicklung der kapitalistischen Wirtschaft von entscheidender Bedeutung.

Diese Auffassung Schumpeters bezeichnet Sombart als „die dynamische Kredittheorie“ und erkennt die Richtigkeit dieser Theorie grundsätzlich an (Sombart 1927, 148-149). Wie Schumpeter, so überzeugte auch Sombart sich davon, dass der „Kredit“ für die dynamische wirtschaftliche Entwicklung, die dem „modernen Kapitalismus“ insbesondere dem „Hochkapitalismus“ eigentümlich ist, unbedingt erforderlich sei.

Seiner Ansicht nach wird die Vorstellung von „Kredit“ in einer Urkunde, dem sogenannten „Effekt“ oder „Wertpapier“ verkörpert. In der „hochkapitalistischen Wirtschaft“, die Sombart das „Zeitalter der Effekten“ nannte (Sombart 1927, 200), gründete sich der „Kredit“ nicht mehr auf die persönlichen Verbindungen, sondern auf die verschiedenartigen Effekte.

In seinem Aufsatz „Die Kommerzialisierung des Wirtschaftslebens“ (Sombart 1910a ; 1910b ; [1911] 1928, 6. Kapitel) behauptet er, dass die Entstehung der Wertpapiere nichts anderes als „der äußere Ausdruck der Versachlichung der Kreditbeziehungen“ (Sombart 1910a , 633 ; [1911] 1928, 62) sei und äußert sich über die Rolle der Wertpapier weiter folgendes : „Ganz allgemein gesprochen wird ein Kreditverhältnis ‚versachlicht‘, wenn es nicht mehr aus der persönlichen Vereinbarung zwischen zwei bekannten Personen entsteht, sondern durch ein System menschlicher Einrichtungen zwischen

einander unbekannt Personen nach völlig objektivierten Normen und in schematisierten Formen zustande kommt. Den Angelpunkt dieser Einrichtungen eben bilden die Wertpapiere, in denen das Forderung- und Schuldverhältnis zwischen Unbekannt und Unbekannt ‚objektiviert‘ ist und durch deren Besitz jederzeit ein neuer Gläubiger in das Kreditverhältnis eintreten kann. Ein unpersönliches Kreditverhältnis wird also durch das Wertpapier begründet.“ (Sombart 1910a , 634 ; [1911] 1928, 62)

Wegen der Eigenschaften der „Beweglichkeit“ oder „Abstraktheit“ als ihr inneres Wesen (Sombart 1910b , 23 ; [1911] 1928, 91) förderten die „Wertpapier“ ein „unpersönliches Kreditverhältnis“ zwischen den Gläubigern und den Schuldern und trugen dadurch ungemein zur Erleichterung der Kapitalbeschaffung bei. Dabei verweist Sombart auf die interessante Tatsache, dass die jüdischen Unternehmer sich seit dem Ausgang des 19. Jahrhundert an „der Entwicklung der modernen Wertpapiere“ und damit auch an „der Versachlichung der Kreditverhältnisse“ in sehr beträchtlichem Umfange beteiligt gewesen sind (Sombart 1910a , 632, 650 ; [1911] 1928, 61, 77).

Unter anderem wurde die „Aktie“ für besonders wichtig erachtet, um den Prozess der „Versachlichung der Kreditbeziehung“ zu beschleunigen und um den Einfluss der Juden auf die kapitalistische Wirtschaft zu vergrößern. Er betont, dass „die Tendenz zur Versachlichung ehemals persönlicher Beziehungen“ bei „den modernen Effekten“, nämlich „den Aktien und Obligationen kapitalistischer Unternehmung“ besonders deutlich zu Tage trete (Sombart 1903, 221-222).

Laut Sombart sollte die „Aktie“ jedem beliebigen Besitzer ein Anteilsrecht an dem Kapital und dem Profit eines ihm persönlich ganz fremden Unternehmens geben (Sombart 1910a , 634 ; [1911] 1928, 63). In der „Aktiengesellschaft“, wo sich die „Lösung des Kapitalbesitzes vom Geschäftsbetrieb“ vollzog, wird die Beziehung eines Aktionärs zu einem Unternehmen in einer „abstrakten Geldsumme“ objektiviert, ohne Berücksichtigung der persönlichen Verbindung. „Das kapitalistische Verhältnis, das [...] seiner Natur nach zur Unpersönlichkeit drängt, kommt somit in der

modernen Aktiengesellschaft am reinsten und folgerichtigsten zum Ausdruck.“ (Sombart 1903, 222) Deswegen kauft der Aktionär eine Aktie eines bestimmten Unternehmens an, nicht weil er persönlich mit dem Unternehmer befreundet ist, sondern weil er auf die Fähigkeiten des Geschäftsbetriebs vertraut. Sombart weist darauf hin, dass die „Zufälligkeiten“ der ganzen frühkapitalistischen Periode, in der die Ausübung der Unternehmertätigkeit an den individuellen Geldbesitz gebunden war, durch die Entwicklung des Kreditsystem, vor allem der Aktiengesellschaft als der „unpersönlichen“ Unternehmungsform, beseitigt worden seien (Sombart 1927, 200). Seiner Meinung nach gehört das Kapital nun den tüchtigsten kapitalistischen Unternehmern, die von unzähligen Aktionären als die führenden Wirtschaftssubjekte ausgewählt wurden. In diesem Sinn bedeutete die „Aktiengesellschaft“ für Sombart eine „Kreditanstalt“ bzw. „die Stützen für das Genie.“ (Sombart 1927, 200)

Fazit

Aus den bisherigen Betrachtungen der Kapitalismustheorie von Sombart wurde klar, dass er den kapitalistischen Unternehmer als die entscheidende „treibende Triebkraft“ bei der Entstehung des modernen Kapitalismus verstand und seine führende Rolle zur Entwicklung der kapitalistischen Wirtschaft für absolut nötig hielt. Unter diesem Gesichtspunkt versuchte Sombart ein der wirklichen kapitalistischen Wirtschaft angemessenes Unternehmerbild zu schildern, nach dem Vorbild von hervorragenden zeitgenössischen Unternehmern wie beispielsweise Walter Rathenau. Als Folge der Analyse des von Sombart dargestellten kapitalistischen Unternehmerbilds ergab es sich, dass er das wesentliche Streben des Unternehmers im von der „persönlichen Willkür“ abweichenden „objektivierten Gewinnstreben“ sah.

Um sein höchstes Ziel des Strebens nach dem größtmöglichen Gewinn zu erreichen, funktioniert der Unternehmer einerseits als der „Organisator“ oder „Innovator“, der die „Kombination“ vieler Einzelbetriebe ausführt, und

andererseits als der „Händler“, der über die spekulierenden und kalkulatorischen Fähigkeiten verfügt. Und seine charakteristische Natur war nach Sombart der scharfe „Intellekt“, wodurch er sich nicht mehr von seinen Gefühlen leiten ließ und immer kühl und logisch handeln konnte.

Zudem richtete Sombart seine Aufmerksamkeit auf die starke Verwandtschaft zwischen diesem kapitalistischen Unternehmerbild und den gegenwärtigen jüdischen Unternehmern und damit beurteilte er ihre Rolle in der „hochkapitalistischen Wirtschaft“ im Zusammenhang mit der Entwicklung des Kreditwesens sehr positiv, weil die Juden tiefen und schöpferischen Anteil an der Ausbreitung der Wertpapiere und dazu auch an der Erweiterung der Kapitalbeschaffung genommen haben.

In Deutschland am Anfang des 20. Jahrhunderts, als der Kapitalismus statt des Handwerk die Hegemonie ergriff, übten diese Betrachtungen Sombarts über den kapitalistischen Unternehmer einen großen Einfluss auf viele vorzügliche Wirtschaftswissenschaftler aus. Vor allem schätzte Josef A. Schumpeter Sombarts Analyse vom Unternehmer hoch (Schumpeter 1927, 362) und er nahm sie positiv bei sich auf. Schumpeter verdankte Sombart nicht wenig die Idee, dass die innovative Tätigkeit des Unternehmers die einzige Triebkraft der wirtschaftlichen Entwicklung gewesen sei.

Nach Meinung des Verfassers stellen Sombarts Überlegungen über den Begriff Unternehmer nicht nur einen Glanzpunkt seiner Erforschung des modernen Kapitalismus dar, sondern gelten auch heute noch als ausgezeichnet. Dies liegt darin begründet, dass die funktionellen Merkmale der gegenwärtigen Unternehmer viel mit der des von Sombart gekennzeichneten innovativen und dynamischen Unternehmerbilds gemein haben.

Um die besondere Eigenschaft der kapitalistischen Gesellschaft von heute zu begreifen, in der viele jüdische Unternehmer durch die „Aktien“ überall Geschäftsbetriebe leiten, scheint Sombarts Kapitalismustheorie nun umso wichtiger.

参考文献

外国語文献

- Appel, M. 1992. *Werner Sombart : Historiker und Theoretiker des modernen Kapitalismus*. Marburg : Metropolis.
- Backhaus, J. [Ed.] 1996a. *Werner Sombart (1863-1941) : Social Scientist. 1 : His life and work*. Marburg : Metropolis.
- _____ [Ed.] 1996b. *Werner Sombart (1863-1941) : Social Scientist. 2 : His theoretical approach reconsidered*. Marburg : Metropolis.
- _____ [Ed.] 1996c. *Werner Sombart (1863-1941) : Social Scientist. 3 : Then and now*. Marburg : Metropolis.
- _____ 1996d. Participants of Sombart's Seminar. In Backhaus (1996a) : 115-129.
- _____ [Hrsg.] 2000. *Werner Sombart (1863-1941) : Klassiker der Sozialwissenschaften*. Marburg : Metropolis.
- Below, G. v. 1912a. Besprechung von : Werner Sombart, Die Juden und das Wirtschaftsleben. *Historische Zeitschrift* 108 : 614-624.
- _____ 1912b. Besprechung von : Werner Sombart, Die Juden und das Wirtschaftsleben. *Zeitschrift für Sozialwissenschaft*. Neue Folge 3 : 133-135.
- Brentano, L. 1907. *Der Unternehmer. Vortrag gehalten am 3. Januar 1907 in der Volkswirtschaftlichen Gesellschaft in Berlin*. Berlin : Leonhard Simion Nf.
- Brinkmann, C. 1941. Werner Sombart. *Weltwirtschaftliches Archiv* 54 : 1-12.
- Brocke, B. v. 1972. Werner Sombart. In *Deutsche Historiker* Bd. 5. hrsg. von H.-U. Wehler. Göttingen : Vandenhoeck und Ruprecht : 130-148. 川本和良訳 「ヴェルナー・ゾンバルト」 ドイツ現代史研究会訳 『ドイツの歴史家』第3巻 未来社, 1983.
- _____ [Hrsg.] 1987a. *Sombarts ,Moderner Kapitalismus' : Materialien zur Kritik und Rezeption*. München : Deutscher Taschenbuch Verlag.
- _____ 1987b. Werner Sombart 1863-1941. Eine Einführung in Leben, Werk und Wirkung. In Brocke (1987a) : 11-65.
- _____ 1992. Werner Sombart 1863-1941 : Capitalism - Socialism - His Life, Works and Influence Since Fifty Years. *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte* 1 : 113-182.
- Büttner, U. 1982. *Hamburg in der Staats- und Wirtschaftskrise 1928-1931*. Hamburg : Christians.

- Chaloupek, G. 1995. Long-term economic perspectives compared : Joseph Schumpeter and Werner Sombart, *The European Journal of the History of Economic Thought* 2 (1) : 127-149.
- _____ 1996. Long Term Economic Trends in the Light of Werner Sombart's Concept of »Spätkapitalismus«, In Backhaus (1996b) : 163-178.
- Commons, J. R. and S. Perlman. 1929. Book Review to "Der moderne Kapitalismus" *The American Economic Review* 19 : 78-88.
- Diehl, K. 1927. Über neuere Kredittheorien im Lichte der Lehre von Macleod, In *Die Kreditwirtschaft*. 1. Teil. : *Kölner Vorträge veranstaltet von der wirtschafts- und sozialwissenschaftlichen Fakultät der Universität Köln. Winter-Semester 1926/27*. Leipzig : G. A. Gloeckner : 107-157.
- Ebner, A. 2002. Nationalökonomie als Kapitalismustheorie : Sombarts Theorie kapitalistischer Entwicklung. In *Werner Sombart. Nationalökonomie als Kapitalismustheorie. Ausgewählte Schriften*. hrsg. von A. Ebner und H. Peukert. Marburg : Metropolis : 7-23.
- Ellis, H. S. 1934. *German Monetary Theory 1905-1933*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press.
- Epstein, M. 1941. Obituary : Werner Sombart. *Economic Journal* 51 : 523-526.
- Feuchtwanger, L. 1911. Besprechung von : Werner Sombart, Die Juden und das Wirtschaftsleben. *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich* 35 : 397-430.
- Guttman, J. 1913. Besprechung von : Werner Sombart, Die Juden und das Wirtschaftsleben. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 36 : 149-212.
- Haberler, G. 1927. Albert Hahns „Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits“. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 57 (3) : 803-819.
- Haenel, H. G. 1925. Geld und Kredit : Ein Beitrag zur Kritik des Nominalismus. *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft* 79 : 281-327.
- Hagemann, H. and M. Landesmann, 1996. Sombart and Dynamics. In Backhaus (1996b) : 179-204.
- Hahn, L. A. 1920. *Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits*. 1. Aufl. Tübingen : J. C. B. Mohr.
- _____ 1923. Kredit. In *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. 4. Aufl. Bd. 5.

- Jena : Gustav Fischer : 944-953.
- _____ 1924. *Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits*. 2. Aufl. Tübingen : J. C. B. Mohr.
- _____ 1930. *Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits*. 3. Aufl. Tübingen : J. C. B. Mohr. 大北文次郎訳 『銀行信用の国民経済的理論』 実業之日本社, 1943.
- _____ 1963. *Fünfzig Jahre zwischen Inflation und Deflation*. Tübingen : J. C. B. Mohr.
- Hainisch, M. 1915. Besprechung von : J. A. Schumpeter, Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie und Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. *Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung* 5 : 216-224.
- Hébert, R. F. and A. N. Link. 1988. *The Entrepreneur : Mainstream Views and Radical Critiques*. 2nd ed. New York : Praeger. 池本正純・宮本光晴訳 『企業者論の系譜 — 18世紀から現代まで』 ホルト・サウンダース・ジャパン, 1984.
- Hilferding, R. 1903. Besprechung von : Werner Sombart, Der moderne Kapitalismus. *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung* 12 : 446-453.
- _____ [1910] 1955. *Das Finanzkapital : Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus*. Berlin : Dietz Verlag. 岡崎次郎訳 『金融資本論』(上)(下) 岩波文庫, 1982.
- Hintze, O. 1929. Der moderne Kapitalismus als historisches Individuum : Ein kritischer Bericht über Sombarts Werk. *Historische Zeitschrift* 139 : 457-509.
- Honegger, H. 1929. *Der schöpferische Kredit*. Jena : Gustav Fischer.
- Honigsheim, P. 1963. Erinnerungen an Max Weber. In *Max Weber zum Gedächtnis : Materialien und Dokumente zur Bewertung von Werk und Persönlichkeit (Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Sonderheft 7)* . hrsg. von R. König und J. Winckelmann. Köln und Opladen : Westdeutscher Verlag : 161-271. 大林信治訳 『マックス・ヴェーバーの思い出』 みすず書房, 1972.
- Ikeda, Y. 2008. The German Historical School : Toward the Integration of the Social Sciences. 『経済学史研究』 (*The History of Economic Thought*) 50 (1) : 79-95.
- Jäger, H. 1990. Unternehmer, In *Geschichtliche Grundbegriffe : Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*. hrsg. von O. Brunner und W. Conze und R. Koselleck, Bd. 6. Stuttgart : Klett-Cotta : 707-732.
- Knight, F. H. 1929. Historical and Theoretical Issues in the Problem of Modern Capitalism. *Jornal of Economic and Business History* 1 : 119-136.

- Komorzynski, J. v. 1903. *Die Nationalökonomische Lehre von Credit*. Innsbruck : Verlag der Wagner'schen Universitäts-Buchhandlung.
- Kruse, V. 1990. Von der historischen Nationalökonomie zur historischen Soziologie — Ein Paradigmenwechsel in den deutschen Sozialwissenschaften um 1900. *Zeitschrift für Soziologie* 19 (3) : 149-165.
- Lebovics, H. 1969. Werner Sombart : The Age of Late Capitalism. In ders., *Social Conservatism and the Middle Classes in Germany, 1914-1933*. New Jersey : Princeton University Press : 49-78.
- Lehmann, H. 1993. The Rise of Capitalism : Weber versus Sombart. In *Weber's Protestant Ethic : Origins, Evidence, Contexts*, ed. by Lehmann H. and G. Roth. Washington : Cambridge University Press : 195-208. 三笥利幸訳 「資本主義の起源 — ヴェーバー対ゾンバルト」 九州国際大学『教養研究』14 (1) , 2007.
- _____ 1996. *Max Webers Protestantische Ethik : Beiträge aus der Sicht eines Historikers*. Göttingen : Vandenhoeck und Ruprecht.
- Lenger, F. 1994. *Werner Sombart 1863-1941 : Eine Biographie*. München : C. H. Beck.
- Liefmann, R. 1909. *Beteiligungs- und Finanzierungsgesellschaften : Eine Studie über den modernen Kapitalismus und das Effektenwesen*, Jena : Gustav Fischer.
- _____ 1923. *Beteiligungs- und Finanzierungsgesellschaften : Eine Studie über den modernen Effektenkapitalismus*, 4. Aufl. Jena : Gustav Fischer.
- Loader, C. et al. 1991. Thorstein Veblen, Werner Sombart and The Periodization of History, *Journal of Economic Issues* 25 (2) : 421-429.
- Ludwig, H. 1996. Sombart and the Jews. In Backhaus (1996a) : 205-210.
- Macleod, H. D. 1889-1891. *The Theory of Credit*. 1 ed. 2 vols. London : Longmans Green and Co.
- _____ 1893-1897. *The Theory of Credit*. 2 ed. 2 vols. London : Longmans Green and Co.
- Marshall, A. 1907. Social Possibilities of Economic Chivalry. *The Economic Journal* 17 : 7-29.
- Marx, K. [1894] 2004. *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie* Bd. 3. In *Karl Marx und Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)* Bd. 15. Bearbeitet von R. Roth, E. Kopf und C. E. Vollgraf. Unter Mitwirkung von G. Hubmann. Mit einer Einführung von B. Schefold. Berlin : Akademie Verlag. 岡崎次郎訳 『資本論』第三巻 マルクス＝エンゲルス全集第25巻第1分冊・第2分冊 大月書店, 1966-1967.

- März, E. 1983. *Josef Alois Schumpeter : Forscher, Lehrer, und Politiker*. Wien : R. Oldenbourg. 杉山忠平監・訳, 中山智香子訳 『シュムペーターのウィーン』 日本経済評論社, 1998.
- Mill, J. S. [1848] 1965. *Principles of Political Economy : With Some of Their Applications to Social Philosophy*. In *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by J. M. Robson et al., vol. II ; III. Toronto : University of Toronto Press ; London : Routledge & Kegan Paul. 末永茂喜訳 『経済学原理』全5冊 岩波文庫, 1959-1963.
- Mitchell, W. C. 1929. Sombart's Hochkapitalismus. *The Quarterly Journal of Economics* 43 : 303-323.
- Mitzmann, A. 1973. Werner Sombart (1863-1941) . In ders., *Sociology and Estrangement. Three Sociologists of Imperial Germany*. New York : Alfred A. Knopf : 135-264.
- _____ 1988. Persönlichkeitskonflikt und weltanschauliche Alternativen bei Werner Sombart und Max Weber. In *Max Weber und seine Zeitgenossen*. hrsg. von W. Mommsen und W. Schwentker. Göttingen und Zürich : Vandenhoeck und Ruprecht : 137-146. 篠原隆弘訳 「ゾンバルトとヴェーバーにおける人的葛藤とイデオロギー選択」 嘉目克彦他監訳 『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』所収 ミネルヴァ書房, 1994.
- Moll, E. 1923. Aktiengesellschaften. III. Statistik der Aktiengesellschaften. A. Die Aktiengesellschaften in Deutschland. In *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. 4. Aufl. Bd. 1. Jena : Gustav Fischer : 141-160.
- Müller, F. 1996. I remember Sombart. In Backhaus (1996a) : 103-113.
- Okuyama, M. 2007. Die Auffassung des kapitalistischen Unternehmers von Werner Sombart und seine Kredittheorie. 明治大学大学院『経済学研究論集』(*Journal of Economics. Meiji University Graduate School*) 27 : 1-18.
- Oppenheimer, F. 1911. Besprechung von : Werner Sombart, Die Juden und das Wirtschaftsleben. *Die Neue Rundschau* 22 : 889-904.
- Osterhammel, J. 1988. Spielarten der Sozialökonomik : Joseph A. Schumpeter und Max Weber. In *Max Weber und seine Zeitgenossen*. hrsg. von W. Mommsen und W. Schwentker. Göttingen und Zürich : Vandenhoeck und Ruprecht : 147-195. 小野隆弘訳 「ふたつの社会経済学 — シュンペーターとヴェーバー」 嘉目克彦他監訳 『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』所収 ミネルヴァ書房, 1994.
- Parsons, T. 1928. »Capitalism« in Recent German Literature : Sombart and Weber. *The Journal of Political Economy* 36 (6) : 641-661.

- Passow, R. 1918. *Kapitalismus : Eine begrifflich-terminologische Studie*. Jena : Gustav Fischer.
- _____ 1922. *Die Aktiengesellschaft : Eine wirtschaftswissenschaftliche Studie*. Zweite, neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Jena : Gustav Fischer.
- _____ 1923. Aktiengesellschaften. II. Wirtschaftlicher Charakter der Aktiengesellschaft. In *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. 4. Aufl. Bd. 1. Jena : Gustav Fischer : 129-141.
- Peukert, H. 2000. Werner Sombart. In Backhaus (2000) : 15-82.
- _____ 2002. Werner Sombart : ein werkbiographischer Überblick. In *Werner Sombart. Nationalökonomie als Kapitalismustheorie. Ausgewählte Schriften*. hrsg. von A. Ebner und H. Peukert. Marburg : Metropolis : 25-36.
- Pohle, L. 1910. *Der Unternehmerstand. Vorträge der Gehe-Stiftung zu Dresden*. Bd. 3. Leipzig und Dresden : B. G. Teubner.
- Priddat, B. P. 1996. Werner Sombart's late Economic Thinking : Back to Physiocracy? In Backhaus (1996a) : 271-296.
- Prisching, M. 1996. The Entrepreneur and his Capitalist Spirit : Sombart's Psycho-Historical Model. In Backhaus (1996b) : 301-330.
- _____ 2000. Unternehmer und kapitalistischer Geist : Sombarts psychohistorische Studie. In Backhaus (2000) : 101-149.
- Rathenau, W. 1908. *Reflexionen*. Leipzig : S. Hirzel.
- Rehberg, K. S. 1988. Das Bild des Judentums in der frühen deutschen Soziologie "Fremdheit" und "Rationalität" als Typsmerkmale bei Werner Sombart, Max Weber und Georg Simmel. In *Judentum, Antisemitismus und europäische Kultur*. hrsg. von H. O. Horch. Tübingen : Francke Verlag : 151-186.
- Santarelli, E. and E. Pesciarelli. 1990. The Emergence of a Vision : the Development of Schumpeter's Theory of Entrepreneurship. *History of Political Economy* 22 (4) : 677-696.
- Schmidt, F. 1920. *Der nationale Zahlungsverkehr. Zweite, erweiterte Auflage von „Der bargeldlose Zahlungsverkehr in Deutschland und seine Förderung.“* Leipzig : G. A. Gloeckner.
- _____ 1924. Bargeldloser Zahlungsverkehr. In *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. 4. Aufl. Bd. 2. Jena : Gustav Fischer : 330-361.

- Schmoller, G. v. 1890. Über Wesen und Verfassung der großen Unternehmungen. In ders., *Zur Social- und Gewerbepolitik der Gegenwart. Reden und Aufsätze von Gustav Schmoller*. Leipzig : Duncker und Humblot : 372-440, zuerst veröffentlicht In *Allgemeine Zeitungen* vom 24. bis 31. Januar 1890.
- _____ 1903. Besprechung von : Werner Sombart, Der moderne Kapitalismus. *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich* 27 : 291-300.
- Schneider, D. 1996. Sombart or Spirit and Accountability of Capitalism as »Enthusiastic Lyricism«. In Backhaus (1996b) : 31-56.
- Schumpeter, J. A. 1908. *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*. Leipzig : Duncker und Humblot. 大野忠男他訳 『理論経済学の本質と主要内容』 岩波文庫, 1983.
- _____ 1910. Über das Wesen der Wirtschaftskrisen. *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung* 19 : 271-325.
- _____ 1912. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. 1. Aufl. Leipzig : Duncker und Humblot.
- _____ 1926. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. Eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*. München und Leipzig : Duncker und Humblot. 塩野谷祐一他訳 『経済発展の理論』 (上) (下) 岩波文庫, 1977.
- _____ 1927. Sombarts Dritter Band. *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich* 51 : 349-369.
- _____ [1927] 1985. Unternehmerfunktion und Arbeiterinteresse. In *Aufsätze zur Wirtschaftspolitik*, hrsg. von W. F. Stolper und C. Seidl. Tübingen : J. C. B. Mohr : 160-173. 八木紀一郎編訳 「企業家の機能と労働者の利害」 『資本主義は生きのびるか』所収 名古屋大学出版会, 2001.
- _____ 1928a. Unternehmer. In *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. 4. Aufl. Bd. 8. Jena : Gustav Fischer : 476-487.
- _____ 1928b. The Instability of Capitalism. *The Economic Journal* 38 : 361-386. 八木紀一郎編訳 「資本主義の不安定性」 『資本主義は生きのびるか』所収 名古屋大学出版会, 2001.
- _____ 1939. *Business Cycles : A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process*. 2 vols. New York : Mcgraw-Hill. 吉田昇三監修 『景気循環論』全

- 5冊, 有斐閣, 1958-1964.
- _____ 1947. The Creative Response in Economic History. *The Journal of Economic History* 7 : 149-159.
- _____ 1954. *History of Economic Analysis*. New York : Oxford University Press. 東畑精一訳 『経済分析の歴史』全7冊, 岩波書店, 1955-1962.
- Senn, P. R. 1996a. Sombart's Reception in the English-Speaking World. In Backhaus (1996c) : 147-286.
- _____ 1996b. A Bibliography of Works by and about Werner Sombart in English. In Backhaus (1996c) : 297-320.
- Sombart, W. 1888. *Die römische Campagna : Eine sozialökonomische Studie* (= *Staats- und socialwissenschaftliche Forschungen*. hrsg. von G. Schmoller, Bd. 8. H. 3) Leipzig : Duncker und Humblot.
- _____ 1894. Zur Kritik des ökonomischen Systems von Karl Marx. *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik* 7 : 555-594. 知念英行訳 「カール・マルクスの経済学体系」 知念編訳 『マルクスと社会科学』所収 新評論, 1976.
- _____ 1896. *Sozialismus und soziale Bewegung im 19. Jahrhundert*. Jena : Gustav Fischer. 池田龍蔵訳 『社会主義及社会運動』三田書房, 1923. 林要訳 『社会主義及び社会運動』同人社, 1925.
- _____ 1897. Ideale der Sozialpolitik. *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik* 10 : 1-48. 戸田武雄訳 『社会政策の理想』有斐閣, 1939.
- _____ 1900. „Dennoch!“ *Aus Theorie und Geschichte der gewerkschaftlichen Arbeiterbewegung*. Jena : Gustav Fischer. 森戸辰男訳 『労働組合運動の理論と歴史』同人社, 1922.
- _____ 1901. Technik und Wirtschaft. *Jahrbuch der Gehe-Stiftung zu Dresden* Bd. 7. : 51-74. 阿閉吉男訳 「技術と経済」 阿閉編訳 『技術論』所収 科学主義工業社, 1941.
- _____ 1902a. *Der moderne Kapitalismus*. 1. Aufl. Bd. 1. : *Die Genesis des Kapitalismus*. Leipzig : Duncker und Humblot.
- _____ 1902b. *Der moderne Kapitalismus*. 1. Aufl. Bd. 2. : *Die Theorie der kapitalistischen Entwicklung*. Leipzig : Duncker und Humblot.
- _____ 1903. *Die deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten Jahrhundert*. Berlin : Georg Bondi.
- _____ 1904. Die Störungen im deutschen Wirtschaftsleben während der Jahre 1900ff.

In *Verhandlungen des Vereins für Sozialpolitik in Hamburg 14. bis 15. und 16. September 1903*. München und Leipzig : Duncker und Humblot : 121-137.

_____ 1906. *Das Proletariat*. Frankfurt am Main : Literarische Anstalt Rütten & Loening.

_____ 1908. Karl Marx und die soziale Wissenschaft. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 26 : 429-450. 知念英行訳 「カール・マルクスと社会科学」 知念編訳 『マルクスと社会科学』所収 新評論, 1976.

_____ 1909. Der kapitalistische Unternehmer. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 29 : 689-758.

_____ 1910a. Die Kommerzialisierung des Wirtschaftslebens. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 30 : 631-665.

_____ 1910b. Die Kommerzialisierung des Wirtschaftslebens. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 31 : 23-66.

_____ [1911] 1928. *Die Juden und das Wirtschaftsleben*. München und Leipzig : Duncker und Humblot. 長野敏一抄訳 『ユダヤ人と資本主義』 国際日本協会, 1943. 金森誠也監・訳, 安藤勉訳 『ユダヤ人と経済生活』 荒地出版社, 1994.

_____ 1913a. *Luxus und Kapitalismus (Studien zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus. Bd. 1)* München und Leipzig : Duncker und Humblot. 田中九一訳 『奢侈と資本主義』 而立社, 1925. 金森誠也訳 『恋愛と贅沢と資本主義』 至誠堂, 1969. 論創社, 1987. 講談社学術文庫, 2000.

_____ 1913b. *Krieg und Kapitalismus (Studien zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus. Bd. 2)* München und Leipzig : Duncker und Humblot. 立野保男抄訳 『戦争と資本主義』 大同書院, 1938. 金森誠也訳 『戦争と資本主義』 論創社, 1996.

_____ [1913] 1920. *Der Bourgeois : Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*. München und Leipzig : Duncker und Humblot. 金森誠也訳 『ブルジョワ — 近代経済人の精神史』 中央公論社, 1990.

_____ [1916] 1987a. *Der moderne Kapitalismus : Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart. Bd. 1. : Einleitung — Die vorkapitalistische Wirtschaft — Die historischen Grundlagen des modernen Kapitalismus*. München : Deutscher Taschenbuch Verlag. 岡崎次郎抄訳 『近世資本主義』第1巻, 2冊, 生活社, 1942-1943.

- _____ [1916] 1987b. *Der moderne Kapitalismus : Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart*. Bd. 2. : *Das europäische Wirtschaftsleben im Zeitalter des Frühkapitalismus, vornehmlich im 16., 17. und 18. Jahrhundert*. München : Deutscher Taschenbuch Verlag.
- _____ 1925a. *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*. Berlin : Julius Springer.
- _____ 1925b. Die prinzipielle Eigenart des modernen Kapitalismus. In *Grundriss der Sozialökonomik*. IV. Abteilung : *Spezifische Elemente der modernen kapitalistischen Wirtschaft*. I. Teil. Tübingen : J. C. B. Mohr : 1-26.
- _____ 1927. *Der moderne Kapitalismus : Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart*. Bd. 3. *Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus*. München : Duncker und Humblot. 梶山力抄訳 『高度資本主義 I』 有斐閣, 1940.
- _____ 1929a. Die Wandlungen des Kapitalismus. In *Verhandlungen des Vereins für Sozialpolitik in Zürich 13. bis 15. September 1928*. München und Leipzig : Duncker und Humblot : 23-41.
- _____ 1929b. Economic theory and economic history. *The Economic History Review* 2 (1) : 1-19.
- _____ 1929c. Nationalökonomie. *Weltwirtschaftliches Archiv* 30 : 1-18.
- _____ [1930] 1967. *Die drei Nationalökonomien : Geschichte und System der Lehre von der Wirtschaft*. 2. Aufl. Berlin : Duncker und Humblot. 小島昌太郎監訳 『三つの経済学』 雄風館書房, 1933.
- _____ 1931a. Kapitalismus. In *Handwörterbuch der Soziologie*. hrsg. von A. Vierkant. Stuttgart : Ferdinand Enke : 258-277.
- _____ 1931b. Arbeiter. In *Handwörterbuch der Soziologie*. hrsg. von A. Vierkant. Stuttgart : Ferdinand Enke : 1-14.
- _____ 1931c. Einführung in Begriff und Wesen des Wirtschaftssystems. In *Kapital und Kapitalismus. Vorlesungen gehalten in der Deutschen Vereinigung für Staatswissenschaftliche Fortbildung*, hrsg. von B. Harms. Berlin : Reimar Hobbing : 77-84.
- _____ 1932. *Die Zukunft des Kapitalismus*. Berlin : Buchholz und Weißwange. 新川傳介訳 「資本主義の将来」(一) - (三) 『長崎商高 研究館彙報』20 (3) ; 20 (4) ; 21 (1) , 1932-1933. 鈴木晃抄訳 「資本主義の将来」『世界大思想全集 86』所収 春秋社,

- 1933.
- _____ 1934. *Deutscher Sozialismus*. Charlottenburg : Buchholz & Weisswange. 難波田春夫訳 『独逸社会主義』 三省堂, 1936.
- _____ 1938a. Gustav Schmoller 1838-1938. *Der deutsche Volkswirt* 12 (4) : 1945-1947.
- _____ 1938b. *Vom Menschen : Versuch einer geistwissenschaftlichen Anthropologie*. Berlin : Buchholz & Weisswange.
- Spiehoff, A. 1955. *Die wirtschaftlichen Wechsellagen : Aufschwung, Krise, Stockung*. II *Lange Statistische Reihen über die Merkmale der Wirtschaftlichen Wechsellagen*. Tübingen : J. C. B. Mohr.
- Swedberg, R. 1991. *Joseph A. Schumpeter : His Life and Work*. Cambridge : Polity Press.
- Takebayashi, S. 2003. *Die Entstehung der Kapitalismustheorie in der Gründungsphase der deutschen Soziologie : Von der historischen Nationalökonomie zur historischen Soziologie Werner Sombarts und Max Webers*. Berlin : Duncker und Humblot.
- Tamura, S. 2001. Gustav von Schmoller and Werner Sombart : A contrast in the historico-ethical method and social policy. In *The German Historical School : The historical and ethical approach to economics*. ed. by Y. Shionoya. London and New York : Routledge : 105-119.
- Tötto, P. 1996. In Search of the U-turn : A Critique of Dieter Lindenlaub's Interpretation of Werner Sombart's Methodological Development. In Backhaus (1996a) : 227-239.
- Veblen, T. B. 1903. Book Review to "Der moderne Kapitalismus" *The Journal of Political Economy* 11 : 300-305.
- _____ 1904. *The Theory of Business Enterprise*. New York : Charles Scribner's Sons. 小原敬士訳 『企業の理論』 勁草書房, 1965.
- Wagner, V. F. 1937. *Geschichte der Kredittheorien : Eine dogmenkritische Darstellung*. Wien : Julius Springer.
- Weber, A. 1941. Werner Sombart. *Die Neue Rundschau* 52 : 365-368.
- Weber, M. [1896] 1924/2000. Die Börse II. Börsenverkehr. In *Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik*. Tübingen : J. C. B. Mohr : 289-322 ; In *Max Weber Gesamtausgabe*, I /5, 2. Halbband. Tübingen : J. C. B. Mohr : 619-657. 中村貞二・柴田固弘訳 『取引所』 未来社, 1968.
- _____ 1904-1905. Die protestantische Ethik und der „Geist“ des Kapitalismus. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 20 : 1-54. 梶山力訳・安藤英治編 『プロテス

タンティズムの倫理と資本主義の精神』 未来社, 1994.

_____ 1910. Antikritisches zum „Geist“ des Kapitalismus. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 30 : 176-202. 住谷一彦・山田正範訳 「資本主義の『精神』に関する反批判」 『思想』 627 : 83-113.

_____ 1923. *Wirtschaftsgeschichte : Abriss der universalen Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Berlin : Duncker und Humblot. 黒正巖・青山秀夫訳 『一般社会経済史要論』 岩波書店, 1954.

Wiese, L. v. 1933. Werner Sombart zum 70. Geburtstage. *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* 11 : 251-257.

_____ 1941. Werner Sombart zum Gedächtnis. *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft* 101 : 597-605.

Wieser, F. v. 1927. Führung. In *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. 4. Aufl. Bd. 4. Jena : Gustav Fischer : 530-533.

Yanagisawa, O. 2001. The impact of German economic thought on Japanese economists before World War II. In *The German Historical School : The historical and ethical approach to economics*. ed. by Y. Shionoya. London and New York : Routledge : 173-187.

Ziemer, G. 1971. *Inflation und Deflation zerstören die Demokratie : Lehren aus dem Schicksal der Weimarer Republik*. Stuttgart : Seewald Verlag.

邦語文献

雨宮昭彦, 2005. 『経済秩序のポリティクス — ドイツ経済政策思想の源流』 東京大学出版会.

安藤英治, 1992. 『ウェーバー歴史社会学の出立 — 歴史認識と価値意識』 未来社.

石川淑子・飯田裕康, 2003. 「シュンペーターにおける信用の概念 — シュンペーターはなぜ貨幣理論を完成できなかったのか」 『帝京経済学研究』 37 (1・2) : 97-122.

居城 弘, 2001. 『ドイツ金融史研究 — ドイツ型金融システムとライヒスバンク』 ミネルヴァ書房.

伊東光晴・根井雅弘, 1993. 『シュンペーター — 孤高の経済学者』 岩波新書.

上田辰之助, 1942. 「上田博士の企業者職分論」 『経営経済の諸問題 上田貞次郎博士記念論文集 第一巻』 所収 科学主義工業社 : 13-40.

上田貞次郎, [1913] 1975. 「株式会社の形式と実質」 『上田貞次郎全集 第二巻』 所収 上

- 田貞次郎全集刊行会：421-432.
- _____ [1913/1921] 1975. 『株式会社経済論 改訂増補』 同上所収：7-301.
- 大北文次郎, 1943. 「ハーン『銀行信用の国民経済的理論』解説」 アルバート・ハーン著 大北文次郎訳 『銀行信用の国民経済的理論』所収 実業之日本社：1-22.
- 大塚金之助, 1969. 『ある社会科学者の遍歴 — 民主ドイツの旅』 岩波書店.
- 大塚久雄, [1938] 1969. 『株式会社発生史論』 『大塚久雄著作集 第一巻』 岩波書店.
- _____ [1964] 1969. 「《Betrieb》と経済的合理主義」 『大塚久雄著作集 第九巻』所収 岩波書店：437-466.
- _____ [1964-1965] 1969. 「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」 『大塚久雄著作集 第八巻』所収 岩波書店：3-100.
- 大野忠男, 1971. 『シュムペーター体系研究 — 資本主義の発展と崩壊』 創文社.
- 小笠原真, 1988. 「ヴェルナー・ゾムバルト研究」 小笠原『ヴェーバー／ゾムバルト／大塚久雄』所収 昭和堂：117-169.
- 奥山 誠, 2005. 「ヴェルナー・ゾンバルトの企業家論」 『経済学史研究』47(1)：35-48.
- _____ 2006. 「ゾンバルトにおける資本主義的企業家像の構成と『ユダヤ人的特性』」 明治大学『政経論叢』75(1・2)：225-262.
- _____ 2008. 「ヴェルナー・ゾンバルトと信用創造理論の系譜 — 『動態的信用理論』の受容をめぐって」 明治大学大学院『経済学研究論集』28：1-21.
- _____ 2008. 「ヴェルナー・ゾンバルトの株式会社論 — 民主的資本調達システムの成立と経営者支配の論理」 明治大学大学院『経済学研究論集』29：15-36.
- 小野清美, 1996. 『テクノクラートの世界とナチズム — 「近代超克」のユートピア』 ミネルヴァ書房.
- 斧田好雄, 1971. 「マーシャルの経済騎士道について」 弘前大学教養部『文化紀要』5：1-19.
- 小原敬士, 1948. 『近代資本主義の範疇 — ゾンバルト「資本主義理論」』 青木書店.
- 片山伍一, 1972. 「配当と創業者利得」 九州大学『経済学研究』37：79-94.
- _____ 1973. 「ヒルファディング『創業者利得』の定式について」 九州大学『経済学研究』38：61-84.
- 金井新二, 1991. 『ヴェーバーの宗教理論』 東京大学出版会.
- 金指 基, 1987. 『シュムペーター研究』 日本評論社.
- 木村元一, 1949. 『ゾムバルト「近代資本主義」』 春秋社.
- _____ 1964. 「ヴェルナー・ゾムバルト」 『一橋論叢』51(4)：495-511.
- 後藤泰二, 1970. 『株式会社の経済理論』 ミネルヴァ書房.

- 佐伯啓思, 2000. 『貨幣・欲望・資本主義』 新書館.
- 塩野谷祐一, 1995. 『シュンペーター的思考 — 総合的社会科学の構想』 東洋経済.
- 榊原巖, 1958. 「意味理解のドイツ経済学 — ウェルナー・ゾンバルト」 榊原 『社会科学としてのドイツ経済学研究』所収 平凡社 : 538-646.
- 新庄博, 1937. 『金融理論の新傾向』 甲文堂書店.
- 鈴木芳徳, 1974. 『信用制度と株式会社』 新評論.
- _____ 1981. 「W. ゾンバルトの株式会社論について」 神奈川大学『商経論叢』16 (3) : 81-90.
- _____ 1983. 『株式会社の経済学説』 新評論.
- _____ 2004. 『金融・証券論の研究』 白桃書房.
- 住谷一彦, 1993. 「ゾムバルトとヴェーバー — 『ブルジョア』をどう読むか」 東京国際大学大学院『国際関係学研究』6 : 1-15.
- 高 哲男, 1991. 『ヴェブレン研究 — 進化論的経済学の世界』 ミネルヴァ書房.
- 高橋俊夫, 2007. 『企業論の史的展開』 中央経済社.
- 高山朋子, 1983. 「企業者利得と創業者利得」 『東京経大会誌』134 : 255-288.
- 田村信一, 1993. 『グスタフ・シュモラー研究』 御茶の水書房.
- _____ 1996. 「近代資本主義論の生成 — ゾンバルト『近代資本主義』(初版 1902)の意義について (1)」 北星学園大学経済学部『北星論集』33 : 1-33.
- _____ 1997. 「近代資本主義論の生成 — ゾンバルト『近代資本主義』(初版 1902)の意義について (2)」 北星学園大学経済学部『北星論集』34 : 217-251.
- _____ 1998. 「国民経済から資本主義へ — ロッシャー, シュモラー, ゾンバルト」 住谷一彦他編 『歴史学派の世界』所収 日本経済評論社 : 55-75.
- 知念英行, 1973. 「ゾムバルトとウェーバー」 流通経済大学『流通経済論集』8 (3) : 41-51.
- _____ 1976. 「訳者解説」 W. ゾンバルト著 知念英行編訳 『マルクスと社会科学』所収 新評論 : 189-217.
- 恒木健太郎, 2005. 「取引所の投機に関するマックス・ヴェーバーとヴェルナー・ゾンバルトの共通認識」 京都大学大学院人間・環境学研究科『社会システム研究』8 : 65-79.
- _____ 2006. 「信用関係の物象化と資本の動産化 — W. ゾンバルトと R. ヒルファディングの比較から」 『経済学史学会ニュース』28.
- 戸田武雄, 1948. 『ウェーバーとゾムバルト』 日本評論社.
- 中田常男, 1993. 『擬制資本論の理論的展開 — ヒルファディング『金融資本論』研究 ①』 未来社.

- 中谷實, 1938. 『新金融理論 — 預金通貨と中立貨幣』 有斐閣.
- 中西寅雄, 1931. 『経営経済学』 日本評論社.
- 難波田春夫, 1933. 「アルベルト・ハーンの信用理論」 東京大学『経済学論集』3(3・4) : 327-336.
- 二階堂達郎, 1993. 「H. D. マクラウドの信用理論と近代的信用観の形成」 『大手前女子大学論集』27 : 159-171.
- 西沢 保, 1995. 「上田貞次郎の経済思想 — 社会改造と企業者を中心に」 杉原四郎編 『近代日本とイギリス思想』所収 日本経済評論社 : 143-175.
- 根井雅弘, 2001. 『シュンペーター — 企業家精神・新結合・創造的破壊とは何か』 講談社.
- 野田弘英, 1981. 『金融資本の構造 — 『金融資本論』研究』 新評論.
- _____ 1994. 「新投資と信用創造 — ハーンの所説」 『金融構造研究』16 : 10-16.
- _____ 1998. 「経済成長と信用創造」 『東京経大会誌』207 : 195-205.
- _____ 2000. 「シュムペーターの発展理論における『信用創造』」 『東京経大会誌』215 : 3-22.
- _____ 2004. 「シュムペーターとマルクス学派」 『東京経大会誌』237 : 9-22.
- 橋本直人, 2000. 「日本マックス・ウェーバー研究史略年譜」 橋本努他編 『マックス・ウェーバーの世紀 — 変容する日本社会と認識の転回』所収 未来社 : 340-351.
- 波多野鼎, 1937. 「ハーンの景気学説」 波多野『景気学説批判』所収 日本評論社 : 142-189.
- 馬場克三, [1964/1978] 1987. 『株式会社金融論 馬場克三著作集 第Ⅱ巻』 馬場克三著作集刊行会.
- 原田哲史, 2001. 「歴史学派の遺産とその継承 — ザリーンとシュピートホフの『直観的理論』」 『思想』921 : 145-170.
- _____ 2008. 「歴史学派経済学」 金子光男編 『経済思想の源流』所収 八千代出版 : 155-185.
- 晴山英夫, 1981. 「わが国における株式会社支配論の展開 — 戦前期」 北九州大学『商経論集』16(3・4) : 169-196.
- _____ 1982. 「わが国における株式会社支配論の展開 — 戦前期(下)」 北九州大学『商経論集』17(2・3) : 159-217.
- 麓 健一, 1953. 『信用創造理論の研究』 東洋経済新報社.
- _____ 1956. 「信用創造論」 信用理論研究会『講座 信用理論体系Ⅲ 学説編』所収 日本評論新社 : 182-227.
- 別府正十郎, 1964. 『資本金計の経済理論』 森山書店.

- 牧野雅彦, 2003. 『歴史主義の再建 — ウェーバーにおける歴史と社会科学』 日本評論社.
- 松井安信編, 1983. 『金融資本論研究 — コメンタール・論争点』 北海道大学図書刊行会.
- 丸山恵也, 1963. 「ドイツ経営史学の源流 — ゾンバルト『近代資本主義』」 東洋大学『経済経営論集』 33 : 87-117.
- _____ 1964. 「ドイツ経営史学の源流 — ゾンバルト『近代資本主義』」 東洋大学『経済経営論集』 37 : 101-121.
- 三上隆三, 1980. 「貨幣・信用学説」 『経済学大辞典 III』所収 東洋経済新報社 : 551-561.
- 三輪悌三, 1949. 「信用創造論の批判的考察」 『金融経済』 2 : 1-12.
- _____ 1952. 「信用創造の二形態 — シュムペーター『経済発展の理論』とケインズ『雇傭, 利子及び貨幣の一般理論』との関連において」 『金融経済』 12 : 16-37.
- _____ 1963. 『貨幣金融論』 東洋経済新報社.
- 村上宏昭, 2003. 「『ネガティブ・パラダイム』としての W. ゾンバルト — 社会科学と人種理論」 『関西大学西洋史論叢』 6 : 1-18.
- _____ 2006. 「『ユダヤ人』表象の変貌 — マルクス・ヴェーバー・ゾンバルト」 関西大学史学・地理学会『史泉』 103 : 1-16.
- 八木紀一郎, 1988. 『オーストリア経済思想史研究 — 中欧帝国と経済学者』 名古屋大学出版会.
- 柳澤 治, 1989. 『ドイツ中小ブルジョアジーの史的分析 — 三月革命からナチズムへ』 岩波書店.
- _____ 1998. 「第一次大戦後における歴史派経済学と政策論 — F・リスト協会・社会政策学会を中心に」 住谷一彦他編『歴史学派の世界』所収 日本経済評論社 : 221-252.
- _____ 2001a. 「戦前日本の統制経済論とドイツ経済思想 — 資本主義の転化・修正をめぐって」 『思想』 921 : 120-44.
- _____ 2001b. 「ドイツの資本主義転化論と日本への影響 — 初期統制経済論の場合」 明治大学『政経論叢』 69 (4・5・6) : 27-54.
- _____ 2008. 『戦前・戦時日本の経済思想とナチズム』 岩波書店.
- 山口博教, 2006. 『ドイツ証券市場史 — 取引所の地域特性と統合過程』 北海道大学出版会.
- 吉田昇三, 1974. 『ウェーバーとシュムペーター — 歴史家の眼・理論家の眼』 筑摩書房.